

---

# 信念を貫く者

G-qaz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

信念を貫く者

### 【NZコード】

NZ8391-X

### 【作者名】

G - qaz

### 【あらすじ】

目が覚めたら大自然。さらに自分の記憶も無い。

顔を見れば、あれ？この顔は…

さあ青年はこの先どうなるのか。作者も分からぬ。

## 第0話

青年は目覚める  
そこは広大な自然に囲まれた世界

### 第0話

「目覚め

・主人公 side

「ん…」

硬い土の感触を体で感じながら、俺は目を覚ました。  
体を起こして周りを見てみると、

「どうなっているんだ、これは…」

あたり一面、森、山、森、山。上を見てみれば広大な蒼穹。  
どこの大自然だここは。

しかも、そばには日本刀のような剣が刺さっているし。鞘どこだよ。  
といふか、なぜ俺はこんな場所にいるんだ。

「えつと…昨日…はつ…?」

思い出せん。

というより、俺は誰だ?

「ぐつ」

記憶をたどりつとすると込みあがつてくる不快感に顔をしかめる。

これは、やつかいな事態だな。自分が何者なのかも、ここがどこな  
のかもわからん。

すると、

『ギヤオオオオオオオオオツツツツ…!』

なにかの鳴き声なのか雄たけびなのか聞こえてきた。

「…………本物ならまだよ。」

## 第〇話（後書き）

はじめまして。G-qanと申します。小説を書くと言つ行為など始めてが多い作者ですが、暖かい田でじ覧になつてください。執筆を始めた手前、何とか完成までさせたいと思つています。読みにくいけれど思ひます、楽しんでいただけたら幸いです。

## 第1話

青年は己を知らず  
窮地だけが彼にもたらされる

### 第1話

#### 「現状」

・主人公 side・

とりあえず、動かなきや話は始まらんので刀を肩に担いで、散策してみることにした。

道中、でかい足跡やら木々がぶつた押されている跡やら食われた残骸みたいなものを発見し、俺が住んでいたと記憶する場所ではないと確認して、若干鬱になりながら進んでいくと馬鹿でかい湖を見つけることができた。

俺にも幸運が残っていたことが分かつて、すこしうれしかった。

そして、湖に食える魚でもいるかの確認と水を飲むために、湖に顔を移したら、

「IJの顔は…」

まあ、なんというかぶつちやけ、る に剣心の斎藤一みたいだよ。  
この顔。

記憶に残っている顔より若干目とかが柔らかくなっている気がしないでもないが。

んじゃ、名前もそこから取るか？名前がなくては不便だろ？しなふむ。なんか牙突とかやってみたくなるな。と想いでいた刀を構えてみたりしてみる俺。

そこで気づいた。俺は、刀といつものに回避を感じていない。刀に慣れている奴だったのか？俺は。

ズウウウン！ズウウウン！

「つ！」

考え方をしていたらなにかがすげえスピードで近づいてきやがるな。はあ。ろくに自分のことも分からぬのに、厄介ごとはどんどんきやがるみたいだな。

刀を持ち直し、音のするぼうへ体を向ける。  
「さて、なにが出てくるのやら」

あれ？俺戦闘とかできるのか？？

## 第2話

青年を狙うは自然界の強者  
そこにあるは弱肉強食の世界のみ

### 第2話

「俺の名へ

『ギヤオオオオオツツツ』

振り下ろされる大木を思わせる腕とその先にある鋼鉄のよつた爪。  
キンツ

それを弾きながら後ろに飛びのく青年。

『ガアアツツツ』

それを追い、開かれる顎が獰猛な牙を見せ、青年を襲う。  
「うわあああ！」

「時を遡る事少し

-主人公side -

「おいおい。やばいんじゃないの？これ

戦闘ができるのか否かわからないことに気づき、更に、遠くに見えるは木々をなぎ倒しながらこちらに向かってくるでかい何かと、それに追われている動物の影が見える。

俺の持ち物は、なぜか違和感を感じない刀ひとつのみ。

……

……

よし、逃げるか。

そう考へがまとまつたとき、

『グワアアツツ』

ちょうど木々が開け、この湖が見通せるところででかい何かが、でかいイノシシを喰らう所だった。

おーおーおーおー、速すぎるだろ。わっさもつと向いにいたじやねえか。

ふと、でかい何かの全貌が分かつた。太く長い尾。太く筋のよつな胴体。ギラッと光る爪を持った手。そして、今イノシシをむさぼつてているでかい口と牙。

……えつ？竜？

俺がそんな風に呆けていると、

竜はイノシシを喰らい尽くしたのかいつの間にかこちりを見ていた。

そして冒頭に戻るわけだが、

「うわあああ！」

必死によける俺。空を切る竜の牙。

「はあっ。はあっ」

やばいな、これは。」のままじや喰われちまつ。どうすれば」の状況を打破できるんだよ。

必死に竜の攻撃をかわし、弾き、食い止めながら考える。

「ん？」

やつしてこりのうちこ、ふと気づく。今俺は何をしている？

竜相手に防戦一方とはいえ戦つてこり。戦えている。俺は戦えている。

ドクンッ

意識した瞬間、体の感覚が研ぎ澄まされていくのを確かに感じた。

- side end -

それは違和感とでも言つべき感覚。先ほどまでの竜が捕食するための攻撃を与え続けていただけの光景。しかしその光景に違和感が生

じる。わずかな違和感。それは急激に戦況を変えていく。

竜はただ捕食する側であった。そして、その違和感に気づきながらも攻撃をやめず、その爪を揮つた。

その爪は刀に難なく弾かれた。

次はその顎を開き、獰猛な牙を青年に向けた。  
しかし、それを青年は竜にすさまじい速度で向かうことでよけたその瞬間。

竜の片腕が宙を舞つた

『グワアアアアアツツツツツ

竜は何が起きたか理解できなかつた。ただいつも通り捕食しようとしただけ。今回は少し時間がかかっているが、それだけのはずであった。

この場所において頂点の位置に属する竜にとつて、今この状況は理解不能な出来事であつた。

-主人公side -

感覚が研ぎ澄まされる。体が自由に動く、どう動けばいいのか分か

る。竜に向かうことでその隙から腕を切り捨てた。俺は戦える。

振り返ると竜が雄たけびを上げている。もはや、勝てない相手ではないと、体が言っている。

そして、構える。

突き。

自然と構えはこうなった。体から力があふれる。負ける気がしない。

『ギヤオオオオオオオオツツ』

竜が向かってくる。

だが、

俺はただこれを放つだけだ。

「はあつ！」

「ゴオツ！」

放された突きから、凄まじい気が直線状に放たれ、竜を穿つた。後に残るは、突き穿たれた竜の屍だけとなつた。

構えを解き、一息ついて、

「ふう…。よし、決めた。…俺の名はハジメにするといいわ」

やはりじつへりきた。

## 第2話（後書き）

とりあえず、完成した分を投稿しました。

原作にはまだ遠いです。

書くというのは大変ですね。他の作家さんを尊敬します。ではまた。

## 設定（前書き）

主人公設定でも。

### 登場人物

#### ハジメ・サイトウ

齊藤一のような顔をしている。目つきなどは柔らかい。

自らに関する記憶を失つており、目覚めた世界と自分がいたであります世界との間に戸惑つていたが、竜を殺した件をきっかけに弱肉強食の世界に順応している。

完全な記憶喪失と言うわけではなく、一般常識など生活する上で必要な知識は有している。

牙突などが使えるのは、ハジメ自身が不思議に思っていることで、体自体が様々な技術を覚えており、ハジメはそれを何回もイメージや、実際にこなすことで、ハジメ自身が理解しを使っている。（その理由は一応考えていますが、作中に出すかは未定です。）

性格などはまだ少し野生に解き放たれたような常識人みたいなことを想定していますが、この後の話でまた変わりすると思います。もう少しでハジメの信念の話しますので。（作者の技量・構想不足でグダグダになるかもしれません。）

身体能力は異常の一言であり、気を含めてラカン以上である。

以上が主人公の設定となっています。

## 設定（後書き）

お気に入り登録がされていて、驚きと嬉しさが到来しています。ありがとうございます。

次回早く投稿できるよう、構想中です。  
ではまた。

### 第3話

鍛錬の日々は青年を強者とした  
交錯する運命は青年に何を求める

#### 第3話

「到来する者へ

・主人公 side -

あの竜と戦つて数ヶ月が過ぎた。あの感覚を忘れぬよう、日々鍛錬をしている。

そうして、鍛錬をしていて気づいたことがいくつかある。

まず一つ。

この体は十一分に頑丈、性能を誇つているということ。驚いたことに、一日ずっと走り続けたり、素振りなどを行つても翌日には平氣という頑丈さ。更に、走つたりするときも、その速度が記憶にある足の速さというものを覆す速さなどなど、驚きの身体能力を持つていた。

二つ。

体が技術を覚えている。鍛錬をするにいたつてどのようにするべきか考えて、とりあえず素振りや走り込みなどをしていると、自然と体がどのように動いていたかがイメージとして明確に浮かぶのだ。これのおかげで鍛錬の際、技術の習得が思う以上に捲つた。言つてみれば、体が覚えている技術を頭に刻み込んだということだ。

三つ。

いわゆる氣が使えるということだ。竜と戦つたとき最後に放つたも

のが気を使ったものなのだが、気を使うと身体能力も技も全てが格段にあがる。竜に風穴を開けたのもうなずける。今は制御に集中し、十一分にできたら、他の鍛錬方法もと考えている。

まあ、この体がとてもなくす”こと”こと、戦える力を手に入れたということだ。この付近で戦いを挑むような生物がほとんどいなくなつたしな。

さて、今日の獲物は何にするかな。

- s.i.d.e end -

- ? ? ? s.i.d.e -

「はあつ、はあつ、はあつ」

畜生っ。まさかこれほどまでに深く奴らがつながつてゐるとはな。しかし、ばれちまつとは。俺も未熟だったと言つことか。だが、そのおかげでやつと手に入れたこの情報。なんとしても、守り抜かなければいかん。やつらの想い通りになどさせたまるか。

「いかんなあ。あまり私の手を煩わせないでくれたまえ。溝鼠君……」

「なつ！」

しまつた。もう追いつかれたか！

「死にたまえ…雷の斧！」  
　　<sup>ディオス・テココス</sup>

- side end -

-主人公 side -

俺の倍はある動物がその体を地に倒す。  
さて、今日の獲物の仕留め完了。

「ん？」

何かがこの付近に侵入したみたいだな。珍しい。しかも範囲が小さいから竜とかじゃない、この大きさは人とかか？

だとしたら面白いな。この世界で目覚めてからは近くの村人ぐらいにしかあっていないからな。

しかも、せいぜいが獲物の角や牙を村に卸すぐらいの交流だからなあ。

仲良くなつたのは、龍だけだな。

そう、龍。とんでもないのが前來たんだ。まあ一回戦つて仲良くなつてな。話すと思いのほか気があつてな。

そう、考えを脱線させていると、まるで雷のようなものが落ちたような音があたりに響いた。

「つ！」

今のはなんだ！？氣とは違う氣がしたが。竜のプレスか何かか、とりあえず行つてみるとするか。

- side end -

- ??? side -

「ほひ。今のを防ぎきるか。ただの溝鼠ではない…か」

「くつ」

今のは、古代語魔法か？軽々と使うあたり、結構な使い手が追手としてきたということか。

逃げ…きれんな。逃がしてくれるとは思えねえ。実力はおそらく攻撃はあちらのほうが上。防御すれば何とかなるか？

とはいって、こちらの防御を抜けるような魔法を使える可能性も十二分にある。まずいな。この情報はなんとしても闇に葬られるわけにはいかん。どうする…。

「ふむ。それをこちらに渡してくれれば、君を見逃してもいいのだがね」

「そんなことができるかっ！これは世界を変えるために必要な足がかりだ。…それに、見逃してくれるとは思えねえんだがな。」

「その足がかり。あつては困るのだがね」

フラグランティア・ルビカанс  
「紅き焰」

「ぐうつ、氷楯！」

フレット・テンペスター・アウトリーナ ヨウイス・テンペスター・フルグリエンス  
「…吹きすたべ南洋の風！雷の暴風」

「なつ」

やべえつ！

「くつーぐわああああつ」

- side end -

あたり一面が焦土と化した中、

「ふむ。消えてもらえたかな？」

辺りを見回す、男の追っ手であろう紳士風の男

「ぐ、ぐう」

「おや、生きていたか。魔力全てを障壁に回したのかね？」

「まあ、じこでどのみち死ぬのだがね」

静寂な中を追手の男の足音だけが響く。

瀕死の男に近づく追手の男。

そのとおり、

「よひ。じんなどこりで何してんだ？」

介入者が、現れた。

### 第3話（後書き）

作ると書くのはどの分野でもやはり大変ですね。  
次回もなるべく早く投稿したいと思います。ではまた。

## 第4話

青年は誇りと信念を知る  
そして、青年の運命は加速する

### 第4話

「理由」

・悪魔 s·i·d·e ·

「よう。こんなところで何してんだ？」  
む。このような場所に人間がいるとは。しかし、これほど接近され、  
声をかけられねば気づかないとは…。私も騒碌したものだ。

「いや、なに。溝鼠を始末していたところだよ。狩場を荒らしてしまったのなら詫びよう。」

ここは龍すら住み着くような場所だ。それなりに実力があるのだろう。

「まあ、別にいいが。俺が聞きたいのは、そうじゃなくつ

「Uのような相手に随分と本気を出してるよつじやないか。人間も  
どきが。」

「なつ」

いつの間にか人間は鼠のそばに。まったく見えなかつた。この私が  
か。

「ぐつ。すまん。理由は…後で話す。た…助けてくれ。」

「ちつ。まだ、喋れたか。」

まざいな。実力が把握できん今、迂闊に動けん。

「ふむ。じつらの弱つているほつから事情を聞くとするか。ではな。

」

そう言つて、介入者は鼠を担いで消えてしまつた。

「はあ。全く…とんだイレギュラーだな。面倒なことだ。」

そして、ニヤリと笑い、

「だが、面白くはなりそつだ。」

- s i d e e n d -

-主人公 s i d e -

とりあえず、怪我してた奴を連れて来たわけだが、相対していた奴がこうしたのだろうな。あれがおそらく悪魔だろう。気が禍々しかつたしな。

「おい、大丈夫か？回復の魔法は使えるか？」

しかし、改めてみるとひどい怪我だ、左半身がひどい、特に左腕なんか焦げて炭化してやがる。これが魔法とやらの威力か。

「ぐつ。魔力は…殆ど残つて…いない。」

「それよりも…話を聞いて…くれないか？」

そういうと男は、手から何かの端末のようなものを出した。

「これは？」

そう聞くと男は、

「この世界にはびこる腐った奴らと、世界を滅ぼしかねない組織の情報だ」

「なつ。 なんでそんなものを貴様が？」

「俺は、ライルと言つ情報屋だつたんだが、ある人に頼まれてな…。最初は腐った奴らを消して、この世界がよりよくなるようにつて思つてはじめたわけだが…」

男は、自身の怪我を見ながら、

「とんでもないものが出てきちまつたわけだ。」

それから男の話を聞くと、この世界の裏、元老院や連合の裏や、帝國側とやらの裏。そしてその2つにもぐりこんでいるらしい存在の影を感じ取つたらしいが、それまでだつた。そこで、先ほどの悪魔に追われ、ここまできたらしい。

「だが、もう限界だ。悔しいがな…体がもうボロボロだ。」

「…お前に頼みがある。」

そう言つて、端末を俺に差し出す。

「これを持たれてくれないか？」

「本気か？」

正氣とは思えん。こんな場所であつただけの俺に、そのよつなものを見渡すだと？

「はは。なんかな。気に入つちまつた。お前の雰囲気がな、知り合いに似ていてな。」

「あいつは、自分の信念のまま逝つちまつたが、俺はどうかな。ど

「つゆつゆ。」

「少なくとも、俺は貴様に信念と誇りを感じた。生半可な気持ちで國に、世界に」つむは挑めん。」

俺はそう感じた。聞いていて、なぜそこまでして挑めるのか。怖くはなかつたのか。

聞きたいことであったが、この顔を見るとそれを聞くことはなぜか躊躇われた。そして思う。俺にはこのよつたな想いが、信念があるのかと。

ふと、近づいてくる気を感じ、

「ちつ、あの悪魔が近づいてきているな。」

「なつ。逃げろつーあの悪魔はおそらく爵位もぢだ…。勝てるわけがない、こいつを持つて逃げろつー」

男は端末を俺に差し出してそう言つたが、

「悪いな。俺にとつて、この戦いで何か見つかりそうでな。逃げ出すわけにはいかん」

そう。先ほどの話を聞いてから、心がうずく。熱く冷たい何かが心を奮わしている。

おそらくあの悪魔と戦えば、これが何かが分かる気がする。ならば逃げ出す気になどなれん。

「は? なん」

「まう。それは何か聞いてみてもいいかね?」

「ひいたどり着いた悪魔がライルの声をやえやつ尋ねる。

「信念と誇りだ

## 第4話（後書き）

うまくまとめられず、読みにくいです。未熟なのが如実に表れた気がします。

表現力がほしいなと思つ今口この頃。ではまた。

## 第5話（前書き）

この作品は独自解釈、独自設定のもと書かれてています。  
そのような作品に嫌悪感を抱く方は戻ることをお勧めします。

## 第5話

青年は彼に憧れた  
故に青年は背負う決意をする

### 第5話

「信念」

・悪魔 s·i·d·e ·

「信念と誇り……かね？」

「そうだ。俺はこの世界に来てからそいつたものには縁がなくて  
な。考えることもしなかつたわけだが、……そこの男に感化されてし  
まつたようだな。」

そう言うと、男は背中にあつた剣を抜く。

「心が歡喜に奮えているのだ。悪いな悪魔、手加減し損ねるかもし  
れん。」

「ふつ。ふはははははは。……なめるなよ。人間風情が。」

「悪魔パンチつ

身の程を知るがいい。

「雷の斧！」

· s·i·d·e end ·

·主人公 s·i·d·e ·

飛んでくる拳をかわした瞬間、雷が俺を襲ってきた。

が、俺はそれを切ることで防ぐ。

「はっ」

これぐらいなら、龍のブレスのほうが余程凶悪だったよ。

「貴様…今何をした…。」

「ん?」

なにか、悪魔が驚いているといつのは滑稽だな。

「今、魔法を…き、切ったのか。貴様」

「何をそんなに驚く。そんなこともできなければこの場所では生きていけないんでな。」

「くくく。そうか。”そんなこと”か。面白い。」

「ふむ。認識を改めよう。我が名はハイエル・ヴァーグムント。子爵の位を持つている悪魔だ。」

「俺の名はハジメ・サイトウだ。冥土の土産だ、よく覚えておけ。」

「ハジメか。覚えておこう。」

そして構えるハイエル。

「一つだけ言つておくぞ。ハイエルとやら

そう言つて刀をハイエルに向ける。

「何かね?」

「本気で來い。生憎これから放つ技は容赦なく貴様を殺すぞ。」

「ふふふ。面白いな。だが！なめ過ぎだつ小僧！」

異形へとその身を変化させたハイエル。

空気が変わる。まさに一触即発の、戦いの空間。

だが、

これが

俺の望んだ瞬間、世界だ。

ずっと考えていた。俺は斎藤一ではない。だがあの男が生涯かけた信念。

「悪・即・斬」

なぜか、それはとても俺の心を震わすものだった。好んでいるといつてもいい。斎藤一の牙突という技もこの体が覚えていただけだ。真に使えていいわけでも、ましてや何も分からず、覚悟もないままの俺が使つていいのかすらも迷つっていた。

しかし、ライルの信念を誇りを聞き、とても眩しく見えた。心が震えた。

俺もこうありたいと。俺も背負いたいと。

ならば、たとえそれが他人のものであろうとも、この生涯をかけて

誇るべきものならば、俺は。

背負つて見せよつじやないか。「悪・即・斬」その信念を。

見せてやろう、ハイエル。本気の牙突を。  
俺の牙突信念…見せてやろう。

-s i d e e n d -

そのときは訪れた。ハジメが構えたその瞬間、ハイエルがその膨大な魔力を一気に放出し、ハジメの目の前に迫る。

が、  
「うぐあああっ！」

次の瞬間の光景はハイエルの攻撃に合わせたかのように牙突を放ち、ハイエルの胸を貫き穿つハジメの姿であつた。

-ライルs i d e -

な、何が起きたんだ。

ハイエルが、まさに悪魔のような異形の姿となり、それにハジメが構えた瞬間にハイエルが消えたようにしか見えなかつた。

そして氣づけば、ハジメの剣はハイエルを貫いていた。

ハイエルの後ろの森がなぎ払われてやがる…。  
はは。強すぎだろ。爵位もちの悪魔を一撃…か。

「くく。ははは。」

笑い出すハイエル。

「私が手も足も出んか。」

体が塵になっていき、消えていくハイエルが口を開く。

「なに。貴様が弱かつた。ただそれだけだ。」

それに応えるハジメ。悪魔を弱いと断言してやがる。

「はつはつはつは。そうか。私が弱いか。だが、世界を相手にビビりまでその強情が貫けるのかな？樂しみだ、とても。」

見れないのが残念だがね。そういう残し、ハイエルは消えた。

「死ぬまで貫くに決まっているだらつ。『悪・即・斬』の信念とともに」

どうやら、俺は死に際にすげえやつに出会つたらしいな。まさか、こんな奴に託せるとはな。

「おい、ライル。まだ生きているか。」

「ああ。なんとかな。それにとんでもないものも見せてもらつたしな」

なんだよ。魔法を切るつて。突きで森をなぎ払つなよ。無茶苦茶だ。

「お前の信念。確かに託された。安心して逝け。」

はは。偉そだよなあ。お前。

まあ、本当に安心だな  
実はもう眠くてしかたねえんだ。

「ああ。任せた……せ……」

- side end -

-主人公 side -

さてこれぐらいで十分か。墓を建てるといつても墓石と花を用意するぐらいだからな。

後は、龍に別れの挨拶をし、まずは近い街から出発するといつ。

ライル。託されたこの情報だが、自由に使わせてもらいつ。

世界を変えてやるつ。 「悪・即・斬」 のもとにな。

「さて、行くとあるが。世界を相手にするため」。

## 第5話（後書き）

もうすぐ戦争編に入れかな、たぶんハジメは裏方ですが。原作は遠いです。そういうえば、原作キャラまだ出てないや…。未熟なのは十分承知のことですが、完結だけはさせたいと思います。ではまた。

第6話

# 青年は旅に出る 全ては未知の出来事

第6話

始まり

- 主人公 side -

ライルから渡された情報から一番近い街に来たが、街には活気がある。

裏通りは知らんが、なるほど。少し偏見を抱いていたようだ。上の  
人間が腐つていても生活するものは逞しい……か。

情報によるヒカルド・サージンと連絡を取る。なるほどここは連合でありつながりがあるところ。

「すまん、ちゃんと聞かたい」レジがある

「ふむ。なるほどな」

あらかた聞き込みを終え、少し休憩することにしたが、ひどいものだな。

私腹を肥やした豚の典型だ。ライルが懸念していた組織の繋がりは分からんが、それは奴の書斎なり何なりにあるだろ？。

さて、遠慮は要らん。今夜決行することとしよう。

⋮⋮⋮⋮⋮

難なく忍び込むことに成功し、今こゝにして屋敷に侵入して、月明かりに照らされる廊下を、歩いていく。

屋敷の情報は情報屋から仕入れて、迷うことなくゴルドがいるであろう書斎に向かっているわけだが。

「なんだ。この警戒のなさは…」

呆れてものも言えん。

「こゝか

中から人の気配がする。当たりだな。

わて、感覚を切り替えるとしよう。

- side end -

書斎の扉が開かれる。ゴルドは扉の方向を向いた。

「誰だね、こんな時間に。無礼な」

だが、扉の向こうには誰もおらず。

「ん?」

その瞬間、

「ゴルド・サーチョンだな。」

ゴルドは後ろから聞こえる声と殺氣に戦慄する。

「ひつ。だ、だれっか…」

助けを呼べるはずもなく、何がおきたか分からぬまま、ゴルドはこの世と別れた。

-主人公side -

さて。ゴルドを片付けたわけだが、こいつがどんな繋がりを持つているか確認するとしよう。他にも有益な情報を持っているかも知れん。

……

ちつ。特に田新しい情報はないな。といつより、この屋敷に人がいなさ過ぎる上に、資料から察すると、ゴルドは運命の末端だったようだな。

ライルが懸念していた組織の情報も分からなかつたか。

まあいい。残念ながら、他にも悪即斬のもとに狩るべき獲物が、山ほど残つてゐる。この組織とやらが分かるのは、そつ遠くないはず。必ず突き止めて見せよつ。

必ず  
な。

## 第6話（後書き）

いきなり中核とかに行ける訳がないので、つなぎの様な話です。このような話でも面白く書けたら良いでしょ。日々精進、でも忙しい。ではまた。

## 第7話

舞台は整い始める  
その脅威はいまだ認識されず

### 第7話

「世界」

・完全なる世界 side

「はあ。これで何人目だろうね。」

そう呟いてアーウェルンクスは今届いた資料を机の上に置いた。

「今話題の、政治家殺しか？」

デュナミスがアーウェルンクスの呟きに反応する。

「そうだよ。もう少し早く起きていたら、死んでいた人数も多かつただろうからね。そうなつていたら、僕たちの計画に支障ができるいたね」

「そうだな。だが、現状特筆すべき支障が出たわけでもない。まあ、操るべき人間が減ったというのは、操作がしにくいと言つことに繋がるが…支障というほどのことでもあるまい。」

「もう計画は始動している。後はどれだけこの戦争を長引かせるかだ。もし件の奴が邪魔すると呟つならば…」

「そのとき、叩き潰せばいいだけのこと」

そう呟つて、デュナミスは資料だらけの部屋から退出していった。

「ふう。まあその通りなんだけどね。しかし、政治家殺しか。僕たちと繋がっている人間もちらほらいる。偶然…なのかな」  
アーウェルンクスは天井に目をやり、思考にふけていった。

- side end -

メガロ・メセンブリア  
- M · M Side -

「まだつかまらんのか！このふざけた殺人鬼はつ！」

机をたたきながら憤慨している老人。

「100万ドルもの金をかけたのだぞ。暗殺者というのならそれほど強くないのではないかね？」

「全く。我等を何だと思っておるのか。」

「申し訳ありません。しかし、顔も特定できていない相手に…」  
老人たちを相手にしているであろう若い職員が平伏している。

「黙れ！」

「はあ。賞金稼ぎもボディーガードも全く役に立たんな。」

「ぐつ

メガロ・メセンブリア  
職員の後ろに控えているM · Mと関係があるのであろう賞金稼ぎらしきものたちが顔をしかめる。

名のあるギルドや賞金稼ぎがもつすでに何人もやられているのだ。  
言い訳もできない。

「とにかくこの男。至急に再手配だ。賞金額は倍の200万ドルにしておけ」

「我等の命を狙つてゐるのだ。早急に事態の收拾を頼んだよ」

「はつ。分かりました。全力を持つて取り掛かりさせていただきます。

」

職員と賞金稼ぎたちが部屋を去つていぐ。

「しかし、顔どじいか、名前も分からんとひば。

「厄介ですなあ。帝国との戦争もあるとこつのは」

「わいじや。戦争じや。どじからか英雄となるよつな者を探せんと  
な」

「ふむ。それならば……」

そうして、老人たちは次の議論へと移つていつた。

……

（「殺されてゐる者全員が……。どじこいつじやへ……あつて見  
ぬ」とには分からんのう）

幾人かを除いて……。

- side end -

- 帝国 side -

「ふむ。連合でもあつたとこつ」とか  
威儀を纏つた王のような存在が喋つた。

「はい。ですが、やはり件の男の有力な情報は無こよつです。」

それに応える人間のような姿の男。

魔法世界人。

古き民と呼ばれ、角やどがつた耳などの特徴がある存在。彼らにとつても政治家殺しは他人事ではなかつた。

「ふむ。ならばそちらに手が届くようこそ、この戦争速く終わらせる必要があるかも知れんな。」

「使いますか？鬼神兵を」

「まだ早い……が、準備はしておけ。」

- side end -

仕組まれた戦争は始まる。

様々な思惑が入り混じつた戦争は終わりを知らず。

ハジメの行動がこの先どのように戦争を世界を左右するか、

誰も…知らない。

## 第7話（後書き）

日間ランディングに載つてゐる…。こうこうのを見ると嬉しく感じますね。思わずニヤリとしてしまいましたが、その場面を友人に見られてしまいました…。

戦争編佳境に入つたら面白くなるかなあ。頑張りたいと思います。お楽しみいただけたら幸いです。ではまた。

## 第8話

人は一人では無力  
青年は盟友を得る

### 第8話

（盟友）

・主人公 side・

裏通りに入り、目的の場所へとたどり着いた。

古びた隠れ家のような雰囲気を持つ店だ。

扉を開けると、子氣味よい鈴の音が来店を知らせる。

「いらっしゃい。」

初老を迎えた、温和な顔の店主がこちらを向く。開店したばかりなのだろうか、店内には誰もいない。

「古い知り合いと会うんだが、なにか新鮮なものはあるか？」

そう言って、半分に欠けた銀貨を店主に渡す。

「はい、いります。奥の席へどうぞ。」

銀貨を受け取りそう言つと、店主は出口へ向かい扉にLOSEの札をかける。

奥の席に座り、少しの間待つことになった。

最近はもう手放せなくなつた煙草に火をつけ肺で煙を味わう。

「ふう。」

吐き出した紫煙があたりに漂う。

100

ライルから渡された情報を手がかりに、私腹を肥やした豚、闇商人、様々な奴らを狩り殺してきたが、未だその闇は知れず。

# 完全なる世界

ライルが黒幕であるうとふんだ組織。 その名だ。 だが、 その目的が  
一切分からぬ。

最初は帝国とM・Mの中核に入り込んでいたらしいと知つて、武器商人と手を組んで稼ぐための戦争を仕掛けているのかと思ひきや、今や下手したらこの先、ただ世界が滅びるまで戦争をするのではないかというほどに、戦争は激化の一途をたどりうとしている。

腐つた奴らをいくら屠つたところで、また新たに腐つた奴らが這い  
出てくるだけ…。やはり、奴ら完全なる世界の真の目的を知らない  
ことには、始まらんか。

オステイアの奪還。これが帝国の侵略の理由らしい。  
ふむ。やはり、オステイアになにかあるやもしれん。ライルの情報  
には欠けていたものだ。これだけ世界を巻き込んだ戦争だ。無関係  
なはずが無い。

オステイアに探しを入れるか。だが、情報がない。やはり、独りでは戦うことはできても謀略の類を征することは無理があるな。まあだからこそ今日、ここに来たわけだが。

席に座つて待つこと十数分経つたところで、向かいの席に男が座る。「始めてまして。マクギル元老院議員の秘書をやらせてもらつています。クーラと申します。あなたが今話題の政治家殺し【バイルドライバー】でよろしいですか？」

さて、待ち人が来たようだ。

「ああ。そうだ。ここに来たと言つことは、契約は成立といつことでいいな？」

「はい。資料はここに。それでは失礼します。」

資料と思われる束と、情報端末を机の上に置き、去つていく秘書。

オステイアがどのような立ち位置にいるか、『完全なる世界』との関係者の有無。それを知るには手元の情報では不可能。ならばどうするか。

協力者が不可欠だ。情報屋では駄目だ。情報と言うものはないといらゆるもののが売れる。信用すらも。俺の情報を少しでもばら撒くの

は、これから先やつにすべくなる可能性があるため却下だ。

ならば一蓮托生。俺の盟友、主足りえるものを探すほうがよい。それが政治家ならば特にな。

政治家の情報ならば、今まで屠ってきた連中の情報から連中が疎ましく感じている者を探せばよい。

そして、出てきたものがマクギル元老院議員。調べればなるほど。盟友足る存在であった。

ならば、こちらから出向く。そして、奴にこちらが知る情報を渡し、こちらの思惑、奴の理想、それらを話し合い、今契約を結ぶことに相成ったわけだ。

⋮  
⋮  
⋮

次の俺の戦場はオステイアか。どのような奴らがいることやら。

- side end -

- マクギル side -

まさか、あちらの方から来るとほのう。

それにしても今でも震えるわい。ハジメの立ち振る舞いはまるで暗殺者じゃな。実際そうじゃし。

しかし、M・M内にまさかそのような組織とつながりがある奴らが

居つたとは。『完全なる世界』のう。奴らの目的とはいつたいたい何なんじやうつた。

そもそも、なぜわしがハジメと契約を交わしたか。ハジメと敵対しなかつたのはじや。

ハジメの行動に違和感を感じておつたからじや。

わしがハジメの行動に違和感を感じたのはある情報からじゃ。ハジメが殺した役人。この役人についての情報が、わしの秘書から知られた。着服、癒着の類じゃな。そして、秘書にハジメが殺してきたとされる者たちを調べてみると出るわ出るわ不正や汚職の数々。何んなりしたわ。

だからわしはできればハジメに会いたかったのじや。協力できると思つたんじやなあ。そしたら来るんじやもん。吃驚したわ。ハジメの信念『悪即斬』。その信念にわしが切られぬ限りわしらは協力できるじやう。できれば一生協力したいもんじや……。

ノックの音が響く。

「誰じや?」

「私は。ただいま戻りました。」

ふむ。ハジメに資料を渡しに行つた秘書が戻ってきたよつじや。

「つむ、入つてよいぞ。」『苦勞であつたな。』

さて、ではわしも頑張つとあるかのつ。

- s i d e e n d -

政治家殺しのニュースは世界中に届いていた。

そして、民衆の興味を引いたのはその死体の異様さであった。

襲撃された政治家たちの死体にはどれも同じような傷があつたためだ。

その傷は胸に風穴が空いていたといひものだつた。

それはまるで太い杭打ち機でも使って無理やり穿つたような傷跡だつたため、件の者はこう呼ばれる。

【パイルドライバー】

と。

はい。盟友とは爺でしたね。違うキャラを期待した方、すいません。  
いい通り名とか思い浮かばない。パイルバンカーと悩みましたが、  
ボトムズだし、魔法世界にあつたらおかしいだろうと杭打ち機にし  
ました。どちらもあつたらおかしいですかね？壬生狼？どう広めろ  
と。

始めの店主との会話は適当です。ただ、半分に欠けた銀貨を渡す事  
で、密談したいから部屋を用意してもらい、もう半分の銀貨を持っ  
た者を部屋に案内してもらう。という暗黙のルールがあつた、とい  
う裏設定です。すみません。こういうの好きなんです。

たくさんの方に読まれているようで、とても嬉しいです。頑張ろう  
とこう気持ちになります。ではまた。

第9話

青年は紅き翼を知る  
紅き翼はただ自らの

紅き翼はただ自らの意思で飛ぶ

第9話  
アラ

# 紅き翼

「た、頼む。金ならいくらでもやる。だ、だから命だけはつ

貴様の様な肩は 早々に死ね  
河かを孕いたよつな音が暗闇の中

何かを碎いたような音が暗闇の中に響

「五」

頭が砕かれた骸を ハシメは無造作に投げ捨てる  
すでに臥していた他の骸とぶつかり不愉快な音が木靈する。

そしてハジメは、手馴れた手つきで咥えた煙草に火をつける。

吐き出された紫煙と共に、ハジメは闇の中に消えていった。  
地獄絵図とも言える闇の中へ…

.....

「……」はオステイアのとある街。その一角にある飯屋。

「全く、これで何十人目だ。」

黒髪の剣士が新聞を見てぼやぐ。

「あ～？ ああ例の政治家殺しか。爺どもも見つけたら倒してくれつて言つてたなあ。」

赤毛の鳥頭が剣士のぼやきにそつ應える。

「ええ。彼らからしたら、いつ自分の身に降りかかると知れない災厄ですからね。」

「後ろ暗い奴は怯えておるじゃろうなあ。」

ローブの男と爺さんのような口調の少年が鳥頭に続く。

……彼らは紅き翼<sup>アルブルフ</sup>。連合側についているいわば傭兵のような者たちである。

「確かになあ。姫子ちゃんのこともあるしな。」

赤毛の鳥頭はナギ・スプリングフィールドと言い、膨大な魔力を有した魔法使いであり、紅き翼のリーダーでもある。

「オスティアの姫御子ですか。そうですねえ」

ローブの男の名はアルビレオ・イマ。にこやかな顔をして何を考えているか分からぬ魔法使い。

「まったくだ。」

剣士の名は近衛詠春。生真面目<sup>マダム</sup>そうな剣士である。

「まあわしらが議論していてもパイルドライバーは捕まるまい。顔もはつきり分かつておらんしの。」

少年の名はゼクト。口調は爺のようすで、見た目は少年の不思議な者である。

以上の4名で構成されている集団である。

「しかし、パイルドライバーか。つええのかな。やつてみてえなあ。」

ナギがそういうと、

「風穴を空けられるぞ？」

詠春がそつ返す。

「ははは。しかし、なんで戦争には出ねーで、裏でこそこそやつてんのかね？そいつ」

ナギが疑問を挙げる。

「さあ？少なくとも私たちの知れる範囲のことで無いのは確かです。」

アルビレオが笑顔と共に返答する。

「わしらの知らん戦争の裏とやらがあるのかも知れんしな。どっちみち知りたいならば、会わんことには始まらんじやろ。」

ゼクトがそれに補足する。

「それもそつだな。お、飯が来たみたいだぜ。いつただき~す。」

「あまりがつくな、ナギ。」

そうして彼らは食事を始める。彼らを見ている者に気づかず。

- side end -

-主人公 side -

あれが紅き翼…か。なるほど。マクギルが推すだけの事はある。あれだけの戦力ならば、M・Mもそう手放したくはないだろうな。

しかし、オステイアに来てから情報収集に重きを置いて行動してきなが…。完全なる世界について調べる上で、まさかオステイアでM・M・Mア

Mが出てくるとはな。そして、重要なファクターであるらしいオスティアの姫御子。そして、この戦争の発端である帝国のオスティア奪還への侵攻。

まだ、ピースは足らんがここオスティアが重要な意味を占めるのは明白だな。完全なる世界も動いているようだしな。そして、それらを含めた情報を考察すると、オスティアのトップまたはそれに準ずる者が怪しいと考えられる。

…全く、完全なる世界はどこまで入り込んでいるのや。ここまでくるとライルの情報も氷山の一角でしかなかつたということか。

さて、オスティアの上層部か。どこまで黒いのやら。それに完全な世界の目的も知らんとな。まさか、本当に世界を転覆させるつもりかもしれないな。いずれ分かることか。

では、行くとするか。

- side end -

- マクギル side -

むう。困った…、困ったのう…。

ハジメの情報や、わしの情報を照らし合わせれば帝国が次にオスティアを攻め込む際は、以前より更に戦力を拡大して侵攻してくるようじや。

いくらオスティアといえども、厳しいものがあるはずじや。新進気鋭の紅き翼が今オスティアにいるとしても、不安じや。

ハジメも捜査や諜報ばかりでなく、表舞台に出てもらいたいものじ

や。奴なら紅毛翼以上の働きがでやねじや わいしな。

……いい案ではなかろうか。ハジメの今までの行動は恐らく誰も把握しておらんじや わい。わしも出来わんかつたら、分からなかつたじや わいしな。

よし。ハジメに頼んでみるとこゝへ。決めたなり即行動じや。

「お~い。誰かおらんか?」

……  
……  
……

## 第9話（後書き）

休みなので、書き上げ中。今日中に、後2話ぐらい上げる予定です。  
ではまた。

## 第10話

青年は黄昏の姫御子に出会つ  
そして、青年は舞台へ上がる

### 第10話

「表舞台へ」

オスティアの内部を探ろうとハジメは動いた。  
しかし、マクギルの緊急の連絡により、本国へ戻つたハジメだった  
が、  
そこでマクギルがいった言葉は、戦場へ出てもらいたいと言つもの  
だった。

・マクギル side・

「どういうつもりだ。マクギル」

ハジメは吐き出した紫煙を辺りに漂わせながらを睨んでくる。  
おお。この殺氣は寿命が縮むのう。

「次の帝国によるオスティアへの侵攻を食い止めもらいたい。と言つたのじや、ハジメ。」

場の雰囲気が凍る。

コズモエンターテイメント

「俺にそのような暇はない。完全なる世界の目的を知るために、後  
もう少し情報が必要だ。奴らに踊らされているような連中を助ける  
義理はない。」

「それで無関係のものが死に逝くとしてもかの?」

「いくらこの戦争が帝国、連合双方に入り込んでいる完全なる世界によるものじやとしても、それで死に逝くものはただ、己の正義のため、家族のため、生きるためのものばかりじやる。」

「…」

「ふむ。思つとこりがあつたのじやる。空氣がすこし程らいたのじやる。」

「それにこのオステイアの姫御子の話。眞実だとするならば酷いものじや。もしまだ、帝国がまたオステイアに侵攻してくるならば彼女もまた、兵器として利用されてしまうのじやる。」

「オステイアの姫御子か…。」

「何か考え込んでるよ、じやのう。姫御子になにかあるんじやる。」

「…完全なる世界の連中も姫御子を、重要なファクターとして認識を持つてこらへし。」

「なつ。なんじやとつ！」

「き、聞いてないぞい。そんなことは…」

「不確かな情報だからな。それに貴様が、姫御子についてオステイアに干渉すればバレる可能性があつた。」

「うつ」

「それも確かにそうじや。今まで大して干渉しようともしていなかつたわしが出でてくれば、怪しまれるのは仕方ないの。」

「だが、帝国が侵攻してくるとするならば、姫御子を出すだらう。奴らは。」

「つーか、まさか、お主…」

「やはり、実際に会つてみないとな。百聞は一見に如かずとこ。オスティアの連中の内部もより知れるといつものだ。」

そして、ハジメはニヤリと笑つた。

な、なんちゅう顔で笑うんじや。な、泣いた子供も泣き止むのつ…恐怖で。

「では、オスティアに行くとしよう。」

そう言つて、立ち去るうとしたハジメだつたが、数歩歩いて立ち止まつた。

「ん? まだ何があつたかの?」

「いやなに、オスティアで紅き翼に会つた。」

なんと。

「ほう。それで、どうじやつた?」

「鳥頭含め全員が一線で戦えるであつて強さを持つてこる。だが、」

「だが?」

「俺とは馬が会わんだろ? な。まつすぐな正義を信じる奴らだら?。」

「それなら、ハジメとはそりが合わんかもしれんのう。」

「つむ。分かつた。」

「ではな。」

そつ言つて、ハジメは去つていった。

オステイア - 戦場 -

「くつ。奴らが来たぞつ！」

ロープを纏つた男が叫ぶ。

すると、同じような姿の男たち、中心にいる少女の周りを慌しく動く。

「仕方ない。また役立つともうひとするか。」

「」のよつな幼子が…。不憫な

「愚か者が。見た目に惑わされるでない。これは兵器と思え。」

「ふう。全く。生きざたない連中が多すぎるな。」  
そこには突然、剣呑な雰囲気を纏つた男が現れた。

「そんなものに頼るぐらいなら、潔く死ねば良いものを。」

その言葉にロープ姿の男の一人が叫ぶ。

「な、何者だ。貴様。傭兵ならば、さつさと戦場に戻れつ」

すでに周囲は帝国の戦艦や鬼神兵が侵攻しており、戦場と化している。

「ふん。そんな無愛想娘に頼るしか能のない貴様のために来たんだよ。分かつたら早々と退け」

「はつ。貴様そんな丸腰で何ができると言つのだ。まさか、帝国のスパイか何かか？」

ロープ姿の男がそう言つが、男はそれを無視し、帝国の戦艦や鬼神兵を見通せる場所に立ち、構える。

「おいおい。…最後の警告だぞ。やつやと…！」

ロープ姿の男が黙つた。

構えた男から凄まじい力を感じたからである。

その男の姿を見て、氣づくものがいれば氣づくであつ。それは咸卦法アルテマ・アートといつ、究極技法の一つ。

そして男は、その力を解放する。

「つ！」

凄まじい力が指向性を持つて帝国の戦艦や鬼神兵を襲つ。

「つ…なんと。」

ロープの男が呆ける。

戦艦は黒煙を上げ沈んでいき、鬼神兵をなぎ払つた。

-主人公 side -

牙突・零式。飛び道具が欲しいと思っていたが、咸卦法とあわせると凄まじいの一言だな。賞金首になつてゐる今、表で刀を使うわけにはいかんからな。咸卦法の力を刃とし、放つ。使い勝手が良いな。さて、後ろで呆けている奴らはどうするとしようつか。そう考えて振り返る。

と、無愛想娘こと姫御子と田が合つた。

「…からつぽだな。絶望もできんか。」

無意識に言葉が出ていた。それほどまでに、無愛想娘の皿は空虚なものだった。

皿が合ひつて見詰め合ひつゝと数秒、

「今」いちです「げえの見たんだが、誰が使つてたんだつ？」

そこで突然、空氣も読まずに鳥頭が現れた。

「こ」は戦場だ。阿呆が…。

「なつ。十の呪文…」  
サウザンド

「この阿呆が現れたことで、役人どもが慌ててやがる。

「はあ。」

思わずため息をつくと、

「お、もしかしてお前だな。（辺りを見渡し）見るからお前だよな。」

鳥頭が詰め寄つてきた。なんと鬱陶しい。

「黙れ。鳥頭。それより、後ろを見る阿呆。まだ終わつてはいないぞ。」

その言葉に振り返る鳥頭。

「それもそつだな。よーし。んじやわつと倒しに行ひが。おーい、お前ら」

そこで空に鉢をかける鳥頭。仲間も来ていたようだな。

「ふむ、その無愛想娘をさつと中へ戻しておくんだな。巻き込まれるぞ？ 貴様」

「くつ。言われずとも。お前ら」い、わつと倒して來い」

そう捨て台詞を残してロープの男たちが無愛想娘を連れて去つてい

つた。

「ん？ 姫子ちゃん助けてたのか？ お前」  
そう尋ねてくる鳥頭。

「ふん、馬鹿いってないでわいつたと行くぞ。ど阿呆」  
「くつくつく。おひ。行ひひじやねえか」

さて、仕事は果たすとしよう。

- s i d e e n d -

紅き翼と一人の男がオステイアの防衛に加わってからは、ただただ一方的であった。

大呪文と氣砲ともいうべき拳撃や斬撃に帝国の戦艦や鬼神兵は敗れ去り、帝国のオステイア回復作戦は失敗に終わったのであった。

第10話（後書き）

う、まだいくる…。

青年はとうとう眞実に触れる  
しかし未だその全貌は知れず

第11話

「王と敵」

帝国は敗れ去り、一時の平穏が訪れるオステイア。

平穏な夜の帳の中、ハジメは目的のために城内に入り込んでいた。

主人公 side

しかし、鳥頭もしつこかつたな。全く、酒もろくに飲めなかつた。

⋮⋮⋮

戦いが終わり、宴があつた。と言つても、酒を飲み、飯を食らつて  
ただ勝利を祝うものであつたのだが。

俺もそこで、久々の休憩をかねて酒を飲んでいたわけだが……、  
「なあなあ。お前名前なんていうんだ?」といふか俺と一戦しようぜ

つ

この鳥頭が何を思つたか知らないが、やたらと話しかけてきて鬱陶  
しいことこの上ない。

「静かに酒も飲めんのか、貴様は。」

「いいじゃねえか。宴なんだしよ」

そういうて、満面の笑みで笑う鳥頭。

…つ。

いかんな。思わず手が出るところだった。

「はあ、黙れ。阿呆が。」

「ははは。すまないな。ウチの馬鹿が、迷惑をかける」  
そう言って、こちらに近づいてくる近衛。

「ふふふ。ナギもあなたと出会って、嬉しいのじょう。」  
近衛と一緒に近づいてくるアルビレオ。

「知るか。鳥頭をしつかり管理しておけ。」

「なんだと。俺は管理されるようなちちやな男じゃねえ。俺は  
無敵の千の呪文の男だぜっ」  
サウザンドマスター

そう言って、派手なパフォーマンスをしだす鳥頭。

「いいぞ。兄ちゃんつ。もつとやれえ」

そしてそれに乗つかつて、ドンちゃん騒ぎをしだす面々。辺りはど  
んどん騒がしくなつていった。

⋮

⋮

⋮

はあ。今思い出しても鬱陶しい。まあ忘れるとじよ。

さて、仕事をするとじよつか。

戦いが終わつて勝利の余韻を味わつてゐる今。次の戦いへの布石も  
含め、動く連中がいるはず。警備も緩くなつてゐるため、手がかり  
を掴める好機。逃すわけにいかん。

しばらく、探つていると、秘書の書斎らしき場所にたどり着いた。中に誰もいないこと、侵入者用の魔法を全て解除して入る。

ここ最近の王族や渡来してきた役人どもの情報や、金の流出入を確認していく。

……。

あらかたの資料を焼き終ると、ふと机に違和感を感じた。

… これは、隠蔽、認識齟齬系の魔法か？

そして、魔法を解除すると出てきた引き出しの中に入っていた資料を見ると、

「つ！」

完全なる世界トキヨモエンテレケイアに関する秘書の手記が書かれていた。読む速度を上げる。それらしき組織がいつごろから、どの頻度で来たかなど秘書の感想らしき文と共に箇条書き程度ではあるが、確かに記された。そして、最後は帝国が侵攻してくる前。数日前で終わっているが、書かれていることに俺は驚いた。

どうやら、完全なる世界トキヨモエンテレケイアと王族の誰かが近い時に密会を行つらじい。

… まさか、今日か？ ありえない話でもない。

俺は、部屋の状態を元に戻し、部屋から出て行つた。

- s i d e e n d -

… 王城の裏手、誰も踏み入れないような場所に2つの人影があつた。

「言われたとおり、秘書も手記も始末しました。しかし、驚きましたな。まさか手記に残しておつたとは」

威厳とも言えるような雰囲気を纏つた壯年の男が口を開く。

「いや、始末したならいいよ。僕らの存在を公にするわけにはいかないからね」

もう一つの影は、どこか人形を思わせる雰囲気を纏つた青年であった。

「その通りですな。では、これから話に移るとしましょう。」

「そうだね。」

そして、彼らには見えない位置で一人の男がそれを聞いていた。

-主人公 side -

部屋を出た俺は、奴らがいるかも知れん場所を気も用いて探索し、奴らを見つけた。

そして奴らに気づかれるよう、十分距離をとった場所で壁を背後にし話を聞いていたわけだが、今聞いた情報を自分で整理する。まさか、先ほどの秘書はもう始末された後だったということか。だが、手記はあった……。どうしたことだ？

「いや、今は奴らの会話を聞くことに専念しよう。とつとつ、完全な世界の奴らの足跡を見つけたのだからな。」

「……次は、……紅き翼には退場……にでも……もらおうか。」

「そうですね。あまり……ても困りますからな。……駒として有力な……ですかね。」

「紅き翼？鳥頭たちの事か。邪魔というのははどうことだ？」

「お姫様には……でもらおうか。その……には、君たちも……だよ。」

「しかし、……なのでは？ 実際に……。」

お姫様……分からんな。無愛想娘のことか？

「最後に、……についてなんだけれど、何か知っているなら……」「いえ、ですが……のつもりです」

「つーそこにはいるのは誰だ！」

「見つかったかっ！？  
仕方ない。逃げるか。

- s i d e e n d -

青年が一気に距離をつめ、壁を破壊する。

「……気のせい……だったのかな？」

辺りに気配はなかつた。青年は勘違いだつたと悟つて、

「まさか、奴の仲間でもいたのでしょうか？」

壯年の男が問うが、青年は、

「いや、恐らく僕の勘違いだよ」

と返した。

「そうでしたか。珍しいこともあるのですな」

壯年の男は、さも驚いたかのように応える。

「……そうだね。」

そう言つて、青年は崩れた壁を見て、夜空を見上げた。

夜空には何かを暗示するかのように、月が輝いていた。

## 第11話（後書き）

次話は夜に更新すると思います。ではまた。

## 第12話

青年は信念のもとに斬る  
斬り去つたものに振り返らない

### 第12話

「王殺し」

月の明かりだけが辺りを照らす中、一人の男は佇んでいた。

・主人公 side -

煙草に火をつけ、いつものように味わう。

「ふう。」

吐き出した紫煙が辺りに漂い、霧散する。

まさか、いきなり当たりとはな……。オステイアが怪しいとは思つてはいたが、上はその殆どが黒いのかも知れんな。

まずは、あそこにいた人物。それとその周りの人間。それで、あの男・完全なる世界のことが分かるはず。

無意識に口が曲がるのを俺は自覚した。

首を洗つて待つている、完全なる世界。<sup>コズモエンターテイニア</sup>貴様らを表舞台へ引きずり出し、その首切り落として見せよう。

帝国がオステイアを撤退し、早くも1週間が過ぎた。

俺は、オステイアの王族を洗いざらい調べようとしたわけだが、随分と王族と言うものは歴史や文化を大切にするのだな。

恐ろしいほどの資料が王都が管理する図書館に並べられていた。マクギルに出させた許可証を用いて一般では閲覧出来んような資料も含めるとその量は圧巻の一言に尽きる。

オステイアの王族には様々な家系に分かれているらしく、各々がこの王都オステイアの王族としてこのオステイアを支えているらしい。『苦労なことだ。よく滅びんな。

王族の主要人物を調べているだけでも数日をかけた。そして、あの夜あの場所にいた人物。それがウエスペルタティア王国国王。…国王自らが世界を滅ぼしかねん完全なる世界のよくな連中と繋がっているとはな。

…もしかしたら、完全なる世界コズモエントレケイアは、何か違う目的を持つて動いて

いる？王族のトップが率先して動くのは不自然極まりない。

世界を衰弱させ征服する？まさか。それこそ、今奴らが持つている繋がりを發揮すれば、それこそ世界など意のままだ。

なら、なんだ？…魔法世界…オステイア…帝国…連合…世界を巻き込んだ戦争…、そして…オステイアの姫巫女。  
何をするつもりなんだ？完全なる世界コズモエントレケイアは…。

分からんなら…、聞くしかないか。

オスティア、王城の円卓に十数人の影があった。

そこでは王族のトップが集まり、あることについて話し合っていた。

「…ふむ。順調ではないか。悲願が叶えられる日も近いな」  
ウェスペルタティア国王が、嬉しさがにじみ出ている顔で話していた。

「ええ。『樂園』はもうすぐですな。」

その言葉に他の王族もうなずく。  
あることとは、完全なる世界ワズモエントレカイアが行おうとしている魔法世界の滅亡マジックワールドのマジックワールドと、  
その救済である『樂園』についてであった。

そして、それらが順調に運んでいて、話し合ひの場の雰囲気は至つて和やかであった。

が、

「『樂園』…か。興味深いな。詳しく話を聞かせてはもらえんか?」

そこに男が扉を背にし、傲岸不遜に割り込んだ。

-主人公 side -

全く、王族というのは阿呆ばかりか?こんな場所に集まるとは秘密の会合があるといつているようなものだらう。だが、そのおかげで、じつして奴らに關して聞く機会ができたのだから歓迎すべき事態だ。

「な、何者だ。貴様つ!」  
「じつがどこか分かつてゐるのか!?」  
老人共が騒がしいな。

「黙れ。俺が聞きたいのは、今喋つていた『樂園』を含めた完全なテレケイア世界。奴らの目的だ。」

完全なる世界で顔色を変えたか。

なるほど。他の王族は全員国王の手駒であり、目的も知つていると…。なら話は早い。

「大人しく話すなら見逃すが…、抵抗するか？」

「くつ。王家の血をなめるでない。賊如きがつ」  
そう言って、こちらに魔法を放つてくる若き王族。

それに対し、俺は腰に携えた刀を振るい、魔法を切る。

そして若き王族へ瞬動で後ろに回りこみ、返す刃でその命を屠る。

一気に静まる円卓。

「貴様らがしてきた事は、把握している。完全なる世界に支援して  
いた事、帝国、連合に入り込んだスパイ、傭兵の事、そして…今回  
の戦争が始まつたとき、貴様らが裏で何をしていたか。楽しかつた  
か？辺境をつぶすのは」

「馬鹿なつ！なぜ計画が知れている…？」

国王が叫んでくる。

なぜ？調べようとすれば調べられるんだよ。動かすのは貴様らでも、  
動くのは民だ。阿呆が。

「…貴様らは『悪即斬』のもとに…断つ。」

そつ、貴様らのようなものを断つ為に、俺は『悪即斬』の信念を背  
負つたのだからな。

そして俺は、刀を構えなおし、王族どもと向かい合った。

刀が振られるたびに、腕を足を首を斬られる者が増えていく。

飛び散る血に円卓は、部屋は血に染まつていいく。

⋮

「うう。ぐああ。

」老いた王族の胸に風穴を空けた後、牙突の構えを解く。

「さて、貴様で最後だな。国王」

俺は、国王と対峙した。

「くくく。なぜ、そこまでの強さを、信念を持つていいのこ

…、彼らの、我等の理想を理解しないのかね？」

「ふん。目的も分からんような奴らのために振るうつ剣など持つてい  
ない。」

そう言い捨てると国王は、

「はははははは。では、教えてあげよう。彼らの、コズモハンターレケイア完全なる世界の理想を。」

「まずは、この世界。魔法世界の成り立ちからだが……」

⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
⋮

「そして、彼らを救うために作り上げられる、理不尽も不幸もない『樂園』に、世界は移り住むという事だ。素晴らしい事であります。彼らは、我等は世界を救うのだ！」

国王は嬉々として語った。俺は話の途中で吸った煙草を吹かしながら、

「ほつ。魔力が枯渇し、消えていく魔法世界と『いな』はずの魔法世界人を救うね。」

重要な要点を反芻した。

「わつだ。素晴らしいからつ。ならば、今からでも遅くない。貴様も…」

「下らんな。」

俺の言葉に呆ける国王。

「正氣で言つているのか貴様」

顔を憤怒の形相にした国王が問つて来る。

「正氣も何も下らんといったのだ。何だその世界は。理不尽も不幸もない? そんな場所に住めるほど人間はきれいではない。」

更に続けて俺は言つ。

「それにだ。今を生きている者が掴み取つた幸せを無碍にする事が許せん。それは貴様らが行つ事でも区別する事でもない。救いたいところならば、魔法世界の者全員に今の話を聞かせるがいい。わざわざ世界を滅ぼすような真似をせずともよからう。」

「世界を滅ぼさねば出来ぬ救いならば、しないほうが良い。神にでもなつたつもりか? 貴様ら…」

「黙つておれば、好き放題言つてくれるな賊がつ!」

憤慨して、こちらに攻撃を仕掛けてきた国王。

「それは、こちらの台詞だ。あまり好き放題してくれるな。この世界はお前らの世界ではない。たとえ作つてあつたものだとしてもだ」

その攻撃をよけ、国王の心臓に狙いを定め、突きを放つ。

「がつ」

貫かれた反動で痙攣する国王。飛び散った血がすでに撒き散らされた血と混じる。

「本当に世界を、人を救うといつ事はそうではない。それに、人はそれほど弱くはない…。」

む。誰か駆けつけてきたか。当たり前か。門番が事切れているのだからな。  
さて、完全なる世界。貴様<sup>ごぞう</sup>の目的は知つた。だが、それは止めさせてもらひつで。

窓に飛び乗り、虚空瞬動で空を駆ける。

「…………王つ。……父上つ…………つ……」

暫くは、裏の諜報だけになりそудだな。

- side end -

ウェスペルタティア国王含め十数人の王族が殺された事は、オステニア<sup>オステニア</sup>王都だけでなく、帝国、M<sup>メガロ・メセンブリア</sup>・M<sup>コグモ</sup>の連合を驚かせ、もちろん完全なる世界にも衝撃の出来事であった。

- 完全なる世界 side -

「くつ！」

振り上げた拳を思いつき机に叩き落し、その結果机は粉々になつた。

「なんてことだい。まさか、こんな事になるとはね。」

アーウェルンクスが、重々しく口を開く。

「早急に実行犯を探す必要があるな。」

デュナミスが提案する。

一見冷静そうな彼らだが、すでに回りはボロボロであった。デュナミスも握りこぶしで血がにじみ出ている。

「大幅な計画変更だよ。だが、戦争は、計画は終わらせない。みんなを集めるのは頼んだよ、デュナミス」

「心得た。忙しくなりそうだな。」

デュナミスは未だに八つ当たりをし続けて他の面々を呼びに行つた。

「まさか、最近は出る事が無かつたパイルドライバーが？これは僕たちも探しに出なければならないかな」

そう言ってアーウェルンクスは、部屋を出て行つた。

- side end -

歯車は加速する。

ハジメは真実を知つた。

しかし、その信念はその真実を否定し、ハジメは完全なる世界コズモエンドレケイアと対立する。

戦争は佳境を迎えると激しさを増していく。

## 第1-2話（後書き）

アリカのクーデターフラグを叩き折っちゃいました。一応続きとかは構想しているんですが、少し無理やりな展開かもしませんね。ではまた。

## 第13話

青年は王女と出会つ  
彼女の瞳に青年は何を思つ

### 第13話

「出会い

・主人公 side・

「で、これはどういふことだ。マクギル。」

少々目つきがきつくなるのを自覚しながら、マクギルの隣でこじかうを睨んでくる小娘を無視して俺はマクギルに聞いた。

「ふおつふおつふお。もつ会つて話をしたよつじやのう。…印象は最悪のよみじやがのう…。」

話を変えようとするマクギルをもう人睨みし、

「誰が仕組んだ事やら。…今度はどんな頼みことだ?・マクギル。」

そういうと、マクギルは少し呆けた後にやりと笑つて、  
「この方を護衛してもらいたいのじや。」

： - 邋る事約一時間前 -

朝となり、人が行きかつて騒がしなくなる時間に俺は静かな喫茶店の奥で一服していた。

この喫茶店は、俺がマクギルの秘書と契約の確認をした喫茶店で、それからというもの、俺が本国でマクギルと会うときは、いつも利用している喫茶店だ。だからなのか、いつも人は居ない。

いつもの通り、マクギルに渡された欠けた銀貨を渡し、奥の部屋に

行く。

つまり、俺はマクギルと待ち合わせをしているわけなのだが……、  
「……遅い。」

すでに約束の時間から30分は経過していた。普段はこんな事はない。襲撃でもされたか？それとも、とうとうボケが始まつたか？いや、他にも……

そんな事を考えていると、

「すまぬ。道が分からなくてな。遅れてしまつた。」

現れたのはローブをかぶつた小娘だった。

「……小娘、貴様何者だ？」

「む。誰じや貴様は。気安く話しかけるな下衆が。」

ミシリと空間が悲鳴をあげた。

「おつと。いかんな。思わず力んでしまつたようだ。」

「ほつ。小娘如きが、偉そうな口をたたくな。程度が知れるぞ？」

「話しかけるなと言つた筈のじやが。言葉が通じておらんかつたのかのう。」

ほづ。

「ふつ。なぜ貴様の様な小娘の言など聞かなくてはいけない？少々、いや、多大に自らを省みたほづが良いな。妄言もほどほどにしておけ、小娘。」

「つ。……ふつふ、私を知らんのか？無知もほどほどにしてほしいも

のじゅ。」

「ふう。名乗つてもいない、ロープをかぶつているような者を知つているとでも？その年で呆けたか？小娘。または、自意識過剰の阿呆かどちらかか。」

くく、我慢でもしているのか、手が震えているな。笑つてしまいそうになるな。

「…。ならば、私の顔を見て後悔しろつ。」

そう言つて、ロープを取つた小娘の顔は、…

俺が殺した国王の娘、ウエスペルタティア王国王女アリカ・アナルキア・エンテオフュシアだつた。

「いやあ、すまんのう。少々ごたごたが起きておつて…のう」。マクギルがやつと来たわけだが、この場の空気を悟つたのか。

「ふおつふおつふお。わしが最後じゅつたかあ。」

俺と小娘…アリカ王女との間に座つた。

・そして、冒頭に戻る・…

「な。誰がこんな無礼な男を護衛になどつ。」

小娘が、先ほどの事を根に持つてゐるのか憤慨した様子でマクギルに詰め寄る。

「いや、じゃがしかし、そこに居る男、ハジメは世界の情勢を良く知つておるし、暗殺などにも鼻が利く。なによりも王女を任せられるほどに…強い。」

「む。しかし…。」

そして、じりりを睨んでくる小娘。

「ふう。」

俺は、いつものように煙草を吸い、紫煙を吹ぐ。

「マクギル。護衛の必要性となぜ俺なんかの理由を教える。」

「そうマクギルに聞く。まあ、理由には見当がついているがな。」

「ふむ。ます必要性じやな。国王が死んだ事はもう知つておるの?」

「…ああ。もちろんだ。」

「もちろん、次期王になるのはここに居るアリカ王女なのじやが。ウェスペルタティア王国は今、『たごたしておつての。なにせ、国王含め十数人の王族が暗殺されたのじやからなあ。無理もない。』それを聞いた小娘はきゅつと拳を強く握つた。

「…王国が沈静するまでの間暗殺や洗脳がされる恐れがあると、言つことか」

「まあ、やうこひとじやのひ。そして、それをお主に頼んだ理由はの…。」

そつぱつヒーリングを向くマクギル。

「お主最近、少々派手に動きすぎたようじや。勘付かれておる可能性がある。」

「やはりか。たしかに、この前の件はいろいろな奴らにとって、大事件だつたようだからな。」

「…ふむ。確かに、俺も少々仕事を控えようと思つていたところだ。受けでやつてもいい。お前もそれでいいな?小娘。現状を把握できていなほじ愚かではあるまい?」

「ぐつ。いちいち腹が立つ言い方をする…。嫌な奴め…。」

「そもそも何か独り言をのたまつている小娘。どうでもいいが、聞こえているぞ?」

「嫌な奴で結構だが…。受けるのか受けないのかどちらだ。」

「つ。か、構わんぞ。マクギル殿、この度の件感謝する」

聞かれていたことが大層驚いたらしいな。随分面白い顔をしている。

「いえ。当然のことでしたまでです。アリカ姫」

そうして、俺は小娘…アリカ王女の護衛となつた。

ふう。さて、束の間の平穏な時間か。はたまた、新たな騒動の時間か。

まあしかし、奴らの動きを見るためにも少々間が必要だつたのも確か。ならば、しつかり励むとしよう。

「ほれ。さつさと行くぞ。ハジメ。」

そう言って、先に進んで物珍しいのか辺りを見回しながら先に進むアリカ王女。

…再訂正だ。やはり、まだまだ小娘だな。

## 第1-3話（後書き）

今日は用事があるので、次話は夜になりそうです。ではまた。

## 第14話

青年は王女に語る  
王女は青年を知る

- 第14話 -  
（護衛）

メガロ・メセンブリア  
M・M首都の外れ。

休憩所となつてゐるのであるつ、その場所にまばらであるが人影がいくつか見えた。そこに、2つの人影があつた。

-主人公 side -

俺は、抱えていた荷物を降ろし口を開いた。

「護衛されている身分といつのに、随分とまあ、買い物をしたな。」

「うつ。私は、あまり外に買い物をするといつことをしたことがなかつたのぢや。別に良いぢやろつ。このくらい。」

そう言って、そっぽを向く小娘。

「別に構わんさ。俺にとつては休暇のようなものだ。」

そう言って腰を下ろし、煙草に火をつける。

「ほう。私を護衛する事が休暇と変わらんとな?」

「実際、今貴様を襲つたところで余計オステイアが混乱するだけだ。まあそのために襲う可能性もあるがな。」

紫煙を吐き出しながら続ける。

「それに、もし今、貴様を狙うというなら好都合。それは転じて、

この戦争が終わつた後の弱みとなる。

「私が死ぬ事になるとか考へんのかのう。」

そう口を引きつらせながら聞いてくる小娘。

「愚問だな。この俺が護衛である限り、やすやすと死なせん。仕事だからな。」

立ててなかに

「したのじゃ」とかんたんに

それに疑問を感じたのか 小娘が問う

瞬間、  
俺たちが居た場所に向かって放たれた魔法に向かってぐるぐる

牙突の構えから牙突零式を放ち、魔法を打ち抜く。そして、その直線状にあつたものを全てなぎ払う。

五月蠅の里に居たが

「場所を移すか。

「そ、そ、う、じ、や、な、

10

見晴らしの良い丘に来た。ここまで来ると人は居ないものだな…。

そんな事を考へていると、

「さうながだ？」

小娘が変なことを聞いてきた。

「いや、ハジメはいつも攻撃されたりしたら、あのよつに反撃する

事に迷わんのかと思つての「

「おかしなことを聞く。今の俺は貴様の護衛だ。迷えば、死ぬのは俺でなくお前だ。」

そう言うと、なぜか小娘は少し笑みを浮かべ、

「ふふ。それはハジメの信念『悪即斬』からきておるのかの?」

「マクギルか…。あのおしゃべり爺が「

「私は、ハジメの口からその信念を聞きたいと思つての。なぜ父王が討たれたのか。」

そう言って、こちらを見る小娘。まさか、俺が仇と知つていたとは。だが、その目には理性の光がある。

「なぜ、それを知つておきながら、俺を護衛にする事を許した?」  
父の仇ならば、近寄りたくもないだろう。それにいくら完全なる世界コスモエントレと繋がっていたとはいえ、表向きはなんら問題はなかつたはず。

「分かつてあるのじや。父王が何をしていたか。マクギルにも少し話を聞いた。…ハジメが討つておらんかつたら、きっと近いうち私が討つておつたじやろ。」

「そして、さつきハジメは私を守つた。それで思つたのじや。別にハジメは王族が憎いわけではない、ハジメの信念が父王を討つたのじやとな。」

丘の先へ足を進め、こちらへ振り返る小娘。

「だからハジメの口から聞きたいと思つたのじや。その信念を。」

紫煙を吐きながら煙草の火を消す。

「小娘。人にとって幸せとは何だと思う。金か?名譽か?家族か?…そんなものは人が積み上げてきたもので決まる。」

小娘は黙つて聞いている。

「人の価値観とはその生きてきた環境で、人生で大きく変わる。家

族が居ない者が家族を求めて家族を作ったのならそれは幸せだろう。なにもない、食う物にすら困つたものならば、金を権力を手に入れただならばそれは幸せだろ。」

「だが、それが他のものが築き上げた幸せを踏み潰すものならば、俺にとつてそれは等しく悪だ。」

そこで小娘が口を開く。

「それでは、ハジメは弱者の味方という事か？」

「ふん。誰がそんな事を言った。弱いせいでの踏み潰されるならば、それはそいつ自身のせいだ。強くなければ幸せなど手に入れることはできても守れん。」

「…不當に奪い、不當に得る。そんな奴らを斬るだけだ。」

「俺の信念は、悪を斬れても、幸せを、平和を守る事はできん。」  
「それが出来ていたらなば、この信念を貫いた男も違う時代を生きていたかも知れんな。」

「それをするのは、お前らの仕事だろ。」

「そう小娘に言つと、小娘は目をぱちくりとさせる。」

「この戦争で腐つた膿は俺のよつた奴らが吐き出してやろ。だが、戦争が終われば貴様らが舞台の主役だ。貴様に出来るか？ 平和を人々の幸せの基盤を築く事が。」

「ふふ。何を言つかと思えば。当たり前じゃ。人々が幸せを作れるよつて、守れるようにするのが私たち、私の任された事であり、信念じやからな。民は私の宝じや。」

夕日を背にし、そう自信満々に答へ、その瞳に強い光を見せる。

「それに、ハジメは私を守つてくれるのじやろ。」

そう言つて微笑むアリカ。

「…」

「どうしたのじゃ？ハジメ」

「いや、そろそろ帰るとしよう。」

帰り支度を始め、歩き出す。

「そりじゃな。」

そう言つてアリカは俺の横に並ぶ。

言えるわけなかつ。貴様に一瞬見惚れていたなど…。

言えるわけがない。

## 第1-4話（後書き）

ハジメの信念を一部説明する意味も含めた話だったのですが、あれ?  
?最後なぜこんな事に…。基本ヒロインとか考えていなかつたんですけどね。  
どうしようかな。ハジメなら胸に秘めたまま終わりそういうけど。

難しいですね。ではまた。

青年は束の間の平穏を得る  
されど世界は動き続ける

第15話

「平穏」

・主人公 side・

朝、新聞や情報端末から情報を仕入れていると、  
「ほう。」

紅き翼がグレードブリッジ奪還にて活躍…か。  
そもそも戦況も動きそうだな。

「何を見ておるんじや？」

突然、アリカが顔を覗き込んで聞いてきた。

「グレートブリッジ奪還だ。知っているか分からんが、紅き翼の連  
中がその際に活躍したそうだ。」

そう返しながらアリカの頭をどかす。

「むう。…紅き翼アラルブラか。聞いたことがあるの。千の呪文サウザンド・マスターの男じゃった  
か?ハジメはあつたことがあるのか?」

どかされた事に若干不満でもあるのか、じちらを睨みながら聞いて  
きた。

「一応あの鳥頭や他の連中にも会つたことはある。が、このジャッ  
ク・ラカンという男は知らんな。情報によると、自ら奴隸から傭兵  
に成り上がつたそつだ。それなりの実力者だろう。」

ふと時計を見ると、マクギルに少し来て欲しいと頼まれた時間が迫  
りつつあった。

「さて、俺はマクギルのところに行くが、くれぐれも外出など軽はずみな事はするなよ？アリカ」

「む。私の護衛はハジメじゃろう。私を護衛せずしてどうするのじや。」

無愛想な顔だが、目が若干怒っている。はあ。俺は父親の仇といつ事を忘れているのか？こいつは。

「俺の本来の仕事は諜報と暗殺だ。そもそもマクギルに頼まれた仕事だ。」

そう言って、マクギルのところへ向かう。

「早く帰ってくるのじや。」

⋮⋮⋮

マクギルの仕事用の書斎の前に着く。

「マクギル、入るぞ。」

そう言いながら中に入ると、マクギルの他に髪のメガネと少年がいた。<sup>ガキ</sup>

見た事ある顔だな。……ああ。マクギルの情報源の一つか。

「お、ハジメ。よくきたの。」

「ほう。お前があの有名なパイルドライバーか。話はマクギル元老院議員に聞いているよ。」

「マクギル、貴様喋りすぎだ。そして、誰だこいつらは。」

マクギルに釘を刺し、紹介を促す。

「分かつてあるわ。」

そう言って、目で髪メガネにも促すマクギル。

「ああ。まあ知っているとは思つが、元捜査官のガトウ・カグラ・

ヴァンデンバーグだ。」

髭メガネがそう自己紹介し、

「タ、タカミチ・T・高畑です！」

それに続いて少年も自己紹介した。

「俺は、ハジメ・サイトウだ。知つてのとおりパイルドライバー・政治家殺しをしていた。」

「していた…？」

目敏いな。ヴァンデンバーグ。

「今は、どこぞのお姫様を護衛していくてな。それに、暫くは表立て動けんのだ。それが理由だ、ヴァンデンバーグ。」

「別にガトウで構わん。それより、姫といつのは？」

「…」、これ。ハジメ。

「ん、これは教えてはいけないのか。てつきりここで情報の共有をす  
ると思つていたんだが。」

「知つているのですか？マクギル元老院議員。」

マクギルに問いただそうとしているガトウ。それに焼てるマクギル。  
勢いよく開かれる扉。

…ん？

皆の視線が、一斉に部屋の入り口に向かつ。

そこには、ロープをかぶつた無愛想な顔のアリカが立つていた。

「遅いぞ、ハジメ。私が迎えに来てやつたぞ。」

思わず、煙草を落としてしまった。

「…なぜ、貴様ここにいる。」

「今日は、中心街の方へ買い物に行きたくての。ハジメが居なかつ

たら行けんじゃろ?」

あまりの阿呆さに、思わず手でこめかみを揉んでしまう。

「…今日は大人しくしておけ、と言つておいたはずだが?」

「そんな毎日部屋に引っ込んでなどおれん。」

当然とばかりに言い放つアリカ。

「ま、まさか。オステイアの……。」

ロープで隠しているとはいえ、その顔に見覚えがあるのだろうガトウが呆然としている。

「なんとこう」とじや。」

マクギルも呆然としているな。

「ほれ、行くぞハジメ。護衛が居ればいいのじやろ?」

そう言つて、アリカは俺の腕を掴み、

「では、お主ら。ハジメを借りていこうぞ。」

俺を連れ、書斎を出て行つた。

呆然としている三名を残して。

⋮⋮⋮

「アリカ、貴様はもう少し自分の立場を認識しろ。ここはM・Mだ。メガロ・メセンブリア」  
スペイや過激な行動を取る奴など、どこに居てもおかしくはない。

片手に荷物を持ちながら、俺はアリカに言い聞かせる。

「仕方なかろう。私はあまり世界というものを知らぬ。教えてはも  
らつたが、見た事もないのじや。こうして、民たちがどういう生活  
をしているのかを、知りたいのじや。」

「それに、護衛であるそなたが、私を守ってくれるのじやろ?」

そう言つて笑顔でこちらに振り向くアリカ。

「…仕事だからな。」

「ふふ。なら問題なかろう?」

「はあ。あいつら固まつてたぞ?それに恐らく今日、互いの情報を話し合つつもりだったのだろう。まあ結果は…貴様が乱入したせいで、マクギルは今日貴様の件について、ガトウに話す事も多そうだがな。」

そう言いながら、アリカを見る。

「むう。そこまで目くじらを立てんでも良かろ?」

むくれるアリカ。最初に比べ随分と表情を出すようになったな。最初は無愛想顔か睨み顔しかしなかつたからな。

アリカが止まつてしまつたので、

「ほれ、行くぞ。まだ行きたい所があるのだろう?」  
そう言つて、手を差し出し先を促す。

「つ、うむ。そうじやな。では、…失礼して。」

そして、恐る恐る差し出した手を握るアリカ。

「ふふ。…」うこうのもいのじや。コホン。…では、行くとするかの。」

途端に笑顔となつて、アリカが歩き出した。

よく分からんやつだ。そう思いながら、アリカと歩をあわせながら進む俺であった。

## 第15話（後書き）

「アリカを救えっ。ついでに世界も救っちゃえ。大丈夫っ。ハジメならできる。」と友人に唆されたG·qazです。奴も俺もアリカ好き。

というわけで、アリカがヒロインになります。これから先、更に原作ブレイク、オリジナル展開が繰り広げられると思いますので、苦手な方は気をつけてください。

もちろん、楽しく読んでいただけるようG·qazも頑張りたいと思いません。ではまた。

## 第16話

青年はピースをそろえていく  
世界は青年を補足する

### 第16話

～合流～

・主人公 si d e -

「そうか…完全なる世界は、もうそこまで深く入り込んでいるのか。

」  
そう言ってガトウがうなだれる。

「ああ。戦争の調整すら出来るほどにな…。オステイアを守った後、  
紅き翼アラルフラが辺境に飛ばされたのも、おそらくは連中の息がかかった奴  
らが仕組んだ事だろ？。あいつらは良くも悪くも戦況をひっくり返  
す力を持っているからな。」

短くなつた煙草を灰皿に押し付け、新たな煙草に火をつける。

今日はガトウと、先日アリカに邪魔されて、できなかつた情報の共  
有をする事になつた。アリカ？今はもう夜だからな。寝ているだろ  
うさ。

マクギルはアリカの事をガトウに話すことが主だつたらしく、いな  
い。最近、連合の戦績が良くなつてゐるため忙しいようだ。

「しかし、良くこれだけの情報を個人で…。いくら元老院議員の助  
力が会つたとしても、凄まじい諜報力だな。」

机の上に散らばる資料。端末の情報。それらを見渡しながらガトウ  
が呟く。

「なに、その殆どが非合法で手に入れた情報だ。今考えると、なぜ完全なる世界<sup>「ズモーンテレケイア</sup>の連中に見つからなかつたのかが分からん。」

そう疑問を呈し、紫煙を吐く。

「恐らく、殺したのが完全なる世界<sup>「ズモーンテレケイア</sup>に関する者だけでなかつたことと、パイルドライバーが顔すら知られていなかつた事が大きいだろうな。」

資料を見通しながら、ガトウがそう返す。

お互<sup>い</sup>いの調べ上げた資料を見ながら、今のように疑問などをやり取りしながら情報の共有を済ましていった。

「そして、これは本当なのか？魔法世界が消える…」<sup>「」</sup>「うのは。」  
ガトウが、俺が未確認とした情報について聞いてくる。

「未確認と書いているのが見えんか？それに、そこに書いてある情報はおそらく、直接完全なる世界<sup>「ズモーンテレケイア</sup>の連中に聞かねば分からん事だろう。下手すると、全てが嘘かも知れん。」

どこの世界にあなたの世界は魔法で作られているんですよ、と聞いて信じる阿呆が居る。

「だが、これが真実だとすると、奴らが戦争を裏で操つていての辻褄が合うな。」

「そういうことだ。そして、今は奴らのアジトを探つていてる最中というわけだ。」

「が、有力なものはないな。殆どが探つた後か、信用の乏しい情報だ。」

そう言って、資料を閉じる。

「だが、敵は知れた。これは大きい。」

「せいぜい、頑張ってくれ。こちらも護衛がなければ世界を飛べるんだが…。」

「おいおい。姫様を何だと思っているんだよ。」

ガトウが苦笑を浮かべる。

「次世代の礎を築くべき人間だな。信念を持っているし、芯も通っている。奴らの思惑のために、死なれたりするのは困るな。」

アリカの感想を述べたら、ガトウが呆けた顔をしている。

「どうした?」

「いや、普段から想像できんほど、姫様を買つているんだな」「ふん。正當に評価も出来んよつでは、諜報はできん。」「それもやつだな。」

そうして、夜は更けていった。

- side end -

- 紅き翼 side -

「しかし、ガトウの奴、会わせたい奴らがいるつて言ってたけど、どんな奴らだろ? なあ」

ナギが期待を強くした声で疑問を投げかける。

彼らは今日、ガトウに呼ばれ本国首都まで来ていた。

「さて、協力者とは言つてましたが…」

アルビレオもさすがにその詳細までは分からぬよつだった。

「よつ、よくきたな。早速会わせたいと思うから、いつに来い。」

ガトウが到着したナギたちを案内する。

「なつ。マクギル元老院議員つ」

マクギルの姿を見た詠春が驚き声を上げる。

「わしちやう。主賓はあちらの方だ。：ウェスペルタティア王国：アリカ王女じや。」

マクギルの紹介と共に、こちらの部屋に上がってくるローブを纏つた女性。そしてその少し後ろに控える、口煙草をしながらこちらを見ている男がいた。

その男の姿を見てナギが、

「あーっ。お前、オステイアのときこいたえーっと…、誰だっけ？見覚えがあるのか、声を上げ男を指差したが名前が出てこない。」

「ふふ。そういえば彼とは名前も交わしませんでしたね。」

アルビレオが名前が出てこない理由を述べた。

「そりだつたっけ？」

「そりいえ、名前を交わしていなかつたな。」

「宴じやつたしのう」

ナギも詠春もゼクトも名前を交わしていなかつたのを思い出したようだ。

「おじおじ、俺はこいつ知らねえんだが。そんなに面白い奴なのか？」

唯一余つていなこラカンも加わる。

「阿呆か、お前ら。主賓は俺じやなくこいつだ。」

そう男が口を開き、場の修正をする。

「や、そりだぞ。お前ら。王女を前に失礼だろうが。」

ガトウも、まさかこいつなるとは思わなかつたらしく、少々焦りながら続く。

「いや、別にもう良い。すこし、外に出る。」  
そう言い残し、去つていく王女。

「ん、終わりか? んじゃ、お前名前なんていうんだ?」  
そう笑顔で聞いてくるナギに、

「「はあ」」

男とガトウのため息が重なつた。

- side end -

- 完全なる世界 side -

「こいつがパイルドライバー…なのか。」

資料を読んだデュナミスがアーウェルンクスに問う。

「まだ、恐らく…という段階だね。なにせ、用意周到で痕跡も死体以外残さない上、顔も知られていないからね。…だけど、8割方彼で決まりだろうね。このような状況を作り出せる者が、他にいると考えるのは少し厳しい。」

そうアーウェルンクスが返す。

「…ふむ。…異界の者か…。」

そこに突然、何者かが話に割つて入つた。

「「つ!」」

「…<sup>ライフメーカー</sup>造物主…。まだ出番は遠いと思いますが?」

デュナミスが突然現れた黒いローブを纏つた者に聞く。

「…興味が湧いた…。」

「ライフメーカー」と呼ばれた者が資料を見る。

そこに書かれていたものは、オステイアで活躍した傭兵ハジメ・サ  
イトウのものであった。

## 第1-6話（後書き）

さて、とうとう造物主も登場しました。もう少しで戦争編も終わるかな。

「お前、遅筆じゃなくね？」 そいつわれたG - q a nでした。どうなのでしょうね？ ではまた。

## 第17話

青年は先を見据える  
世界は青年に襲い掛かる

### 第17話

（襲撃）

・主人公 side・

「ふむ。こんなものか。」  
構えた刀を解く。

「ぜえつ。ぜえつ。」

「はあつ。はあつ。嘘だろ？俺たち2人がかりでこれかよ。」  
地面に倒れこんでいるナギとラカンを見下ろす。

「これでも修羅場をいくつも潜り抜けた身でな。諜報活動というのを甘く見るなよ？」

この2人が、「一戦やろうぜ。」と余りにしつこいため、「ならば2人がかりで来い。格の違いというのを見せてやろう。」と相成り、ここでは大規模な魔法や氣を使えないため肉弾戦にしたわけだが、  
「それにしても貴様ら、本当の阿呆か？そんな直線的な攻撃ばかりならば誰でもよけれや。戦い方というのを知らんのか？」  
そう、こいつら連携が出来ていない上、殆どが真正面からや大して作戦も立てずに突っ込んでくるという、いわば自らの身体能力や魔法でしか勝負していない。

たとえ、頭を使った攻撃をしようとしても、分かりやすいフェイン  
トだつたりする。

「いや、あの速度で対応できるのはもう居ないと想つのだが……。少し離れた場所で詠瞬がそういうと、ガトウも頷いていた。

「これから貴様らは、完全なる世界ワカヨウノテレカイアと戦つ事になる。これぐりこ出

来る連中だと思っておけ。おそらく、トップに近しい立場であるわ、あの入形のような奴は……鳥頭、お前と同じほどに強いぞ？」

「へつ。おもしれえ。世の中にはまだ、こんな強いのが居たとはな。

」  
そう笑みを浮かべながら立ち上がる鳥頭。

「後、俺は鳥頭じゃねえっ！ナギ・スプリングフィールドって名前

があるんだよ。」

そして俺に向かってくる鳥頭。

「そういうことは、せいぜい俺を倒したときには言つんだな。

「ワッハッハッハ。俺も忘れんじゃねえぞっ。ハジメつ」

さて、この阿呆どもの相手は、もう少し続きやうだな。

……

「おおらあああっ！」

瞬動でこちらに向かってくる鳥頭。

それがあわせながら、後ろを狙つているラカンの顎に、鳥頭をよけながら掌底を喰らわす。

「ぐおっ」

「だから、丸分かりだ。阿呆共。」

俺の横を通り過ぎる鳥頭のロープを掴み、地面に叩き潰す。

「ぐえっ」

「もうこのぐらいで良かろう。魔法も氣も放てないならばそれ以上

居るものとそりゃ変わらんのは理解した。」

「いやいや、んな阿呆な。」

「ふふ。格闘術なら、まさに格が違つよつですねえ。」

詠春とアルビレオが苦笑しながら俺の言葉に反応する。

「くそお。次戦の時は、もつと広い場所でやろつぜ。俺の大呪文で今度こそ倒してやる。」

「おうつ。俺のラカンスペシャルでな。」

随分と立ち直りが早い連中だ。

「さて、俺は護衛に戻る。マクギルが来たら連絡してくれ、ガトウ」

「了解した。大変だな、お前も。」

「ふつ。仕事だからな。」

⋮⋮⋮

アリカがいたバルコニーに辿り着くと、  
「なんじゃ。お主がいれば、別に紅き翼アラルフラといつ奴らに、力を貸して

もらわなくとも良かつたのではないか？」

「なんだ。さつきのを見ていたのか？」

バルコニーの手すりの部分から下を見ると、なるほど。さつき鳥頭たちの相手をしていた場所が見えるな。

「なに。奴らの本領は特大の魔法や氣だ。こんな狭いところでは真価は測れん。それに、数は力だ。俺一人より、奴らがいたほうが良い。アリカを守れるものも増える。」

「なんじゃ。ハジメが護衛ではないのか？」

「これからまた忙しくなる。俺は諜報の役目があるからな、鳥頭共も護衛位できよつ。」

そう返しアリカのほうを見ると、あからさまに不機嫌だった。

「どうかしたか？」

「別にどうもしとらんつ。」

…よく分からんやつだ。

「それと、戦争の調停に關してだが…、マクギルが帝国の第三皇女との調停の場を用意してくれた。マクギルが着き次第向かうべ。」

その言葉に、アリカに笑みが戻る。

「そうか。この戦争を終わらせることができるのじやな？」

「さあな。まだ、連中が動いていない上に、まだ中枢には連中の息がかかった奴らがいる。…だが、無駄ではなかろべ。」

その言葉に満足したのか、アリカは、

「うむ。まずは話し合う事が重要なのじや。帝国にもそう考えてくれているものが居るだけで、私は嬉しく思つだ。」

と微笑を浮かべながら話した。

「ハジメ。マクギル元老院議員が到着したよつだ。姫様を連れてこちらに来てくれ。」

ガトウから念話が入る。

「わかった。そちらに向かう。」

「アリカ。マクギルが来たよつだ。行くぞ。」

「うむ。」

進むアリカの後ろを俺はついていった。

…

「マクギル、首尾はどうだ？」

「そうマクギルに問う。」

「大丈夫じゃ。この船で向かう先に帝国の第三皇女が居る。」

ふむ。小さい船だな…当たり前か。調停の話し合いをするために行くのだからな。

「…ふむ…。揃いも揃つてどこに行くのか…。」

瞬間、戦闘体制をとる俺と紅き翼の面々。

そこに佇んでいたのは、黒いローブを身に纏つた性別も判定できない輩だった。

「おいおい。…あいつはなんだ？やばいなんてもんじやねえぞ。」

その異質さを肌で感じるのが、ラカンが冷や汗をかきながら喋る。

「貴様が、完全なる世界ワセドウの長。…黒幕というわけか。」

咸卦法を行なながら、ロープに問う。

「…否定はせん…。」

「鳥頭つ」

鳥頭に呼びかけ、後ろに控えさせていたアリカを投げる。

「なつ？」

投げられたアリカをキャッチする鳥頭。

「アリカを頼んだぞ、鳥頭。」

「なつ。ふざけんなつ！あいつがどんなやばい奴かハジメにも分か

るだろつ？」

ナギがそう叫ぶが、睨み返し黙らせる。

「…くつ。」

「…なに、死にはせん。少々聞きたいことがあつてな。貴様うでは足手まといなだけだ。」

だから、さつさとアリカをつれて逃げる。鳥頭。

「行くぞ。ナギ。アリカ姫もこちらへ。」

「ハジメつ。お主は私の護衛であるつ。」

アリカがナギに抱えられた格好でこちらに問い合わせる。

「さつきも言つただるつ。そいつらでも護衛ぐらいなら出来る。」

鳥頭。」

顔をしかめる鳥頭。

「お前とはまだ、全力で決着つけてねえんだからな。死ぬんじやねえぞつ。」

そう言つて、アリカを連れて船に乗り込む面々。

「ふん。まだ言つているのか。あいつは…。」

船を見送った俺は、ロープに向き直り、

「まさか、待つてくれるとはな。随分やさしいじやないか造物<sup>ライフメ</sup>一<sup>カ</sup>主。」

ロープが少しゆれる。

「くくく、ふはははは。今更私の正体を知つていたといひで、驚きはせん。我が興味を抱いたのは貴様なのだからな…ハジメ。…異界の者よ…。」

そう言つてこちらを見据えてくる造物主。まさか、本当に敵の黒幕がこちらに来るとはな…。

「造物主<sup>ライフケー</sup>」。貴様にはいろいろと聞きたいことがあるのだが、その前に一つ確認だ。さつとこの戦いから引く気はないか?」

刀を構えながら、俺は造物主に問う。

「……もはや我が悲願は、すぐ先にある。それを引く気は、毛頭無いい……」

俺と対峙する造物主。なるほど、強い。死ぬかも……知れんな。だが、我が信念……曲げるわけにはいかん。

「そうか。ならば、造物主<sup>ライフケー</sup>」。貴様を、その目的を『悪・即・斬』のもとに……断つ。

「やつてみるがいい。人間……。」

そして、俺と造物主の戦いが始まった。

## 第17話（後書き）

あともう少しで戦争編が終わるはずなので、今日中に終わらせたいと思います。

次回はハジメ対造物主。戦闘シーンは苦手ですが、何とか読めるようにはしたいと思います。ではまた。

青年は世界と矛を交える  
されど青年は笑う

第18話

「敗北」

メガロ・メセンブリア  
M・Mの首都のはずれで、戦いは起きていた。

「破あああ」

ハジメの突きが、一筋の閃光となつて空を貫く。

「くはははっ…。その程度か…異界の者よ。」

造物主の背から、魔方陣が空に描かれる。世界の理は曲げられ、次元がゆがむ。

「くっ。」

その刹那、数十、数百もの闇の線がハジメを襲う。

「なんとまつ。規格外なつ…攻撃だつ…。」

虚空瞬動、縮地を用いてそれ一つが致命傷だと思えるような攻撃を避け続ける。

刀を構えなおし、一気に造物主の元へ駆けるハジメ。障壁を紡ぐ造物主。

造物主の障壁とハジメの刀が、凄まじい音を立てながら競り合ひ。

「なかなか硬い楯だな。」

「そちらも…良く折れぬ。」

ハジメは笑みを浮かべる。造物主はロープで顔は窺い知れないが、おそらく笑みを浮かべているであろう事は雰囲気でわかった。

「破つ！」

ハジメが薙ぎ払い、袈裟懸け、突きと、それら一つ一つが必殺の一撃を造物主へ放つ。

「くつ…。」

しかし、造物主は魔力で覆つた肉体で、魔法で、それらを全て紙一重で避け、いなすが、一撃を喰らう。

「つ…」

刀は造物主を貫くが、

「…墜ちろつ…。」

造物主が魔法を放つ。

咄嗟にいつものように、魔法を斬るハジメ。

「なつ。」

しかし、刀が折れ、全てを斬り損ねてしまい、残りの魔法がハジメに直撃する。

「がつ。」

魔法で打ち落とされたハジメの場所にクレーターが出来上がり、粉塵が舞い上がる。

「…」

静かに地面に下りてくる造物主。

曇天の空から雨が降り始めた。

- 紅き翼 side -

ハジメと別れ数時間たち、テオドラ皇女との調停の会談の場所に着いた一同。

しかし、

「おーい、姫さん。そろそろ立ち直ってくれよ。」

「ナギがアリカに声をかける。

「なんじゃ？何が起きたんじゃ？なぜアリカ姫はあんなに落ち込んでるのじゃ？」

先ほどまでの事情を知らないテオドーラ第三皇女が、紅き翼の面々に問いかける。

「はは。なんと言えば良いのやう…。」

苦笑するガトウ。

「まさか、こんな事になるとほの。」

思わぬ事態に困惑するマクギル元老院議員。

「はつはつはつは。ハジメが死ぬわけねえだろ、姫さん。俺とナギ相手に勝つちまう男だぞ。」

若干汗をかきながら、ナギと共にアリカに声をかけるラカン。

ハジメと別れてから、アリカがどんどん塞ぎこんでしまつたのであつた。

「ふふ。ちょっと、想定外の事態が起こりましてね。」

「一人メンバーが欠けてしまつてな。」

テオドーラの疑問に返答するアルビレオと詠春。

「だーかーらよつ。あいつが死ぬわけねえだろつ…俺とも約束したんだ、決着つけるつてな！姫さんだつて、あいつとなんか約束とかあんじやねえのか？姫さんは、ハジメを信じらんねえのかよつ！」

いい加減頭にきたのか、声を荒げるナギ。

「つ。」

塞ぎこんでいたアリカが顔を上げる。

「あるみてえだな。」

「…ああ、ある…ふふ。すっかり忘れておつたわ。こんな様ではハ

ジメに怒られるの。」

そつと笑みを浮かべるアリカ。

「すまぬの、みんな。テオドラ第三皇女。調停のための話し合いをしよう。」

そこにタカミチが扉を開け放ち入ってきた。

「どうした？タカミチ。そんな勢い良く入ってきた。」

その姿に疑問の声をかけるガトウ。

「はあっ、はあっ。こ、これを見てくださいーーみなさんっー。」

- side end -

-主人公 side -

雨が降るのを体で感じながら、考える。  
まいつたなあ。この世界で目覚めてからずっと愛用していたんだが  
なあ。折れてしまつた…か。

ふむ。左脇腹を抉られたのと、背中を強打しただけか。ならば、まだ戦えるな。俺は折れていない。  
考え終わると、俺は立ち上がつた。

「…っ…。まだ生きていたか…。ハジメ…。」

俺の姿を見て驚く造物主。むしろ、俺が驚くのだがな。  
くく。信じられんな。殆ど無傷…か。割に合わんna。まるで、ここにいなじみ…っ

「くくく。ならば、とんだ道化か…。」

折れた刀の切つ先を見つけて、それを取り握る。

さて、この方法は考えてはいたが試した事が無い……まあどうとか  
もなるか。

「……なにをしている。」

造物主がこちらに問いかける。

「いやなに、……考えていた。貴様……実体を持っていないな？いや、  
正確にはその肉体……貴様のものではあるまい。」

そう言つた瞬間、造物主の雰囲気が変わつた。

「……なぜ？」

「今思い返すと、動きが余りに不自然だつた。それに……貴様2、3  
俺の技を喰らつていただろう？なのに、だ。なぜ、貴様平然として  
いる。」

言葉を発しながらも、俺は咸卦法を行い、更に調整する。

「……やはり、貴様は異分子であつたか。……この肉体は貴様と戦つた  
後、滅ぶのみ。」

「だが、貴様である事に変わりなかつ。……それでも操つているの  
は貴様だということ……。」

「……何を言つて？……つー貴様何をつー？？」

俺のしていたことに驚く造物主。

俺がしていたこと。それは咸卦法のを咸卦法の力で行い、それを延  
々繰り返すというもの。名づけて感卦螺旋法。欠点が大きいがな。  
調整が難しすぎて、戦いの最中に使えん上、おそらく放つ技の威力  
も桁違いになるだろうから迂闊に試せないという、大きな欠点だ。

俺が制御できる限界まで、力を高め続ける。

「……愚かな。身を滅ぼすだけだ……。」

「なに。負けっぱなしは気に喰わんのでな。これなら貴様を断てる。  
それにな……」

そう言って、折れた切つ先を造物主に向けながら、牙突を構える。  
「言つたであるうつ。貴様を…そのふざけた目的を『悪・即・斬』の  
もとに断つとなつ。」

今。限界を迎えた力を全て造物主に向けて放つ。

「…くつ。リライトつ」

世界を貫く光の螺旋と、世界を書き換える撻がぶつかる。  
その瞬間世界から音が消えた。

- side end -

- 紅き翼 side -

「！」これを見てくださいつ

そう言って持つてきた新聞を開く。そこには、

「「なつ！」」

全員の驚きの声が重なつた。

新聞の一面にはこう書かれていた。

M・M・マクギル元老院議員の邸宅から半径5 Kmの範囲で街が消え  
去つており、街の機能が停止したこと。昨夜起こつたことについて、  
様々な推測が書かれており、その推測には、紅き翼アラルカラがこれを起こし  
たのではないかという事と、その証拠、証言らしきものが書かれて  
いた。

- side end -

「…完全なる世界 side -

「…くつ。…まさか」ちりまでダメージが来るとは…」

「…ふむ…つ。…どうなりましたか?」

造物主に問い合わせるテュナミス。

「…ふむ…つ。」

左胸に刺さった刀のよつた魔力の残滓に氣づく造物主。

「…この身に届くほどに、…大した信念ではあつた。…が、」

その残滓を抜き、

「…最早、…我等の前には居ない。」

碎いた。

「分かりました。では、計画を進めたいと想います。」

そう言つてテュナミスは立ち去り、

「紅き翼の連中とマクギル元老院議員。アリカ姫に対しては、すでに策は取つてある。後は我等が成すべき事を成すまで。行くぞ。」

待機していた他の面々に、声をかける。

- side end -

戦争は終わらない…

## 第18話（後書き）

総合評価が1000ptを超えてテンションが上がったので、そのままに書き上げました。やはり、戦闘は難しい。そして、眠気が襲ってきたので寝ます。続きはたぶん殴り書きます。今日中に戦争編を終わらせるつもりです。ではまた。

## 第19話

そこに青年は居らず  
されど反撃の牙は研がれる

第19話

「反撃」

・紅き翼 side

タカミチが持つてきた新聞に皆の視線が集まり、静寂がその場を支配する。

「おいおい、これってつまりはよ…」

ラカンが若干戸惑いながら沈黙を破る。

「おそらく、いえ間違いなく昨日あれから起きたのでしょうか。」

アルビレオが眞面目な顔をして結論を口にする。

「まさか、ハジメの奴…」

ナギがそう口を開こうとしたとき、

「それよりも、こちらのほうが問題じゃ。この件、お主ら紅き翼アラルフラが原因となっている。…おそらく、完全なる世界コズモエンテレカイアの奴らが情報を操作したのじゃろう。」

アリカが、街が崩壊した事ではなく、紅き翼がその主犯として書かれていることについて口を開いた。

「そ、それよりもって、おい。ハジメが心配じやないのかよ？」

ナギがアリカに問う。

「お主こそ、現状を理解せよ。…これは恐りく…奴らの脚本通りじゃろう。ガトウ。」

それに対し、アリカは執りあいもしない。

「」の手際のよ。おもろくは昨日の時点で狙っていたのじゃ。

アリカ姫

「そうか。ではお主、ハジメから完全なる世界に関する情報はもうつておるな。」

「はい、情報の共有はすでに済ませています。資料も一通り。」

そう言って、端末といくつかの紙の束を見せるガトウ。

「つむ。ならば、完全なる世界に関与する者を除き、我等の味方を、我等の話を聞いてくれるような者達を探せ。その者らを中心に、奴らと戦うための準備をせねばならん。」

「分かりました。タカミチ、行くぞ。」

「はいっ」

早速行動に取り掛かるガトウとタカミチ。

「さて、紅き翼。アラルカラお主らはガトウに協力できるものは協力を頼む。出来ぬものは我らの護衛、敵の殲滅じや。」

そして、アリカは皆を見渡し、

「敵は世界じや。これを見れば分かるが最早…我らの味方は居らぬ。ならば、我らが世界を救おう。良いな？」

皆に問う。

「あつたつまえだつ！」

「はつはつはつは。楽しくなつてきたなあおい。」

「ふふふ。相変わらずですねえ」

「やれやれじやの。」

「」いつらは、敵の殲滅だな

紅き翼の面々がそれぞれに応える。

「つむ。では、テオドリ第三皇女。マクギル。我らもこれからどうするか話し合おう。」

「そうじやな。まあか、これほどまでに、完全なる世界の力が世界

の中枢に入り込んでいたとは、驚きじや。」

テオドラは、驚きの面で言つ。

「戦争を終わらせる事は、完全なる世界を倒す事には始まらないのう。…わしはM・Mのほうで、協力者が探してみるとしよう。」

マクギルがそう続け、ガトウのほうへ向かう。より厳密に探すためである。

「うむ。それなら、わしは帝国じやな。」

テオドラもガトウのほうへ向かう。

「…」

一人になつたアリカは、外の風景を見ながら、唇をかみ締め、拳を握り締めていた。

「…ハジメ…。」

- side end -

- ナギ side -

はあ、随分気丈な姫さんなことだよ。

「ん~。姫さんを見てな~に考えてんだよ、ナギい。ありや無理だぞ。ハジメにそつこんだ。」

突然ラカンが後ろから声をかけてくる。

「うつせえっ。そういうんじゃねえよ…。といつか、ハジメの野郎。生きてやがるんならさつさと来いってんだ。」

あの野郎が死ぬとは思えねえが、あんな写真を見ちまうとな…。

「ワツハツハツハ。さつきお前なんて姫さんに言つたんだよ。ハジメを信じられないのかつて言つたんだぜ?」

「つ。ああ、そういうことか。不器用な姫さんだなあ。」

姫さんに、あんなに心配かけさせやがつて。だからよ。

さつさと帰つて来いよ、ハジメ。

俺との決着は、まだ着いてねえんだぜ？

- side end -

それから、世界は大きく動く。

アリガ率いる紅き翼のメンバーは、ガトウやアルビレオかハジメの「スマートレケイア」情報を元に完全なる世界に関係する大きな組織などを暴いていった。

そして、それらを確認したラカンやナギの実働メンバーが敵だと分かつた組織を次々と潰していく。

アリカやテオドラたちは、その裏で必死に説得をしながら徐々にだが味方を増やしていく。

…そして、とうとう彼らは辿り着く。

最期の決戦の地…墓守り人の宮殿へと

10

オステイアの荒野

「ライフメー<sup>カ</sup>…」造物主…、言つたはずだ。貴様の目的は断つと。」

独りの男が呟いた言葉は、砂塵と風にかき消される。

戦争は佳境を迎える…。

## 第1-9・5話（福井也）

やはつ、一気に飛ばしきれたように感じたので最終決戦までの5ヶ月としたお話を

王女は青年を想う  
少年の想いはただあふれる

第19・5話

「想い」

「最終決戦よりしばし時は遡る

ハジメの消息が分からなくなつてから数ヶ月のときが過ぎたとき…

-ナギside-

「よお。ただいま戻つてきたぜえ。」

ラカント共に基地に戻つてきた。

あの日から随分と時間が過ぎた。俺達は今、味方集めと敵の殲滅を行つてゐる。

「ああ、お疲れさん。…しかし、今回も黒か。ハジメの情報収集の精度の高さとその量には驚かされてばかりだな。」

ガトウが感嘆の声を上げてゐる。

ハジメが残していた敵さんの資料と情報。それは俺達の大きな行動指針となつてゐた。ちいせえ組織からバカでけえ組織まで、どこが怪しいのか記してあつた。それをガトウやマクギル、アルとかがより詳しく調べるとあつさりと敵さんがどうか分かつちまつ。…やっぱ、あいつとんでもねえやつだな。

「つたぐ。すげえのは、わかるけどよ。あいつは、今ビコニーるのやう。」

そう言いながら、姫さんを思い出す。

ハジメがいなくなつて、1ヶ月ぐらいは気丈に振舞つていたけどよ。まあそれでも十分強いと思つけどな。やつぱり、不安なのが寂しいのか知らねえが、この前の夜。月を見て涙流してやがつた。

ハジメ…。帰つてこねえなつよ。俺が奪つちまつざへ俺はきっと姫さんが好きだぜ?お前はどうなんだよ…ハジメ…。

しばらく、休んで物思いに耽つていると扉が開いた。  
そこには今考えていた姫さんが立つていた。

「どうかしましたか?アリカ姫」  
ガトウが突つ立つている姫さんに聞く。  
「いや…の。」

辺りを見回す姫さん。そして、俺と田が合つた。  
「ふむ。鳥頭、暇そつじやの。護衛を頼むぞ。」  
そう言つて、部屋を出る。

「は?」

疑問の声を上げても、誰も応えない。

「おじおい、ちよつ。ちよつと待つてくれよつ。姫さん。」

俺は慌てて姫さんの後を追つ。

「姫さん。どこに行くんだよ?」

追いついて俺は姫さんに聞く。

「どこと言われても、買い物に行くのじゃが。そのためには護衛が必要じやろ?」

あつけらかんと囁つ姫さん。

「はあ。俺、敵さん倒して疲れているんだけど……。」

「そんなものでは、完全なる世界コズモエンターテイニアには勝てんぞ？早く着いてまire。」

「

わざわざ先を行く姫さん。

ハジメ……。こんなのを護衛していたのかあ。

俺達はロープをまとつて、街に出る。姫さんは街の大きな店や小さな雑貨屋など、いろいろな場所を知つていた。

思わず俺は、

「姫さんいろんな場所知つてんなあ。」

などと呟いていた。

それを姫さんは、

「ふふ。数ヶ月前には、護衛に託してかしつハジメを連れていろいろな場所へ行つたからのう。……やはり、いいのう。変わるものもあれば、変わらんものもある……の。」

そつと口を細める姫さん。

まるで、姫さんの隣にハジメがいるように……見えた。

姫さんは、買い物を終えたら夕日の見える丘に来た。

「すまんのう、ナギ。今日ははつき合わせてしまつての。」

こちらを見る姫さん。

「別にかまわねえよ。」

「ふふ。……ハジメはびびつておるのかの。あの馬鹿者が。」

そう言って夕日を見ながら微笑む姫さん。

なんか、込上げて来ちまつた。

「なあ、姫さん。俺じや、俺じやハジメの変わりになれねえのかつ？」

ハジメの消息が分からぬときいても、氣丈に振舞う姫さん。世界を敵と定め、それでも世界を救おうと頑張つてゐる姫さん。ハジメが心配の癖に、笑う姫さん。

もう、見てられなかつた。

「俺は、俺はつ」

「そこまでじや。鳥頭。」

そう言つて、こちらに手の平を出す姫さん。

「ありがとう、ナギ。」

「じゃが、私はやはりハジメが好きなのじや。今日、お主と街を回つて思つたわ。最初あつたときはあれほど憎かつたといふのにのう。ハジメと会つたび、話すたびに惹かれておる私がおつた。」

きれいな笑顔を見せる姫さん。

「それに、ナギ。人は、誰かの代わりになどなれん。だからこそ、人は皆それを必死に守るのじやよ。」

「そつか。そうだよな。へへ。なんか、悔しいな。そこまで言われるよ。」

振られちまつたか。

「ふふふ。ハジメに会わんでいたら、お主に惚れていたかも知れぬな。」

姫さんが何か言つてゐる。

「ん? 何か言つたか? 姫さん。」

「いや、では帰るとしようかの。ナギ。今日はありがとつの。」

「なあに。いいくことよ。」

そう言つて笑う俺。

ハジメ。姫さん待つてんだ。さつさと帰つて来いよ。

⋮

そして、全てが集結し、終結する戦いへ時は進む。

## 第19・5話（後書き）

謀略に関しては「冗長してしまつと思いましたが、こちらはそういうわけにはいかないので書きました。

ハジメがいなかつたらくつついた一人が主役でした。

## 第20話

世界を救うべく翼は羽ばたいた  
そして青年は地より蘇る

### 第20話

#### （最終局面）

・ナギ s i d e ・

「不気味なくらい静かだな。奴ら。」  
墓守人の宮殿が見える場所で、俺らは最後の戦いのときを待っていた。

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」  
隣にいるラカンが、ふざけたように言つ。

ハジメ…と「ヒヒヒヒヒヒ」まで来ちまつたぞ。お前はなにやつてんだ?  
「ナギ殿つ。帝国・連合・アリアードネー混成部隊、準備完了しました。」  
おつ。そろそろか。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりや、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ。」

「ハイツ。…それで、あの、ナギ殿。」  
ん?まだ何かあつたか?

「サツ、サインをお願いできぬでしょうか?」

そつ言つて、報告に来た女の子が色紙を差し出してきた。

「おあ?いいぜ、そのくらい。」

俺達も有名になつたからなあ。色紙にサインを書き、女の子に渡す。

「そ、尊敬していました。」

隣でラカンが大笑いしてやがる。

さて、わざわざ姫子ちゃんを助けるとしようぢやねえか。

- side end -

「連合の正規軍は派遣できる説得したのじゃが、…この様子じや間に合わんのう。」

空中に浮き出た画像の向こう側にいる、マクギルが報告する。

「…こちらもだ。帝国も間に合ひそうになー。」

もう一つの画像でガトウの報告が入る。

「決戦を遅らせる事はできそつか?」

「無理ですね。私達でやるしか無いでしょ?」

ガトウの問いにアルビレオが答える。

「タイムリミット…だな。」

詠春も続けて応える。

「ええ。彼らはもう始めています。『世界を無に帰す儀式』を…。世界の鍵『黄昏の姫巫女』は今彼等の手にあるのです。…ハジメはこれを危惧していたのでしょうか?」

アルビレオが真剣な面持ちで喋る。

「はつ。なあに。わざわざ姫子ちゃんを助けりや問題は無いだろ?」

「?」

ナギは笑みを浮かべそつと、

「よし、野郎どもつ。」

杖を構え、

「行くぜつ!」

彼らは決戦の地へ、飛び立つた。

・墓守人の宮殿・入り口

アーウェルンクスたち完全なる世界がナギたち紅き翼を迎える。

「やあ。『千の呪文の男』…まさか、パイルドライバー以外の面々が、こうも我々を追い詰めるとはね。」

「この半年、まさかこれほどまでに数を減らされるとは思わなかつたよ。…この辺りでケリにしよう。」

そして一気に戦闘体制をとる両者。

戦いが始まった。

……  
紅き翼と完全なる世界の激しい戦いが繰り広げられる。

……  
紅き翼の面々が完全なる世界を押し始める。

そして、

「うらああああつ！」

「くああああつ！」

ナギの魔法がアーウェルンクスを貫くのを最後に、決着した。

：

アーウェルンクスの首を掴み吊り上げるナギ。

「見事…理不尽なまでの強さ…。」

アーウェルンクスが賞賛する。

「黄昏の姫巫女は…どこだ？消える前に吐け。」

：

ナギが問う。

「フ…フフフ…まさか、君はいまだに僕が全ての黒幕だと思つていいのかい？」

そして、ナギは思い出す。ハジメと別れた日に訪れた異常の者を。

「ま…まさか。」

「「つ！」

その次の瞬間、一条の光がアーウェルンクスを襲う。

「なつ！」

ナギが驚いていると、

「ふん。久しぶりだな、鳥頭。ちゃんとアリカの護衛はしていたか？」

聞き覚えのある声の方へナギが顔を向けるとそこには、

黄昏の姫巫女を抱え、煙草を吸つている男。ハジメが立っていた。

…遡る事数時間前

-主人公 side -

ここが、墓守人の宮殿…か。

「くく。」

独りでに笑みが出る。墓守人…か。未だに諦められずに、足掻いているようにしか見えんな、造物主。

宮殿に侵入した俺は、まずあの無愛想娘を探すことにした。あれだけ、言つておいて攫われるとは…。まあ奴らもそれだけ必死だったという事か。

魔力が入り乱れているな…、これが儀式の陣か。ならば、より入り

組んでいる場所に、源泉に無愛想娘がいるはず…。

ちつ。宮殿というだけあって、通路が入り組みすぎているな。地図を頭に入れてなければ迷つところだつたな。

そして、大きな扉を見つける。この宮殿の中心より下、陣の中心。ここに無愛想娘がいるはず。

扉を開く。

「なるほど。…惨い」とする。

そこには、まるで聖堂のような部屋があった。その中に、無愛想娘が結晶の中に閉じ込められていた。

「今、開放してやろ。」

刀を構え、結晶を切る。

子氣味良い音と共に結晶は砕け散り、無愛想娘が落ちてくるのを抱きかかる。

140

「…ふむ。…死に損なつたか…異界の者よ。」

部屋の天井より、声が聞こえる。

「なに、貴様を斬りに來ただけのこと。」

無愛想娘を脇に抱え、牙突を放つ。

「なつ。」

一条の光が造物主を襲い、天井を穿ち空を覗かせる。そして、天井に出来た穴から虚空瞬動で空へ抜けた。

外へ出ると、

「フ…フフフ…まさか、君はいまだに僕が全ての黒幕だと思つてい

るのかい？」

「ま…まさか。」

アーウェルンクスと鳥頭の会話らしきものが聞こえてきた。  
おいおい。鳥頭、あの日造物主が来た事を忘れていたのか？  
俺はアーウェルンクスと鳥頭たちがいる方向を確認した。

無愛想娘をしつかり脇に抱え、俺はアーウェルンクスへ向かつて牙突を放つた。

そして、紅き翼の面々がいる場所へ降りる。

「ふん。久しぶりだな、鳥頭。ちゃんとアリカの護衛はしていたか？」

…そして、時は戻る…

「はつ、ハジメつ。お前つ今までなにやつてたんだよつ！みんながどれだけ…」

鳥頭が詰め寄つてきたので、無愛想娘を渡し、

「話は後だ。俺はこれから、奴と決着をつけねばならん。」

振り返り、空にいる造物主を見る。

「ふむ、今度はしつかり喰らつているよつだな。」

「くつ…。」

ローブがボロボロになつた造物主には、確かに牙突が喰らつている様が見える。

「鳥頭。無愛想娘をわつとじいから非難させておけ。」

鳥頭にそつ言つと、

「ふざけんなつ！前もそつやつて負けたんだろつがつ。」  
「ふざけんなつ！前もそつやつて負けたんだろつがつ。」

「ふざけんなつ！前もそつやつて負けたんだろつがつ。」

「ふざけんなつ！前もそつやつて負けたんだろつがつ。」

「ふざけんなつ！前もそつやつて負けたんだろつがつ。」

「ふざけんなつ！前もそつやつて負けたんだろつがつ。」

「なに、今度は負けはせんや。今度こそ、奴を…『悪・即・斬』のもとに断つ」

そつと、空を駆ける。

- side end -

「だあつ。行つちまつたつ。」

「ふふ。彼も頑固者のようにですよ。我々は我々のできる事をするとしましよう?」

アルビレオがナギを説得する。

「ここにはわしが残る。ナギたちは、黄昏の姫巫女を安全な場所へ送るが良い。」

ゼクトが提案するのを、ナギはしかめつ面で、「ちつ。あ～あ、姫さん」に怒られそうだぜ。」

ゼクトを残し、ナギたちは宮殿を脱出した。

「さて、世界はどうなるのか…の。」

ゼクトはただ、空を見上げた。

そこには、造物主とハジメが対峙する姿があつた。

## 第20話（後書き）

申し訳ないですが、ほぼ原作引用です。

青年は世界と決着する  
そして戦争は終結する

第21話

「決着」

影と影が交差するたびに、互いの攻撃の衝撃が周りを崩壊させていく。

「くく。くははははははは。面白い。面白いぞ人間っ。」  
造物主は幾多の魔方陣を宙に描き、その全てから魔法を放つ。  
「ふん。貴様の生き様ほど愉快なものは無いと思うが？」  
それら全てを斬撃で、切り捨てるハジメ。

「…人間如きが、我の…何を知る？」

ハジメの周囲を魔方陣が囲む。

「ふん。諦められぬ、絶望をした振りをする者を、道化と言わずなんと言う。」

その全ての魔方陣をハジメは神速を持って切り刻む。

「…何が言いたい。人間…。」

魔力を溜め、ハジメに問う造物主。

「ならば問おう。人間に絶望した貴様が何のために楽園とやらを作つた？」

同じく咸卦法で身を高めるハジメが応える。

「度し難い人間は世界にいくらでもいる。ならばお前が認めた人間

を住ますのか？なら問おう。その人間の何を認めた？絶望したのではなくのか人間に？貴様は心の奥では感じているはずだ。その希望を、だからこそ貴様は世界を作ったのであるう。…自らが知る希望に、すがりつけもない貴様を、見ぬ振りをして絶望した氣でいる貴様を…道化と言わずなんと言つ？」

「黙れ…。黙れ、人間っ。全ては救えぬ。なればこそ、より輝いているものを救うのが我が悲願。」

造物主の前面に巨大な魔法陣が描かれる。

「全てを救えるわけなかろう。だがそれでも、諦めん奴を俺は知っている。そいつならば…たとえ明日全てが滅びようとも…、貫くだろうさ。」

ハジメの脳裏にアリカの顔がよぎる。

「貫く覚悟を失つたお前に、何かを救えるなど思うな。」

感卦螺旋法で更に高めるハジメ。

「覚悟しろ。貴様が見限つたこれが…」

ハジメは牙突を構える。

「人間の強さだ。」

ハジメの姿が搔き消える。

造物主の魔法が放たれる。

造物主の魔方陣から放たれた魔法が無数の光となつてハジメを襲う。

しかし、その全てをハジメは突き破り、

造物主を貫いた。

「ふ、ふははははは。 我を倒すか…人間。」

「ふん。俺より人間くさい貴様が言うな。」

「…ははははははは。 いずれ、また会おう。ハジメ  
笑いながら消えていく造物主。」

崩壊しかけている宮殿に降りるハジメ。

「信じられぬのう。 勝つてしまつとは。」

ゼクトが話しかける。

「ゼクトか、ちようどいい。 貴様に話がある。」

「む?なんじや?」

…

…

-ナギside-

「いねえ。」

姫子ちゃんを安全なところへ連れて行き、俺も参戦しようと思つたら、もう入り込める余地なんて無かつた。

だから、観戦してたわけなんだが。まさか、本当に勝つちまつとはなあ。俺でもちよつときついと思つぜ。

で、終わつたと思ってラカンたちと様子を見に来たら、いない。ハジメどいつもかお師匠もいない。

「まつまつま。いやあ、ものの見事にいねえなあ。」

「まさか、やられたのか？」

「造物主を倒していたのは、見ましたからやられたところの事は、無いと思つのですが…。」

ラカンたちもやつぱりわからねえよな。

「姫さんになんていえば言へんだよつ」

「そりですねえ。正直にいなことおつしやつたひどいなるでしょつねえ。」

「ワツハツハツハ。なんか面白い事になつやつだがな。」

俺は思わず頭を抱えたくなつた。

⋮⋮⋮

「と、言つわけでハジメもお師匠もいなかつた。」

「な、なんじやと？」

「うわあ。姫さん顔怖いぞ。言わないけど。

「ハジメは生きておつた。そして、お主らの前に現れた。」

「お、おひ。証拠に姫子ちゃんここにゐるじやん。」

「なら、なぜここにおらん?」

「ハジメ…どつかいつちやつたの?」

あ、姫子ちゃん今それは禁句。

「ふふ。この半年、わしの前に現れもせんで…やつと現れたと生きていたと思つたら…、どこへ行つたのじやつ。ハジメの奴はつ。」

「うおお。怖い。くそつ全員逃げやがつて、何で俺がこんな田に。」

生、ハジメの奴。

「いや、だから分からないつ」

俺

「探せ……。」

「て、えつ？」

なんか、嫌な予感が……。

「探すのじゃつ。ハジメの奴を新世界、旧世界を問わずに探すのじやあつ」

「えええつ？」

だからどこに行つたのかすら分からないつて言わなかつたか？俺。

「絶対に逃がさんからのつ。ハジメ」

王宮に姫の声が轟いたとか何とか。

- s i d e e n d -

-主人公 s i d e -

「クシユンッ」

誰か噂でもしているのか？

「……大丈夫か？」

「ああ。どうせ噂でもしているのだろう。」

そう言つと、造物主は笑みを浮かべ、

「貴様も大変だな……。」

「なに。こつものことだ。……で、どうだ。話に乗るか？」

造物主に問う。

「人間というものはどこまでも面白い。そうだな、乗るとしよう！」

「では、準備からだな。俺は田世界に行く。貴様は…」

「「」の世界と位相。魔方の構築じやな。」

「ふ、分かっていふようだな。」

「そうこうじだ。資料は「」の世界のものもある。後で読んでおけ。」

暗い部屋から出る。

「ではな。」

別れを告げる。

「貴様も達者でな。」

造物主も応える。

さて、田世界へ行くとしようか。

## 第21話（後書き）

さて、戦争編も終わりました。若干強引な事は否めませんが。これから数話、幕間のような後日談のようなものを書いてから、原作に入りたいと思います。ではまた。

## 幕間1（前書き）

戦争編が終わったのでこれからしばらく幕間にになります。戦争中、戦争後を含めたものになると思います。時系列は余り気にしておりませんのであしからず。

## 幕間1

青年は自らの想いを知る  
騎士と姫は結ばれる

幕間1

（結婚）

・主人公 side・

「ハ、ハジメ。ど、どうかの？おかしなところはあるかの？」

アリカが純白のドレスを纏つて、俺に聞く。

しかし、アリカの美しさに見惚れていた俺には、それに応えるには少々時間が必要だった。

：遡る事1週間前

造物主との戦いが終わってから、早くも1年が過ぎようとしていた。アリカたちも忙しいとは思うが、俺が暗殺などで稼いだ金で開いた学校の卒業生がそろそろ力になるだろう。クルトもなかなか内政などいい線いっていたしな。

俺は今ある目的のために旧世界に来ているわけだが、

「なぜ、貴様らここにいる？」

鳥頭とその愉快な仲間達が俺の下に来た。

「そりや、もちろんお前と決着つけるためっ

「ちげえよ。」

す」「むラカンに突っ込む鳥頭。

「まあ、俺も決着つけたいんだけどよ。今日は違う目的でお前を探してたんだよ」

「ええ。それとあなたに訪ねたいことがありますてね。」  
「何かばれたか?まだこいつらに知られるわけにはいかないのだが。

ナギが口を開く。

「お前。姫さんあ、今は女王か。まあいいや。姫さんのこと、ビリ思つてんだよ。」

「...なに?」

少々理解するのに手間取る。

「どういふことだ?」

「だーかーらよつ。お前がアリカ姫のことを好きなのかどうなのかつて聞いてんだよつ」

ラカンがナギの言葉に補足する。

俺が、アリカの事が好きかどうか…。

そして、思い出されるのは造物主と最後に戦ったとき。俺は確かにアリカの事を思い描いていた。それと同時に思い出されるのは、アリカを護衛していたときの事…あの夕日の見える丘で、俺は確かに…アリカに見惚れていた。

くく、なるほど。俺はどうやら、アリカの事が好き…だったようだな。まさか、俺が人を好きになる事があるうとは。しかし…

俺は手を見ながら、答える。

「くく。今更気づく時点でどうかと思つが、たしかに俺はアリカの事が好きなんだ。だが、この手は余りに血に塗れている。」

そして、鳥頭たちを見ながら、

「そんな俺が、奴の前に姿を見せる資格があると思つか？」

「ふふふ。思つたより素直に感情を吐露したかと思えば…。しかし、ナギに似て、変な所で臆病ですね。」

アルビレオが少し可笑しそうに言つ。

「なつ。誰がこんな冷血野郎に似てるだつて？」

「ワッハッハッハ。」

「笑うなつ。ラカン、てめえ。」

なぜか、殴りあい始めるラカンと鳥頭。

「アリカ姫が今更そんなことを気にするお方ではない。俺らと一緒に来てくれるか？」

詠春が問うてくる。

「ええ。アリカ姫の気持ちを知つてからでも遅くは無いでしょ?」

アルビレオも微笑を浮かべながら、俺に聞く。

「…ならば、行ってみるか。顔も見たいしな。」

思い出すのは、あの強い光を宿した瞳。行くのも吝かではないな。

- 王都オステイア

「ひ、久しぶりじやの。ハジメ。」

「ああ。久しいな、アリカ。いろいろと忙しそうだな。」

王室ではなく、私的な部屋だがある程度は広い場所で俺はアリカと向かい合つてている。

「当たり前じゃ。どつかの誰かさんは生きておったというのに、私の前には現れず、旧世界に行つていたというのじゃからな。」

俺をジトッとした目で睨んでくるアリカ。

「くく。なに、これからはアリカを始め、皇女やマクギルで平和の礎を築くのだろう。俺の出番は無いほうが良から。」

「ふふ。そもそもうじやの。まあ、マクギルがお主を真剣に探しておつたがのう。」

「それは主にアリカのせいだとは、この場に突つ込むものは居ない。」

それからも他愛の無い話をしていく。

久しいな。楽しいと感じるこの感覚は…。俺は思つた以上に田の前に居る奴に惚れていいるのかも知れない。

「そ、それでじやの。ハジメ。」

「ん？」

突然、拳動不審になるアリカ。

「こ、これはの…ナギたちに聞いたのじやがの。」

「今日、ここに来たのは、わ、私にお主が…気持ちを教えようと思つて来たのじやと、聞いたのじやが。」

俯いてうつすらと、紅くなつていくアリカの顔。

「つ…ああ。やうだな。そろそろ、『まかしも効かなくなつてきたようだしな。』」  
だめだ。…何だこの感情は。アリカが、その拳動すらも愛おしいと感じる。

俺は、アリカに近づき、その手をとる。

「なつ。ハジメ…？」

驚いたのかアリカが顔を上げる。その顔は随分と赤い。そして、きれいだと思う。

「アリカ。」

「はっ、はい。」

心を落ちつかせる。まさか、これほどまでに、アリカの事が好きだつたとはな。

「アリカ。俺はお前の事が好きだ。できるならば、お前と共に…これからを生きていきたい。俺についてきて…くれるか?」

言つた。アリカとなれば、この先の困難もすべて乗り越えられよう。アリカは目の中の涙を溜め、

「は、はい。」

そして、静かに唇を合わせた。

そして、冒頭に戻る。…

その後、さつさと結婚式やらなにやらと、どんどん準備が進んでいった。マクギル…用意が良すぎだらう。普通王族が結婚するのに、もつと手順があると思うのだが。そして、俺は白い礼装を着け、アリカのところに連れて来られたのだが、

「だ、黙るでない。ど、どうなんじゃ？」

顔を紅くするアリカ。まだ答えていなかつたな。

「…あつああ、すまんな…見惚れるほどにきれいだぞ。アリカ。」

「そ、そうか。良かつた。」

途端に笑顔になるアリカ。その笑顔が愛おしい。

「では、行くか。」

手を差し出す。

「うむ。よろしく頼むぞ。我が騎士よ。」

俺とアリカ。その間にはしつかり握られた手があった。

結婚式はパレードのように街を回るものとなつた。手順を踏まなかつた事も考慮したそうだ。

街を埋めている、凄まじい人の数を見ても、アリカの人気が伺える。

「アリカ様。」

民達がうれしそうにアリカに手を振つてゐる。それに笑顔で応えるアリカ。

民達のうれしそうな顔を見て思つ。

やはり、俺の目に狂いは無かつたな。アリカはこの先、礎を築く重要な役目となるだろ。」

「これ、お主ももつと应えんか。お主も英雄なのじゃぞ。」

そんなことを考へてると、横に座つてゐるアリカに言われる。

「俺が、英雄？」

「なんじや。知らんかったのか？ ああ、旧世界に行つておつたのじやつたな。」

話に聞くと、どうやら俺がパイルドライバーであつたのは周知の事実になつたらしい。さらに、それは悪徳なる政治家や闇商人を殺しておつたのだといふ話であり、たつた一人で、世界といち早く戦つた英雄として民達に認識されているらしい。ちなみに情報源はマクギル。あの爺。

「騎士様。アリカ様を守つてね。」

子供の声に、手を振りながら応える。どうやらパイルドライバーよりも、アリカを護衛していた『騎士』という通り名の方が、俺として認識されているようだ。

「ふふ。しつかり守つてくれよ、騎士様。」

いたずらっぽい笑みを浮かべこちらに言つアリカ。

「当然だろ。愛しい者を守るのは、男として当然の事だ。」

そつ言つて、アリカの顔を引き寄せる。

周りの喧騒も大きくなる中、少々顔を赤めるアリカと唇を合わせた。

」のパレードも、まだまだ終わりそうにない。

…これからもよろしくの?ハジメ

…ああ、こちらこそよろしく頼むぞ。アリカ

## 幕間1（後書き）

まずは、アリカとの結婚式を書きました。どうでしたでしょうか。  
いやあ、ラブコメも難しいですね。

次回は何書こうかな。マクギルの方面とか考えています。ではまた。

## 幕間2

少年は世界の裏を知つた  
されど少年の夢は明確に

幕間2

「先見」

・マクギル side -

「ふう。」

今日まで済ますべき案件を全て済ましたわしは、椅子の背もたれに背中を預け、一息つく。

「お疲れのようですね。どうぞ。」

「コーヒーを淹れた秘書のクルト君がわしに声をかけ、コーヒーを机の端に置く。

「ほほ。なあに、ハジメと出会つた時から苦労する事になるとは思つておつたわ。」

そう言いながら、「コーヒーを飲む。うむ、うまいのう。

クルト君はもともと紅き翼の面々についていつた者の一人じやつた。まあ彼はアリカ女王に惹かれていたのもあつたのじやう。そこでクルト君は、ハジメに出会つた。

クルト君はもともと、暗殺などの類が大嫌いで大変じやつたのう。

「なんで、あなたほどの力がありながら。なんで、こんな事をするのですかつ。ハジメさんつ。」

⋮

まるで、夢破られた少年のようなクルト君の問いに、煙草を吸いながらハジメはそれに応える。

「阿呆か。小僧、人一人の力がどれだけ無力なのか知つていいか？小僧が言う、汚い手段とやらで手に入れた情報で、国一つ滅ぼす力を持つているのを知つていいか？」

ただ、淡々と述べながらクルト君に近寄るハジメ。

ハジメの姿が消えたように見えた次の瞬間、

「があつ」

ハジメがクルト君を頭を掴んで地面に叩きつけおつた。

「小僧。俺がどれだけ、貴様を叩き伏せる事ができたとしてもだ。それは国を左右できる力ではない。」

「ううつ。」

地に這いつぶばつておるクルト君を尻目に、ハジメは用が済んだとばかりに部屋から立ち去る。

「小僧。それでも納得できないというならば、マクギルの下に着いて、世界を…人の醜さを知れ。」

立ち去る間際にハジメがそろいに残した。

全く、素直では無いのう。

「大丈夫かのう。クルト君。」

「…マクギルさん。僕が見ていたのはきれいなだけの外側だけだったのでしょうか？」

俯きながらクルト君が問うて来る。

「否定はせん。ハジメが言つておつた事もじや。」

クルト君が手を握り締める。

「マクギルさん。僕を、僕を秘書にしてください。ハジメさんが言

つていた事がビリーハウスなのか。僕は、自分で知らなきゃいけないつ。

「ふお。ハジメの奴…これを狙つておつたのか？だとしたら、本当に敵に回したくないのう。

「ふおつふお。良かれ。未来あるものを導くのもわしの役田じやろうじ。」

……

あの後のクルト君の成長は凄まじかったのう。國の醜い部分を見てもなお、いや、見たからこそ、自分が何をすべきなのか分かつたのじやうひ。

もう立派な政治家じや。いつ、わしのあとを継いでもらおうかのう。楽しみじや。

楽しみといえ、ハジメがいつの間にか作つておつた、これから先を担うものを育てる学校の卒業生達もすうじいのう。政治だけでなく、教育や魔法学においてももうすでに名が知れているものもある。ありえんことじや。

しかも、ハジメが作つた学校の教師陣がまたなんとも言えん。ハジメ曰く、

「この先を担うものたちに必要なもの？そんなものは全てだ。必要で無いものでしら、活用する。それが出来ないような人間に先は担えん。」

厳しいと思つたものじやが、それを実際に行つものたちを見てたまげた。すでに隠居した、高名な魔法使いを始め、優秀であつた政治家、役人、果てには犯罪者すら雇つておつた。

まあ優秀な者ばかりなので助かつてはおるんじやが…ハジメにしか

できんな。あんな事。

「しかし、きれいでしたね。アリカ様。」

先日の結婚パレードの事を思い出しておるのか、クルト君が嬉しそうな顔をしておる。

「少々残念だつた気がしないのかな? クルト君。」

悪戯心のままにクルト君に聞く。

「いえ、ハジメさんならきっとアリカ様を幸せにしてくれるはずです。」

「世界を敵に回してもするじやううな、ハジメなら。」

「はい。きっと僕にはできなに事です。」

「やうじえ、ハジメについてクルト君。君の答えは見つかったかの?」

昔のことを思い出したついでにクルト君に聞くつてみる。

「いえ、まだ分かりません。結果的にハジメさんがやつてきた事は、正しい事でした。でも、やつぱりまだ納得は出来ないです。」

「やうか。だが、答えを求める事はやめちやいかんぞ?」

「わからん、そのつもりです。いつか、いつかハジメさんにて答えられる日が来るまで。」

ふおつふおつふお。本当に先は明るいのう。

「それじゃ、マクギルさん。こちらが明日までに必要な資料です。擬音が聞こえてきやうなほどビト、積み上げられた資料の束を持ってくるクルト君。」

「わあ。民達のために頑張りましょ。」

ふおつふおつふお、眩しいのう。わて、わしも頑張らねばならんの

う  
。

## 幕間2（後書き）

とこつわけで、マクギル視点でした。  
次はどじのよづな話を書いひつかな。ではまた。

## 幕間.3

世界を救うピース

それが使うには時がいる

幕間.3

「役割」

戦争が終結し、早3年。

ここはM・M首都。マクギル元老院議員の邸宅。

そこには、世界を救いし英雄達が揃っていた。

「さて、集まつてもらつたようだな。」

口を開いたのは、騎士と呼ばれる男ハジメ。

「つたぐ。決闘かと思つたら、なんだ堅つ苦しいなあおい。」

愚痴を言つているのは、千の刃の男ジャック・ラカン。

「ラカンさん。これから、大事な話があるんですから。そんなにだらけないでください。」

そんなラカンに小言を言つのは、クルト。

「構わん。どうせ、そいつらに言つ事は無いに等しい。…といつか、貴様らを呼んだ覚えは無いんだが。」

ハジメがさも鬱陶しいかのように、疑問を口にする。

「そうだったのか。すまんな、俺が呼んだ」

その疑問に答えるものはガトウ。気まずそうに頭をかいている。

「けつ。頭使うかつたるい事は、ハジメたちがちやつちやとやつちやえよ。」

「心配するな、鳥頭。誰も貴様の頭に期待しちゃいない。」

煙草を吸いながら片手間で言い放つハジメ。

その言葉に口を引きつらせる、鳥頭こと千の呪文の男、ナギ。

「上等じゃねえかっ。てめえとはい加減決着つけたいと思つてたんだつ。この野郎。」

紫煙を吐き出しながら、煙草の火を消すハジメ。

「では、今回集まつてもらつた理由を話そう。」

「無視すんなつ」

ナギが叫ぶ。が、そんなことは無かつたように話を続けるハジメ。ナギが部屋の隅で、いじいじしている。

「話は簡単だ。この世界。魔法世界のその行く末に着いてだ。」

その言葉に、真剣な目つきになる面々。

「魔法力の枯渇…だつたか。その解決法でも見つけたのか?ハジメ。」

「ハジメに問う詠春。」

「魔法力の枯渇に関しては、すでに考えはまとまつてゐる。これから少し時間と技術を有するがな。」

「それは、またすごい事を簡単に言いますね。…では今回集まつた理由は、魔法世界の亜人たちですか?」

ラカンを見ながらアルビレオが、今回集まつた理由を推測する。

「ああ、そういうことだ。これに関してはまだ、その方法を確立させていない。故に貴様らに頼みたい事は…」

「その方法の模索ですか?しかし、あなたらしくない。もつある程度目星はついていると思ったのですが。」

アルビレオが驚いた様子でハジメに聞く。

「いや、それに関してはすでに、げほ…協力者がいる。そして、俺も本腰を入れて調べている。…貴様らにやつてもらいたい事はそれの仕上げだ。」

アルビレオの問いに言葉を選びながら喋るハジメ。

「協力者…ですか。失礼ですが、どちらをまでじょつか?」  
アルビレオが目を細めながら問う。  
それに対し、ハジメは少し逡巡し、

「ふう、…言つても構わんか。…造物主だ。」

その言葉に面々が驚きに目を見開く。

「なつ。どういうことじや。奴は、やつは生きておつたのかつ?」  
ハジメの隣にいたアリカが、戸惑いながらハジメに問い合わせる。

「おじおい、やつ」さんが生きていたのも驚きだが。…ハジメ、お前奴を許したのか?」

ラカンもハジメに問う。

他の面々も言葉は発しないが、同じような疑問が胸中にはあった。

「奴を許す事は無い。これから先もな。だが、奴には生きてもらわねばならん理由がある。ある時まではな。それに、奴の知識とやらも世界を救うためには有用であろう?」

言外に、それほどのことをしなければ、世界など救えはしないとハジメは言つていた。

「じゃが、…奴は、奴は。」

それでも、納得できないアリカは、ただ口ごもる。

そんなありかの頭に手を置きなでるハジメ。

「なに、納得するもしないもこの世界を作つたのは奴だ。ならば、最後の尻拭いは奴にやらせるべきであろう。」

「では、貴様らにせつてもらいたいことについて、説明する。」

「面々を見ながらハジメが続ける。

「まず、マクギル、アリカ、クルトにガトウ。」この世界の政治体制を変えて貰う。競争し、向上するならともかく、腐敗していくのは唯の怠慢だ。後で、その辺りの話をする。時間を空けておけ。アリカやクルトを見るハジメ。

それに対し、頷くアリカやクルト。

「次にそれ以外の奴らというより紅き翼<sup>アラルフラ</sup>。貴様らには新世界・旧世界で暴れてもらおう。紛争地帯を片つ端から片付ける。救える者がいれば片つ端から救え。いくら金を使つても構わん。だろ? マクギル」

マクギルを睨みながら喋るハジメ。

「も、もちろんじや。議会は通す。」

なぜか焦りながら答えるマクギル。

「お前らには、詳しい解決法が出来次第協力してもらひ。特に、鳥頭とアルビレオ。貴様らにはやつてもらいたい事があるしな。」

「ええ。分かりました。面白そうですねえ。」

笑みを浮かべながら了承するアルビレオ。

「お、なんだ。傭兵まがいの事か。いいねえ、最近暴れてなかつたからよ。」

やる気を出し始めるラカン。

「私は、そろそろ妻を娶るのだが……。」

嬉しそうに言う詠春。

「ああ、近衛の者とか。なに、貴様にもやつてもらいたい事がある。そのときまでは、暫くは休んでおけ。」

あつせりというハジメ。

「まあ話は以上だ。あとで詳しい情報なじが手に入れば、渡す。ではな、貴様らはやるべきことをやつてくれ。」

そう言って、アリカをつれ退散するハジメ。

各々も解散して各自がやることに専念し始める。

そして、これから数年紅き翼の活動は田覓しく、偉大なる魔法使いとたたえられるようになる。

### 幕間3（後書き）

下準備な話でした。余り説明してしまつと、ネタばれしてしまつので難しいです。そろそろ最後の終わり方は構想まとまつたので、あとはどう原作に介入するか考えている日々です。もつとこし幕間は続くと思います。

いつも読んでいただきありがとうございます。ではまた。

誰しも意地といつものがある  
青年も例外ではない

幕間4

（意地）

英雄達がその役割を確認しあつた集結より少し後、見渡す限りの原野において、ハジメとナギは距離をとつて向かい合つていた。

「準備はいいか？ハジメっ。」

杖を構えるナギ。

「構わん。いつでも来い、鳥頭。」

刀を抜くハジメ。

…なぜこのようなことになつたかは時を少し遡る。

王都オスティア。執務室にハジメはアリカはいた。

普段は、世界救済のために旧世界と新世界を往来しているハジメだが、数ヶ月に一月ほどアリカのために王宮にいる。主に護衛として、そして秘書としての仕事をしていた。

「王族に、これほどまでの決定権があるのは、やはりまざいものがいるな。」

仕事の内容から、これから先の政治の案件を頭に入れながら仕事を

「なすハジメ。

「ふむ。確かに、M・Mや帝国とはまた違つ体制じゃからのう。」  
ハジメの言に、そう返すアリカ。

そんな会話を織り交ぜながら、黙々と仕事をこなし続けるアリカとハジメ。

仕事も一息ついたとしたとき、H富が騒がしくなる。

「む？ 何かあつたんじゃろ？」

「…、鳥頭が来たようだ。」

若干疲れた顔をするハジメ。

そして、執務室の扉が勢い良く開かれた。

「ようつ。ハジメつ、戻つてきたみたいだなつ。」

ナギが笑みを浮かべながら、入ってくる。

「はあ。何のようだ？ 鳥頭。」

思わずため息をつきながらも質問するハジメ。

「何つて、決まつてるだろつ。…そろそろ、決着を着けるときじやねえのか？」

握り拳を出し、挑発的な笑みをするナギが答える。

「貴様もこだわる男だな。」

呆れた口調で言うハジメ。

「前は負けちまつたが、今度はそつはいかねえ。ちゃんと広え場所はとつといたぜ。魔法も何も気にする事はねえ。」

「ふむ。」

ふとアリカを横目で見るハジメ。

「ふふ。やつてみてはどうじゃ？ ビビりが強いのか妾も知りたいぞ？」

どうやらアリカも乗り気である。

ハジメは観念したように、されど目は鋭く、  
「良いだろう。では、行くとしよう。」  
「へへつ。そう」なくつちやな。じゃ、行くか。」

…そして冒頭に戻る。

「コウイース・テンペスター・フルグリエインス  
『雷の暴風つ。』

ナギの魔法が雷となつて、ハジメ目掛け放たれる。

「破あつ。」

ハジメの牙突が、斬撃となつてナギに向かう。

雷と斬撃が衝突し、弾ける。

両者は、それがさも当然かのように笑みを浮かべる。

「小手調べは。」

「いらねえようだなつ。」

両者の姿が焼き消え、ただ衝撃だけが、2人が闘いあつてゐることを証明していた。

-観客 side -

「おうおう、やつてんなあ。俺もやりてえぜ、おい。」

ラカンが2人の戦いを見ながら、そんなことを呟く。

「今は、どちらが優勢なのじや？」

アリカがラカンに問う。

ラカンが要る理由。それは、アリカの護衛。アリカも2人の戦いは見たかつたのだった。他にもアルビレオも護衛としてついてきている。

「うーん。接近戦のときは、やっぱりハジメだな。やつのその攻撃の圏内は、俺も出来ればいたくねえ。」

ラカンはまずハジメを評し、

「だが、一度離れりや、ナギが大魔法ぶつ放しているな。あれは、やつぱりハジメもきついだろ？。」

そう解説する最中、

「キーリブル・アストラペー

「…千の雷つ。」

ナギが大呪文を放つ。あたり一面に稻妻が走る。

「おつと。あぶねえな、おい。」

こちらに少し飛び火したものを、ラカンが気合防御で打ち消す。

「破あああ。」

稻妻が走る中、それを打ち貫いてハジメがナギに向かい抜きでる。

「ちつ。」

それに対し、雷を槍の形に収束させた者を放つナギ。瞬間、爆発を起こし辺り一面に衝撃が広がる。その衝撃で周りの山々は崩落を始める。

戦いは続いていく。

「いやあ、すごいものですねえ。2人の戦いは。」

アルビレオがいつも通りの、真意が分からぬ笑みを浮かべながら言う。

「ふむ。じゃが、いつまでかかるのかのう。最早、昨日までの荒野、山々の光景がただの焦土と化しておる。」

アリカが若干呆れたように呟く。  
すでに、数時間が経っていた。

「はあつ、はあつ、はあつ。いい加減倒れろよハジメつ。…もう刀握ってる手が震えてるぜ？」

左腕と左足を切り傷だらけにし、脇腹には穴が開き血まみれのナギが言う。

「ぜえつ、ぜえつ、ぜえつ。貴様こそ、…出血多量で今にも倒れそうだぞ？鳥頭。」

右腕は焼かれ、体中がボロボロになつてゐる、一ちらも血まみれのハジメが言う。

言い終えた両者は、笑みを浮かべながら、

「…はつ。バカを言つた、倒れてなどしてたまるか。」

お互い杖を、刀を構える両者。ナギはその身の魔力を高める。ハジメはその身に惑卦螺旋法を宿す。

両者の間に静寂が宿つた瞬間、両者の技が放たれた。

ナギは雷の大槍を振るう。ハジメは牙突を放つ。

両者が激突した瞬間に、天は割れ、辺り一面に粉塵が舞い上がつた。

その光景を見て、どちらが勝つたかを見極めようとする観戦してい  
た面々。

粉塵が晴れる。

そこに、立っていたのは…ハジメであった。

-主人公side-

「はあつ、はあつ。」

ちつ、危なかつた。いや、違うな、今にも倒れそうだ。

「がはつ。てめえも限界のはずだる…。なんで立つてられるんだ?」

倒れ付している鳥頭が聞いてくる。

「…なに。好いでいる奴が見ている前で…倒れるわけにいかんだろう?…意地といつやつだ。」

「ハジメ~。」

そう叫びながら走つてくるアリカを見る。

「けつ。意地だつて…俺にだつてあらあ。」

そう言つて、手をつく鳥頭。

「まだ、やる気か。」

自然と笑みが浮かぶ。…やはり、阿呆だっこつよ。

だが、…面白い。

「あつたりまえだあつ。はあつ、はあつ。」

立ち上がる鳥頭。

そして、じりじりに拳を振りかざす。

だが、忘れるな。この距離接近戦は俺の距離だ。

鳥頭の拳をよけ、鳥頭の右頬に左の拳を打ち抜く。

「がはあつ。」

それでも、倒れんかつ。

なお、こちちに向かつてくる鳥頭。その拳が俺を射抜く。だが、もはや…その拳に力は無かつた。

「くつ。いい加減に、…眠れつ。」

鳥頭の頭を鷺掴み、地面に叩きつける。

「はあつ。少しはお前の事を認めてやろう。…ナギ。」

ふらふらになりながら、近くまで来たアリカのもとへ歩いていく。

「全く、バカじやのう、男といつのは。」

そう言つて笑うアリカ。

「ふん。…意地といつものだ。」

「お~い。大丈夫か?ナギい。」

「ふふふ。気を失つているようですねえ。」

ラカンとアルビレオがナギのもとへ寄つていいく。

全く、阿呆らしくなつてきたな。  
だが、こいつのめ…悪くは無い。

ナギとの勝負を思い返しながら、俺はそう思つていた。

#### 幕間4（後書き）

ネタも話も浮かばないG - q a nです。結局、昨日も今日も一話だけで終わってしまった。

というわけで、ナギとの戦いでした。勢いだけですので読みにくいと思います。

文才が欲しいと切に願う今田この頃。ではまた。

## 幕間5

騎士の剣は折られた  
されど青年の牙は折れぬ

幕間5

（相棒）

・主人公 side・

アリカの仕事も終わり、共に部屋へ向かう途中。

「のう。ハジメ。」

「ん? どうかしたか?」

「いや、そういえばハジメがいなかつた半年間があつたじやろ。そのとき、ハジメが何していったのか気になつての?」

アリカが戦争中、俺がアリカたちと行動を共にしていなかつた日々の事を聞いてきた。

そういうえば、言つてなかつたか。

「それに、その腰に携えている剣。最初にハジメと会つたときとは違う物じゃよな?」

そう言って、俺の腰元にある刀を見るアリカ。

「ふむ、そうだな。では、あれからのことを話すとしよう。」

……時は俺が造物主に敗れた後まで遡る

最後の衝突の瞬間に意識を手放した俺は、激痛に目を覚ました。体がボロボロになつていた俺だったが、なんとかその命をつなぎとめていたことを、そのときに知つた。

「…ぐつ。あああああつ」

しかし、凄まじい激痛が俺を襲い続けた。

激痛に意識を手放し、激痛で目覚める。それを幾度か繰り返していると、

「ほう、目を覚ましたか。やはり、無茶苦茶だわ。お前さん。」

懐かしい声がした。

「ほれ、これを良くかんで飲め。幾分か楽になるはずだ。」

俺の口に何かが入れられる。俺は空腹からか、躊躇い無く嚥んで飲み込んだ。

「つ。」

「かかか。苦かるう。しかし、良薬は口に苦しと聞くぞ。」

俺の苦悶の顔を見て、笑っている男。

「くつ。なぜ、貴様がここに…？」

「そりや、こいつの台詞だあ。ハジメ。驚いたぞ？ボロボロで今にも死にそうなお前が、俺達が良く戦っていたあの荒野に倒れていたときは。」

その言葉を聞いた俺は、愕然とする。

「…こには、龍の山脈という事か。」

あの瞬間に跳ばされたか、俺が無意識にこの空間への入り口を紡いだのか…。

「とりあえず、礼を言おう。だいぶ楽になつた、ナーガ。伊達に長生きはしておらんな。」

そう言つと、ナーガは胸を張り、

「おう。こいら一帯の長だしな。」

ナーガ。今は人の姿をしているが、その真の姿は巨大な龍であり、俺が初めて負けた相手もある。この地では、こいつに鍛えられたようなものだ。

「それで、いつたい何があつたってんだ？お前が、そん所そこのの奴に負けるとは思えねえんだがよ。」

ナーガが刃を鋭くさせながら俺に問う。

俺はこの龍の山脈を出てからのことを見約して話した。

「ほうほう。お前がね。それは人の世では英雄と呼ばれる人間ではないか？」

肩をすくませながら、ふざけた口調で言うナーガ。

「くく。それはないな。俺は表に出れるようなことは何一つしてはいない。」

「それで、これからいつたいどうするんだ？ハジメ。剣も折られちまつたんだろ？」

「旧世界に行くつもりだ。まず、奴の、造物主の目的が踏み違えている事を、奴の眼前に叩きつけねばならん。それから、刀を仕入れる事だな。」

造物主との戦いでこの世界にきてからといつもの、幾多の修羅場を潜り抜けてきた相棒が折れたことを思い出す。

それを聞いていたナーガは、

「前者はまあお前しだいだろうが、後者は無理だな。と刀の件について、そう言つてきた。

「…なぜだ？」

「お前は知つていたかどうか知らんが、あの剣は恐らくお前のために作られたものだ。刻印を解析してみたからこそ分かるが、あれはとりわけ頑丈に出来ていた。…良く考えてみろ。貴様の牙突…あれに耐え得る剣など、本来はありえん。」

牙突…確かに、ただの剣では簡単に折れたことがあった。最近では咸卦法など、あの刀には上乗せしながらの技ばかりであつたな。

それが、あの刀の限界を超えた？

「あの技は突貫力に特化している。普通の剣では言わずもがな、上等な剣ですら10回も持たん。」

刀なくして、奴に…造物主を倒す事ができるのか？  
…難しいであろうな。

「それでだ、ハジメ。お前久々に戦<sup>や</sup>ろうじゃねえか。お前がどれほど強くなつたかを知りたい。…もう回復したろ？」

突然提案してきたナーガ。

「回復はしたが、刀をどうにかする方が先だ。」

「だからよ、凄まじく頑丈でなおかつ魔力時を通しやすいものどうう？あるじやねえか、すぐ近くに。」

刀のことを考えなければいけない俺に、ナーガはそんなことを言う。

「なに？…まさか。」

「おう。俺は龍だ。俺の爪か牙を抜いて見せろ。後はそれを、お前の憑つとおりに加工すればいい。刻印も施せば、件の奴にも効くだろ？」

「ううつ…」

「俺にあの姿を相手にしろと？」

「かつかつか。強くなつてんだろ？期待してるぜえ。…ここでくたばるようなら、てめえの信念も高が知れてるつて事だ。」

言つてくれる…この阿呆が。

「ふふふ。面白い。貴様の牙一つといわず全て抜いてやる。後悔しろ。」

体を起き上がりせながら、ナーガを睨む。

「かつかつか、やつてみろよ。」

場所を荒野へ移す。

「さてさて、この姿になるのもお前が出ていつて以来か。久しいな。

「膨大な魔力を放出するナーガ。

放出された魔力によつて、辺り一面に暴風が起きる。

「ふん。結局その姿の貴様には勝つ事は無かつたな。だが、今日は勝たせてもらうぞ？ 戦利品は貴様の牙だ。」

「はあああつ。」

ナーガの身に一気に魔力が収束する。

周囲の大地がひび割れる。

巨大な体躯、柱を思わせる太き爪、鋭い牙を宿した竜王の名に恥じない姿となつた。

「では、やるとするか。」

ナーガが言い放つた瞬間、ナーガが凄まじい速度で飛び上がる。

そして、急降下。その勢いのまま爪を振り下ろす。

「でかい団体をしておきながら、相変わらず恐ろしい速度なことだ。

「それを避けながら、どうやつて奴にダメージを食らわせられるか考  
える。」

「…避けてばかりでは、俺には勝てんぞつ。ハジメツ。」

口内に魔力を収束させるナーガ。おいおい、本気だな。

「かあつ。」

ブレスを放つ、ナーガ。咄嗟に上空に飛び、圈外へと逃げる。  
辺り一面を溶かしつくすナーガのブレス。

「かつかつか。甘いぞ？ハジメエ」

「なつ。」

俺の眼前にいるナーガ。この距離はまづいつ。

刹那振るわれる爪に、俺は防御しながらももろに喰らってしまう。

「がはつ」

さらに、ナーガの攻撃は続く。

爪、殴打、魔法、そして、

山に埋め込まれた俺に、魔力を収束した砲撃を放つ。

その砲撃は俺を巻き込みながら山を一つ消す。

砲撃に吹き飛ばされた俺は、唯倒れ伏していた。

「おいおい、そんなもので、世界を救うなんて甘つちよろい事言つているのか？ハジメ」

上空に飛び続けながら、ナーガが嘲るように言つ。

「お前の信念はそんなものか？貫くと決めたのでは無いのか？…そんなところで倒れている暇があるのならつ、俺を倒す事だけを考えろつ。」

言われなくても分かつてゐる。俺は手を突いて、立ち上がる。

「（くく。目がまだ死んではない…か）まだ、やるきか？」

未完成などとは言つてはおれん。

感掛螺旋法を行う。ただ、爆発的な威力を持つて…奴を、ナーガを一発ぶん殴る。

ナーガを睨む。

たとえ、血だらけだらうが、なんだらうが、俺が屈するときは死ぬときだけだ。

「いくぞ…ナーガつ。」

一気にためた力を解放させる。ナーガから見ても消えたようにしか見えんはず。

「つ。」

その勢いのまま、ナーガの顔に向けて、ただ、渾身の一撃を持つて奴を貫く。

「破あつつ。」

「があつ。」

もろにそれを喰らつたナーガは吹き飛ばされた。

その牙を一つ宙に翻しながら…。

それを見た俺は、笑みを浮かべながら意識を手放した。

田を覚ませば、俺はナーガの住処にいた。

「よう。気がついたかこの野郎。」

人型の姿をしたナーガが、機嫌悪そうに隣に座っていた。その奥には、でかい牙があつた。

「なんだ。口が痛いのか？ナーガ。」

思わず笑みを浮かべながら、ナーガに言ひ。

「起きた直後にご挨拶だな。つたく、しかし、本当に持つてかれるとは思つてなかつたぜ。あの最後の奴ありやなんだ？」

「ああ、あれは感卦法のままさらには感卦法を行つ。感卦螺旋法と名づけた。まだ、未完成だがな。」

あれは完成させねばならん。不安定すぎて使う氣になれん。

「ありや、面白いな。器がお前じやなければ使えないようなバカな技だが。…言つてみれば、お前だけの技か。」

「器？」

氣になる単語が出てきたので思わず問つ。

「なんだ。知らねえで使つてたのか、危ねえなあおい。…器つてのは氣や魔力、それを使える上限つてところだ。それがでかけりや大呪文もどんでもねえ技も使える。…器だけで言えば、お前は古龍種よりも大きく感じるほどだからな。」

ほう。なるほど、鳥頭があれほどの魔法をつかえるのは器がでかいからか。

「…俺の器が古龍種よりも大きいだと？」

「感覚としてだがな。じゃなければ、感卦螺旋法だったか？あんなものを使えば、爆発しちまうよ。自爆技だ。」

随分と恐ろしいものを考えたものだな、俺も。

「さて、さつやとじの牙を加工しちまうか。刻印も俺がしどこでやるよ。前の剣を覚えてるからそれと一緒にいいだろ？」「

そう言つて立ち上がるナーガ。

「ああ、感謝する。」

「いいつてことよ。面白かったしなつ。」

そう笑みを浮かべ、奥に行くナーガ。

それから数日で、ナーガは刀を完成させた。

「どうだ。」

刀を振りながら、その感触を確かめる。

「悪くない。なぜか、あの刀のように手になじむ。」

「ああ、そりやたぶんその刻印だろうな。良く分からぬものが多かつたが、きっとこの刻印は恐らく、お前が使わなければ意味無いんだろうなあ。」

ほう。あの刀は、俺がこの世界に目覚めてからあつた刀だったからな。なにかあるのかも知れんな。興味は無いが。

「さて、では俺は急がねばならん。」「

これからよろしく頼む、相棒。

刀を腰に携える。

「もう行くのか。まあ、なかなか楽しめたぜ。」

「ふん。ではな。」

「おへ、さつさと世界を救つちまえよ。ハジメ。」

後ろ手を振りながら、自らの住処に帰るナーガ。

「無論だ。」

さて、まずは旧世界に行くとしよう。造物主、貴様を完膚なきまでに、叩き潰すためにな。

⋮⋮⋮

「まあこのような事があつたな。この刀に関してはな。」

「…そうか。龍の牙で…。すご~いとしか言えんのう。」

そう言つているアリカを見ると、少々眠そうだった。

「今日はこれまでにしておこう。誰かさんが眠そうだしな。」

少々話が長かつたか…。

「む? 眠くなどないぞつ」

声を上げるアリカを抱きかかえ、寝室へ向かう。

「今日はもう、寝るとしよう。夜ももう遅い。」

「…ふむ。では、続々は今度聞こうかの。」

お姫様抱つこのためか、少々顔を赤らめながら笑みを浮かべるアリカ。

「そうだな。また今度だ。」

## 幕間5（後書き）

新しい刀つてどう手に入れたの?というリクエストがあつたので書いてみました。まあ大まかには考えていたのですが、ネギまの要素はゼロでしたので…。

原作どうしようか今だ考え中です。最近丸くなつてしまつた感が否めないので、過激にでもしてみようかなと考えたら、数話で麻帆良が全滅しました…。

引き伸ばし感がある幕間ですが、G・qa・zの構想が出来上がるまでもう少しあ付き合いください。ではまた。

## 幕間6（前書き）

短いです。そして、アンケートすることになりました。詳細は文末まで。

## 幕間 6

青年は父親に  
姫は母親になる

幕間 6

「誕生」

・主人公 side・

俺はあるところに向かい、王宮を走る。  
目的の場所へと辿り着き、扉を開ける。  
「アリカ、生まれたかつ？」

アリカに問いかける。

そんな俺の様子に、目をぱちくりさせるアリカ。

「ふふ。お主らしくないのう。そんなに慌てるでない。」

そう言って、胸に抱いている眠りに着いている赤子を、こちらに見せるアリカ。

「心配するな、元気な女の子じゃ。」

「はい。それに、アリカ様自身も健康体です。良かつたですね。」

隣にいた主治医の女が笑顔で補足する。

「ふう。 そうか。」

安堵しながら、アリカに近づく。

「ほれ、抱いてみよ。」

アリカから娘を受け取る。

軽い。だが、重い…な。

「くく、俺が父親になる日が来るとはな。」

壊れそうな娘を抱きながら、心から思ったことを呟く。

「ふふ。お主がそうしていと微笑ましいのう。」

アリカが微笑みながらこちらを見る。

「旦元はアリカに似ているな。とこより、女の子なのだからアリカに似て欲しい。」

「ふふ。うれしい事を言つてくれるのう。」

しばらく、娘の寝姿を見ていると、

「そうじや。名前は決めたのかの？」

アリカが聞いてきた。

「ああ、娘ならばメアと名付けようと思つていたのだが。どうだろうか？」

単純に俺とアリカの名前からつけただけだが、それくらいシンプルな方が俺にはいい。

「なんじや。妻とハジメの名前からか。」

「…、良く分かつたな。」

そう感心していると、アリカは顔を赤らめながら、

「…妻もそう名付けよつと、思つただけじや。」

と答えた。

なるほど。

「…くつ。ははははは。」

「なつ、笑うところか？そこは。」

少々恥ずかしそうなアリカが、少し怒つたように言ひ。

「いや、なんか可笑しくてな。2人それぞれ考えた名前が同じで、

理由も同じだとはな。」

「ふふふ。それもそうじやな。」

2人で笑みを浮かべながら話す。

しばらく、会話が続いていると、ふと思い出す。

「そういえば、詠春の奴も子供が出来たそうだ。…お前とはちゃんとした旅行などは行つていなかつたしな。ちょうどいい機会だ、行くか？」

「そういうえば、そうじやの。…行きたいのう。」

こちらに向けて笑顔で言うアリカ。

「ならば、1・2週間後に行くとしよう。しつかり体を休めておけ、アリカ。」

「意外と心配性じやのう、分かったのじや。では、準備の方は任せたぞ？」

メアをアリカの腕に戻し、

「ああ、了解した。」

と言つて、準備をするために部屋を出る。

それから数日後、俺達は詠春のいる京都へと旅立つた。

困ったときの原作。京都旅行に行きたいと思います。そして、子供が出来ましたね。アリカとハジメに。まあ、特に問題ないかなあとおもいました。

娘なのはあくまでこの作品の主人公がハジメだからです。といっても、一応息子としてそっちを原作編主人公にしたら面白いとも思つたのですが。どちらがみたいですかね？

というわけで、アンケートです。こなかつた場合は自動的に娘です。  
？このまま娘で（たびたび登場するかな？）、ハジメが主人公のまま原作編へ。

？息子に訂正して息子が主人公の原作編へ、ハジメは完全裏方へ（もちろん登場はします）。ちなみに、息子のままでメアの名前でいこうと思っていますが、いこういふ名前もいいんじゃないかというのも募集です。

アンケートは11月12日土曜の夜ぐらいまでを締め切りとします。なので、更新はその日までなくなると思います。一応ストックは作つておく予定なので12日の夜に結構更新すると思います。  
アンケート協力お願いします。ではまた。

旅にでるは京都  
そこで戦友と再び見える

## 幕間7

「京都旅行」

「」は京都駅。

「いやあ、久しぶりですね。ハジメにアリカ様。子供が生まれたようだ、おめでとうございます。」

幾分か温和になった印象を受ける詠春が、ハジメとアリカに挨拶する。

アリカが抱いている赤子を見て、詠春が尋ねる。

「おお。可愛らしいですね。名前はなんど?」

「メアじゃ。」

アリカが答える。

「なに、そちらも子供が生まれたのだろう? そりゃうれしい、めでたい事だ。」

ハジメが詠春に言いつ。

「ふふ、詠春も女の子らしいのう。後で会いたいのう。」

「」に泊まるのでしょうか? ならば、ビルダ家を使って構いませんよ。そのときに妻と娘に会ってください。」

そう笑顔で答える詠春。

「いいのか? 」の地はそれほど魔法世界の者にいい感情を抱いていないうちだが。」

少し田を鋭くさせるハジメが詠春に問う。

「はは。ハジメは本当に何でも知っていますね。ですが、今そのような過激な事をする人間はいませんし、なにより、戦友が来ているのです。迎えることが当然でしょう？」

長に成り立てでりながらも、風格を滲み出している詠春が答える。「はあ。後で、それらの人間について教えておいてやる。宿泊代だ。」

呆れながらも、礼を言うハジメ。

「さて、立ち話もなんですし。まずは、家まで案内します。」

そう言って、駅の出入口へ向かう詠春についていくハジメたち。

⋮⋮⋮

近衛家に辿り着いて、長い階段を上りきったときハジメたちに声がかけられる。

「よう。ハジメに姫さん。あんたらも来てたのか。」

その声に振り返るハジメとアリカ。

そこには紅き翼の面々とアスナ姫がいた。

「なんだ、貴様らも来ていたのか。」

「まあな。姫子ちゃんに世界を見せてやるって約束したしな。それに詠春の子供も見たかったからな。来たわけだ。」

ハジメの言葉に、ナギが応える。

「まあそしたら、あんたらが来てたというわけだ。子供生まれたみたいだな、おめでとわん。」

「ああ。まあな。」

「ふふ。いつやって集まるのも久しぶりですね。さあ、今日当たり

は宴でもしましょつか。」

詠春が懐かしむ顔で、皆を案内する。

「おう。詠春、なかなか気が利くじゃねえか。楽しみが出来たぜっ。」

「

ラカンが嬉しそうに詠春についていく。  
後の面々もついていく。

⋮⋮⋮

宴は長引き、女性陣と子供はさつさと就寝したが、もうみんなまだまだ宴を続いている者たちがいた。

「がつはつはつは。いやあ、ハジメにも子供が生まれたかっ。ハジメに似たらとんでもねえ女になるなつ。」

ラカンがハジメの娘について想像する。

「確かに、俺に似て欲しくは無いな。」

ハジメもそれに同意する。

当然、ここにいる全ての者が酔っている。

「詠春の娘さんはどうですかね？詠春に似れば真面目な感じに、奥さんの方に似ればおつとりとした女性になるのでしょうか？」

アルビレオも話に乗る。

「はは、やはり男親としては妻の方に似てもういたい者ですね。ハジメはどうですか？」

詠春がハジメに話を振る。

「俺としては、やうだな。…難しいな。…幸せであればそれで良い。」

「俺を揺らしながら、ハジメはそつまくよつて答へる。

「それもそうですね。」

詠春もそれに同意する。

「おーい、詠春。酒がなくなってきたぞ。」  
ナギが酒の催促をする。

「それでは、持つて来ましょうかね。」

「あと、酒の肴を頼んだあ。」

ラカンもついでに注文する。

「はいはー。」

詠春は苦笑しながら了承し、宴会場を出て行く。

そんな調子で、空の酒樽が次々と増えていった。

「ん?なんだ?」

妙な気配を感じたハジメが声を上げる。

「おや、なんでしょう。強い魔力を感じます。」

アルビレオも不振がる。

「はつはつはつは。なんだなんだ?行つて見よつじやねえかつ。」

「おうつ。行つてみねえことにはわからねえ。」

ラカンとナギが嬉しそうに気配の下へ行く。

「ふう。全く、行動を起こすよつな輩はいないんじやなかつたのか

?詠春。」

すでにつぶれている詠春を尻目にハジメは嘆息しながら立ち上がる。

「ふふふ。長というのも大変なのですねえ。」

「これをさつさと渡しておけばよかつたな。」

端末を片手でいじりながらハジメが呟く。

「では、我々も行きましょうか。」  
アルビレオと共にハジメもナギたちを追つ。

「おう、こりゃ でけえ。鬼神兵並にでかいんじゃねえか？」

ラカンがリョウメンスクナノカミを仰ぎ見ながら呟く。  
「すごいですねえ。神格を持っているようですね。」

アルビレオが感嘆としながら分析をする。

「へへひ。ただのでかぶつて訳じやなぞそつだな。  
ナギが戦う気満々で腕を回す。

「ふう。おそらくは過激派の人間が俺達が来た事で、こいつを解き放つたのだろう。本来は土地神、守護神の類のはずだからな。  
ハジメが現状が起きた理由をほぼ正解に近い推測で述べる。

「んじや、」

ラカンが構える。

「さつさと、」

ナギも杖を構える。

「やつちまうかつ。」

そこから一方的な戦いが始まった。

ラカンの常識外れの攻撃と、ナギの大呪文がリョウメンスクナノカミを襲う。

「グオオオオオオツ」

リョウメンスクナノカミも抗戦するが、その攻撃はラカンたちには当たらない。

「なんだなんだ？まだ本調子じやねえのか？でかぶつ」

ラカンが本気の右の拳をリョウメンスクナノカミに叩きつけた。

「ガアアアツ」

「俺も忘れんじゃねえぜっ千の雷<sup>キーリブル・アストラベー</sup>」

雷がリョウメンスクナノカミを巻き込みながら一直線に全てを薙ぎ払う。

「ゴアアアアツ」

「やることば、ここいらこいつた結界張る事と封印だけよさやうだな。」

「…もしかしたら、そのまま消滅させてしまいそうですね。」

ハジメの咳きにアルビレオはそう応えた。

⋮⋮⋮

あの後、消滅しかかつたりョウメンスクナノカミを封印した一行は宴をやり直し、一晩中騒ぎ続けた。

もちろん、妻帯者は妻に怒られることになった。

## 幕間7（後書き）

アンケート協力ありがとうございました。

結果は

? 21票

? 5票

? 5票

? 5票

ということだ、このまま娘のまとして、ハジメ主人公で行きます。

今週は忙しく余り書き溜められませんでしたが、とりあえず4話投稿します。

計画の舞台は定まる  
今はただ平穏を楽しむ

幕間8

「京都旅行2」

「はは、昨日は随分と騒いでしまいましたね。」

詠春が一日酔いの頭をさすりながら苦笑して言つ。

「そうだな、少々羽目をはずしそぎたな。」

ハジメが煙草を吸いながら、省みる。

「ハジメが、ハメをはずすとは珍しい。子供が生まれてそれほど嬉しかつたか？」

ガトウがハジメに聞く。

ここは本堂から遠い離れ。そこで、ハジメと詠春、ガトウが煙草を吸いながらくつろいでいた。

「まあ、そうかもしだんな。なかなか面白い感情だとは思つ。」

ハジメはメアの顔を思い出しながら、そう応えた。

「さて、詠春。宿泊代だ。」

ハジメが懐から端末を取り出し、詠春に投げ渡す。

「おや、これは？」

「見れば分かると思うが、関西呪術協会の末端から上層部…貴様のすぐ下の者までを網羅した者だ。いざれ必要になるとと思つてな。調べていた。」

ハジメの周到さに、呆然とする詠春。

「それは、また。感謝した方がいいのでしょうか、探られた事を悟

らせなかつたことに驚くべきでしょうか。」

「戸惑いながらもそれを自らの懷にしまつ詠春。

「それに、これから計画に麻帆良が舞台となる可能性がでてきた。

「その言葉に詠春とガトウが反応する。

「お義父さんのところですか…。確かに、あれは様々な技術などが発展しているところですからね。」

「それに世界樹もある。なるほど、計画の舞台、礎となるにはつづつつけか。」

そこで詠春がある疑問を抱く。

「といふことは、ハジメは麻帆良に赴くのですか？」

「いや、暫くはここ京都にいようと思つ。下手に干渉されてもかなわん。マクギルやクルトがいるからといって、安心は出来んしな。ハジメがこれからのことについて軽く説明を続ける。

「恐らく仕上げは十数年後になる。そのときの舞台は麻帆良だ。そのために、俺は数年から十年後を田安に麻帆良に赴くつもりだ。」

「俺は何を協力すれば良い?」

ガトウがハジメに尋ねる。

「こちらの関係者や魔法使いたちも、腐つているのが多い。始末するのを手伝ってくれ。」

「…お義父さんもですか?」

思つところがあつたのか、詠春が真面目な顔をして問つ。

「近衛近右衛門か…。奴は、正直その能力は捨てがたい。あの学園の長だけあつてな。マクギルとはまた違つた形の政治家だ。政治をしてゐるわけではないがな。」

ハジメは、紫煙を吐き出しながら続ける。

「今のところ、やつてることも問題らしき者は無い。多少私用において職権を乱用している気がするが、それだけであそこを統括する者を居なくするのは惜しい。…それよりもだ。」

詠春とガトウを見ながら、ハジメの目が鋭くなる。

「奴の下にいる魔法使い、魔法生徒どものほうが問題が多い。どこで吹き込まれたかは簡単に推測できるが、自分を全く疑つてない阿呆が多すぎる。」

「魔法使いどもの教育までも腐らせていたとはな。…正直そこまで手が回らなかつた事が悔やまれるな。」

現状の問題点を語ったハジメは、短くなつた煙草の火を消し、立ち上がる。

「これからに拠点を移す際の問題点は細かい事は他にもあるが、主な点はそれらだな。」

「そうか。…夢見る事はいいことだが、現実が見えていない者が増えたという事か…。」

ガトウが冷静に判断する。

「さて、俺はアリカと京都を回る予定があつてな。ではな。」

そう言って、立ち去るハジメ。

「ああ、楽しんできてください。」

ハジメに声をかける詠春。

京都を観光している家族がいた。ハジメとアリカである。アリカはメアを抱っこしながら、観光している。

「ほう。随分趣きある街じやな。歴史が感じられる建物も多い。古都か…オステイアと通ずるものがあるのう。」

京都の雰囲気を気に入つたのか、アリカが辺りを忙しなく見回して

いる。

しかし、その手はしっかりとハジメとつながれている。

「あまり、はしゃぐな。メアが驚いているだろ？」

そういうハジメにアリカはメアを覗き込み、

「あーい。」

「ふふ、メアも喜んでるみたいじゃ。初めて見る街並みが楽しいのじゃろ。」

アリカがそう結論付けた。

「はあ。まあ、いいがな。」

「ん？ メアどうしたのじゃ？ あっちが気になるのかの？」

メアが指差す方向へアリカが歩くのを、ハジメは柔らかなまなざしでついていく。

それからも京都の散策をし続けるハジメとアリカ。

ときには、メアが興味を示したお土産屋や、仮装などを見て回り、大仏の大きさに驚いたり、寺などの建築物を見ながら楽しいときをすごしていた。

そろそろ日が傾こうとする頃、

「じつしてみると、あの頃を思い出のつ。」

アリカが突然そんなことを言つてきた。

それに対しハジメは、

「ああ、貴様が護衛として俺を連れ回したときか？」

そう言つハジメにアリカは目を丸くしながら、

「なんじゃ。覚えておつたのか？」

「なに、あれだけ連れ回されれば忘れるとはできんだろ？」

「ふふ。そんなに連れ回したつもりは無いんじゃがのう。」

アリカはおどけたよつて言つて。

夕日が差し込む中、アリカがふと呟く。

「あの頃はこうして、家族と共に、このような幸せな空間を得る事ができるとは…思っておらんかったわ。」

遠い目をしながら微笑むアリカ。その瞳は何を映しているのかは、窺い知れない。

「確かに。アリカが将来隣にいることになるとは、思いもしなかつたな。」

ハジメが続ける。

「それに、俺が、こうして人並みの幸せを手に入れるとは考えもしなかつたしな。ただ、己の信念を貫くことだけが生き様であるかのよつにな。これからも信念を貫くことはやめんが。」

「ふふ。お主のその信念が妾たちをつなげたのかも知れんのう。」

アリカはつないだ手を見ながら、言葉を紡ぐ。

「己の信念が、想いが、他の者と折り重なつて大きく、強い何かになつて、絆というものは作られるのかも知れんのう。」

「くく、なかなか口マンチックな事を言つた。アリカ。」

ハジメはアリカを見る。

「ふふふ。なにせ、妾も乙女じやからな。」

そう言つて笑みを浮かべるアリカ。

「そうだな。アリカは乙女だな。なにせお姫様だったものな。」

「むう、なにか含みのある言い方じやのう。」

アリカが少しハジメを睨む。

「さあ、そろそろ暗くなつてきた。メアもそろそろ帰りたいだろつ。詠春のところへ戻るよ。」

そう言つてアリカを連れ出す。

「全く。メアも難儀な父親を持ったものじやのう。」

アリカが笑みを浮かべながらメアに喋りかける。

しかし、

「あー、あい。あー。」

メアはそんなことはお構いなしに、唯楽しそうに声をあげていた。

ハジメたちが帰つてくると、

「よつ、お一人さん。楽しんできたみたいだな。」

「あ、おいつガトウ。それは俺のつまみだぞ。」

「別にこれだけあるのだから構わんだろう? ナギ。」

「更に酒樽を持つてくる必要がありそうですねえ。」

「ふふふ。すみませんが、すでに始めていますよ?」

すでに宴が始まつていた。

「はあ。本当に騒がしいのが好きな奴らだ。」

「じゃが、じうこうのも悪くなからう? 妻は先に休む。楽しむのも良いが、昨日のような事はせぬようにな。」

ハジメをそこに置いて、さつさと自らの部屋に戻るアリカ。

「まあ、嫌いじゃないが… さすがにな。」

ラカンがハジメの首に手を回す。

「別にいいじゃねえかあ。明日にはまた戻つちまうんだろ?」

「まあな。1週間しか時間が取れなかつた上、ゲートの場所の関係もあるからな。」

「じゃあよ。今日はぱあつと騒いじまおうぜつ」

そう言つて、杯をハジメに渡すラカン。

「ふう。じうこう日も… 悪くは無いか。」

そして、今宵もまた宴が続かれた。

世界の英雄達のほんの些細な休息であつた旅も終わる。

何かを成すには準備が要る  
今は準備のとき

## 幕間9

（拠点）

・主人公 side・

メアが生まれて早くも6年が経つた。  
そしてそろそろ、計画までの準備として旧世界に拠点を構える必要  
があるな。

俺は、計画のための準備を行いながら、拠点について検討していた。  
「それで、どうする。アリカ？ ひとまず、拠点を京都に移すつもり  
なのだが。」

オステイアのことを考えながらアリカに話す。

「いくら王族の力をなくさせたからといつても、シンボルである事  
には変わらんからな。ここにとどまる事もできるだ？」

この数年で、王都オステイア、王族の力はその殆どが削がれた。と  
いうよりも削いだ。

帝国とM・M・<sup>メガロ・メセンニア</sup>両国が共に盛栄させる場所、両国の友好の国として  
の面を強くさせ、

世界にはびこつていた、人種による不満や不平を、なくすきっかけ  
になるようにと考えていたのだが、思った以上にマクギルたちが頑  
張った。

今では、オステイアを動かしているのは王族ではなく、真に世界を

考える者が率先して発展させていく。そこに種族の違いなど些細な問題にもならない。

「阿呆。言つたはずじゃぞ？ までもお主の傍に居るとな。それに、メアもパパと一緒にの方が良かるつ？」

「うん。私もパパと一緒にの方がいいな。」

俺の提案にアリカとメアは自らの意見を言つ。

「それに、京都ということは木乃香もいるの〜？」

メアがあつたのは赤子のときだから覚えていないが、木乃香のことは教えている。

「ああ。まあいるだろ？ な。あれは親馬鹿だからな、手放さんだろ。」

メアの疑問に、詠春の姿を思い浮かべながら答える。

「じゃが、なぜ麻帆良じやないのじや？ 抜点を移すのならば麻帆良のほうが良かるつ？ 監視の意味も兼ねての。」

アリカが疑問を口にする。

「ああ。監視の件ならばすでにアルビレオを送つてある。英雄と呼ばれているからな。近右衛門も笑顔で承諾したそうだ。」

「それに今俺が、麻帆良に干渉するのは、難しい状況にある。まあその辺りは、マクギルたちに任せているから大丈夫だとは思うが。」

俺が懸念要素を述べていると、

「ふう。お主は少し休んだ方が良いぞ？」

突然、アリカがそんなことを言つてきた。

「なに、いつしてアリカたちといふ事が、俺の休息だ。」

-アリカ side -

「なに、 じつしてアリカたちといふ事が、 僕の休息だ。」  
ハジメはそう言つてくれる。

そう言つてくれるのは、 嬉しいのじや。  
だがの。ハジメは妾が会つた時から、 すでにその身を戦争へ投じて  
おつた。誰もが知らないようなとこからすでに、 完全なる世界と戦  
つておつた。そして、 その身をボロボロにしながらも戦争を終結さ  
せる鍵を必死に集めておつた。

じつして思ひ返すと、 妾の護衛は本当に休息のよつたものじやつた  
よみじやな。

「京都に行つてからまどつするのじやへ妾たちも着いていくから大  
変じやろつ？」

「メアは木乃香がいるし、 詠春もいる。…安心しろ。僕は、 独りで  
戦つているわけじやない。隣にはお前がいることだしな。」

そう言つて、 妾の頭をなぐるハジメ。

そうやつて笑われると妾は何も言えんじやないか。

「あ、 メアもメアも。」

メアのおねだりに、 笑みを浮かべメアの頭をなぐるハジメ。

全く、 心配でならん。

まあ良かうつ、 どこまでもつこいけば良いことじやからな。

そう思いながら、 ハジメを見て妾は微笑んだ。

- side end -

⋮  
⋮

拠点を京都に移すこととしたハジメたち一行に、詠春は快く近衛家の居住を勧めた。

「おいおい、あいつ長の自覚があるのか？」

「ふむ。適材適所ではなさそうじゃな。」

詠春の行動に若干不安を覚えたが、都合が良いのでハジメたちは詠春の好意に甘える事にした。

そして、詠春の家に招かれる。

「ウチは、このかつていつんやよ～。」のちやんつてよんでな～。  
黒髪のきれいな女の子が自己紹介する。

「わたしはメアって言つんだ。よろしくね。このちやん。」  
メアもそれに答える。

「ウ、ウチは、せつないります。よ、よろしくうおねがいします。  
髪を横に束ねた女の子も、緊張しながら自己紹介をする。

「ふふ。うん、よろしくね。せつなちゃん。」

「せつちゃん。かたくなりすぎや～、もつとやわらかくならんと～。」

「

そつ言つて、わいわいと楽しそうにする女の子3人。

そんな少女3人の和気藹々とした様子を、微笑みながら見ているハジメと詠春。

「いやはや、木乃香には年の近い友人があまりいないものでしたからね。ありがとうございます。」

詠春が口を開く。

「なるほど、何かやたら誘つてきたのはそういうものもあったのか。

「ハジメが納得したように呟く。

「あつちで、あそぼうな～。メアちゃん、せつちゃん。」  
少し離れた遊び場に向かう木乃香。

「うん、行こ～う？せつなちゃん。」

「あ、うん。メアちゃん、お嬢様。」

それに続く、メアと刹那。

「あ～またせつちゃん、お嬢様いうた～。」

「あ、こめん。…こちやん。」

口を尖らせた木乃香に、すこし顔を赤らめながら囁く刹那。

「うん、ええよ～。せつちゃん、ほないこい～。」

途端に笑顔になる木乃香。

「ふふ、仲いいんだねえ。こちやんにせつなちゃん。」

「仲良しさんや～。メアちゃんも今日から仲良しさんや～。だから、せつちゃんのことも、せつちゃんつてよんでな～」

そう言って、刹那とメアと手をつなぐ木乃香。

「ふふ。こちやん。」

「うん、せつちゃん、こちやん。」

そして、遊び始める木乃香たち。

「メアにとつても良い事だな。こちらからも礼を言つ。」

「そうみたいですね。」

ハジメの咳きに反応する詠春。

「それにしても、あの娘。半妖か？少々気に違和感を感じる。」

「そう言つたハジメに、詠春の目が細まる。

「刹那ちゃんですか…。はい、少々訳有りでしてね。鳥族でして…。」

「…なるほどな。惡々しい慣習という事か。」

何か心当たりがあるのか、ハジメの眉間に皺が寄る。

「そのようなものです。ですから、神鳴流として預かっているのです。才能はありますよ？」

自慢話をするかのように笑みを浮かべる詠春。

「護るための剣か…。俺とはまた違った剣だ。強くなるといいな。」

「はい。」

ハジメと詠春は、遊んでいる木乃香たちを、これが平和である光景だと思いながら見ていた。

## 幕間9（後書き）

口調とかはスルーしていただけれどG - q a nはほつとします。

その名も血も重く大きい  
ならばどうするのが正しいのか

幕間10

「認識の違い」

・主人公 side・

近衛家に来てからもう半年が過ぎようとしていた。  
俺はここを拠点としながら、着々と世界中で計画のための準備をしていた。

そして、そろそろ戻るときかと思い、ここへ帰ってきたある夜、俺と詠春は酒を交わしていた。

「それで、木乃香のことはどうする気だ？ 詠春。」

気になっていた事を詠春に聞く。詠春は木乃香にこちらの世界について教えていない節があった。今日は、その真意を聞くのと想いこうして酒を酌み交わしている。

「それは、こちらの世界について、と言つことですか？」

「それ以外なからう。どういう意図で木乃香に黙つている？」

杯を傾けながら問う。

「私は、木乃香には普通の女の子として生活してもらいたいと思っています。」

その言葉を耳に入れた瞬間、俺は刀を詠春の首筋に突きつけた。

「つ。…どういうつもりですか？ ハジメ。」

反応できないとは、衰えたか？ 詠春。

「貴様」そどうこつもりだ？ 詠春。…普通の女の子？ なら、それ

に 対して貴様は何をして いる? 何の対策をして いる? ただ、黙つて いるだけで無いか

余りにも甘い考えに、目が鋭くなる。

「…ですが、じきに麻帆良へと転校させるつもりです。この地にいるよりも、お義父さんに任せた方が安全でしょう?」

詠春のふざけた考えに、手に力がこもる。

「しばらく見ない間に随分と腑抜けになつたな。懐柔されたか?それとも間抜けになつただけか?あの爺が貴様の考えを汲むことはあつても守りはしない。いずれは、後継者としてこちらの世界について教えるだらう。」

「そんなん…。」

口ごもる詠春。心当たりがあるのだろう。

「それにだ。木乃香にはナギ以上の魔力の資質がある。たとえ魔力を封印しようが、そんな考えを持つ貴様を辞させ、封印を解き器とさせられるだらう。」

「青山にいたお前にも多少は分かるだらうが、…近衛といつ名の、血の大きさを認識しろ。」

俺の言葉に呆然としている詠春。

「…では、私はどうすればいいのでしよう?」

「本当の意味で普通の女の子として暮らすのは無理であろう。まずは、この世界の事と、刹那の事について教えればよからう。」

刀を收めながら続ける。

「あの子に危険が迫つてから教えても良いが、手遅れになるのは貴様ではない。木乃香だぞ? 知つておくに越した事は無い。それから、徐々に自分で考えさせれば良い。あと10年もすれば自分でできる事も増える。」

そうすれば、自らの幸せも、進む道も分かるだらうし、選べるだろう。

「確かに近衛の名は、普通に暮らすには大きすぎますね。」

杯の酒を見ながら詠春が呟く。

「でも、なぜ剣那君のことも？彼女は、知られたくは無いはずですよ。」

「奴の剣は、恐らく木乃香を守るために振るうものとなるだらう。あの2人に必要な鱈を入れる意味もなからう。」

空になつた杯に、酒を入れながら答える。

「…あなたは本当に、いろんなことを考えていますね。ハジメ。」

こちらを感心した目で見ている詠春。

「貴様が甘いだけだ。阿呆が。」

杯を傾ける。

⋮⋮⋮

暢気についている剣那の後ろに忍び寄り、

「ひやうつ。」

妖などの真の姿を現させる魔法を使つた。

こちらを振り返る剣那。

「へつ？あつ、ハジメ様。えつ、あれ？羽が…えつ？」

わたわたと困惑している剣那の首根っこを掴む。

「えつ？ハジメ様…えつ？」

「少々急だが、貴様の正体を木乃香に話すことになつた。剣那。」

その言葉を聞いた剣那の顔が一気に青ざめる。

「

「…どういふことですか？」

「刹那…。貴様は木乃香を護りたいんだつたな？のために、今は剣の腕を磨いている…そうだな？」

「は、はい。ウチは…、ウチはこのちゃんとちゃんと護れるようになりたい。メアちゃんに頼つてばつかじやいかんて。」

この前あつた、木乃香が川に流された事か？たしか、メアと刹那が助けたと記憶していたが。

「ならば、なおさらだろ。」

「？」

俺の言葉に疑問符を浮かべる刹那。

「護るという事を甘く見るな小娘。剣の腕をどれだけ磨こうが、それが護るという事に全てつながると思うな。」

俺がアリカを護衛していたときはそれでよかつたがな。

「…貴様が護るのは木乃香の日常だろ？それがどんな日常でもだ、そこに貴様がいなければ意味があるまい。貴様は自分の出自を隠しておきたいようだが、隠しておけるものでもあるまい。」

木乃香たちがいる場所へ歩き出す。

「それがばれたとき、貴様は木乃香たちの前から消える氣か？それこそ阿呆のやることだろ。」

木乃香たちがいる部屋に辿り着く。

「…なに、木乃香とメアはそんな薄情ではない。怖いだろ？が勇気を出せ。」

扉を開け放ち、刹那を放り投げる。

「あう~。」

「あつ。せつちや…。」

刹那に集まる視線。アリカに詠春の妻、詠春に木乃香、メアだ。アリカがこちらを見て、  
(また無茶をしおつたな)

と今にも闇にえりうな田で睨んできた。

「あ、あう。」

縮こまる刹那。

「わ～。せつちゃん、キレーなハネやね～。天使さんみたいやな～。」

「

笑顔で刹那によつてくる木乃香。

「本当だ～。きれいだね～、せつちゃん。」

木乃香に続いてよつてくるメア。これからも笑顔だ。

「え、え？ ほんま？」わくないの？」

戸惑う刹那に木乃香は、

「ん～ん、せんせん。キレイし、かわいいよ。せつちゃん。」

と笑つていつた。

「うつ。」のちや～ん。」

涙を田に溜めながら木乃香に抱きつく刹那。

「無茶をしますね、本当に。下手したらトライアウトですね。」

「こちらに歩いてきた詠春が言つ。」

「なに、木乃香もメアもちゃんと自分で判断できる子だからな。さつさと一步踏み出さん刹那が悪い。」

「まだ子供じや、たわけ。」

後頭部にちょっとした衝撃が走る。

アリカがチヨップしたようだ。

「もう少し、やさしく出来んかったのか、おぬしさ。」

アリカが呆れたような顔で言つてくる。

「無理だな。むしろ、とてもやさしくやつたつもりだったのだが…。」

「本來ならば、有無を言わさず正体を明かすところだ。」

「はあ。」

「ははは。」

アリカはため息をつき、詠春は苦笑している。  
なんだ？文句でもあるのか？

俺は撫然としながらも、もうすでに笑っている刹那たちを見ていた。  
あいつらは、いつまでもあるような関係であってくれれば良いと思  
いながら。

幕間10（後書き）

後一話べりこは今日中にあげられると思います。

どんな組織でも一部は腐敗する問題はそれをどう拡散しないかだ

幕間11

（襲来）

剣が交差する音が道場に響き渡る。

「やあっ。そこっ。」

「…甘い。」

回り込んだ少女が男の後ろから木刀を振るうが、男は一瞬で少女の後ろに回りこみ、指で頭を弾く。

「いたあっ。」

そこそこに吹き飛ぶ少女。鈍い音がしたが大丈夫であろうか。少女は目に涙を溜めながら起き上がる。

「うう。父上え、もう少し手加減しても罰は当たりませんよ？」

「これ以上手加減したら、手合わせする意味がなからう。そう言つ

ならば、大人しく刹那と鍛錬を続けていろ、メア。」

「父上のいけづ〜。せつちゃん、手合わせしよ〜。」

メアと呼ばれた少女が道場の向こう側にいる少女の方へいく。

「はは。少しは手加減したらいかがですか？娘でしょう。ハジメ。」  
ハジメと呼ばれた男が答える。

「阿呆か、詠春。ちゃんと手加減しているだろ？『せつぎりまで粘らせただろうが。』

詠春は唯苦笑するしかなかつた。

-主人公 side -

木乃香にこちらの世界の事と刹那のことを話してから、早数ヶ月。木乃香にこちら側の世界を話したときの反応は、

「ふえ～、そんな不思議なんがあるんやね～。でも、ウチが大きくなるまで考えてもええのやろ？なら、ウチはウチが幸せになれるようにはんばるわ～。だから、ようしくたのむで？せつちゃん。」

「は、はい。お嬢… このちゃん。」

と、なんとも、良く分かっているのかどうか知らないが、自らよく考えとけという趣向は伝わつたらしい。刹那もいるからとりあえずは安心であろう。

それよりも、メアについてだが。

こいつもなぜか神鳴流を習つている。

そんな簡単に習つていいものかと詠春に問うたが、

「刹那君も学んでいる事ですし、なによりあなたの娘ですから。きっと才能にあふれていますよ。」

と笑顔で言い切る始末だった。

だが、力を得る以上興味本位で得てもらつては困る。だからこそ、メアを呼び出し、

「これがお前が踏み入れようとしている世界だ。」

と、自らの腕が足が切り落とされ、死にいくまでの半殺しにあう幻術まで見せたが、

「い、こんな世界に、このちゃんとが踏み入れる可能性があるなら、私だつて…、例外じやない。それに、私はつ、このちゃんと一緒にいたい。」

と今にも氣絶しそうな顔で言い切つた。いつの間にそこまでの絆が出来たのや～。

まあ、この事がアリカにばれて凄まじい形相で、

「 10にも満たん子にやることかあつ。」

と怒られたのは今思えば仕方なかつ。

まあ、いざれは踏み入れると思つてはいたが、子供といえどもその心は決して弱いというわけではないという事か。

俺は、刹那とメアの試合を見ながら、そう感じていた。

⋮⋮⋮

そして、数日が過ぎたある日の事。

「 その話は事実か？ ガトウ。」

俺はガトウから緊急の連絡をえていた。

「 ああ。 メガロ・メンブリア M・M元老院にまだ膿がいたようだ。お前とマクギル議員たちがあれほど掃除したって言つのにな……。」

ガトウが苦虫を噛み潰したような顔をする。

「 組織というものは、そう言つものだ。どれだけ掃除しようが腐敗はどうしてもでてくる。後は、それをどうやって拡散させんようにするかを、考えるしかない。」

煙草に火をつけながら俺はそう呟いた。

本当に、愚かな者多多すぎるな。だが、多いならば唯排除すればいいだけのこと。

「 ……そうだな。しかし、今回は奴らもなぜか必死だ。罪人を幾人か生贊にするつもりらしい。奴らを始末したときには、すでに罪人を解き放つた後だつた。……正直言つて大惨事になるかも知れん。ああ、くそ。なぜナギと連絡が取れんつ。」

ガトウが頭をかきながら愚痴を言つ。

あのバカが。いつたいどこをほつつき歩いているんだ？

「 それで、予定はいつだ？ ナギの息子とやらを襲撃するその予定は？」

- s i d e e n d -

⋮⋮⋮⋮⋮

ウェールズのとある山奥。

「はあっ、はあっ、はあっ、これをすれば家族は助かる。家族は助かる。家族は助かる。」

狂気を宿した顔でボロボロの衣服を纏つた男が呟き続ける。そして、男はその手に持つていた短刀を

己の心臓に突き刺した。

その瞬間、男を基点として、幾多の魔法陣が広がっていく。それは、少し離れた場所でも起きていた。それらは幾重にも重なる。そして、この世界と魔界の境界が曖昧になっていく…。

次の瞬間には、悪魔の手が足が浮かび上がり、境界を超えて、数え切れないほどの異形があふれ出る。

⋮⋮⋮⋮⋮

「これは…厄介な数だな。」

少し小高い丘を登った先に、ハジメはいた。

「少年期に不幸に遭いながらも、懸命に英雄の父親を目指し、偉<sup>マ</sup>ギス<sup>テル</sup>・マ<sup>ギ</sup>」

大なる魔法使いとなつた英雄”…か。

ハジメが煙草を折り、目を鋭くさせる。

「どこの三流脚本家だ。虫唾が走る。」

村の先に見えるは、黒き靄。悪魔の大群である。

ハジメは刀を構えながら、

「早々に退場願おうか。悪魔共。」

飛びだつた。

・主人公 side -

この悪魔共を村に入れるわけには、襲わせるわけにはいかん。

幸いその殆どが中級にも満たん雑魚だ。

「ふんっ。」

ただ感卦法を籠めた斬撃で薙ぎ払う。それだけで、その範囲内の悪魔のほぼ全てが、消えるか還っていく。

「くく。貴殿が噂に聞くバイルドライバーであるか。素晴らしい腕だ。…がつ。」

俺を知つてゐるらしい悪魔が、腕を振りかぶる。

時にはこのような爵位を持つてゐるような悪魔もいるが、

「話す暇など無いのでな。」

牙突を放てば消えていく。

敵は雑魚だが、数が多い。どれだけの人間を生贊にしたのだ？

「ちつ。」

周りの悪魔共を消していく。だが、このペースではいずれ村に入られる。

感卦螺旋法で牙突を放つ。今のでやつと半分ほどか？まあいな。

俺が焦つてゐると、

突然一條の雷が悪魔を薙ぎ払つた。

「よひ。悪いな、ハジメ。遅れちまつたようだ。」

「その発生源をみると、ナギがいた。

「ど！」言つてた阿呆が。だが、話は後だ。さつやとこいつらを消すぞ。」

「おう。背中は頼んだぜつ、ハジメつ。」

ナギが、なぎ払つた空間を凄まじい速度で飛び込んでいく。

「キーリブル・アストラベー  
千の雷つ。」

「ふん。これで、入られる事もなさそうだな。  
俺も負けていられんな。」

「破つ。」

ナギがいるならば、俺が動けなくなつても問題は無い。  
そう考え常時、感卦螺旋法を行いながら、牙突を放つ。

唯ひたすら、俺とナギが悪魔共を屠つていぐ。

そして、最後の一匹を互いに残す事になつた。

「力カ。ドチラガ化け物カ…ワカラヌナ。」

「ふん。貴様らにどう思われようとも構わん。」

そう言つて最後の悪魔を穿つ。

首をへし折る音が聞こえた。ナギの方も終わったようだ。

「へへ。ありがとうな、ハジメ。」

乾いた笑みを浮かべながら、近づいてくるナギと子供。

「なに、もともと防げたはずだったものだ。気にするな。そここの子  
供は息子か？」

「ああ、ネギって言つんだ。あそこにしてびっくりしたぜ。」ううう  
うとこうは似なくていいのによ。」

「随分と破天荒な行動をする。」

ナギの後ろに控えるナギの杖を持つているナギの息子。

「…。」

そのとき、こちらに近づいてくる者がいた。

「なんじや。随分禍々しい魔力を感じたから準備してたつての、元、  
それが消えちまつたから来て見れば。」

老人がナギとネギを見る。

「おいおい、ネギ。見ないと思つたら、こんなところで何してるん  
だ？」

ネギがいたことに驚いた老人が尋ねる。

「魔法の練習してたら、怖いのがいつぱい来たから…僕、村のみん  
なを助けよつと思つて。お父さんもきつとそうすると思つて…。」

「はは。ほら、ネギ。スタンと一緒に村にもどれ。」

そう言いながら、ナギがネギをスタンに近づける。

「お、お父さん…。」

「…俺が言えた義理じゃねえが幸せになれよ。ネギ。」

「ふん。団体だけ一人前になりやがつてよ。…いつでも帰つて来い  
よ?みんな待つてるんだからよ。」

「悪いな、スタン。」

そう言い残して、スタンはネギを連れて去つていった。

「いいのか?」

「いいや。余るのは、全部終わつたらだ。」

「…そつか。ならば何も言わん。ではな。」

ナギに言い捨て、去る。

「ああ。またな。」

ナギもまたどこかへと歩いていった。

- s i d e e n d -

これを期に、M・M<sup>メガロ・メセンブリア</sup>においての罪人などの法や規制、また議員の特権などにおいての議論がなされた。

それによって、M・M<sup>メガロ・メセンブリア</sup>元老院議員による違法奴隸や、様々な悪事がまた暴かれる事になる。

## 幕間1-1（後書き）

幕間はもう少し続くと思います。ではまた。

青年は気づかず  
少女は勘違いをする

幕間12

「勘違い」

これは、ハジメが造物主を倒した後の、旅をしていたときの物語。

-主人公side-

「ふう、こんなものか。」

俺は、この地で見つけた今は使われていない魔法を行使していた。  
なかなか面白いと思う。俺が知っているのは陰陽術と魔法。しかし、  
この魔法も決して決まった系譜では成り立っていない。

古代語魔法というものもあり、今では衰退した魔法もある。さらに  
は魔術と呼ばれたり秘術と呼ばれたりと、一子相伝、一族にしか伝  
えられないような魔法もあるらしい。

まあそれを巡つて旅を続けているわけだが。

俺が魔法を終えて一息ついていると、何かが爆ぜた様な音が近くに  
聞こえた。

「ここは旧世界だぞ？… いつたい何のつもりだ？」  
音がするまゝへ気配を隠しながら駆ける。

「はは。よくよく見てみれば、なかなかの上玉じゃねえか？」  
「確かに。…引き渡すときはどういう状態でもいいんだったな？」

「…少し楽しむか？こいつには仲間も随分やられちまつたしな。」  
なかなかに下衆な声が聞こえる。

俺がついてみると、倒れている少女といくつかの屍。そして、今下衆な声をあげている男数人。

誘拐か何か？…こっちの世界もあっちの世界も底辺は変わらんな。  
そう思いながら俺は刀に手をかける。

さて、狩るとするか。

一瞬で下衆どもに駆ける。俺のさつきに氣づいたのが一人。だが、それ以外の首をすべて刎ねる。

刎ねた首が地に落ち、遅れて首の無い体が崩れ落ちる。

「…なつ、てめえつ何者だつ。」

俺のさつきに氣づいて咄嗟に飛びのいた男が叫ぶ。

「下郎にかかる名など、持ち合わせてはいないのでな。」

「な、なめんなつ。糞野郎つ。」

男が杖を構える。

魔法使いだつたか。だが、それは悪手だ。阿呆が。ただ駆け、刀を振る。

それだけで、残っていた男の首が刎ねた。

造物主と戦つた後だからだろうか。どんな奴が相手でも、まるで話しにならんな。

そう思いながら、倒れていた少女に近づく。先ほどは氣づかなかつたが、随分弱つている。

「待テヤ。ソレ以上ゴ主人ニ近ヅクンジャネエヨ。」

声がするほうへ刀を構える。

そこには、片腕だけのボロボロな人形が浮いていた。

「この少女の 人形か？ならば 安心しろ。近くの街に 知り合いがいる  
のでな。そこで 休ませるだけだ。」

「へッ、ソレヲ 信用シロッテカ？」

「好きにすればよからう。どの道、ここに置いたままならば、力尽  
きるのはこの少女だ。」

少女を見ると、本当に 随分弱つて いることがわかる。近寄るが、人  
形は動かない。納得していないが、理解はしたか？

傍まで行き、少女を 担ぎながら、

「あそこ の 街に 行く。ついで これ ないなら 貴様も 連れて 行くが？」

「ヨロシク、頼マア」

人形が こっちにくる。人形の首を 握る。  
さて、では 行くか。

街に 瞬動を使つて 出り 着き、よく 使う宿屋へと 向かう。

「おや、また 人助けですか？さすがは 千の呪文サカツヅシンドマスターの男ですね。」

宿屋に入ると、主人が 迎える。

俺の名は 余り 広めたくなかつたため、鳥頭の 通り名を使つて いたせ  
いか、ちらほら 鳥頭の 事を 聞く ようになつてしまつた。使いすぎた  
か？

「なに、たいしたことは して いない。… それで この 少女だが、随分  
弱つて いる ようで な。」

担い でいた 少女を 主人に 見せる。

「ああ、これは また ひどい。部屋は この 部屋が 空いて おり ます ので、  
どうぞ 使つて ください。」

主人に 鍵を もらう。

少女を 部屋に 移し、カウンターへ 戻る。

「いつも 協力して くれる 事に 感謝する。」

「いえいえ、とんでも ありません。我々も あなた のような 人に 協力  
できて 嬉しい ので すから。」

俺も、こちら側の世界を知りながらも、いつも風に協力してくれる者はないがたい。

「俺は、そろそろこの地から出る。今までの礼だ。ではな。」  
少々の心遣いの金を入れた袋を置き、宿屋を出る。

- side end -

「……律儀な人だ。だから、協力したくなるのですがね。」  
そう言いながら、男が置いた袋を開け、中身を見た店主の動きが止まる。

袋の中には金貨が数十枚入っていた。

「これは……いくらなんでも……いやはや。」

店主はただ呟くだけだった。

- 少女 side -

目を覚ますとそこは人が使う宿らしき部屋だった。

「チャチャゼロ。あれからなにがあつた?」

今思い出しても忌々しい。奴ら、私が女子供を殺さないと知ついたらしく、あらうじとか子供を使って私に不死殺しの呪いをかけてきおつた。

誇りも何も無い奴らが……本当に忌々しい……。

しかし、その呪いも今やなくなっている。おそれく未熟だったのだろう、この身を呪つには弱かつたようだ。時間が経過して解けたようだ。

「アア? サウザンドマスター? テ言ウ、男二助ケラレタミタイダゼ?  
?」

「千の呪文の男だと？魔法世界であつた大戦の英雄じゃないか。なぜ、そのような男がこの私を助けた？」

ダーク・エヴァンジェル  
闇の福音たるこの私を…。

「聞キタイコトガアルナラヨ、直接聞キヤイインジャネエカ？」

「ふむ。チャチャゼロの言う事も一理あるな。くく、面白い。会いに行くとしようか。…行くぞチャチャゼロ。」

「アイヨ。ゴ主人。」

ふふ。ふはははは。なかなか面白いことをしてくれるじゃないか、

千の呪文の男。お前に会いたくなつてみたよ。

面白い男ならば、この私の眷属にしてやろうじゃないか。

このエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルのなつ。

「ふふ。ふはははははは。」

「…ゴ主人…樂シソウダナ。」

- s i d e e n d -

この数カ月後、身の覚えの無いことで、吸血鬼に付きまとわれるナギの姿があつたとか。

## 幕間1-2（後書き）

エヴァってこんな感じでいいのかな？

補足として：

ハジメはエヴァが弱りすぎて吸血鬼とは気づかなかつた。という事にしています。いつも気の強弱、違和感で判断していますからね。これだけ書くとラカソっぽいな。

原作編の日常はどうしようかなあ。戦いとかイベントは結構構成できてきたんですが、日常とか学校生活のほうがなかなか…。

そろそろ原作も近づいてきました。幕間も明日には終わらせたいと思ひます。ではまた。

護るために一緒にいるために  
その一途な思いはただ強い

## 幕間13

（絆）

・主人公 side -

京都を拠点にしながら、着々と計画を進めて2年が過ぎた。  
そして、詠春が協会の事でそろそろ動く、といつぱんのことを俺に伝  
えてきた。

詠春は、俺が渡した情報や自ら探し続けた情報をもとに、そろそろ  
呪術協会の再編を行うらしい。

なので、木乃香たちの身の安全を考え、麻帆良へ行く事となつた。  
これが、過激派などの不穏分子をあぶりだす要因ともなると考えた  
からだ。

しかし、麻帆良か…。数年前のガトウとのやり取りを思い出す。

⋮⋮⋮

「ほう。それであの無愛想娘の記憶を封印した…と。」

俺は煙草を吸いながら、端末越しのガトウに言ひ。

「そういうことだ。これから生きていくのにあのときの記憶はいら  
ないと思つてな。…独善だと笑うか？」

ガトウが端末越しに聞いてくる。

「別に笑おうなどとは思わん。お前が、無愛想娘の幸せを考え、行  
つたのだろう？ならば、その責務を果たせば何も言つつもりはない。」

「

俺がそう言ひつと、ガトウは苦笑しながら、

「はは。本当にお前は歯に衣着せぬ言い方をする。まあアスナは麻帆良へと預けるつもりなんだがな。」

麻帆良という単語に、疑問を抱き、

「なぜ、麻帆良に預ける？近右衛門は無愛想娘の事は知らないのか？」

「そろそろ、本来の活動に専念せねばならないからな。それに、もともと存在が秘匿されていたんだ。知るわけが無からう。」

「そうか。ならばいいが。」

そして、ガトウは眞面目な顔になりながら、計画についての行動を開始する図を伝えてきた。

「ああ、分かつた。では、その件は任せる。信頼できる諜報が余りに少なくてな。一応マクギルやクルトからも情報はもらつていて、こういうことではお前の方が精度が高い。」

ガトウが呆けた顔を少しし、

「そりや、期待には応えなくてはな。」

「せいぜい期待しておくとしよう。ではな。」

「ああ。麻帆良に行く事があればアスナのことを頼むな。」

……

今麻帆良には、あの無愛想娘が小学校に通つていて、  
ガトウの報告と麻帆良の調査結果から、普通の児童・若干の問題児として通つてていると分かつた。

これなら、メアや木乃香、刹那を通わせても何か不都合が起きる事

も無いが。

ならば、さつさと俺も麻帆良へ行く準備に取り掛かるといつよ。

俺の麻帆良での待遇も決まり、麻帆良へ行くのに1ヶ円を切つたといつのに、

「えへ、せつちゃんいかんの～？」

木乃香が悲鳴じみた声を上げる。

「や、だからこのちゃん。ウチはまだ未熟やし…。」

それに対し、刹那が困ったような顔で言い訳を始める。

「いやや、いやや～。せつちゃんも一緒にいくへんや～

「長、ハジメ様～。」

刹那がとうとう俺達に助けを求めた。

「ふむ。詠春。」

詠春に声をかける。

「なんでしょうか？ハジメ。」

「最近体を動かしていられないだろう。腕は鈍っていいか？」

「え？ あなたと…」

何かを言いかけた詠春を睨む。

「つ。そうですねえ。あなたと戦つたのももう10年近くになりますしねえ。鈍つたかもしれませんね。」

「ほうほう、そうか。ならば、刹那。」

まだ木乃香に泣き付かれ、ビうじようかとあたふたしている刹那に声をかける。

「えつ、あ、はい。なんでしょうか？ハジメ様。」

「今から詠春と試合しぃ。その結果で貴様を連れて行くかどうか決める。よつは実力を見るところだ。」

「…へ？」

動作が止まる刹那。

「なに、安心しろ。詠春は先ほど言つたとおり、戦いから離れて久しい上に、長の仕事にかまけて腕を鈍らせていく。刹那、貴様でもいい勝負が出来るはずだ。」

「はは。ひどい言われようですね。…よろしく頼みますよ、刹那君。」

「

笑顔で刹那に喋りかける詠春。

「え、えええええつ。む、無理ですつ。長と戦うなんてウ、ウチ  
じゃ太刀打ちできひん。」

狼狽する刹那。なかなか面白い顔をしている。

「よし、それじゃいくか。」

刹那の首を後ろから掴んで持つていぐ。

「え、え？ ちよつ、ハジメ様つ。お、下ろしてつ。」

「よし、見学したい奴はついてこい。」

「ウチの意見は無視ですかああああつ。」

刹那の絶叫が、近衛邸に響き渡る。

当たり前だろ、貴様は木乃香の護衛なのだから。

…ところ変わつて道場。

- 刹那 side -

え、え？ なんでこんなことに…？。

長と向かい合つているウチ。獲物はもちろん木刀やけど、神鳴流は獲物を選ばんし。

「さて、それではお手柔らかに頼むよ？ 刹那君。」

そう言つて、構える長。

「つ。」

雰囲気ががらりと変わる長。それにあわせてウチの意識も一気に変わる。

戦いから離れて久しい？嘘やろ。こんな空氣を纏える人が、腕鈍つてるわけあらへん。

「考え方ですか？刹那君。感心しませんよ？」

後ろから長に声をかけられる。

一気にそこから飛び出す。いつから、ウチの後ろにまわったんや？「さて、刹那君も意識を切り替えたよつですしね。…いきますよ。」

長の木刀が閃く。それを何とか防げたけど、吹つ飛ばされる。まずいつ。隙だらけやつ。

体を翻し、長の氣を感じた場所に木刀を振るつ。それを避けて、後ろに引く長。

ウチは着地して、長を見ながら木刀を構える。

「ははは、これは期待できそうです。」

いくら、長だからと言つても負ける訳にはいかん。長に向かつて駆け出す。

「神鳴流奥義つ。斬岩剣つ。」

ウチは、ウチはこのちゃんを護れる人になるつて決めたんやからつ。

- side end -

主人公 side  
「まう。思つたよりもやるよつになつたな、刹那は。」

刹那が詠春相手に善戦しているさまを横目に、俺は煙草に火をつけながら、思ったことを口にする。

「父上、煙草いつやめるんですか。父上…詠春さんは、本当に戦いから離れていたの？父上のような濃密な気配はしないけど、それでも、あの纏う雰囲気を見ると、とてもそつは思えないよ。」

メアが詠春について聞いてくる。

「ふむ。奴が戦いから離れて久しいのは事実だが、それで腕が鈍るのは困るのにな。ちゃんと俺が稽古をつけていく。」

と笑みを浮かべながら返したら、

「せつちゃん…可愛そうに。父上のような人に目をつけられて…。なぜそうなる？

「どうせ、少し面白そうだとか思つてたんでしょ？」

メアが「」ちらをジト目で見てくる。

「俺は何も言つてないが？」

「父上の考えている事なんてお見通しですう。」

なんか変な所がアリ力に似てきたな、こいつ。

「母様はきれいですし、私もああなりたいなあといつも思つてます。」

……。

ふむ。刹那は鍛錬を随分と真剣に打ち込んだようだな。まだ甘いところがあるが、詠春についていつている。

才能というのもあるだろうが、驚くべきはその絆か。

真剣に刹那を見守っている、メアと木乃香を見ながらそつ思つ。

子供というのは親が知らんうちに成長しているものと聞くが、確かにその通りだと実感する。

ふつ。詠春の奴も随分楽しそうな事だ。

「はあつ。神鳴流奥義つ、雷鳴剣つ。」

「神鳴流奥義、雷鳴剣。」

雷がぶつかり合い、激しい衝撃波が起つ。

「はあつ、はあつ。」

息も絶え絶えな刹那と肩で息をしている詠春。

…もう十分か。

「それまでつ。刹那」こ苦労だつたな。その力確かに見をせてもひつた。

終わりの合図を聞き、こちらを泣きそつた目で見る刹那。

「…合格だ。今の詠春相手にこれだけ戦えるのならば、木乃香の護衛を勤めさせて問題あるまい。」

笑顔で頷きながら、こちらを見る詠春。そして、呆然としている刹那。そして、横にいる木乃香とメア。

「え…。でも、ウチ…。長を倒せなかつた。」

「阿呆、身の程をわきまえろ。十年早いぞ小娘。…いや、五年ほどか?どうだつた?詠春。」

すこしよたよたしながらこちらに来る詠春。刹那は座り込んでしまつたので、メアと木乃香が向かう。

「いやあ、年は取りたくないものです。あなたと稽古をしていなかつたら恐らくは、負けていたでしょうね。」

苦笑しつつも嬉しそうな詠春。

「ふん。まあ予想以上ではあるな。後、お前は鈍りすぎだ。再編の件が終わつたらまた鍛えなおす。」

詠春のいじ…鍛錬法を考えながら、笑いあつてゐるメアたちを見る。

「やつた。せつぢやん、一緒に麻帆良いこな。」

「よかつたよ～。またみんなで遊べるね～。」

喜んでいる木乃香とメア。

「うん。ウ、ウチも嬉しい。」

刹那もはにかみながらも、喜んでいる。

さて、いろいろ手回しきしなくてはな。  
忙しくなりそうだな。

幕間1-3（後書き）

原作キャラが難しい。

今日中には幕間終わらせられるかな。ではまた。

そこに信念はあるのか  
腑抜けに正義は語れない

幕間14

「顔合わせ」

「ここは麻帆良学園。月が輝く夜空の中、世界樹がそびえ立つ広場に、この地に住む魔法使いが集っていた。」

その目的はただ一つ。この地に来た英雄と会間見えるため。

「ふおつふおつふお。さて、集まつたようじやな。…では、ハジメ殿。よろしく頼むぞい。」

近衛近右衛門が周囲の人間を確認して、男に呼びかける。

そして、ハジメと呼ばれた男が魔法使い達に近づく。  
「さて、名は知られているようだが改めて名乗りう。ハジメ・サイトウだ。…広域指導員をやらせてもらつ。」

月下に照らされたハジメが名乗りを上げた。

- タカラミチ side -

辺りがざわめく。

「あれが…騎士と呼ばれる英雄。」

「パイルドライバー…。」

ハジメさんはナギさんたちと違つてパイルドライバーの悪名が強いみたいだ。

以前ハジメさんにその事を言つてみたら、

「周りを気にして、自ら成すべきことを行わないこと」じゃ、俺にとってはよっぽど恥ずべき事だ。」

と、全く気にしていなかつた。

そんなハジメさんだからだろ？ 煙草に火をつけながら呆れたように周囲を見渡している。

「さて、俺が英雄であろうが無からうがどうでもいいことだ。」

煙草から立ち昇る紫煙がやたらはつきり見える。

「最初に言つておこいつ。」こちら側の世界の人間として、腑抜けてい  
る貴様らと馴れ合つ氣は無い。」

いきなり随分な事を言い放つな。

「俺がここにきたのは、ある目的のためだ。それを邪魔しなければ、  
それでいい。俺は俺の仕事をする、お前らはお前らの仕事をしてい  
ろ。なに、表の世界では普通に接するとしよう。」

後は何も話すことは無いとばかりに踵を返すハジメさん。

えつ？ もつ帰るんですか？

「ちよつ、ちよつと待つんじゃハジメ殿つ。」

学園長の言葉に歩みを止めるハジメさん。

「まだ何か用か？ 近右衛門。」

首だけで振り向きながら聞くハジメさん。

「目的… どうこいつ」とでしょうか？」

「くつ。何様のつもりだ？ 暗殺者のような分際で…」

うわあ、周りの空氣も悪くなってきたなあ。

「そうじやな。ハジメ殿の力量を見せてはもうえんかのう？ 大戦を  
戦い抜いた力の一端を、見れるだけでも彼らには勉強になるじゃろ

う。の？頼む。」

学園長が頭を下げる。

「…他にも学ぶべき事があると思つがな。まあ、いいだろ？。わい、相手はタカミチでいいな？」

そつ言つて僕と向かい合つハジメさん。

「えつ、僕ですか？学園長ではないのですか？」

慌ててハジメさんと学園長に聞く。

「阿呆か。近右衛門が数日動けなくなつたら、この学園を誰が回す

？」

暗に僕が、数日動けなくなると言つていないですか？

「…では、よろしく頼むぞい。タカミチ。」

そつ言つて、皆のもとに下がる学園長。そんなあ。

「くく。そんな顔をするな、タカミチ。そんな顔をしていいのは、これから始まるお前への…稽古が終わつてからだ。」

煙草を燃やし灰くして笑うハジメさん。今絶対にじめつて言おつてしまでしょ、いじめつて。

「では、やるか。タカミチ、お前の活躍…聞いてはいる。がっかりさせるなよ？」

そつ言つて、無手で構えるハジメさん。

「安心してください。僕だつて20年前の僕ではありませんから。」

そして、拳をポケットに入れる。これが僕の構え。

「ガトウの技か。そういうや、ガトウから教わつていたのだったな。

…こい。」

居合い拳を放つ。

しかし、見切られているのか、ハジメさんは極小の動きだけで避けしていく。

「威力はまあまあか。だが、あまり強者と戦つてこなかつたか？」

甘すぎるわ。」

ハジメさんの姿が搔き消える。

「つ。」

本能的に後ろへ飛びずた。すると、一拍遅れて僕が立っていた場所が衝撃と共に大きく窪んだ。思わず窪みの上を見てしまう。

「戦いの最中に動きを止めるなど、愚の骨頂だぞ？」

後ろからハジメさんの声が、聞こえたと同時に背中に衝撃が走り、体が吹き飛ばされる。

「がはつ。」

肺から息が吐き出される。

受身を何とか取りながら思う。ハジメさんは全く衰えていない。むしろ、僕では今だその限界を感じ取れない。

なら、僕は最初から、僕が持てる力全てを持って、相手をしなければいけなかつた。僕も腕抜けていたみたいだなあ。

左腕に魔力、右腕に気、咸卦法つ。

僕の全てをぶつけるつ。

「やつと少しは見れる顔になつたか。さつさと来い。」

ハジメさんが構えたまま呆れた顔で言つて来る。

「いきますつ。」

豪殺居合い拳と居合い拳そして自らの拳を、必死に使い分けてハジメさんに向かう。

地面が次々と抉れて行く。だけど、ハジメさんにはかすりもしない。

「相変わらずつ、理不尽な強さですね。」

「なに、お前も強くなつた。だが、まだまだステージが違うだけのこと。」

そして、ハジメさんの雰囲気が変わる。

「俺が大戦を生き抜いた技、今一度見せてやる。」  
つ。牙突かつ。

ハジメさんの気が膨れ上がる。

避けられないつ。咄嗟に全力で身構える。

「…手加減はしてやる…。」

凄まじい衝撃と共に僕は意識を手放した。

- side end -

辺りは静寂に包まれ、各々が現状を理解するにつれ騒がしくなつていいく。

「なつ、高畠君が…一撃でつ？」

「嘘でしじう…化け物ですか？」

魔法使い達は今の状況が信じられない。

「さて、近右衛門。タカミチを頼む。手加減はした、死んではいい。」

淡々とハジメが学園長に言ひ。

「む、無茶するのつ。結界を抜かないぎりぎり加減も見事じやつたわい。」

「そんなことは阿呆がすることだ。ではな。」

そう言つて、今度こそ立ち去るハジメ。

その後姿を見ながら学園長は、

「また、とんでもないのが来たのつ。」  
と呟いた。

そして、世界中の枝の一つに人影が見えていた。

- ハヴァンジエリン side -

「フフフ。あいつがハジメ・サイトウか。」

なかなか面白い奴だ。

なるほど、自称正義の魔法使いどもにとっては、気に入らない奴に違ひない。

しかし、あいつは強いな。タカミチ程度では物差しにもならんか。あれを屈服させるにはこの封印が邪魔だ。

だが、解けた暁には覚えていろ？ハジメ。私が受けた屈辱を万倍にして受けさせてやる。

トガルは、自らの勘違いと、はめられた屈辱の数々。

ああ。あの鳥頭を思い出しだけで腹が立つ。そつそつと戻つて秘蔵のワインを飲む事としよう。

- side end -

青年は少年を観る  
人々は少年に英雄を重ねる

幕間15

（更正）

・主人公 side・

計画の準備も終えて、後は数年後の仕上げを待つのみとなつた。メアたちも、この春中学生になり、平穏が続いていたある日。

「で、これはどういふことだ？ 近右衛門。」

「ふおつ。気配を殺して後ろに立つのはやめてくれつハジメ殿つ。心臓が止まつたかと思つたぞい。」

俺はある情報を仕入れて近右衛門がいる学園長室にいる。

「その心臓を貫かれたいというならいつでも貫いてやる。さて、本題だ。これはなんだ？」

紙の束を近右衛門に投げ渡す。

「なんじやこれは？ ふむふむ、『ネギ・スプリングフィールドの修行先について』… ふおつ？ ハジメ殿、どこからこれをつ？」

近右衛門が目を見開きながら聞いてくる。

だが、問題はそこではない。問題は、ただ知識を詰め込めるだけの子供を教師に据えるという馬鹿さ加減だ。

「ナギと違つて、とても優秀らしいな。飛び級で早ければ2年後には卒業か？」

とてもあの馬鹿から生まれたとは思えんな。

「…そして、修行先としてお前も少し話したくね？ 近右

衛門。」

ここが、重要な話だ。なぜ、この爺がここを修行先として提供したか。しかも教師として。

近右衛門が苦渋の顔をしている。

「まさか、ここまで早くハジメ殿に知れるとは思わんかつたわ。」

そして、近右衛門が訥々と喋り始める。

「ナギは、最早こちらの世界で知らぬ者が居らんほどに、その名を轟かせた。そして、そのナギの子供がナギに等しい魔力を持つている。」

なるほど、周りの連中…とくに魔法学校の連中が関わっていそうな問題だ。

「もちろん、周りの者達はネギ君をナギと同じよう<sup>・マギ</sup>、偉大なる魔<sup>・マギステル</sup>法使いとなるように育てる事しか考えんじやうつ。」

それはいい広告塔になるだうつ。数年前のことを思い出すと反吐が出来るがな。

「じやから、わしは魔法使いとはなんのためにいるのかを、教師といふ教える立場を持つてネギ君に教える事ができたらと思っての…。もちろん、わしだつて期待していないとは言わん。じゃが、彼の人生を決めるのは彼じや。」

そう言ってこちらを見る近右衛門。

真実が6割、ウソが4割といったところか。

「貴様が下の連中の事を考えていないはず無からうへ…俺がどういう名前でここに来たかは覚えているな?契約もしたことだしな。」「どうにづつもりじや?特にそちらが害を被ることはせんぞ?」

近右衛門の雰囲気が老獴のそれとなる。

「可能性があるものは全てといったはずだ。俺は<sup>メガロ・メセンブリア</sup>M・M、帝国両国の許可をもらつてここに来ている。計画に障害をきたす事柄、及びその可能性に關して、俺にはそれ相応の権限を有することができる。」

「

近右衛門が唸る。それを了承と受け取り、俺は部屋を去る。  
「じゃが、ネギ君は優秀と聞いておるぞい？どうするつもりなんじ  
や？」

「阿呆か。自ら調べねば分かるまい？」

さて、ナギの息子か。どれほどの者か、この町で見よつじやないか。

「というわけでだ。俺はしばらく出かけることになった。」

アリカに事情を説明して、出かける旨を伝える。

「お主はまったく。この前準備が終わつたから暫くは一緒に居れると言つたではないか。」

アリカが少しむくれた様子で言つ。

そんなアリカの頭をなでながら、

「すまんな。あちら次第だが、半年ほどで戻る。ではな。」

そう言つて、アリカの頬に手を沿え唇を重ねる。

「んつ。ちゃんと戻つてくるのじやぞ？」

「無論だ。」

そして、俺はウェールズへと出向いた。

：イギリスのウェールズ

「これはこれは、先の大戦の英雄がこのような場所に何の用かの？」

ここはメルディアナ魔法学校の校長室。

「俺は英雄などではないがな。……なに、英雄の息子がどれほどの者かをな。」

やれやれ、勝手に探つても良かつたのだがな。手順を踏まねばなんときもある…か。

「ネギ…か。あの子は少し、特殊な環境での、干渉はほどほどにして欲しいものじゃがな。」

校長の目が鋭くなる。

「なに、俺の目的は力量を見ることと、改善すべき点があれば報告するだけだ。ではな。」

そして、校長室を出る。

気配を消す。

さて、件の息子を観察するとしよう。

本当にナギが小さくなつた容姿だな。ちび鳥とでも名付けるか？  
ちび鳥が壇上に上がる。

「はい。ですから、…。」

なるほど、優秀なのは本当らしいな。他の者と比べても知識量・頭の回転の速さは互角以上か。

放課後は、図書館に忍び込み勉強か。本当にナギの息子なのか？

「…。」

黙々と読んでいるな。

しかし、どれも相当な威力を持つ魔法だ。何を考えているんだ？

今、俺は大惨事を目の前にしている。  
ありえん。あのちび鳥は魔力制御すらまともにできていないのか？  
ちょっとした衝撃で魔力が暴発している。しかも、武装解除の魔法を。

女子の悲鳴が凄まじいな。仕方ない。影の魔法で法衣を紡ぎ、被害にあつた者たちにかけていく。

しかも、本人は何があつたかまるで把握していない様子。

そして観察をして1週間、殆どがそれの繰り返しだ。もちろん、暴発の件は最初の1件以降、吹き飛ばすなり、無効化するなりで未然に防いだが。

これはひどい、要注意だ。自らを省みず前しか見えていない。修行先を変えるように圧力をかけるか？いや、さすがに今大きな行動を起こすと計画に支障が出かねん。学校での教師の態度も気になるものがある。色眼鏡を通してでしか見れん者ばかりだ。

観察の報告書を提出しても、

「彼は未来の英雄ですよ？じきに気づき、自ら正す事でしょう。」「われらが干渉して、英雄となれなかつたらどうするつもりですか？」

話にもならん者ばかりであつた。まあ校長は多少話が通つたがな。改善はするだろ？

だが、根本的な問題解決にはならん。

正しく教えられる者がいればいいのだがな。

俺は、そう思いながら必死に考えをめぐらせていた。そして、ある人物を思い出す。

とこり変わつてナギの故郷の村。数年前となんら変わらんな。酒場に入る。あの老人のことを少し調べたいと思つたんだがな。数年前のあの会話。ナギと親しいと思つたのだが。

酒場の主人にナギの事を聞くとなるほど。こゝはナギを慕つた者達が集まつてできたらしい。

そして、件の老人。名はスタン。ナギを息子のように思つてゐるの

だろう。

「だからよ、ナギの奴は悪ガキでよ。……」

今こいつして酒の相手をさせられ話を聞くと分かる。

「スタン。そのナギの息子の事なんだがな？」

そう言うとスタンがこちらに顔を向ける。

「あ～。あいつか。あいつもなかなか悪戯ばっかするやつでな。ナギの話をしたら僕もそうなるとか言いやがつてよ。」

ふむ、ナギか。あいつの英雄譚だけ聞けば、ああも攻撃魔法を修得しようとしても不思議ではないか。

「実はな、その息子の事なんだが。魔力制御がろくにできていなくてな？ 武装解除の魔法を頻繁に暴発させている。」

その言葉にスタンは口を開けて呆然とする。

「なんじゃそりや。色事はまだ早いだろ。… というか、魔法学校の教師どもはなにやつてんだ？」

放置しているのさ。

「色眼鏡でしか見れん連中が多くてな。それで、誰か適当な人物がいないかと思つてな。」

「それで、俺を尋ねたつて訳か。だが、俺は魔法を教えられるような人間じゃねえぜ？」

スタンが自分の手を見ながら言つ。

「なに、スタンだけが教えるわけではない。あのち…ナギの息子を叱つて欲しいだけだ。… ちゃんと魔法学校には報告書を提出していく。

る。」

「なんだ、お前さん調査か何かか？ 相当な腕前の持ち主だとは思つたが。まあいい。んじゃ行くとするかね。あの馬鹿孫の顔も見て見たいしな。」

そう言って立ち上がるスタン。

「そうか。では、行くとするか。」

「おお、すまねえな。世話をかける。」

これで、多少は更正もできるだろ?。

それから数ヶ月。

あのような魔力暴走を起しそことは無くなつた。校長もさすがに問題だと思っていたようだ。対応が早かつた。

ちび鳥もスタンからいろいろ教わっているらしい。

スタンも表面上は嫌々そつだが、内心は嬉しそうだ。魔力暴走がなくなつたならば、秘匿も可能だろう。その辺はあちらに来たときには話すとしよう。

ちび鳥が来たとしても、計画に支障はなさそうだ。

さて、麻帆良に戻るとするか。

幕間15（後書き）

ネギの魔力制御などの若干修正が入ります。  
やっぱね…強制脱衣はね…犯罪ですかね。

青年は麻帆良での立ち位置を得る  
未来人は未知の過去と出会い

幕間16

「指導員」

「ここは麻帆良。今日は休日。学生が盛んにあふれてい。そして、もちろん悪さを行う奴らもいるわけで。

「ちょっと。やめてください。」

少女4人が男達に絡まっていた。

「いいじやん、いいじやん。ちょっとお茶飲むだけだって。奢っちやうよ？」

リーダーらしき男が執拗に迫る。

周囲の人間も気にはするものの去っていく。

「だーかーら。結構ですって言つてんでしょ？」

4人組の中で、活発そうな髪を右に結わえた少女が、男に言い放つ。が、

「そんなこといわずに、さつ。」

それを気にするでもなく、男は喋り続ける。

「そこまでにしておこうか。しつこい男は嫌われるらしいぞ。」

そこに煙草を咥えた青年が話しに割り込む。

「あ～。誰だ？あんた？」

男達のなかで体格のいい男が、割り込んだ青年に近づき、青年を投げようとその肩に手をかけようとした瞬間、

男の体が宙を舞つた。

それを呆然と見る男達と少女達。周囲の通行人も見ていた。  
「ぐえつ。」

重力にしたがつて落ちた体と重い音が響き渡る。

「おつと、すまんな。だが、余りにもみえみえだつたのでな?」  
青年は気にする風でもなく、落ちた衝撃で悶絶している男に向つ。  
「はつ、ふざけんなてめえつ。なにしやがつた。」

男達がいっせいに青年に向かう。

「やれやれ、血氣盛んな奴が多い…。」

向かつてくる男達を往なし、一撃で沈めていく青年。  
男達は、あつという間に地に伏せていく。

「…すごい。」

少女たちの中で、背が高くボーテールの少女が、思わず呟く。  
周囲の通行人たちもざわめく。

「…おいつ。あれつて、テスメガネよりも凶悪つて噂の指導員(じや  
ねえか?)」

「…えつ? 男子中等部、高等部を軒並み大人しくさせたつ?」

「…ああ。どうやら教員免許も取得し、本格的に学校内でも指導に

当たるらしい…。」

「…」りや、面白くなつてきただせい。」

青年は気にした風も無く、携帯を手にし、

「ああ、ここは…、そつ…カフェの近くだ。後は頼む。」

なにか報告をしている。それが終わると青年は、少女達に近づく。  
思わず少女達は姿勢を正す。

「災難だつたな。…美人、美少女というのは得なのか損なのか分か  
らんな。まあこれからここつらも更正するだろ。」

無いよう俺達がいるのにな、すまんな。」

青年の謝罪に、

「いえ、助けてもらつたんですから別に大丈夫ですよ。」

前半部分の事を聞いたから若干頬を染めている少女が答える。

「そう言つてもらえると助かる。せつかくの休日だ。こんな事はさつさと忘れて、楽しむといい。」

そう言つて、青年は立ち去つた。

「渋い…。明日菜じやなくとも、ああいう人なら確かに惚れるかもね。」

活発そうな少女が呟く。

「せやなあ。」

関西弁の一番おびえていた少女がそれに反応する。

「うーん。ちょっとクールすぎるなあ。私はもつもつと親しみやすい人がいいなあ。」

「私は…ああいう人が…いいかな。」

朗らかな少女と背の高い少女も反応した。

そして、少女達は色恋話に花を咲かせながら、休日を楽しんだ。

-超 side -

どうこうことね。

20年前の大戦でオステイアが滅びていない？

今では、帝国とM・M両国<sup>メガロ・メセンブリア</sup>の友好国としての中心国となつてゐる？

いや、それよりももっと重要な事があるね。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア…『災厄の女王』として処刑されるはずだった彼女が、世界を救つた英雄の一人として認識されているという事ね。

もちろん千の呪文の男や近衛詠春など。私が知つてゐる英雄はもち

サウザンド・スター

ろんいる。

だが、知らない英雄もいる。

ハジメ・サイトウ。パイルドライバー、騎士として名が広まっている。その功績は前者は大戦中、国や世界を裏切った者たちを狩つていたときに、後者はアリカ女王の護衛として。

もしかしたら私が来た事で世界に歪ができた力ナ？  
様々な事が考えられるね。だが、

私がすることは変わらないね。私の計画はこのまま続けるヨ。なんのためにこの時代に来たか分からなくなるからネ。

だけど、調べなければいけないね。なぜ、この時期にパイルドライバーがこの麻帆良にいるか、その目的を。

- side end -

ハジメは指導員として、次々と問題児を屠り、更正をさせていく。  
その活動が広まるに連れて、その名を知れ渡らせる。  
麻帆良の教育の最後の砦、最終兵器リーサルウェポンとして。

幕間16（後書き）

麻帆良の最終兵器、サイトウ先生。いや、センス無くてすみません。

青年は世界を否定する  
世界は人を知る

幕間17

「折る」

「これは、ハジメが造物主を倒したその後の語られなかつた物語

ナギと別れ、ゼクトをつれ、富殿の中心に行く。  
そこには、倒れ臥していた造物主の姿があつた。

「無様だな。造物主…。それほどまでになぜ、貴様がその目的を諦めんのか理解に苦しむ。」

「くく。貴様に分かつてもらおうなどとは夢にも思わん。」  
倒れ臥し、瀕死の状態の造物主が答える。

「貴様と話をしても埒が明かんな。良いだらつ。これを見ろ、  
造物主。」

情報端末を造物主に投げ渡す。

渡された端末を見る造物主の雰囲気が驚きに満ちる。

「なつ。なんだ、これは？」

「くく。面白いだろ？神話の時代を始め、人々は往々にそれに挑み  
続けた。神の顯現…。死者蘇生…。そこにいるはずがない、無から  
有を生み出す秘術を。所詮手から火を放つたところでそれはいざれ

消えてしまつものだ。それを考へるとこの新世界も、それに準ずるものであるな。…いすれは、消えてしまつ」

そこにあるのは旧世界・新世界の魔法理論を始め、陰陽術や召喚術。膨大な秘術の数々。果てには、神話の物語すらあつた。

俺がこの半年間で旧世界で調べ上げた。それこそ、体が悲鳴を上げるほどに。おそらく、調べれば更にでる事であろう。

「貴様は確かに始まりの魔法使いと呼ばれ、幾多の魔法を作り、使つてきたであろう。」

「だが、所詮貴様は一人であつた。身の回りに居たのは貴様に着いていくしか能の無い、いわば人形。」

「2600年?どれだけ貴様が絶望し続けたかは知らんが、それほど時間があれば、人はこれだけのものを生み出せる。」

「ばかな、これほどまでに…。」

膨大な資料を見て、愕然としている造物主。

「人の数は可能性の数だ。…もちろん、腐つたものもあるがな。」

そう言いながら、煙草に火をつける。

「ふう。それで、貴様はどうする?まだ、貴様の目的は唯一なるものとして、遂行する気か?言つとくがYESと答えるならば、大笑いしてやろう。貴様は道化ではない。道化ですらないとな。…道を踏み違えた事をそろそろ自覚しろ、造物主」

紫煙を吐きながら、造物主に答えを求める。

「私は、私は間違っていたのか？」

絞り出すような声で、造物主が問うて来る。

「それを見れば分かる事だ。貴様は人の可能性を否定した結果だ。だが、それすらも人任せにする気か？貴様。」

「ふはははは。…人間というのが貴様というものがばかりであつたら…、私はこうしてはいなかつたかも知れぬ。」

「つ？」

体が消えていく造物主。

「ちつ。最後まで道化で居る氣か？貴様。」

「なに。もう、折れてしまつたわ。わが悲願。これほどまでに虚しいものであつたか。」

空虚な声を出す造物主。

「貴様もどこまで行こうと所詮は人だ。人は一人では無力。」

「ははは。貴様が言つても説得力が無からう。」

笑いながら消える造物主。

「で、次はお前か？」

「貴様は本当に…どこまで知つてているのだ？」

雰囲気が変わつたゼクトの問いに、

「世界の真実と、独りの道化だ。」

世界の真実…、この新世界はいづれ滅びる、そのよつなことを、ただ指を咥えて待つてゐるわけにはいかん。

「くくく。我が独りの道化か。言ひえて妙だ。我は結局は独りであつたからな。」

ゼクトの姿をした造物主が悲しげに呟く。

吸つていた煙草の火を消し、造物主に問う。

「それで、答えを聞いていなかつたな。貴様は、その悲願が踏み間違えたのは理解したようだが？」

「…。貴様も人が悪い。我は、我の悲願は、目的はもう貴様に折られてしまった。」

空虚な声が造物主から響く。

「ならば、俺に協力しろ。それがせいぜい貴様の償いになる事を祈つていろ。」

「全く。人間というのは面白いものだな。先ほどまで戦つていた我に協力しろと？」

おどけた口調で造物主が言つ。

「嫌ならば、さつさと消えろ。田障りだ。」

「そう急くな。協力させてもらつ。わしに利用価値を見出しからこそ、わしに言つたのじやうづ？」

「分かつてゐるなら、最初からそつしろ。貴様のその命、俺がもうう。」

そう言つて、煙草に火をつける。

さて、次は世界を救つて見せよう。

この世界が滅びるのが運命といつならば、その運命…俺が貫く。

そして、新たな物語の幕が開く -

## 幕間17（後書き）

とうあえずこれで幕間は終了。書きたいなあと思ったことはかけたので良かったのですが、思ったよりも長くなってしましました。

原作編は原作を読み直している最中なので不定期更新になりそうですが、週に2、3回は更新出来るように頑張ります。ではまた。

英雄の卵は英雄にであつ  
されど卵は英雄に気づかず

第1話

「英雄の卵」

「わー、ここがニッポンですか。すごいなー。」

赤毛の少年が大きな杖を背負い、辺りを見回している。

少年は辺りの通行人に、目的地へ行くための道を聞きながら歩いていく。

彼の名はネギ・スプリングフィールド。修行先として麻帆良に赴いた魔法使いの卵である。

舞台は麻帆良学園へと移る。

・明日菜 side -

バイトから戻ってきて、着替えを済ましながら部屋に入ると、

「そういえばな、アスナ。じいちゃんが言つておつたんやけどなあ。

今日新しい先生が来るらしいで?」

木乃香が刹那さん・メアちゃんと一緒に朝食を並べてながら、聞き捨てなら無い事を言う。

「えつ?ウチのクラスに?うそつ、高畠先生はどうなるの?..」

「高畠先生は出張ばっかりやつたからなあ。担任から外されるのがもなあ。」

うつ。たしかにこの2年間でいなかつたときの方が多いかったわね。

「でも、それでもちゃんと、ウチのクラスを纏めていたからいいじ

やない。」

「そつよ。だから、担任が変わるなんて…、  
「ははは、明日菜さん。…何回、新田先生に怒られていたと思つて  
いますか。」

「わあ、何回かしり…刹那さんのツツコツがいたいわあ。

「ウチのクラスは個性豊かだからねえ。」

「メアちゃんがきれいな金髪を後ろに纏めながら、苦笑いしてくる。  
なんかメアちゃんを見ていると、懐かしい気持ちになれるのよね。  
いつも思つけど、なぜかしり?」

「ん? どうかした? アスナ。」

「ずっと見ていたからか、メアちゃんが気づいた。

「いや、なんでもないわよ。さ、食べましょ食べましょ。」

「うやつて私のこのものの一日は始まる。

「いつもの一日ではなかつたんだけどね。

- s i d e e n d -

といひ変わつて学園長室。

「…遅いな。」

学園長室のソファに腰掛けている男が呟く。

「道を間違えてしまつたのかのう? 迎えのタカミチから、連絡も無  
いしのう。」

頭の形が少々異常な老人が、心配の声を上げる。

「すいません、学園長。遅れてしまひました。」

そこに、メガネをかけた老け顔の男が入ってくる。

「わわ、失礼します。」

遅れて赤毛の少年も入ってくる。

「遅かつたのう、タカミチ。なにかあったのかの？」

老人が男に問いかける。

タカミチと呼ばれた男は、

「はは、ネギ君が女子中高生にもみくちゃにされてしましね。」

「うう。すみません。」

ネギといつりしい赤毛の少年が縮こまる。

「学園長室を、女子中等部に作っている弊害があるががるな。わざと移設しろ、近右衛門。」

ソファから立ち上がった男が、老人にさすよつに言ひ放つ。

「なつ。わしの楽しみがなくなるでないかつ。」

学園長の本音に場が静まる。

「「ホント。冗談はともかく、移設出来ぬ理由があるといつたじやろ？ハジメ殿、いや、サイトウ先生。」

「ふう。それで弱みを握られるのはお前だぞ？近右衛門。」

ハジメが呆れた様子で学園長に告げ、ネギの隣に行く。

学園長が雰囲気を変えて、ネギと目を合わせる。

「さて、ネギ君。修行のために学校の先生をやる事になつたようじやが。」

学園長は髭をなでながら、

「正直言つと、この修行は大変なものになるじゃね？ひやんとやりぬく覚悟があるのかの？ネギ君。」

ネギに確認するように言葉を並べる。

「は、はい。もちろんそのつもりです。至らない点は多々あると想いますが、よろしくお願ひします。」

そう言つてネギが頭を下げる。

「つむつむ。では、ネギ君には2・Aクラスを任せたいと思つていいのでな。そこで担任として教育実習を任せたいと思つ。」

「ええつ。担任ですかつ？僕には荷が勝ちすぎる気がしますが…。」

学園長に言われた役職にネギが戸惑つ。

「安心せい。そこに居るサイトウ先生は、男子中等部、高等部と問題児が多いところを、指導員として回つていた先生でな。サイトウ先生を副担任として、ネギ君の補佐をしてもらつ。」

ネギがハジメに顔を向ける。

「えつと、ネギ・スプリングフィールドといいます。未熟者ですが、よろしくお願ひします。」

ハジメに頭を下げるネギ。

「ああ。俺はハジメ・サイトウだ。何か困つた事、分からぬ点があるならば、俺や後で紹介するが新田先生を頼るといい。大変だろうが頑張つてくれ。」

ハジメがネギの肩に手を乗せる。

「はいっ。」

「ふおつふおつふお。大丈夫そうじゃの。」

「ええ。では、ネギ君。これがクラスの名簿だ。大変だとは思つけど、頑張つて。」

タカミチがネギに名簿を渡す。

「はい。では行つてきます。」

ネギは失礼しましたと言つて、学園長室から出て行く。

「では、ハジメさんも頑張つてください。男子とは勝手が違つとは思いますが。」

「心得ている。ではな。」

ハジメも学園長室から出て、ネギの後を追つ。

学園長室に残るのはタカミチと学園長だけとなつた。

「いやナギの息子じやといつのに、ネギ君は思つた以上に礼儀正しいよじやのう。」

「ナギさんの村のスタンさんからいろいろ教わつたらしいですよ? タカミチは、多分反面教師として教わつたんだろうな、と思ひながら、返す。

「補佐として、ハジメ殿があるし、ネギ君にとつて有意義な修行となるじやひつな。」

学園長は椅子に凭れながら、今後の展望に明るいものを感じているよつだ。

「ハジメさんは、そつこいつといひはあつちつしてるので、ネギ君もいい勉強になるでしょ。」  
タカミチも同じよつな事を思つてゐるよつだ。

英雄の卵は、果たしてどのよつに成長するか。  
それはまだ、誰も知らない。

## 第1話（後書き）

原作開始です。不安でいっぱいです。

後、いつの間にか総合評価が2000超えていて、お気に入り登録も900超えていました。吃驚です。テンションあがりました。思わず、昨日不定期更新になるとか、書いたのにもかかわらず、こうして更新していました。

初心者が書く、拙作を楽しんでくれる人がいるというのは本当に嬉しいです。次話は明後日には更新できると思います。ではまた。

## 第2話

少年は青年の背中に何を思ひ  
少年は田指す片鱗を見る

### 第2話

「初授業へ

麻帆良学園女子中等部の廊下を歩く2つの影。  
ハジメとネギである。

ネギはやはり、教習でありながら一つのクラスを、受け持つ事に不安があるのか、顔をこわばらせている。

「それほど緊張してては、うまくいくものも、うまくいかなくな  
る。少しほは、心を落ち着かせてみてはどうだ。スプリングフィール  
ド先生。」

ハジメが、ネギに落ち着くよう言いつ。

「はは、ありがとうございます。ですが、まだ先生ではありません  
よ? サイトウ先生。あと、僕のことはネギで大丈夫です。」

ぎこちない笑みを浮かべながら、ハジメの気遣いに感謝するネギ。

「だが、教育実習生といえども先生という役職に変わりは無い。ネ  
ギ。」

「はい、そうですね。頑張りたいと思ひます。」

そして、2人は2-Aのクラスの前に着く。

「はあ、噂以上かも知れんな。問題児がいるところのは。」

「はは、元氣があるようで何よりですね。」

ハジメとネギは、ドアの上に挟まっている黒板消しを見ながら、苦笑する。

「いや、よく下を見てみる。」

ドアから少し入ったところには、足元に紐が見える。

「は、は、はは。」

ネギは苦笑するしかなかった。

「俺が先に入ろう。ネギは、ここで待っている。怪我をしたくなければな。」

ドアを開け放つハジメ。落ちる黒板消し。

紐を踏み切り、それに連動して落ちるバケツと、矢を回収する。

「さて、高畠先生から、こういったことをする輩は聞いている。鳴滝姉妹、春日。実行犯はこの3人でいいな？」

静まる教室を鋭い目で見回すハジメ。

「「「はいっ。その3人ですっ。サイトウ先生（ハジメッち・父上）

「「ええっ、そりやないよっ。みんなっ。」

いつせいに翻つた勢力図に嘆く、春日と鳴滝姉妹。

そんな3人に、

「そりや、新任の先生が、麻帆良の最終兵器リーサルウェポンことサイトウ先生って分かつたらそうなるつて。」

苦笑いしながら麻帆良のパパラッチこと朝倉が、皆の胸中を答える。そんな朝倉に、

「いや、新任の先生は俺ではない。…まあ副担任にはなるが。ネギ、入ってきていいぞ。」

教室の外で待つていたネギに声をかけるハジメ。

「あ、はい。」

そして、教室に入るネギ。

「は、初めてまして。今日からこのクラスの担任を勤めさせていただく事になった、ネギ・スプリングフィールドです。担当教科は英語になります。教育実習として、3学期の間お世話になります。よろしくお願ひします。」

自己紹介を終えたネギが頭を下げる。

そしてその瞬間、黄色い声が教室に響き渡った。

-主人公side -

あまりの五月蠅さに、一瞬視界が揺らいだぞ。どれだけ、凄まじい威力だ。

ネギもふらふらとしている。

「静かにしろつ。それ以上、他のクラスに迷惑をかけることは、俺が許さん。質問等は代表が行え。」

「はいはいっ。じゃあ私が質問します。」

果物を連想させる髪形をした女子。確かに朝倉だつたな。

「よし。では、朝倉。質問をして良し。ただし、常識の範囲内でだ。」

「はーい。では、えつとネギ先生。失礼ですが、本当に先生なんですか？」

「あ、僕は10歳ですが、大学卒業程度の知識は持っています。不安だとは思いますが、よろしくお願いします。」

「おおー。んじゃ、どこ出身ですか？」

「えつとですね、イギリスのウェールズの…」

ふむ。ある程度落ち着いてきたようだな。時計を見ると授業開始から10分経っている。

あと10分ほどを説明に使つて残りを授業に回すか。

「それじゃ次は、」

「そろそろ、質問は終了だ、朝倉。」

「え、じゃなかつた、わかりましたあ。」

席に戻る朝倉。

「さて、では知っている奴も顔見知りもいるが、改めて自己紹介だ。」

俺はハジメ・サイトウ。ここで受け持つ教科は無いが、全般教えられる。教えを請いたければ、いつでも来い。」

俺の役割は、ネギの完全補佐という事になつた。下手に放置も出来んからな。

「それと、俺はこのクラスの副担任を任せられることになつた。故に担当教科は無いと言つたが、ネギの補佐として、英語の授業は俺も出ることになるからな。」

あからさまに嫌な顔をした奴がちらほらいるな。あとで、成績表の下を確認しとくか。

「俺からは以上。ネギ、なにか伝えたい事はあるか?」

「ネギに確認し、ネギが無い事を伝える。

「では、授業開始といこう。ネギ、頼んだ。」

そして、教室の後ろへ下がる。そのときに、先ほど殺氣やら向やらを出した連中を確認する。長瀬、古菲、マクダウェルか…。マクダウェルはネギにも殺氣を出していたな、これは要注意か。

⋮⋮⋮

ネギの授業が始まった。

「はい。では最初の授業と云ふこともありますし、高畠先生が教えたところまでの、前辺りからを復習する事にしましょ。」

「えつと、委員長は、雪広さんでしたね。P128からで大丈夫ですね。」

「ええ。はい、そうですわ、ネギ先生。」

雪広がうつとりしたような顔で答える。…雪広はあんな奴だつたか?

「では、ここ辺りをどう理解しているかを知りたいので、まずは雪広さん。このページの最初から半分までを訳してください。」

「分かりましたわ。」

ふむ。順調に進んでいるな。しかし、なかなか優秀だな。ますます、ナギの息子かどうか怪しくなる。母親に似たのか？ そういえば、母親は知らんな。今度ナギと会ったならば、聞くとするか。

「そうですね。ここ」の英訳はそう答えるのが一般です。もし分かりにくいく感じたならば、物語のように、自分に分かりやすい文章で慣れていきましょう。僕も日本語を学んだときは、一つの言葉の意味の多さなどに四苦八苦しました。ですから、型どおりに受け取るだけではなく、それがどう文章につながってきたか、つながっていくか、楽しみながら学んでいきましょう。」

そこで授業終了の鐘が鳴る。

「今日はここまでですね。次回から本格的に教科書の内容に入ります。少しだけでもいいので、予習をしてきてくださいね。」

ネギが教室を出て行く準備をする。俺も教室を出るとするか。

- side end -

- ネギ side -

ふう。なんとか終わつたあ。大丈夫だつたかなあ。最初だから簡単にしたけど、見る限りだと出来なさそうな人が数人いたな。

「初めてにしては上出来だつたな。ネギ。」

これからどうやって教えていこうかなと考えていると、後ろから声をかけられた。

振り向くと、そこにはサイトウ先生がいた。

「いえ、緊張しちゃなじで。」

本当にものすごく緊張した。教えるというのは大変だつて聞くけど本当に大変だ。

「課題点は自分で分かっているだろうから、とやかくは言わん。職員室に戻つたら、担任としての業務内容を教えよう。」  
なんか、サイトウ先生は随分威圧的というか、怖い感じがする先生だけど、面倒見がいいんだなあ。

教室にいたときも、分からなさうにしていた子に、せつと教えていたもん。

「お世話になります。」

感謝の意味もこめてお辞儀する。

「では、行くとするか。」

「はい。」

少し歩いていくと、本の山が向かってきた。いや、本を持っている女の子だ。

「あれは……富崎か？ まったく、誰かを頼ればいいものを。いくぞ、ネギ。」

え、クラスの人の名前をもう覚えたんですか？ サイトウ先生。そういえば、僕に質問をしてきた人の、名前も分かっていたようだし。すごいなあ。

「あ、待つてください。」

サイトウ先生、足はやいつ。もつ富崎さんのところにいるつ。魔法で身体強化して僕も追いかける。

追いつくとサイトウ先生は、もつ富崎さんが持っていた本を持っていた。

「わわわ、あ、ありがとうござりますう。」

「気にするな。ネギ、君も多少は持てるだろ？ 数冊頼む。」

そう言つて器用に本を僕に渡すサイトウ先生。

「つと。うわあ、結構重いですね。富崎さん、余り無茶してはい

けませんよ?「

「は、はい。気をつけます。」

宮崎さんが狼狽しながら返事をしてくれた。

「では、行くとするか。これは、図書館島か?」

「はい。そうです。すいません。」

ペコペコお辞儀してくる宮崎さん。なんか小動物を連想させるなあ。サイトウ先生が歩き出したので、僕もついていく。まだ、どこに何があるか分からんんですよね。

「ありがとうございました。」

お礼を述べて走り去っていく宮崎さん。それにしても、図書館島かあ。とてもでかかったなあ。吃驚しました。

「走つてもいいが、こけるなよつ。」

そんな宮崎さんに声をかけるサイトウ先生。

やつぱ、優しいんだなあ。サイトウ先生は魔法使いじゃないけど、僕が目指す偉大なる魔法使いもこんな人を言つのかなあ。

「少し、寄り道をしてしまったな。学校へ戻るとするか。」

「はい。」

サイトウ先生と一緒に学校へ向かう。

この修行も大変だと思ったけど、頑張れる気がするなあ。

僕は、早足で行くサイトウ先生に、精一杯ついていきながらそう思つていた。

## 第2話（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

なかなか書く時間が取れなくなつて来ましたが、更新頑張りたいと思ひます。ではまた。

### 第3話

青年を知る少女達はただ驚く  
知らぬ少女達は青年と少年に何を思つか

#### 第3話

「歓迎」

・M e a s i d e -

最後の授業も終わり、ネギ先生と父上…サイトウ先生の歓迎会をする事になった。

騒がしい事が好きなうちのクラスだからなあ。

「それにしても吃驚してもうたわあ。ハジメのおじさんが、ウチのクラスに来るなんてなあ？」

歓迎会の買出しに、一緒に来ていたこのちやんが呟く。

「はい。私も吃驚しました。このちやんやメアちゃんにも黙つていたとは、学園長もハジメ様も人が悪いですね。」

せつちゃんも知らなかつたみたいで、少し責めるような口調で喋る。  
「私も知らなかつたなあ。父上はなかなか連絡してこないし、ネギ先生のことしか教えてくれなかつたよ。」

いきなり、父上が教室に入つてきたときは、思わず、立ち上がりそうになつちゃつた。

もづ本当に吃驚しちやつたよ。

「メアちゃんも知らんかつたの？」

「うん。忙しいのは分かるけど、じつに大事なことは教えて欲しないな…全く。」

「のちやんの疑問に、普段思つていたことと一緒に思わず口に出る。「アスナは高畠先生が、担任じゃなくなつたから元気ないしなあ。」となりでぶつぶつ言つてゐるアスナを見ながら、このちやんがあり心配していないうるな口調で言つ。

アスナ、「……サイトウ先生、若いけど……渋くてかっこいい……でも子供が担任つて……怖いよ。

父上は、見た目若いけど既婚者だよ? しかも、たまに家に帰ると、何気にラブラブな雰囲気を母様と出している人だよ?

母様と父上は、私がいないと大学生のカップルにしか見えないからなあ。

「ネギ君はメアちゃんから見てどうだつた?」

少し小声で聞いてくるこのちやん。

「うーん。そんな氣にするほど子じやなかつたよ?」

それにはいくら英雄の息子だつて、私達とくつつけるような真似はさせないつて、父上言つてたし。

「それに、本人があまりその氣なせなかつたよ? 修行として先生頑張りますつて感じだつたし。」

10歳の子供だからといつて甘く見てたよ。頭もいいし、高畠先生より教えるのはうまいかも…。

「そやつたなあ。せつちゃんはどう思つ?」

「私もメアちゃんと、同じように思つます。ハジメ様もいますので、学園長が何かできることも無いかと。」

「ハジメのおじさんのおかげで、お見合いしなくて、よひなつたしなあ。心配なせやうやね。」

「んじや、せつさんと戻つて準備手伝おつか。アスナ、行くよ。」  
まだ、うんうん変な事で唸つてるアスナを、肩を揺らして目を覚ま

れる。

「えつ、あ、うん。」

「そういえば、誰が父上たち呼ぶんだろ？」

教室に駆け足で戻る最中、私はそんなことをふと思った。

- side end -

・のどか side・

職員室前で立ち止まって、深呼吸をする。

「のどか、落ち着くですよ。サイトウ先生たちは職員室にいることは確認しましたし、呼ぶだけですから、そんな緊張しなくとも大丈夫なのです。」

「う、うん。わかった、ゆえ。」

職員室の扉に手をかけ、開ける。

何の抵抗もなく開けられた事に違和感を感じる。

えつ？

ふと田の前を見たら、サイトウ先生がそこに立っていた。

「どうかしたか。富崎に綾瀬。」

わわわわ。ど、どうしよ。えつと、ま、まずは、案内を…

「実は、サイトウ先生とネギ先生に、教室の方に来ていただきたくて、きました。」

私があたふたしていると、夕映が私の代わりに、サイトウ先生に説明してくれた。

「いじじやだめなのか？」

「はい。教室でなくてはだめなのです。」

「やつが、わかった。ネギを呼んで来る。少し待つていってくれ。」  
やつは職員室の中に戻るサイトウ先生。

「あ、ありがとうございます。ゆええ。」

思わず、情け無い声が出ちゃう。

「まったく、毎回の礼はちゃんとどのどかが言ひますよ。」

「う、うん。頑張る。」

ちゃんとお礼しなくちゃ。

「さて、では行くか。」

ネギ先生を連れてきたサイトウ先生を教室に案内する。

よつし、頑張るぞ。

- side end -

た。

ネギとハジメが飲み物を飲みながら、クラスの面々と次々と話していくと、

「今日はお疲れ様です。ネギ先生、サイトウ先生。初日の授業はどうでした?」

メガネをかけた大人の女性が、ハジメたちに近づいてきた。

「ああ、こちら源しづな先生だ。俺がいないときは、しづな先生がネギの指導教員になる。なかなか上出来だつたと思つが?」

ハジメがネギに紹介する。

「あつ、はい。よろしくお願ひします。授業の方は、緊張しましたが、何とかできたと思います。」

ネギが頬をかきながら、今日の報告をする。

「ふふ。誰だつて、初めてを経験して学んでいくんですから。自信を持つてくださいね、ネギ先生。」

報告を聞き終えたしづな先生の言葉に、

「はいっ。頑張りますつ。」

元気よく答えた。

そして、他愛ない会話をしていくハジメたち教師陣。

・のびが side -

「ほりつ、いくですよ。のびか。」

「うんつ。」

ゆえに背中を押してもらつて、サイトウ先生たちのところへ向かう。

「あ、あのつ。」

サイトウ先生がこちらに顔を向ける。

「ん? 宮崎か。どうした?」

「昼間は手伝つていただいて、ありがとうございました。お礼として、あの、図書券です。」

サイトウ先生に図書券を差し出す。

あつ。緊張するよ。もらつてくれなかつたら、どうしよう。サイトウ先生は、やっぱり怖いイメージが…。

「ああ、あれか。気にしなくていいものを。俺は先生だぞ?まあ、気持ちとしてもらつておこう。」

あつ、もらつてくれたつ。あ、笑顔は意外にす、ステキかもしけない。

「あ、後ネギ先生にも。どうぞ。昼間はありがとうございました。」  
「はは。余り、お手伝いできたよには、思えませんでしたが。僕も気持ちとして、もらつておきます。」

ネギ先生も笑顔で受け取つてくれました。

やつた、やつたよ。ゆえ。男の先生だつたけど渡せたよ。思わずゆえの方向を見る。ゆえが親指を立ててくれていた。(よくやつたです。のどかつ。)

「おお。本屋が、先生にアタックだーっ。しかも2人つ。」  
えつ?

「えつ、あ、違いますー。それに私本屋じゃないですー。」

良かつた、渡せて。この調子で、男の人とか苦手意識をなくしていきたいなー。

そんな風に思う私でした。

- side end -

その後も、委員長である雪広がネギに銅像を渡すなどの暴走をした

り、

そのことでもめる、雪広と神楽坂のじゃれあいをしていると、

「そういえば、父上。このこと、母様は知っているのですか？」  
金髪を三つ編み巻きで纏め上げた少女が、ハジメに近づいてきた。

「メア。学校では、サイトウ先生だ。」

「なら、サイトウ先生も、私のことをサイトウって、呼ばなければ  
ダメじゃないですか。」

そんな2人に、

「え、サイトウ先生とメアちゃんって親子？」

地獄耳とでも思えるほどに、2人の会話に気がつき、一気に近づく朝  
倉。流石である。

「ああ。そつか、知らなかつたのか。そだよ？」

そんな朝倉に、メアが当然のよつに答える。

「「「え、えええええっ」」

教室に木靈する知らなかつた者たちの叫び。

「え？え？メアちゃん。サイトウ先生の娘なの？それよりも、サイ  
トウ先生つて結婚してたの？」

アスナがメアに詰め寄る。雪広は、アスナに弾かれたのか、回転し  
て目を回している。

「あれ？アスナにも言つてなかつたつけ？」

「ウチとせつちゃんぐらうしか、知らんじちやうのかな？」

「そうですね。余り公言していいものでも、ありませんし。」

記憶をたどるメアに、木乃香と刹那が補足する。

重大な事だつたのか、クラスの面々は思い思に口を開き出す。

そんな皆を眺めながら、

「サイトウ先生…結婚してたんですね。」

ネギがハジメに確認する。

「ああ。わざわざ公言する事も無いと思つていたが、なぜ知らないだけでこんな騒ぎになるんだ？」

ハジメは、飄々とした面持ちで今だ騒いでいる旨を眺めていた。

「は、はは。そうですねえ。なぜなんでしょうね。」

なんともいえない顔で曖昧に返した。

少しだけして、ハジメとネギの歓迎パーティーは騒がしいままに終わった。

### 第3話（後書き）

いろいろ書いていたら、長くなってしまった。  
やつぱ難しいですね。文才が欲しい…。

まだ1日終わってません。おかしいな、プロットもどうでもいいと、  
サクサクっと初回とが終わらせるはずだったのに。

未熟な作者ですが完結を目指して頑張りたいと思います。ではまた。

## 第4話

将来は誰にも分からず  
故に人は将来を楽しむ

### 第4話

「楽しみ

-ネギ said -

「ふう。」

パーティも終わってサイトウ先生としづな先生と共に外へ出る。

「ふふ。ネギ先生には、少し騒がしかったかしら？」

しづな先生の言葉に、

「いえ、僕とサイトウ先生を歓迎するためのパーティですし、とても嬉しかったです。」

とても元気がいいとも思いましたが。お酒とか入っていなかつたのに、あのテンションは凄まじいと思います。

でも、歓迎されて思いましたが、あのクラスは楽しいです。いいクラスにめぐり合えたなあ。

「タカミチも苦労していたみたいだし、毎日騒がしくなるだろうな。

「はは、でも皆さんいい人たちですから、大丈夫です。つ。うん。明日からも頑張ろう。」

学校を出でしばらく歩いていくと、

「そういえば、今日からどこに住むんですか？」

しづな先生のそんな疑問に、僕は思わず立ち止まつた。

「… そういえば、忘れてた。」

ど、どうしよ。授業の事とか、先生の心構えとか、礼儀作法とかは準備してきたのに、肝心な事忘れちゃってたつ。

一気に顔が青ざめしていくのが分かる。今日は、僕野宿？

「なんだ、タカミチから聞いていなかつたのか？ネギ、貴様は奴と同室に住むことになつてゐるはずだぞ？」

「えつ？ 本當ですか？」

「よかつた。野宿じゃなかつた。

「あ、でも僕タカミチの家知らない…」

「心配するな。あいつは教員の寮に住んでいる。案内しよ。」

「あ、ありがとうございます。」

本当にサイトウ先生には、お世話になりっぱなしだなあ。

「では、また明日。」

「ええ。また明日。」

「はい、また明日です。今日はありがとひびきました。」

しづな先生と別れ、男性教員寮に入る。

「すまんが、今日から、高畠の部屋に住む事になつた者がいるのだが。鍵は用意してあるか？」

サイトウ先生が、多分寮の管理人の方かな？に話しかけている。

「あ、今日からお世話になります。ネギ・スプリングフィールドと言います。」

「ああ。高畠先生と学園長に聞いていますよ。はい、これが部屋番と鍵です。無くさないようにねえ。」

鍵を手に、タカミチの部屋へ向かおうとすると、

「そういえば、タカミチは暫くいないんだつたな。一人で困る事があつたら、同じ階の瀬流彦か3階にいる明石教授を尋ねると良い。」「分かりました。今日はありがとひびきました。明日からもうよろしくお願ひします。」

そう言つてお辞儀する。本当にお世話になりっぱなしだつたなあ。

「なに、間違つていいる点があるなひば、しつかり教えてといてやる。ネギ、道を違えるなよ。」

そう言つて、寮から出るサイトウ先生。

サイトウ先生は自分の家を持つてこらし。ところよりも、パートで家族がいるつて聞いたときは吃驚しました。

とても、子持ちの見た目には見えませんよ。タカミチと比べると更に…。

さて、明日の準備もあるし、部屋に行こう。

- side end -

- Haga Ning Rin side -

「くくく、あれが、千の呪文の男の息子か…。奴の息子とは思えんほどに、理知的な奴だつたな。」

授業を聞く限り、優秀とまではいかんが、それなりに出来ている。子供と言えども、なかなかのものだ。

しかし、くく。やつと、封印を解除するチャンスが現れたと思つたら、そのチャンスと共にまさか、あのパイルドライバーが来るとはな。

迂闊に行動できなくなつてしまつたな。しかし、このよつたチャンスはもう無いだろつ。

綿密に計画を立てる必要があるな。

見ているよ、パイルドライバー。いや、ハジメ・サイトウ。私が受けた屈辱は万倍にして返してやるつ。立ち上がり、その様を思い浮かべながら笑う。

「…マスター。食事の準備が出来ました。」

「… そうか、分かった。今行く。」  
の、ノックぐらいしろつ。茶々丸。なに? しましたが、反応があり  
ませんでしたと?  
むう。少々妄想に耽すぎたか。

- side end -

-主人公 side -

「おかえりなさい。ハジメ。」  
家へ帰るとアリカがいる。今でもなかなか不思議な、こそばゆいも  
のを感じてしまうな。

「ああ、ただいま。アリカ。」

そして、共にリビングに行き、共に食事をしながら、今日あつた些  
細な事を話し合う。

ふむ、また腕を上げたな。

「それで、どうだったのじゃ? ナギの息子とやらは。」

「いや、あの馬鹿の息子とは思えんほど、優秀だつたな。修行と言  
う題目はともかく、教師というものを必死に理解しようとしている。  
最初の授業であつたと言うのに、特に問題なく終えたしな。」

歓迎パーティーのときに再認識したが、あの騒がしいクラスでよくで  
きたものだ。

教えると言つのは、言つほど容易くは無い。そればかりか、ただで  
さえ子供なのだ。教師として見られない、可能性もあつただろう。  
実際、そう言つ風に見ていた奴もいた。

特に問題なく授業を終えたと言つ事は、今日の授業の準備として、  
十分練習したのだろうな。

「ほう。よき魔法使いにはなれそうかの?」

悪戯心を含めたような口調でアリカが聞いてくる。ふう、全く変わ  
らん奴だ。

「それとこれとは別問題だがな。ただ、自らの意思で自らの道を決められるならば、どう言われ様とも、それは奴の誇りになるだろつ。」

「下らん考えに左右されないで欲しいものだ。教師どもには干渉しないように、近右衛門には言つておいたがな。」

「ふふ。」

「む、なんだ？」

「いやいや、どうなるか楽しみじゃのう。」

アリカが笑みを浮かべながら、ワイングラスをじょうじょうに差し出す。

「それは否定しないな。」

俺もワイングラスを差し出し、グラス同士が子氣味よい音を奏でる。

たまには、じうじう楽しみも悪くは無い。  
将来の芽といふのは、大事なのだからな。

#### 第4話（後書き）

読んでいただきありがとうございました。やはり、田舎編は苦手です。もひとつ面白く出来たらいいのに。

最近は余り書く時間が取れなくなってきたのでも、なるべく多く投稿したいと思います。ではまた。

## 第5話

話し合いは土俵で決まる  
相手をひきひきに引きずつむか引きずり込まれるかだ

### 第5話

「土俵」

麻帆良学園女子校舎の広場のある一角。

そこで、バレーで遊んでいる少女達、2・Aクラスの裕奈、まき絵、アキラ、亜子がいた。

「ねー。あのネギ君が、来てから5日経つたけど、みんなどう思つ？」

頭でボールをトスしながら、まき絵が口を開く。

「ん…いいんじゃないかな。」

アキラが腕でボールをトスする。

「そだね。授業も分かりやすいし、結構頑張ってるでしょ。」

ボールが亜子の前に落ち、亜子がボールを持ちながら、  
「でもウチら、来年は受験やし、子供先生じゃ頼りなくない？」  
不安を口にする亜子に、

「ハジメっちがついてるから、その辺は心配いらないでしょ。それに、私達大学までエスカレータじゃん。」

裕奈が笑いながら答える。

「やっぱ、ネギ君には、相談できないよね。」

「ふふ。相談事なら私達が聞いてあげることになるかもねえ。」

「あはは。経験豊富なお姉さまとしてー？あつ。」

トスに失敗したまき絵。ボールを追つかけながら、  
「もう。ちゃんとトスあげよね。」

ボールを拾うと、

「誰が経験豊富なお姉さまですつて……？……笑わせてくれるわね。」  
そこにたたずむ影が囁つ。

ところ変わつて職員室。

そこの一角では、ネギとハジメがたまつていた書類を片付けていた。

「先生と言つのは、こうこうこともするんですね。」

「基本は生徒中心だがな。こうこうとも学校の教師として、やらなくてはいけないことだ。」

他の先生も、各自受け持つている作業をこなしていくと、

「うわああああん、先生っ。」

「ネギ先生っ、サイトウ先生っ。」

職員室に飛び込んできた生徒が2名。亜子とまき絵である。

「どうした、お前ら。基本職員室では静かに、だ。」

ハジメが椅子を回転させて、亜子とまき絵に向く。

「ウチらが、広場で遊んだらっ。」

「見てくださいよ。このキズッ。助けてくださいつ。」

その言葉に、ネギが立ち上がる。

「なつ、そんなひどい事を。誰がつ？」

「まあ、落ち着け。しづな先生っ。佐々木と和泉を保健室に連れて行つてもらえまんか。」

「あ、はい、わかりました。いきましょうか。」

辺りを見回したハジメが、しづな先生にまき絵と亜子を頼む。

「さて、ではいくとするか。」

ハジメはネギを連れて職員室を出る。

-主人公side -

まあ、広場に来たわけだが。

「それつ。女子高生アターックつ。」

「あつ。」

高等部の生徒が、大河内にサーブをし、大河内がそれを受ける。

なんだ、これは。

思わず、こめかみを揉む。

「こらあつ。僕の生徒に怪我をさせたのはあなた達ですかつ。その年になつて、していいことと悪い事の区別も出来ないんですかつ？」  
いつの間にか、隣にいたネギが感情に任せて突撃していった。

「キヤーッ、可愛いいい。」

「え、ちょ、わあああ。」

集まつていた高等部の生徒達に押しつぶされるネギ。  
少しは期待したが、やはり無理か。

そろそろ制裁しようつと、一步踏み出そつとしたら、  
「いい加減におよしなさいつ。おばさマ方つ。」

「な、なんだと、こらあつ。」

雪広と神楽坂か。

おいおい、ネギがあつちにいるからか知らんが、今のは失言だろ。

雪広。

まあ、現状生徒だけでどう收められるか見ると言つのもありか。  
きつかけも、高等部が暇つぶしで來たと言つ所か？

「こじはいつも私達が使つている場所なんです。高等部の、”年  
増”の方々はお引取り願えます？」

火に油を注いでどうする雪広。

「な、なんですか？」

「いかんな、やはり無理か。

「ちょっとあんたは黙つて。…先輩だからって、力で追い出すなんていささか大人気ないんじゃないんですか？」

お、神楽坂か。

「ふん、言つじゃない。神楽坂明日菜と雪広あやか。中等部の癖に、いろいろ出しあばつて有名らしけど…。」

そう言つて、笑みを浮かべる高等部の生徒。

「先輩の言つ事には大人しく従つ事ね。子供は子供らしく、隅で遊んでなさいな。」

何を得意がつているのか分からんが、奴らも阿呆なのか？  
ため息が出そうになる。ネギの方は…、まだもみくちゃにされているな。

このままでは、騒動になるか。生徒の自主性を重んじても、意味を  
履き違えたら意味が無い…か。

騒ぎの中心へ近づき、

「静まれつ、阿呆共がつ。」

少し威圧を出す。静まらせんにはちよつといのだが、効かない奴  
がちらほらいて困る。

「うわ、サイトウ先生つ。」

「え、この人がつ？」

女子高等部でも、名は知られてはいるのか。

「神楽坂、話し合いで持つていこうとしたことは評価するが、手を  
出したらいがんだろ。」

「あう。」

「それと、雪広。先ほどの失言は、多くを敵にするぞ。言葉を選べ。

「

「あ、はい。」

話せば、分かるのが救いか。

高等部の生徒に向き直る。

「さて、お前に言いたい事はいろいろあるが。」

副担任としても、指導員としても。

「とりあえず、反省文だ。高校生になつて、中等部相手にこれは、よろしくない。」

「うう。はい。」

高等部生徒の隙間からネギの屍がのぞく。

「はあ。詳しい話はそちらの指導員とする。解散。」

うな垂れながら戻つていぐ、高等部の面々。

「サイトウ先生。悪いのはあこつらなんですよ。」

高等部の連中がいなくなると、神楽坂が抗議してきた。

「気持ちは分かるが、神楽坂。相手の士俵に立つた時点で負けだ。田を回していくネギを立たせながら、周囲にいる面々を確認し、話す。

「正直に言えば、お前らがどの程度できるかを試していた。結果は…まあ、残念だったが。」

「試すつてどうこうことですか？」

「いいか？これから、世の不条理と言つのばどんどん増えていくぞ？学校と言つのは社会の縮図に近づからな。先ほどのような不条理をどう回避するか、対応するかで、自らが出来る事が変わつてくる。」

「でもちよつと、それはひどくないですか？」

神楽坂はむくれた顔で責めてくる。

「なに、甘やかすだけが教師の仕事ではない。あの程度の事、自分で解決するんだな。それに、神楽坂。雪広を遮つて話し合ひに持ち込もうとしたまではよかつたな。そう言つ心がけはしておいた方が

いい。それが、ああいうことの解決につながる。」「あ、はい。」

「まあ、もしだ。今のお前らでは解決できない事が起しつたならば、そのときは俺が解決してやる。それが、お前らを受け持つていい、俺の仕事だからな。」

ネギもそろそろ覚醒してきた事だ。そろそろ戻るとするか。「ではな。次の授業には遅れるなよ。」

- side end -

「やつぱり、ハジメっちは頼りになるねえ。」

次の授業が体育のため、更衣室で着替えている2・Aのメンバー。「ですが、やはりネギ先生のようにまつすぐ駆けつけでもらいたいものです。」

雪広が両腕を上に掲げながら、思いを説いている。

「子供先生も頑張つたけどねえ。やつぱり、年の功と言つたか、大人の風格やねえ。」

「ネギ君10歳だもんねえ。」

「やつぱ、頼りがいがあるほうが……いい。」

「ほりほり。今日は屋上でバレーよ。やつぱとこきましょ。」

着替えが終わり、屋上へ向かうと。

「あら、また会つたわね、あんた達。偶然ね。」

先ほど、アスナたちと揉めた高等部2・Dの面々が立っていた。

「なつ。あんたたち、まだ懲りてなかつたの?」

「嫌ねえ、私たちは自習だからレクリエーションとして、バレーする事にしたの。今度は私達が先だから、お引取り願える?」リーダー格の女子が、笑みを浮かべながら言い放つ。その言葉にアスナは、

「いい加減にしなさいよ、あんた達つ。わざとでしょ?だって、あんた達の校舎は隣の隣じゃないつ。」

「今度は言いがかり?本当に子供ね。」

挑発してくる女子に、思わず頭に血が上るアスナだったが、

(どう対応するかで自らが出来る事が変わる)

先ほどのハジメの言を思い出し、踏みどじまる。

「…、言いがかりはそっちでしょ?わざわざこんな事をするなんて、そっちの方こそ子供じゃない?」

いやつたらしい笑みを浮かべて、高等部の面々に言い放つアスナ。「そうですね。まさか、私達に構つてもらいたくて来ているのかしら? だつたら、かわいそうに思えてきましたわ。」

雪広も神楽坂の言葉から真意を汲み取り、それに続く。

「なつ、なんですつてえ。」

高等部の面々が顔を怒りに染めるが、

「いや、全く持つてその通りだぞ。神楽坂、雪広。わざわざこいつらの校舎まで来たんだ。そう捉えてもおかしくない。」  
声が聞こえた瞬間、一気に顔を青ざめる高等部。

「まったく、本当に大人気ないですよ。高等部の皆さん。」  
屋上の出入口から入つてくるのは、ハジメとネギ。

「な、なぜ、サイトウ先生がこちらに?」

「なに、体育の教員が急遽これなくなつたのでな。」

「それで、僕達が頼まれてきたんです。」「さて。」

ハジメが高等部に近づく。

「ネギ、俺は少々用事が出来た。頼めるか?」  
背後に修羅が見えるような笑顔で、ネギに問うハジメ。

「は、はいっ。大丈夫です。」

思わず後ずさるネギ。

「どうか、すまないな。では、貴様ら。なぜ、生徒指導室があるか  
をきつちり教えてやる。……」

「は、はいっ」

整列し、いつせいに校舎へ戻る高等部。

その後に続くハジメだが、校舎に戻る手前、立ち止まって振り返り、  
「ああ、神楽坂に雪広。やれば出来るじやないか、上出来だつたぞ。」

「

そつ言葉を残して校舎の中に入つていった。

「はい。神楽坂さんに雪広さんは、とても格好良かつたですよ。」  
満面の笑みで賛辞を送るネギ。

「え、見てたの?まあ、…ありがとうございます。」

「ああ。ネギ先生、ありがとうございます。その賛辞がこの私に送  
られると言つだけで、もう、私はつ。」

ハジメたちに見られていた事実に、頬を赤く染めるアスナと、ネギ  
の言葉に若干トリップしているあやか。

「さて、では皆さん。授業を始めましょう。」「はーい。」

その日、女子中等部の生徒指導室には、高等部の生徒が行列を作り、中等部の生徒達や先生からの視線に、羞恥に顔を赤く染める光景があつた。

そして、部屋の中では恐ろしい笑顔のハジメのもとで、反省文を泣きながら書く生徒たちがいたとさ。

## 第5話（後書き）

結構書き直しながら思つたこと。この回りで飛ばしてよかつたかも  
しれない。

## 第6話

少年の道は険しい  
障害は身近に

### 第6話

「課題」

ネギが就任してきでから一月が経とつとしていた。

「それで、どうかの？ネギ君は。」

学園長室にて、学園長がハジメにネギの様子を聞く。

「ふむ。どう、と問われれば、よくやつていうと云つのが正しいな。  
あのクラスをよく纏めている。」

纏まつているのは、ハジメがストップバーとして機能しているからな  
のだが、ここではそれも考慮し、ハジメは述べる。

それを聞いた学園長は、

「ふおつふおつふお。やはり、ハジメ殿が補佐してくれてよかつた  
わい。」

と嬉しそうに言つ。

「じゃから。そりそり、課題を出やつと細ひのじやが。」

目を鋭くさせながら、学園長がハジメに目を合わせる。

「それは、魔法使いとしてか？教師としてか？」

ハジメも目を鋭くさせる。

「これが、課題じや。ハジメ殿、よろしく頼む。」

「それでは、俺が第三者として監督するとしよう。問題が生じたら  
俺の権限で中止させる。良いか？」

学園長はハジメの提案に頷く。

ハジメが学園長から渡された紙を開き、内容を見た瞬間、ハジメはネギが苦労することを察した。  
紙にはこう書かれていた。

『ネギ君へ 次の期末試験で、二・Aが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。』

こうして、ネギの課題が決まった。

-ネギ side -

授業終了の鐘が鳴る。

「では、今日はここまでです。みなさん少しずつですが、小テストの平均があがつてきています。やれば出来るのですから、復習予習頑張りましょう。」

「ふう、終わつたあ。

」  
「そういえば、

「なんか、最近どのクラスもぴりぴりしていますが、何があるんですか？」

クラスの人間に問うと、近くにいた椎名さんが、

「ああ、来週の月曜から期末テストがあるからだよ。」

「へえ。そうですか、学期末テストがあるんですねか。」

「そつかあ。それは、びりびりするよね。

「つて、ウチのクラスに、そんな雰囲気全然ありませんでしたけどつ？」

「すごく和やかでしたよつ？」

「あはは。ウチの学校エスカレータ式だから余り関係ないんだ。」

「それに、2・Aはずーっと学年最下位だから、大丈夫大丈夫。」

明石さんと椎名さんが、すうじに笑顔で言つてこなすけど、

「いやいや、ダメでしょ。」

そつ言つても、からからと笑つて流されてしましました。

トロハイーもあるそつですが、無理そつですね…。

サイトウ先生と教室を出て、職員室に向かう最中。

「ネギ。」

サイトウ先生から声をかけられ、何かを手渡されました。これは、紙？

「サイトウ先生。」これは？

「学園長からだ、ネギへの課題だそうだ。内容は見れば分かると。」

課題つ。そうか、修行だもんね。どんな課題がだされるんだ？

恐る恐る折りたたまれた紙を開く。

その内容を見て愕然とする。

… 2 - Aを学年最下位から脱出させる…。

思わず、サイトウ先生のほつを見る。

「これは貴様の課題だ。どう取り組むか、見させてもらひまつと想ひつ。

協力はするだ？」

ほつ。協力はしてもうえるみたいだ。

むむ。どうしようかな。英語の居残りだけでなく、全教科でも居残りさせたほうがいいのかな？でも、あまりやるとモチベーションも下がつちゃうだろつし。

「と、とりあえず、今日まづやりてこの課題に取り組むかを考えたいと思います。」

「あまり、時間は無い。勉強会を開くならば、俺を頼つていいくから

な。

「そのときは、よろしくお願ひします。」

やつぱり、みんなが学期末テストに、意欲が出るよいにしたことだめだよね。

帰りのHRになった。

「では、後はそうですね。そろそろ学期末テストが迫ってきました。僕は2・Aが万年学年最下位と言ひ、汚名を返上したいと思つています。皆さんはやればできるのですから、頑張りましょう。」「これで、勉強しようつて気になつてくれるかな?」

「素晴らしい提案ですわ、ネギ先生。」

あ、雪広さんが応えてくれた。

「はいはーい、提案しまーす。」

お、椎名さんがなんか考へてくれたみたいだ。

「はい、何でしようか? 椎名さん。」

「英単語野球拳がいいと思いまーす。」

えつ?

英単語「野球拳」?

スタンおじいちゃんに聞いたことがあつたよつな…。

「くくく、椎名。俺の前でよくそんな提案が出来たな。」「あー。えへへ、冗談ですよ?」

椎名さんが頭を搔きながら、席に座る。

「はあ、とりあえずはだ。各自自分の出来ない範囲、といつものを中心でいると思ひ。今日は英語を各自自弱。友人に教えてもらつても、俺達に聞いてもいい。最後の15分で小テストを行ひ。で、いいな? ネギ。」

「あ、はい。」

テキバキと指示するサイトウ先生は、やつぱすいな。

自習が終わり、小テストを行って採点したけれど、  
「やつぱすいこばりつきですね。」

苦笑いしてしまった。

「上位の連中はほぼ完璧。下位の連中は本当に下位だからな。だが、  
英語は平均が上がってきてているな。これは、ネギの成果だらう。」  
「はい。それは素直に嬉しいんですけどね。」

他の科目は、多分もつと下なんだろうな。他の科目も勉強できるよ  
うにしないとなあ。

明日から、どう勉強会を開いていくかをサイトウ先生と考えながら、  
今日と並んで口も過ぎていった。

- side end -

「今のは本当でござるか?」

細田と忍者口調が、特徴の楓が聞き返す。

「本当みたいだよ? なんでも初等部からやり直しさせるんだって。」  
まき絵がそれに答える。

「それは、困つたでござるなあ。」

「嫌アルよ。今更初等部でランドセル背負うなんてネ。」

古菲も楓に同意する。

ここは、寮の大浴場である。そこで、学園の噂について話しあつて  
いる。

それは、今期学期末テストで最下位であつたクラスは解散という、  
荒唐無稽なものであつたが、

「それは、やばいわね。」

信じる者がいるのが、この麻帆良学園。

「だから、ネギ君もサイトウ先生も勉強会しようって話をしたのかな？ネギ君も若干焦つていたようだし。」

「確かに、初めて受け持つたクラスが解散だなんていやよね。」

まき絵の考えに、アスナが同意する。

「(ヒ)は、やはりアレを探すしかないかもです。」

夕映が不思議な飲み物を飲みながら、呟く。

「夕映つ？」

「なにか、いい方法があるのつ？」

「図書館島は知っていますね？我々図書館探検部の活動の場なっています。…実はその深部に、読めば頭が良くなる魔法の本があるらしいのです。」

「あはは、なんか胡散臭い話だねえ。」

まき絵が、夕映の話にもつともな意見を言つ。

「はい。恐らくよく出来た参考書の類でしょうが、あれば、強力な武器になると感じます。探してそんは無いかと。」

夕映が尊から信憑性の高そうな推測を述べる。

「頑張っているネギ君にも、サイトウ先生にも苦労かけたくないしね。探すのもありかな？」

「そうね。あのガキも頑張つていてるしね。サイトウ先生にも迷惑かけられないし、行きましょうかっ。」

「そうで(ヒ)やるな。」

「賛成アル。」

夕映の話に同意する面々。

そんな面々を見ながら、

「あははは。父上、大変な事になつやうですよ。」

「あははは。ネギ君も大変やなあ。」

「止めなくともよろしいのですか？」のちゃん、メアちゃん。

「「だつて、そっちの方が面白そう（やん・じやん）。」

刹那は、（なんかハジメ様に影響されているな）と一人思った。

こうして、噂話を信じた成績が芳しくない者たちは、図書館島へ魔法の本を探しに、探検することとなつた。

## 第6話（後書き）

長くなつたので、分けました。

## 第7話

少女たちは宝を目指し探検する  
しかし宝には門番が付き物である

### 第7話

「探検」

夜。麻帆良学園の図書館島の入り口まで走る、一つの影があった。  
そして、その影が入り口につくと他にもいくつか集まっていた。

2・Aの成績底辺組のアスナ、楓、古菲、まき絵、夕映の5人と、  
付き添いできた、のどかとハルナである。

最後にきたアスナが一人なのを見て、

「あれ？ アスナ、木乃香たちは？」

「あー木乃香たちにもお願いしたんだけどねえ。」

⋮

「うーん。行かん方がいいと思うえ？ サイトウ先生に叱られてまう  
で？」

「そうだね。父上はそこらへんは厳格だから、理由も一緒に聞いた  
ら、大変だよ。」

「サイトウ先生は不正などは嫌いですよ？」

アスナは、ルームメイトからの全否定に思わず後ずさる。恐らく最  
後の、刹那の言葉が一番効いたと思われる。

「で、でも。クラス解散されちゃうのかかもしれないんだよ？ 私、足  
引っ張るのはいやだから、一人でも行く。じゃねっ。」

行く用意はしていたらしく、そのまま部屋から飛び出るアスナ。

「ああ、行つてもうた。なんでそんな話言じりられるのやうへ。」

「さあ？」

そんなアスナを見送る木乃香たち。

：

今思えば、逃げるように来たことに気がつき、若干気がまずそうに、元気な顔でアスナを見送る木乃香たち。

「まあ、こなかったのよ。」

とアスナが言う。

「こない者はしかたないです。では、行きましょう。」

図書館島探検部の部員である夕映が先頭に立ち、入つていいく。皆もそれに続く。

図書館島地下3階。

「中学生が入つていこのは、ここままでです。地下では、罠が仕掛けられているので、気をつけてくださいね。」

夕映が注意事項を述べていく。そして、地上にいるのどかとハルナに、3階までたどりついた事を報告する。

「ねえ、夕映ちゃん。どのくらい歩くの？」

まき絵の質問に、夕映は徐に地図を広げ、

「今私たちがいるのは、ここです。目的の本があるとおれでいるのは、地下11階のこの地下道を渡つた、この場所ですね。」

「ふええ。遠いねえ。」

「往復でおよそ4時間かかると思われます。明日の朝までは戻れる計算ですから、明日の授業は大丈夫です。」

その言葉に、皆もやる気を見せる。

「では、出発です。」

「おーつ。」「

道中の罠を持ち前の運動能力と経験で次々と突破していく面々。今は、のどかたちから教えられた休憩ポイントで、休憩している最中である。

「「」の調子なら思つたよりも早く着きそうです。」

お弁当を食べ終えた夕映が、時間を確認しながら述べる。

「そつかー。よーし、もう一息だつ。」

探検を再会する一同。

そして、ついに田的地直前まで、たどりついた一同。

「ふふ…。ここまでこれたのもバカレンジャーの皆さんの運動能力の賜物ですね。さあ、この上に田地の本がありますよ。」

隙間から光が洩れている石を、押し上げて外す。

そこには、物語に出てきそうな石でできた祭壇が造られていた。2体の巨大な騎士を模った石像に、挟まれている場所には、本が安置されていた。

「あ、あれはつ。あれが、魔法の本?」

「分からぬですが、その可能性は高そうです。」

それを聞いた瞬間、一斉に本に向かつて走り出す。

「やつたー。」「「」れで最下位脱出よ。」「一番乗りアルー。」

しかし、安置されていた場所との間にある橋を渡る途中、

橋が割れた。

「「えつ?」」

すぐ下の石床に落ちる一同。

その石床には、何かが刻まれていた。

「え？ これって…。」

「ツ…ツイスター…ゲーム？」

石床には、橈円がいくつも刻まれており、橈円にはそれぞれひらがなが刻まれていた。

石像の目が妖しく光る。

「フォフォフォ…。」

そして、なんと2体の石像が動き出し、

「この本が欲しくば…、わしの質問に答えるのじゃー…」

「…」

どこかで聞いたことのあるような口調で、喋ったのだった。

「ななな、石像が動いたっ？」

その現象に驚く一同。

石像は気にせずに続け、

「では第一問。『DIFFICULT』日本語訳は？」

一同は質問に対し、何とかツイスター…ゲームで答えていくが、

「い、痛いです…。」

「死ぬ、死んじゃう…。」

それは、形容しがたいほどにひどい状態であった。

「…」

「フォフォフォ。それでは、最後の質問じゃ。『DISH』の日本語訳は？」

「やつた、最後だつて。」

「…分かつた、おさらねつ。」

お・や・うと各自の体を駆使して、必死に押さえよつとするが、『お』『や』と押さえ、次を押さえたが、それは『ら』ではなく、

『 る』

であつた。

「 おさる?」

「 ハズレじやな。」

振り下ろされる大槌。

床もうとも破壊され、はるか下に落ちていく一同。

「 「 いやあああ。」 」

果たして、学期末テストはビリになるのであらうか。

-主人公 side -

「 なに? 図書館島で行方不明だと?」

朝職員室に来ると、富崎と早乙女があわてた様子で走っていたので、何かあつたのかと思い聞いてみると、

「 クラスを解散? か。全く、噂の真偽くらい確かめたらどうだ? そんな話、まかり通る分けなかろう。」

「 あう、すいません。」

縮こまる富崎。

「 いや、お前らを責めても仕方ないな。…責めるべきは今行方不明の奴らか。」

さて、魔法の本などに現を抜かして、自らすべき事もしない、馬鹿どもをどうするかだな。

「 あれ、どうかしたんですか? サイトウ先生。それに、富崎さんこそ早乙女さんも。」

これからどうするか考えていると、ネギが来た。

「大変なんですよ、ネギ先生。夕映やアスナたちがつ。早乙女が事の成り行きをネギに説明する。

「ええっ？綾瀬さんたちが行方不明っ？それよりも、クラス解散つて…。あれは、僕が先生になれるかの最終課題ですよ？」

「先生の課題なんですか？」

ネギが狼狽して、課題のことを暴露しているが、

「まあ落ち着け、ネギ。富崎、早乙女。この件は俺達がなんとかする。お前らも授業があるだろ？早く教室に戻れ。ネギの課題の件は内密にな。」

「あ、えっと。はい、わかりましたあ。」

早乙女が富崎を連れ、職員室を出る。

「…迂闊だつたな。まさか、俺が知らないしそんな噂が出ていたとは。…いや、これは近右衛門の仕業か？」

「少し学園長室に行つてくる。」

「あ、僕も行きます。」

「ネギはここで待つていてる。」

一人、学園長室に入る。先程メアに聞いたところ、昨日の夜に急激に噂が広まつたらしい。ということは、

「さて。現状起きている事を全て述べてもらおうか？」

殺氣をこめて近右衛門に問い合わせる。

「ふおつ？な、なんのことじやか、わからん。」

氣で形成した刃で、近右衛門の一つ隣の空間を切り裂く。遅れて、崩れ落ちる机。

「ま、待つんじやつ。ハジメ殿つ。三つ。三つから殺さんといつ。」

最初からそつしろ。時間が惜しい。

「いや、実はの、成績が芳しくない者が居るじゃろ? 本当はネギ君にそのものたちを連れて、図書館島に連れて行つて欲しかったんじやがの、何かの手違いで噂が先行してしまつての。なまじ、実力がある者ばかりでの。目的の場所へたどりついてしまつたのじゃつ。今はアルビレオの監視下においておるつ。」

早口で必死に説明する近右衛門。アルビレオがいるならば、怪我などの心配は無いか。

ならば、さつさと助けに行くか。クラスの連中も心配しているだろうしな。

「今は奴らの救出が先だ。このことは、後でゆつくり話し合おうか、……近右衛門。」

殺氣を全開で近右衛門に向ける。ガラスに鱗が入つたが、別に良からう。

そして、部屋を出る。

「あつ。サイトウ先生、どうなりましたか?」

ネギに事の説明を行う。

「そんなんつ。魔法の本なんかに頼るだなんて……。」

ネギが少々ショックを受けているようだ。

「俺はこれから、図書館島にいる馬鹿どもを、説教ついでに助けてくる。ネギはクラスを頼んだ。」

「待つてくださいつ。僕が、僕が行きますつ。」

「なぜ? 行つておぐが、図書館島の地下は、意味が分からぬほど罠で埋め尽くされているぞ?」

暗にお前には危なすぎると言つたんだが、

「大丈夫ですつ。それに、自分で出来る事もしないで、そんなものに頼るみんなに、一言言いたいです。それに、頼らせてしまつた自

分が嫌なんです。」

ネギがまっすぐじかに見れる。…いつの間にか、教師らしくなったものだな。

「ふむ。では、学園長から地図をもらつていけ。安全にいけるルートがあるはずだ。話によると、奴らは比較的安全などこかにいるらしいしな。」

「はいっ。」

そして、学園長室に入つていくネギ。

さて、俺はクラスにいる奴らの面倒を見ることにするか。

## 第7話（後書き）

最終課題、まだ終わりませんでした。

## 第8話

努力は素晴らしい  
しかし方向を間違えてはいけない

### 第8話

「努力」

-ネギ said -

学園長から地図を受け取り、図書館島まで走っていく中、  
僕は魔法について考えていた。

僕がこんなに早く走れるのは魔法のおかげだ。サイトウ先生と同じ量とまでは行かないけど、それだけの仕事をこなせるのも魔法のおかげだ。

それに、誰かを助けることも出来る。

だけど、今回の事は何か間違っていると、僕はそう感じてしまう。自ら捜し求めたものを、どう利用しようとも、それはその人の自由のはずだ。

だけどつ。

こんな努力の仕方は間違ってる。クラスのみんなはそりや、成績がいい人ばかりじゃない。でも、決して努力していないわけじゃない。分からぬところがあつたら、僕やサイトウ先生に聞いてくれる人もいる。そんな人たちがいるのにつ、いくら、クラスが解散するだなんていわれてもつ、そんな人たちの努力を笑うような行為を、

僕は許したくないつ。

図書館島に着く。

あつちに、Hレベータがあるのか。地図を見ながら、奥に行く。

- side end -

その頃のバカレンジャーたちはとこつと、

「一生ここにいてもいいです。」

「至れり勿くせりだもんねえ。」

バカンスを楽しんでいた。

あれから床から落ちた一同は、湖があり、光もある不思議な空間に落ち、幸いしたいした怪我もなかつた。

その空間を一通り探検した夕映が下した判断は、

「ここは恐らく幻の地底図書室かと思われます。本好きの楽園とすらいわれています。」

目を輝かせながら、そう述べたのだった。

そんな夕映に不安を覚える者もいたが、実際に生活すると、食料もあり、水浴びも出来るのでかなり快適だったようだ。

今では、ずっとこのままでいいとすら思つているものもいた。

「やつと見つけましたよ、監さん。」  
「そこへ、ネギが現れた。」  
「え？ ネギ君だつ。」  
まき絵が反応する。

「え？ なんでこんなところにいるの？」

アスナが疑問を投げかける。

「それはこっちの台詞ですっ。聞きましたよ、魔法の本を探しに来たそうですね。」

ネギが少し怒りを表しながら、アスナたちに近づく。

「あ、いや、それは。最下位だつたら、クラス解散だなんて聞いたんだもの。しようがないじゃない。」

アスナが弁解する。

「ハイッ、それは聞きました。ですが、僕が言いたいのはっ、なっつ、自分たちで勉強せずにそんな話に頼つたかですっ。」

ネギは声を荒げながら、アスナたちに問う。

「いや、拙者たちがどんなに頑張つても。」

「たかが、知ってるアルネ。」

楓と古菲が弱音を吐くが、

「それで、魔法の本を頼る？ そんな考えがあるから、あなた達は一向に成績が良くならないんですよ。分からないとこがあれば聞けばいい。1点でも伸びるならば、勉強すればいい。実際に神楽坂さんたちは、僕の英語の授業の小テストで、それは低いですが、点数が良くなつてきたじゃないですか。」

「まあ、それは、そうだけどね。」

「興味が無いことに、あまり関心が持てないのです。」

まき絵と夕映が、反論する。

それに対しネギは、

「みんながみんな、勉強が好きではない事ぐらい分かっています。ですが、それでもちゃんとやっている人もいるんですつ。そう言つ

人たちに対して恥ずかしいとは思わないのですか？」「

「…。」

思つところがあつたのか、静まるバカレンジャーの面々。

「あなた達も、勉強すれば出来るんですから。一緒に頑張りましょう。今から勉強すれば、学期末テストでもいい点が取れますよ。」ネギはアスナたちに微笑みかける。

「分かつたわよ、頑張つてみるわよ。」

「確かに、他の人たちに悪かつたネ。」

「そうだねえ。やっぱ自分の力で頑張らないとねえ。」

「拙者、やる気が出てきたで！」

「頑張るです。」

ネギの言葉に、各々が頷き、

「はい、では帰つましょ。僕も言つ過ぎましたね。すいませんでした。」

「ああ、後ですね。」

先頭を歩き始めるネギだが、立ち止まる

「帰つたらちやんと、サイトウ先生と新田先生の説教が待つていますからね。」

「えつ。」「

ハジメを髣髴とさせる、怖い笑みを浮かべ、それを見たアスナたちは顔を引きつらせるのであつた。

ネギと共に帰つてきた、アスナたちを待つてたのは、怖い笑みを浮かべるハジメであつた。

「…迷惑をかけてすいませんでした。」「

「自覚するのはいいことだな。……さて、では生徒指導室へ行くとしようか。」

「いやああああああああ。」「

1時間後、そこには燃え尽きたバカレンジャーがいたという。

-ネギ side -

なぜか、僕の課題がばれていました。なぜでしょう？

それよりも、皆さんがやる気になつてくれています。1週間もありますが、それでも、やれるだけの事はやりたいと思います。

「というわけで、これから勉強会を始めたいと思います。これは5教科分のプリントです。これは最初に自分だけでやってみてください。分からなかつたところがあれば、僕やサイトウ先生、または友人に聞いてくださいね。」

神楽坂さんたちも、考えを改めたのかちゃんと勉強してくれています。やれば、できるんですよ。だから、頑張ってください。

「」苦労だつたな、ネギ。」

「あ、サイトウ先生。いえ、少し感情的になつてしましましたし、それはちょっといただけないなと思います。」

思い返すと、恥ずかしい事をいつてしまつた気がする。

「なに、それはお前が、それだけ教師と言う仕事に真剣だからだ。そうやって一歩ずつ、自分と見つめあいながら成長するといい。うう、サイトウ先生から、大人の風格というのでしょうか。それがすごく感じられます。僕もああなれるのでしょうか。」

「ネギ君つ。ここわからないんだけどお。」

「あ、はい。えっと、これはですね、こここの公式と公式がありますよね？この2つを順に使うと…。」

そつやつて、僕とサイトウ先生の勉強会は進んでいきました。

これからとくらもの、休み時間でも、聞きに来てくれる人が増えて、本当に嬉しい限りです。

やはり、サイトウ先生のほうが聞きにくる人が多いですが、

それでも着実にみなさんに実力がついていると実感しました。  
最後に小テストを行つていて、神楽坂さんたちが学年平均  
のところまで来たんです。嬉しかったですよ。

そして、とうとう学期末テスト当日になりました。

不安でそわそわしている僕に、サイトウ先生が、  
「ここまで来たのならば、後は奴らを信じてドンと構えていろ。お  
前が信じなくてどうするんだ。」

その言葉に、また一つ教わりました。そうですよね、僕が信じなき  
や。

テストが終わつた後は、皆さんお疲れのようでしたが、それでも、  
なぜか輝いて見えました。皆さんが頑張つたからだと思います。

⋮⋮⋮

今日はクラス成績発表の日です。

「少し落ち着け、ネギ。」

サイトウ先生に頭を抑えられながら、順位表示するモニタに集中し  
ます。

アレだけ頑張ったんだから、最下位じゃないはずっ。

『えー。2年生の学年平均点は74.8点です。…では、第2学年のクラス成績を良い順に発表しましょう。』

司会の女子生徒が、順位を読み上げるのか。

「第1位 2年えー…え？」

少しおわついている。

「なんと、第1位は2年A組だつ。平均点は82.1点つ。これはあつ、大番狂わせだあつ。」

周囲が騒がしくなる。

えつ？ 1位？ 本当に？

「やつたーつ。ネギ先生つ、サイトウ先生つ。1位だよつ、1位つ。

「佐々木さんが僕に抱きついてきましたが、余りの事に僕の脳はショートしているみたいですね。」

「ほひ。いいところまで行くとは思つたが…まさか、1位とはなよかつたじやないか、ネギ。」

サイトウ先生の言葉に、実感が出てきて、少し涙が出てきました。

「はいつ。みなさん、すごいですよつ。よく頑張りましたねつ。」

本当にうれしい事ですつ。

かなり騒いでしまつたので、サイトウ先生の檄が飛びましたが、今日はとても良い日でした。

後日、包帯塗れの学園長を田撃しましたが、事故にでもあつたのでしょうか？



## 第8話（後書き）

なんとかネギの最終課題終りました。

いかがでしたでしょうか。

ご都合主義は否めません。

次は桜通りの吸血鬼かな。

更新頑張りたいと思います。ではまた。

気づかない者がいれば気づく者もいる  
どちらがいいのであるつか

第9話

～異常性～

3学期終了式

「フオフオフオ。 それでは、皆さんも紹介しておひづ。 来年度から、  
正式に英語教員として赴任する事になった、ネギ・スプリングフィ  
ールド先生じや。」

ネギは正式に教員となり、4月からは3・Aクラス担任となること  
になった。

・千雨 s.i.d.e.

な、なにいいいいいつ？

おいおい、マジか。

教室に戻つても、依然として疑問の解決法は存在しない。

いや、確かに優秀だ。高畠先生よりも分かりやすいし、ネイティブ  
の発音との差も良く分かる。

教師としても頑張っている。3学期末のテストが良かつたのは、あ  
の子供先生とサイトウ先生のおかげだろう。  
だけどな、だけどだ。

10歳のガキだぞつ？労働基準法違反だろつ？

なんでサイトウ先生は、そんな冷静に後ろから見守つているんだよつ？

誰か突つ込めよおおおおおつ。

- side end -

2 - Aは、ネギが続投して担任となること、学年1位に贈られるトロフィーをかざしながら、歓喜の声を上げたりして、騒がしくなつている。

そんなクラスの面々をハジメは見ていた。

-主人公 side -

今日が終了式だからだろつ。幾分かこのクラスもざわついている。ネギも正式に教員になれたからか、浮ついているな。まあ、今日ぐらいは多めに見るか。

鳴滝姉妹がパーティをやろうと提案しているのを見ながら、ふと気づく。

あれは、長谷川か。

「長谷川、気分でも悪いのか？」

「あ、えつと。はい。ちょっと気分悪いので帰宅して構いませんか？」

顔を引きつりせている。

なんか、妙だな。

「それなら、仕方ないな。一人で大丈夫か？」

「はい、大丈夫です。では、さよなら。」

ふむ。

（メア。長谷川に着いていつでもらえるか？何か様子がおかしかった。）

（千雨ちゃん？いつもあんな感じだよ？）

（いや、なにか鬱憤でもたまつてそうだったのでな。それにあれば仮病だろ？）

（ふうん。それじゃ、パーティに出席させることでいいの？）

（方法は任せる。）

（了解。）

メアとの念話を終える。

俺にも、入つていいい領域とそうでない領域があるからな。メアに任せた方がよからう。後で話を聞くとするか。

- side end -

- 千雨 side -

サイトウ先生に對して少しごつきら棒だったかもしれないな。だけど、前から思つていたけど、ウチのクラスおかしいだろ。留学生も多いし、見た目小学生もいるしよ。

そして、あの口ボツ。どうからどうみても口ボボだろ。なんで誰も突つ込まないんだよ。しかも、いくらまともつていつても10歳の子供教師つ。存在がまともじやねえつ。

歩き方が少し激しくなるのを、直覺しながら歩いていると、

「千雨ちやん。」

名前を呼ばれたので振り返ると、

「あれ？ サイトウさん。」

「メアでいいって言つてゐるのに。大丈夫？ 父上じやなかつた、サイトウ先生が心配してたよ？」

ああ、ちょっと対応まずつたかな。

「いや、大丈夫だから。ありがとね、サイトウさん。」

そして、足早にそこから去る。

そして、自分の部屋に、自分の城へ入る。ここが私が私でいられる場所だつ。

メガネを外し、衣服を脱ぎ去り、コスチュームを着る。

ネットアイドルとしての裏の顔を持つこの私が、表の世界では騒がず目立たず、裏を牛耳つてトップを取る。

それが私のスタンス。世の男どもはこの私の前にひれまづくのよつ。

「へへ、千雨ちやん普段から可愛いと思つてたけど、ひつしてみると一段と可愛いね。」

へつ？

ブリキにでも、なつたように首を後ろへ回す。

そこには、いつもそのきれいな金髪、羨ましいなおいつ。と思つてゐるサイトウがいた。

「サイトウ…なぜここに?」

「いや、心配だからずっとついてきてたのに、千鶴ちゃん無視するんだもん。」

いや、せつさの会話で普通あきらめるだり? いや、

サイトウの肩に手を置き、顔を近づける。

「黙つてくれるか?」

「メアつて呼ぶのと、パーティに来たら考えてあげる。」

すごい満面な笑みだな。

将来どれだけの男を誑かすんだ?

「分かったよ、いくよ。少し待つてろ。メア。」

…ああ、メアつて呼びやすいな。

着替えて、メアと共にパーティ会場へ行く。  
パーティ会場に近づくと、サイトウ先生やクラスの面々が見えてきた。

「やつほー。千鶴ちゃん連れてきたよ。」

「つて、おいつ。」

メアが突然、私の手を掴んで走り始めた。私は、そんなに早くは走れないんだよつ。

「(;)苦労だったな、サイトウ。」

サイトウ先生が近づいてくる。「この人はあんまり嫌いになれないんだよな。

「いえいえ、やつぱ生徒が心配なんでしょう? サイトウ先生は、」  
含み笑いをしながらメアは、近衛たちのところへ合流しにいった。  
仲いいよな。

メアのまつを眺めていると、

「まあ、前から言おうとは思っていたが、このクラスはつらいか？」

サイトウ先生の言葉に、思わず顔を向ける。

「長谷川は前から、確固たる自分というものを、持っていたみたいだからな。余り親しくもしていなかつただろ？個性も強いし、あの馬鹿どもは馴れ馴れしいしな。」

「えつと。」

やべえ、何もいえない。

「この1ヶ月見てきたわけだが、メアはどうだった？不快だったか？」

これまでの付き合いや、さつきのやり取りを思い出す。

「まあ、多少は…強引なときがあるけど。なんか…嬉しかったと思います。」

サイトウ先生は、”…そつか。あいつにしては上出来だな。”と呟いて、

「こんな事気軽に言われても困ると思つが、あいつらもなかなか重いものを背負つて生きている。長谷川も自分だけがつらい、何も出来ないと思い込んでないで、少しは外を見てみてはどうだ？今日の空と明日の空は違つ。それに気づくのは、大抵全てが終えてから、という事ばかりだからな。」

サイトウ先生が空を見上げたのに釣られて、私も空を見る。

空つてこんなに青かつたっけ…。

「千鶴ちゃん。じつにきなよ。」のジュースおこしよ。

…そうだな。今日、今日ぐらこは、あいつらと馬鹿騒ぎしてもいいかもな。

「えつと、ありがと」わざいました。…私の分あるのかよ~つ。」

サイトウ先生に礼を言つて、メア達がいるところへ向かって、走る。

なんか、いろいろのもありだな。

- side end -

-主人公 side -

メアたちと合流した長谷川を見て、とりあえず安堵する。恐らく、長谷川はこの学園の異常性に少し気づきやすいのだろう。それが、長谷川の負担になっている。いくらネギが優秀といつても未熟な上に子供だ。解決にはなんだろう。こんなときに自分の力は全く役に立たんことに、腹が立つ。

やはり、長谷川の事はメアたちに任せるとか。

メアはアリカに似て、人を惹きつける何かがあるからな。良い関係を築ければ、長谷川もそれほど辛くはなくなるだろう。

木乃香も考えるという事がどういうことかを知っているし、刹那も孤独の恐怖を知っている。

さすがに、こればかりは、俺にはどうすることも出来なさそうだな。  
そして、俺もパーティを楽しむとするか。

## 第9話（後書き）

この話は難しかったです。千雨に余り干渉するのはハジメのすることでは無い。だけど、放つておくこともしないだろう。そんなわけで、こういう話になりました。やはり、難しいですね。

文才が欲しいと切に願う作者でした。ではまた。

## 第10話

騎士の休息  
愛する者は常に隣に

### 第10話

～春休み～

春休みとなり、メア、木乃香、刹那を連れて、京都へ行く事となつたハジメたち一行。  
もちろんハジメにとって、ただの旅行、帰郷の類ではなく。

近衛家家長近衛詠春と、名田上、麻帆良から来た教師としてハジメ・サイトウが、近衛家の客間で対面している。

「そうですか。…修学旅行の行き先は、…ここ京都になりますか。

詠春がそう呟き、湯飲みを傾けて茶を飲む。

「ああ。ネギに古き良き日本を知つて欲しいそうだ。  
鹿威しの音が遠く響く。

詠春が湯飲みを戻し、

「ふう。目的は、西と東の友好。そして、眞実は西と東に残つてい  
る、所属を問わない過激派といったところですか？」

ハジメを見ながら推測を述べる。

「妥当だな。近右衛門も妥協点を探つていたのだろう。」

「それが、今回の修学旅行ですか。わざと、東は西を軽く見て  
いると錯覚させ、憤慨した過激派と、隙を狙つてゐる過激派を呼び寄せ  
る。」

「シナリオはそのようになるな。」

「ハジメがついていなるなら、心配は無いのじょうけれどね。」

「詠春が笑みを浮かべながら言つ。」

「さて、な。敵対勢力は必要だが、過激な者は双方共に不需要といふだけだな。」

「固い話もここまでにしましょ。久々に京都を回つてきはどいつですか？木乃香たちは、もう行つたみたいですが。」

「そうさせてもらおう。京都の街は久しいのじな。」

-アリカ side -

相変わらず良い眺めじや。

庭を眺めながらやう思つ。数年前まではここに住んで居つたといつのにの。やはり、麻帆良は騒がしいから。

麻帆良も好きじやが、やはり、京都の街並みやここの庭のよつな景観の方が妾は好きじやな。

古都の方が妾に会つておるのじやう。

「待たせたな、アリカ。…行くとするか。」

「うむ。」

そう言つて、ハジメの腕に体を寄せる。ふふ、いつの間にかこの位置が定位置になつておるわ。

「どうかしたか？」

「いや、なんでもない。今日はどいを回るのじや？」

「ふむ、そうだな。アリカに似合つ着物でもまた買うか。アリカによく似合つていたからな。」

その言葉に思わず笑みを浮かべてしまつほどい、やはり妾はハジメが好きで、愛しておるのじやな。

「では、しつかり見繕つてほし。のじや。ハジメが選んでくれると嬉しいから。」

「…そ、うか。」

ふふふ。照れておる照れておる。

ハジメの反応を楽しみながら、共に京都の街へ繰り出したのじやつた。

「のう。ハジメあの甘味屋は、数年前はなかつたのじや。入るぞ。」  
久しづりの京都の街は、懐かしい場所や、新たな発見があつて、実際に楽しいものじや。

「さつきは数年前にあつた甘味屋に入つていなかつたか?」

む、細かい奴じや。

「それとこれとは別じや。行くのじや。」

ふむ、和菓子の店であつながら、和洋折衷の新商品も出しつる。  
なかなかやりおる。

「この白玉ソフト餡蜜とじやの、抹茶を頼む。」

「まだ、食べるのか?」

団子と抹茶を食べ終えたハジメ。

「別腹といつじやひ?」

「…もう何も言わん。」

むう。何だというのじや。ん?この白玉が欲しいのかの?

「ほれ、あーんじや。」

白玉を差し出す。

「…。」

「じつしたのじや?」

首をかしげそう聞くと、ハジメはやつと口に入れたのじやつた。

それからも、新しく出来た雑貨店を見ながら歩いておった。ときたま、「新婚さんですか?」と聞かれたりして、嬉しくなったのは秘密じゃ。

そして、いつもお世話になつておる呉服屋に足を向ける。

店内に入ると、顔見知りの店主がちょうどおつた。

「おや、これはお久しぶりですね。サイトウ様。今日ほどのようなものをお探しで?」

「なに、久しぶりにこちらに來たのでな。妻に買おうと思つてな。ハジメが話を進めるので、妾は適当に商品を見ていく。この時間も、なかなか良いものなのじや。」

⋮⋮⋮

「アリカ。」

「選び終わつたのかの?」

「ああ、これははどうだらうか?」

ハジメが選んだのは、白地の生地を貴重とし、桃色の花を彩つた、なんとも可愛らしいものじやつた。

「春だしな。それに、たまにはこうこうものを着た、アリカが見たくてな。」

いつもは藤色などが多かつたしのう。

「ふふ、有難くもらつとするかの。」

「お気に召したようで何よりです。お姫様。」

ハジメと顔を見合させ、笑みを浮かべる。

買い物を終え、最早定番となつた、夕日の見える丘。

「すまんな。最近は忙しくて、なかなかこうこうとも出来なかつたからな。」

「いいのじや。ハジメは妻と一緒にいるだけで休まるのじやろ?」

「くく、覚えていたのか? そうだな。アリカたちと一緒にいるだけで、俺は休める。安心するのだな、共に歩んでくれる者がいるということに。」

ハジメが妻を抱き寄せ、髪をなでる。

ふふ、くすぐつたのう。

静かに唇を合わせた後、近衛の家に戻る。

安心せい、ハジメ。妻は常にお主と一緒にじや。それは幸せと共にの。

- side end -

その光景をこつそり見ていた3つの影。

「うああ。ラブラブやな。ハジメのおじさんとアリカさん。」

「道中は、新婚と間違われていましたね。」

「もうね、見た目が若いからね。2人とも。」

こつそりといつても、恐ろしく離れた場所でハジメたちを見ていた木乃香と刹那、メアの3人組。

甘味屋巡りをしていたら、いちゃついているカップルがいて、よく見てみたらそれはハジメたち。

思わずあとをつけてしまつた3人組は、最後のキスシーンまで見てしまい、思春期の彼女達には少々刺激が強かつたようである。

「というより、ハジメ様格好良すぎですね。あのさりげない優しさは、いつたい何なんですか？ウチもされてみたいつ。」

だんだん口調が巣に戻る刹那。

「ええなあ。ハジメのおじさんみたいな人おらんかなあ？」  
普通の生活は、もう出来ないことが分かっている木乃香は、ただ願う。

「父親としては、少々厳しいですかね？」

流石に娘としては、親のそれを見るのは少々きつかったようである。

こうして、少々話を広げてしまった彼女らは、家に帰るのが遅れたのであった。

もちろんハジメは気づいていたので、少々寝るのも遅れたそうだ。

## 第10話（後書き）

久しぶりのハジメとアリカ。いかがでしたでしょうか。作者は日常とか書くのが本当に苦手だと再認識いたしました。

あまり更新に間が空かないよう頑張りたいです。ではまた。

## 第11話

時の歯車は加速する  
されど平穏は終わらず

### 第11話

～春休み・2～

満月が浮かぶ夜空のもと、世界樹の根元に立つ男がいた。  
男は幹に手を沿え、見上げる。

「やはり、蟠桃の魔力が高まっている。。。」

男は呟くと、聳え立つ世界樹を見上げる。

「計画の実行を早めねばならんな。。。準備を終えていたのが幸いか  
。。。」

男はそつそつと、踵を返し去つていった。

・メア s.i.d.e .

今日は月に一度家に帰る口。

寮生活を始めるにあたつて、母様と決めたことだつたりする。

この日は母様に料理を教えてもらつたり、父上に稽古をつけでもらつたりしている。

京都では、父上と母様がずっと仲睦まじかつたので、このちやんとせつせつやんとばかり遊んでたのもあるしね。

お、家に着いた。

「ただいまー。父上、母様。」

「おお、珍しいの。おかえりなさい、メア。」

母様が出迎えてくれた。

靴を脱ぎながら、家の中に入る。

「今日は家に帰る口じゅん。それに父上に稽古をつけてもらおうかと思つて。」

母様とリビングに入りながら話すと、母様はキョトンとした顔で、  
「聞いておらんのか？ハジメならおらんべ。」

「え？」

父上、またいないの？

「出張ということじゃ。春休みの前日位に戻るそうじゅべ。」  
えー。京都で詠春さんに稽古つけでもらつたから、久しぶりに父上  
とやりたかったのに。

「そつかー。残念。」

まあ、いいや。今日は母様に料理とか教えてもらおう。

昼も過ぎ、母様と他愛無い話をしていると、

「そういえば、メア。メアは好きな子は出来たかの？」  
と聞かれた。

「えつ？いや、いないけど。女子中だし。」

身近な男性か…。先生達はみんな先生としか思えないしなあ。ネギ  
先生は余りタイプじゃないしねえ。

「ふむ、それもそうじゅのう。それに、メアはなんだかんだ言つて  
も、ハジメのことが好きじゅしな。」

「な、突然なに言い出すの？母様つ。」

若干、顔が熱くなるのを感じながら母様に言つ。

「ふふ。照れるでない。明石教授のところも、娘がそつじゅと言つ  
ておつた。」  
なつ。

「裕奈と一緒にするなつ。」

私はあそこまでファザコンじゅ無いから。

「ふふふ。まあ、メアにもいづれ、いい巡り会わせがあるじゃろ？  
なにが、運命の出会いか分からんものじゃ。楽しみにしておるがよ  
い。」

……その言葉は嬉しいんだけど、なんかいやな予感。  
「妾もハジメと出合つた時は、こうなるとは夢にも思わんかったが、  
さりげなく妾を護つたときの、奴の後姿がじやな？……」  
あー、惱気が始まっちゃった。

……

そんな会話をしながら、そろそろ口も傾き始め、  
夕食の献立を考えることになった。

「メア、夕食は何を食べたい？」

「ん~。やっぱ春だから、春っぽいのが良いなあ。

「春野菜のてんぷらとか良いなあ。」

「ふむ、それに筍ご飯でよいか。では、買い物に行くかの。メア。  
はあい。」

母様の後ろにつきながら買い物に付き合つ。

商店街を歩いていると、母様くらいの年のお姉さんが、

「あら、今日はご主人と一緒にじゃないの？」

「夫は出張に行つてしまつたもので。今日は娘と2人で食事です。  
娘のメアです。」

おお、これがご近所づきあいつて奴なのかな。母様に紹介されたの  
で、少しあ辞儀する。

「あらあらまあまあ、お母さんに似て美人ねえ。将来が楽しみだわ

あ。」

うう、なんか恥ずかしい。

「…ありがとうございます。」

「ふふ、照れちゃつたのかしら。」

お姉さんは、笑みを浮かべて手を自分の頬に添える。

「なに、褒められ慣れておらんだけじゃ。買い物の続きがあるので、これで失礼するのじや。」

「あら、お邪魔しちやつたわね。またね。」

「うむ。また。」

手を振りながら、去つていったお姉さん。

見送つた後、少し歩いて聞いてみた。

「母様の友達？」

「そうじや。麻帆良に来てから、いろいろな人とあつたからのう。」

「へえ。」

美人には、美人の友達が出来るものなのかなあ。

商店街で、夕食の材料を買つていく。

結構いい品が多くて迷うんだよね。

「こつちの方が身がしつかりしてんじやない？」

「ふむ、そうじやな。こちらにするかの。」

母様と見比べながら、買い物を済ましていく。

帰つてから、母様と一緒に料理をして、夕食の時間となつた。

「うん、おいしいつ。」

「ふふ、メアも手伝つてくれたからじやうつ。」

なんか、このちゃんと一绪の食事もいいけど、こうして母様たちと食事するのもやっぱりいいなあ。今日は父上はいないけど。

そつこえば、

「父上、出張つて言つてたけど。なにかあつたの？」

ネギ先生の補佐が、主な仕事になるとか言つてたと想つんだけど。

「なに、予定より、計画を早めることになつたそうじや。それで、

少々仕上げのための調整といったところかの。」

「ふうん。」

計画ねえ。なんか大戦時代の因縁とかを、片付けるためのものとは聞いたけど。

私に教えても、やるじと無いから、教えてもらつて無いんだよねえ。

つまんないの。

食事も終わつて、母様とお風呂に入り、就寝の時間になつた。

「それじや、電気を消すだ？」

「うん、こいよお。」

家に帰つた日は、母様といつて寝てる。さあがに父上とまつり寝れないのでね。

「おやすみ、母様。」

「おやすみなさい、メア。」

こつして、私の春休みの一日は終つた。  
明日も良い一日ありますよ。

## 第11話（後書き）

昨日は時間がとれず、投稿できませんでした。

時間と文才が欲しいです。ではまた。

## 第1話

新たな気持ちで始める  
また新たな物語も開かれる

### 第1話

「桜通りの吸血鬼」

満月の夜…月明かりで怪しく光る桜通りを歩く少女が一人。

「ふんふふ～ん。ネギっく～ん。」

佐々木まき絵は、夜の桜通りで一人涼んでいた。

強い風が吹いた。

「きやつ。春一番つてやつかな～。」

まき絵が桜を見上げると、その風景の中に歪な者が紛れ込んでいた。

「ふえつ？」

そこには、黒いトンガリ帽子、黒いローブを身に纏った影が佇んでいた。

「悪いが、その血…少々分けてもらひうぞ？」  
影は、まき絵に襲い掛かる。

「え、あ…いや。いやあああああああ。」  
少女の悲鳴が木霊する。

ただ、満月だけが妖しく光っていた。

-ネギ side -

「3年A組つ、ネギ先生アソンドサイトウ先生一つ。」

「はい、今年度もよろしくお願ひします。みなさん。」

やつぱり皆さん元気がいいですねえ。

「改めまして、3年A組の担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから一年間よろしくお願ひしますね。」

サイトウ先生に目を向ける。

「俺も引き続きネギの補佐をすることになった。あまり、面倒をかけてやるなよ?」

「「はーーっ。よろしくーっ。」」

元気に反応してくれる皆さんを見渡す。

こうしてみると、3学期いろいろ空回りしていたことが分かるなあ。まだ、ろくに話していない人も多い。やつぱり、生徒と『マニアケーション』が取れないとね。

つ。

突然背筋が凍るほどの寒気がした。なんだ?強い視線を感じる。

視線のもとへさりげなく目を向けると、あれは確かにクラス名簿と見比べる。

26番エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルか。

タカミチは、なんか困つたことがあれば相談しなさいって書いているけど、とてもそんなことができそうに無いよ…。あの視線はなんだつたんだろう?

肩に手を乗せられた」と、思考を中断する。

「ネギ、考え方はその辺にしろ。今日は、身体測定の日だ。」

「あつ、そうでした。では、みなさん、身体測定があるので、準備

をお願いします。では、サイトウ先生、行きましょうか。

「はーい。」

教室を出て、サイトウ先生と今後の授業の話しあいをしてくると、「先生ーーっ、大変やつ。まき絵が…まき絵がーーっ。」

和泉さんこちらに向かつて走ってきた。

それよりも、佐々木さんがどうかしたのでしょうか? 佐々木さんはH.R.ではいなかつたと思いますが。

「落ち着いてください、和泉さん。佐々木さんがどうかしたのですか?」

「えーと、保健室に来てください。」

保健室に入ると、佐々木さんが、ベットで横になっていた。

「なにかあつたのでしょうか? 佐々木さんは。」

和泉さんに聞く。

「それが、桜通りで寝てたらじいんですね。」

桜通りで…。

「ふむ。桜通りの吸血鬼か。」

「サイトウ先生、なんですか? それ。」

「いや、最近桜通りで噂になつてゐる変質者の話だ。」

変質者…。まさか、佐々木さんの身になにかつ? 思わず、佐々木さんに近づくと、違和感を感じる。

「、」

微量だけど、魔法の力を使つた…その残滓を感じとれる。ま、まさか…魔法使いがこんなことをつ?

これは調べる必要があるかもしれない…。

もしかしたら、学園長に協力してもらわなければいけないことになるかも。

そんなことを頭の片隅に置きながら、今日の授業を終えていった。

- side end -

学校も終わり、放課後。少女達は帰宅の途中であった。

少々、話に興が乗ったのか、彼女らが帰るときには、満月が浮かぶ夜になっていた。

「じゃあ、先に帰つててね。のどかー。」

「はいー。」

のどかは桜通りに差し掛かると、

「あ、桜通り。」

思わず、昼間身体測定のときに聞いた噂を思い出してしまった。不気味なほど、静かな桜通りに風が吹き、桜を揺らしていく。その音すらも不気味に奏でながら。

「…こわくない。…こわくないです。」

自分に言ひ聞かせるように、歌を歌いながら桜通りを歩くのどか。

少し歩くと、風で揺れた音ではない、異質な音が聞こえ、思わず立ち止まり、音のした方へ顔を向けてしまうのどか。

「えつ。」

そこに見えたのは、街灯の上に佇む黒い影。

「ひつ。」

思わずのどかは、喉が引きつったような声を出す。

「27番富崎のどかか…。悪いが、少々その血分けてもいいだ？」「」

牙が妖しく光る。

そして、のどかは直感する。これが、桜通りの吸血鬼なのだと。影が襲い掛かってくるのを、のどかはただ、悲鳴を上げることしかできない。

そこに、

「待てっ。僕の生徒に何をするつもりだつ。」

突然現れたネギが影に呼びかける。

影の動きが止まる。ネギは、飛びながら詠唱を始める。

「ラス・テル・マ・スキル風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえ  
る」

ネギの右手に光が収束する。

「魔法の射手・戒めの風矢」

ネギの右手から放たれる、束縛の光の矢。

しかし、

「もう気づいたか…。氷櫃」

レフレクシオ

その全ては、氷の櫃にはね返される。

「なつ。僕の魔法が全てはね返されたつ？」

ネギは戸惑いながらも、のどかの安全を最優先として、のどかの傍で構える。

はね返したといつても、ネギの魔力は凄まじく、衝撃によつて、影のトンガリ帽子は飛んでいった。

その姿を見て、ネギの顔は驚愕に彩られる。

なぜなら、

「なつ、あなたはつ。マクダウェルさんつ。」

そこにいたのは、ネギのクラスメンバーでもある、H・ヴァンジエリ  
ン・A・K・マクダウェルであったのだから。

## 第1話（後書き）

桜通りの吸血鬼編に入ります。  
原作引用が多くなりそうですが、ご容赦を。

夜にもう1話更新できそうです。ではまた。

## 第2話

少年は目標と義務に迷う  
吸血鬼は少年と遊ぶ

### 第2話

～邂逅～

満月が浮かぶ夜、対峙するは2人の魔法使い。

今なお正義を、己の目指す者を探している少年と、はるか昔より、己の矜持のままに悪を貫いてきた魔女が向かい合ひつ。

-ネギ side -

「マクダウエルさんつ。なぜ、あなたがここに？」

富崎さんを庇いながら、胸中から出てくる疑問を投げかける。

マクダウエルさんは、先程の魔法の衝突で負ったのか、人差し指の傷口から出る血を舐める。

「10歳にしてこの力…。流石は奴の息子だけある。」

お父さんのことを見つけていた…？

「…何者なんですか？あなたは、魔法使いだということに、こんなことをして。」

魔法という力は、誰かを助けるためにある力なのにな。

僕の言葉にマクダウエルさんは、

「この世には…いい魔法使いと悪い魔法使いがいるのを…ネギ先生。」

笑みを浮かべながら、試験管のようなものを両手に構える。

あれは、魔法薬かつ？

「ハコーゲカンバスクサルマテイオ  
氷結武装解除つ」

魔法薬をこちらに投げつけ、マクダウェルさんが詠唱する。

しまつたつ。武装解除かつ。

富崎さんを後ろに庇いながら、魔力を持つて抵抗する。  
「ぐつ。」

抵抗したせいで、あたりに粉塵が舞い上がる。

「さて、パイルドライバーまで相手に出来ないんでな。ここで退かせて貰うよ、ネギ先生。」

そう言って、走り去るマクダウェルさん。

くつ、富崎さんをこのままにしておくわけにはいかないし。

「ちつ、遅かったようだな。ネギ、富崎は大丈夫か？」

聞き覚えのある声に、緊張が一気にほぐれる。

「さ、サイトウ先生つ。富崎さんをお願いしますつ。僕は、吸血鬼の方を追いますのでつ。」

いくらサイトウ先生でも、魔法使い相手では厳しいと思つ。なので、富崎さんをサイトウ先生に頼んで、マクダウェルさんを追つた。

「なつ、おい。待て、ネギつ。」

サイトウ先生が何か言つてゐるのが聞こえたが、僕に気にしてゐる余裕はなかつた。

- s i d e e n d -

- エヴァンジエリン s i d e -

ちつ。まさか、これほどまでに早く戻づかれるとはな。しかもあんな坊やに……。

「待つてください。マクダウェルさん。」  
坊やの声が聞こえたので、後ろを振り返ると、坊やが後ろに迫っていた。

なるほど、坊やは風が得意だつたな。

橋が見えたところで、飛翔する。この程度なら、封印されていても造作ない。満月の夜だしな。

それに対して、ガキの癖に冷静な奴だと思つたら、なかなか面白いじやないか。

てつくり、富崎を安全な場所へ連れて行くとばかり思つていたよ。

「待ちなさい。マクダウェルさん。どうしてあんなことをつ。

「ふははは。先生つ、奴のことを知りたいのではなかつたのかつ？  
私を捕まえたら教えてやるよ。」

「…今の僕は先生ですつ。今は、あなたを捕まえることが優先ですつ。」

「くくく、捕まえることには変わり無こと。

思わず笑みを浮かべてしまつ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギスティル風精召喚つ。剣を執る戦友。  
エウオカーテイオ・ウアルキヨセタベル本一リア・グラティアーリア

「坊やの周りに、分身？

いや、精靈魔法か…。10歳とは思えん魔力だな。

魔法薬を取り出し、精靈に投げる。

ちつ、やはり殲滅は出来んか。

「これで終わりですつ。 風花 フランス・エクサルマティオ 武装解除つ。」

ローブが消え去る。

ふふ、やるじやないか坊や。

近くの建物に降り立つ。

「大人しくしてください。聞かせてもらいますよ。なぜこのようなことをしたのか、そして、お父さんのことも。」

「父親か… それは、千の呪文の男のことか？」

坊やの顔が驚きに目を開く。

くくく、分かりやすいな、坊や。

「とにかく、あなたにはもう抵抗する武装が無いはずです。大人しく、負けを認めてください。」

それは、間違いだよ。坊や。

後ろに茶々丸が降り立つ気配。

「やれ、茶々丸。」

「了解です。マスター。」

「なつ。ラス・テル・マ・スキル・マギ痛つ。」

茶々丸が一気に坊やに近づき、『ヒーピンを放つ。

その後も坊やが魔法詠唱をしようとしても、茶々丸が止める。ふはははつ。いい氣味だよ坊やつ。

「茶々丸は私のパートナーでね。紹介しよう。」 ミーステル・マギ 魔法使いの従者”、  
絡繰茶々丸だ。」

茶々丸が、こちらに戻つてくれる。

「ええつ。パートナーつ？」

やはり、まだガキだな。パートナーなどは、まだまだ先の話だらうしな。

「茶々丸。」

「申し訳ありません。ネギ先生。」

茶々丸に坊やを押さえつけようつに命令する。

「あう、ぐああつ。」

ふふふ。

やつと、やつとだ。

「やつと、この呪いから開放される。」

思えば長かつた。万感の思いをこめながら、ネギに近づく。

これで、呪い開放されれば、後は。

後は、あいつを、パイルドライバーを私の前に跪かせて屈服させるだけだ。

「…の、呪い？」

坊やには疑問だらうだらうな。まあ、今から死ぬ理由を聞かせても良かろう。冥土の土産という奴だ。

「冥土の土産に教えてやろう。私はなあ。」

今までの記憶が蘇る。勘違いから奴に付きまとい、拳銃の果てには封印され、お気楽な女子中学生に囮まれた田々を…。

坊やの胸倉を掴み、今までの鬱憤を晴らす。

「私はなあつ、貴様の父親に敗れて以来、この地に封印されつ、もう15年間もだつ。あの能天気な奴らのような、女子中学生と一緒に勉強させられているんだよつ。」

「そんなことがつ。」

「「」のばかげた呪いを解くには、だ。奴の血を引く、貴様の血が大量に必要なわけだ。よつて、死ぬまで吸わせて貰うつぞ？」

坊やの首を露にさせる。

「へ？ そんなあつ。」

坊やが泣き喚こつが関係ない。封印をとくのに必要な犠牲といつだけだつ。

首筋に牙をつきたてようとしたその瞬間、

「マスターつ、何かが凄まじい速度で飛来していますつ。」

知覚した瞬間、坊やを突き飛ばし、後ろへ飛びずさる。

私がいた場所に何かが降り立つ。その衝撃で粉塵が舞い上がる。

まずいな。少々坊やに夢中になりすぎた。奴が「」に来る時間を与えてしまつたか…。

「やあ、こんな夜更けに何のよつだい？ サイトウ先生。」

「なに、出来の悪い生徒に、少々お灸を添えにな。」

粉塵が薄くなるとそこには、パイルドライバー…ハジメが立つていた。

「さ、サイトウ先生つ。」

坊やが涙を目に浮かべながら、ハジメに近づく。  
そんな坊やにハジメは、

「コピンを放つた。

「ぎゅうつ。」

…大丈夫か？車が正面衝突したような、凄まじい音がしたが。

ハジメは更に、倒れている坊やに向かつて、

「この阿呆がつ。貴様の立場を考えて行動しろつ。ましてや、単独行動をするなど、もつてのほかだつ。」

「す…すいません。で、でも相手は魔法使い…あつ。」

魔法使いといつ言葉で思わず口を手で封じる坊や。いや、遅い上に、ハジメは裏の関係者だぞ？ああ、知らせていないんだつたな。

今のうちに逃げるか。

「…茶々丸、退くぞ。」

「ハイ。」

ハジメの方も、まるで今のうちに逃げるといわんばかりだな。…どういうつもりか知らんが、助かつたことに変わりは無いが。

茶々丸に抱えられながら、夜空を飛ぶ。

次こそは必ず、封印をとき、私が受けた屈辱を味あわせてやる…。絶対だぞつ。

## 第2話（後書き）

読んで頂もありがとうございます。ではまた。

吸血鬼として屠るべきか  
生徒として信じるべきか

## 第3話

「生徒は吸血鬼

「去つたか…。」

エヴァンジエリンと茶々丸が去つた方向を見ながら、ハジメが呟く。  
本来ならば、捕まえるところであった。だが、ネギがいたために、  
戦闘は控えたのであった。

「えつとですね、これはですね、魔法…じゃなくてですねつ。」

魔法がばれたのではないかと焦るネギに、

「安心しろ。俺は同業者だ。…全く、教える気など無かつたのだが  
な。」

呆れながら、自らが裏の世界の人間であることを告げる。  
その事実に、ネギは一瞬何を言われたのかを理解できず、

「へ？」

間抜けな声を出した。

「えええつ。魔法使いなんですかつ？サイトウ先生は？」

驚きでハジメに迫るネギ。

ハジメは、そんなネギを鬱陶しそうに、手で払いながら、

「魔法使いではない。協力者という関係だ。傭兵みたいなものだと  
思え。」

魔法関係者であるという最低限の情報だけを述べ、これ以上問われ  
ないように、嘘を並べる。

「さて、ネギ。なぜ、単独行動などした？」のような事態、学園長に報告することを考えなかつたのか？」

ハジメはネギに向き直り、今夜のことを見つめ。

その目は鋭く、ネギを萎縮させるには十分であった。そして、ネギは自分が未熟なので、サイトウ先生が補佐しているのだろうと想に至つたのであつた。

「す、すいませんでした。僕の思慮が足りませんでした。」ネギは、今夜の行動を思い返し、思い上がつていたと同時に心配をかけたことを謝罪した。

「今夜のことは良く考えておけ。…では、学園長室に報告に行くとするか。」

「はい。」

ハジメはネギと共に、学園長室へ向かつた。

閑散とした夜の校内の中を歩く、ハジメとネギ。

学園長室にたどり着き、

「邪魔するぞ、近右衛門。」

ハジメがノックもせずに部屋へと入る。

「めずらしきの。どうかしたのかの？」

珍しい組み合せでの来訪に、山のよつよつした資料の間から、驚きよつも先に疑問を投げかける学園長。

「なに、問題児がいてどうよつとかと、相談しようつと思つてな。」

ハジメが笑みを浮かべながら、学園長に用件を語つ。

「…ふむ。」

学園長は吸血鬼の噂を思い出していた。

ハジメの様子に、噂の吸血鬼はやはりエヴァンジエリンであったかと学園長は考え、

「これは、ネギ君にも関係ある」とじやしな。話をするとしようかの。」

書類の仕事をいったんやめ、話をすることを決めた。

「ネギ君は、エヴァンジエリンに何か聞いたのかの？」

ソファに移り、学園長はネギにさつき起こつたことを聞き、質問する。

「あ、はい。なんでも、お父さんに負けて、麻帆良学園に封印されたと。後、15年もこの地にいることも聞きました。」

ネギの発言を聞き、どこから話すかと学園長は髪を揉みながらしばし考える。

この間、ハジメはただお茶を飲みながら事態の推移を考えていた。

「そうじやの。エヴァンジエリンが言つていたことはその通りじやな。15年前、エヴァンジエリンはナギに破れ、この地に封印された。」

「な、なんで、マクダウェルさんがこの地に封印されなければいけなかつたんですかっ？」

ネギの問いに、ネギの目を見ながら、学園長がそれに答える。

「そもそも、エヴァンジエリンは闇の福音ダイク・エヴァンジエルと呼ばれた、賞金首の魔法使いじやつた。吸血鬼の真祖ハイディライト・ウォーカーと呼ばれる魔法使いじやつた。」

「…吸血鬼の真祖…。」

吸血鬼の真祖であったという事実に驚きを隠せないネギ。

「じゃが、15年前より更に前かの？何を考えていたのか知らぬが、ナギにくつづいておつての。聞いてみるとナギは、身に覚えの無い

ことで付き纏わっていたそつじや。」

ちらりとハジメを見る学園長。しかし、ハジメは特に思つといふがなく、受け流していた。

「それで、ナギの限界が超えたんじやうつなあ。麻帆良で、登校地獄の呪いをエヴァンジエリンにかけて去つていきました。あの馬鹿魔力で、の。」

そうして、ナギが今だ呪いを解きにも来ず、今に至るといふわけじやな。

そつじやで、学園長は話を締めた。

「さて、今の話を聞いて、ネギ君はエヴァンジエリンをどうするつもつじや？」

期待の若干こもつた目で、ネギを見る学園長。

「ほ、僕は、話したいと思います。やっぱり、いけない事はいけないと言いたいです。」

ネギのその言葉に、今まで静観していたハジメが口を開く。

「それでも、吸血鬼被害が増えたらどうする？」

「それは、僕が止めてみせます。その上で、話し合いたいと思います。マクダウェルさんがどんな人でも、話さなければ分かりません。それに、僕は自分で確かめたいと思いますから。」

ハジメに向かつて真剣な目を見せながら、自分が甘いと思つていても、それでも自分の考えを述べるネギ。

場に沈黙が流れるが、ハジメがふつと笑みを浮かべ、

「ならば、どこまで出来るかやつて見せる。なにかあれば、協力はしてやる。」

その言葉にネギは笑顔になつた。

「そうじやな。それじやわしは、他の生徒が襲われんよつて、エヴァンジエリンに釘を刺しておくかのう。」

そんなネギを見て、学園長も協力を意思を示した。

「あ、ありがとうございます。」

そんな学園長とハジメにネギは礼を言ったのであった。

主人公 side

学園長室から出て、ネギと共に寮へ向かっている。

しかし、マクダウェルがこの地に封印をされていたのは知っていたが、あのような理由があつたとはな。まあ、訳も分からずついて回られたら、封印するナギの気持ちも分かるが。

近右衛門の話から察するに、マクダウェルの目的は、ナギの血を引くネギの血で、己にかかっている呪いを解呪することだらう。ネギはああ言つていたが、マクダウェルの目的を考えるとやはり、戦闘は避けられんだろうな。そのとき、ネギをどうするかが問題だな。

現状、ネギがマクダウェルに勝つのは難しいだらう。封印されているといつても、経験の差が激しすぎる。

それに、絡繆もいる。今のネギの戦闘能力は、従者がいる魔法使いを相手に出来るものではない。

俺が介入することになるかも知れんな。最悪、教え子を葬ることになるか…、あまり教育上よろしくはないが。

それに、ネギが言つていたとおり、マクダウェルがどのよつた奴かを確認しないことには、流石に手を下せんしな。

この15年、普通とはいかんが、特に何かをしでかしたというわけでも無い。

やはり、現状はネギを補佐する」ことが、そのまま奴の牽制になる……  
といふことか。

夜の見回りを増やし、周囲を警戒しなければいかんな。昼間にかかる  
つてくれるような阿呆なら、「し易いのだがな……。

今日は良い満月だと思つたのだがな……。

夜空を見上げて思つ。

「あの、ありがとうございます。サイトウ先生。」

思考を続いていると、隣を歩いていたネギが突然礼を言つてきた。

「なにがだ?」

何に対する礼なのか分からぬ。

「いえ、やはり、マクダウエルさんが悪いことをしたのは事実です  
から。それでも、僕が確かめたいと言つたら、協力してくれるとい  
つてくれたことにです。」

ああ、そのことか。

「ネギ。お前が言つていたことは甘い。それはお前も分かっている  
だろう。それでも、お前の考えは人として正しいと思つ。自ら見た  
ものでしか人というものは分からんからな。」

噂だけで、何かを決めるなど阿呆のやることだ。噂に振り回されて  
もろくなことが無いだろうに。

「怖いですけど、それでもマクダウエルさんは僕の生徒ですから。  
話さなきや分からぬこともあると思つんです。」

ネギが握り拳を作つてこちらに笑みを向ける。

そうだったな。今の俺は”先生”だつたな。ならば、教え子のこと  
を第一に考えるべきだつたか。

俺もまだまだ未熟ということか。

意気込んでいるネギを見ながら、そう思つ俺であった。

### 第3話（後書き）

最近書く時間が減ってしまったので、今日中に吸血鬼編終わらせる  
れたらいいなあと思います。間が空くとどうしても駄目な部分が露  
になってしまいますので…。

ではまた次の更新で。

## 第4話

大切な者の傍にいるのに人であるかないか  
そんなことは些細な問題なのかも知れない

### 第4話

「からくつ

・ネギ side

うう。怖い……だけど、マクダウエルさんも僕の生徒なんだ。まずは、話さないことには何も始まらないつ。

タカミチがないので、簡単にパンを焼き、スクランブルエッグで朝食を済ましながら、僕は決意した。

決意したのだけれど、

「えっと、マクダウエルさんは……？」

「マスターならば、学校には来ております。すなわちサボタージュ

です。」

マクダウエルさんがいなかつたので、絡繆さんに聞いてみると、そんな返答があつた。

「ちゃんと授業には出てくださいよ。

「お呼びしますか？」

昨夜のこともあるから話がしたかつたけれど、改めるヒヤッぱり怖い。

「いえ、お気になさりや。やる気がなかつたら、出ても意味が無い  
と思いますので。」

そんな言葉も、僕の心中から考へると、情け無いとしか思えない。

気分を切り替えて、授業を始める。

サイトウ先生は、僕が正式に先生になったといつゝことで、今日は他のクラスを見回っているそうです。

僕ひとりでどれだけできるのかを知りたいのと、3・Aが2年学期末テストが良かつたのもあるみたいで。

それにサイトウ先生は、昨夜のことを感じさせないよつて振舞つていました。

僕も見習わないといけません。

「それでは、新しい教科書になつたことですし、まずは皆さん読んで下さいね。」

さあ、授業授業。

正式に先生になつたんだから、ちゃんとやらないとねつ。

⋮⋮⋮

「ふう、終わつたあ。」

職員室で、今日片付ける書類と明日の授業資料を作成し終えた僕は一息ついていた。

やつぱり大変だなあ。先生をやることになる前は、先生が授業以外も何かするなんて考えていましたから。

「ふむ、多少は慣れたようだな。」

「あ、サイトウ先生。はい、やはり大変ですね。」

いつの間にか隣にいたサイトウ先生が、僕の作った書類などをチエックしている。

サイトウ先生が資料を見ながら、

「そういえば、今日マクダウェルがいなかつたが、何か聞いているか？」

⋮あ。

「…えつと、サボつたみたいですね。」

忘れてた。今朝の決意は、どこへいったんだ？僕。

サイトウ先生が書類から田を離し、僕に向く。

「そんなことで、話し合いなどできるのか？」

「そうですね。明日は話し合いをしたいと思います。」

よし、明日こそはつ。

そう意気込む僕の田の前に、マクダウエルさんのサボりの事実。明日は来てくれるのでしょうか？

「…それ以前に、やはり補佐が必要みたいだな。」

「…すいません、また明日からお世話になります。」

まだまだ未熟ですいませんつ。

- side end -

翌朝、女子中等部の玄関にネギは来ていた。

次々に、登校してくる生徒と挨拶をしながら、ネギはエヴァンジエリンを待っていた。

目的は、桜通りの吸血鬼のことを話し合つことと、父親である千のサウザンマスター呪文の男と何があつたのかを聞くことであつた。

「…遅いなあ。マクダウエルさん。」

今日は早くから職員室に入り、今朝やるべきことを終えていたネギであつたが、余りに来ないので、心配になつてきただ。

「おや、私を探していたのか？ネギ先生。」

「つ。」

かけられた言葉に一瞬身をすぐませるネギ。やはり、一昨日に戦つ

た記憶は残つてゐるようであった。

「私に、なにか用かな？」

そんなネギを見て、面白いといわんばかりの、笑みを浮かべながら問うエヴァンジエリン。

「はい。桜通りのことについて、あなたと話がしたいと思いまして。

「ふふ。なんだ、続きをここでやるかい？」

エヴァンジエリンの後ろにいた茶々丸が構える。

それを見たネギがあわてた様子で、

「い、いえ、そういうことではなく。あのような行為はいけないとです。先生として、見逃すわけには行きません。」

と発した言葉に、エヴァンジエリンの片眉が上がる。

「ほう。悪の魔法使いたる私に説教か？なかなか面白いことをいうな、ネギ先生。だが、断らせてもうおつ。まあ、今日もサボらせてもらひうよ。」

そう言って、踵を返そうとしたエヴァンジエリンであったが、

「俺がそれを見逃すとでも？」

その先にハジメが立つていた。

「…他のクラスを回るのではなかつたのか？」

冷や汗をたらしながらエヴァンジエリンが問う。

「なに、やはりネギ一人では、まだ厳しくようだといつことになつてな。今日からまた、一日補佐を続けることになった。」

近づくハジメ。後ずさるエヴァンジエリン。

「俺のクラスでサボりは許さん。」

エヴァンジエリンの襟首を掴み上げ、そのまま教室へ連行していくハジメ。

「ま、待てっ。これは余りにも恥ずかしいぞっ、ハジメっ。」

その体制のまま暴れるエヴァンジエリンであったが、その手足はハ

ジメには届かない。

「サイトウ先生と呼べ、マクダウェル。まあ、田代の行いだ、諦めろ。」

「ふざけるなああああ。」

エヴァンジエリンの叫びが廊下に響き渡る。

しかし、そんな叫びも無視しながら、ハジメはエヴァンジエリンを掴み上げたまま歩いていった。

「……。」「

ハジメの行動とエヴァンジエリンに、呆然とした様子で見送つてい

くネギ。

「……僕達も行きましょうか。」

ネギは、なんとか言葉を搾り出し、茶々丸に言ひ。

「はい。」

遅れて、ネギたちも教室へ向かったのだった。

そのまま教室に入ってきたエヴァンジエリンに教室は和んだそ�だ。

主人公 side

「ふう。」「

放課後となつて、一息つく。

しかし、ネギは果たしてマクダウェルと話せるかどうかだな。

隣で必死に書類を片付けているネギを見て思つ。単純に時間が取れそうになさそうだ。

手伝える書類は片してしまつたしな、指導員として見回りに行くか。

見回りをしていると、前方に見覚えのある姿を見かける。

：絡繩か。傍には小さな女の子が泣いている。

絡繩が見ている先を見ると、なるほど。風船を手放してしまい、木に引っ掛けてしまったのか。

そう考えていたら、絡繩が飛んだ。文字通り背中から火を噴いて飛んだ。飛びすぎて木の枝に頭をぶつけている。

：なるほど。普段から接していると、絡繩が口ボットであるということを忘れてしまったな。

絡繩は風船を取ると、降りて女の子に渡す。女の子が礼を言つて去つていく。

そして、また新たに子供が絡繩の周囲に集まる。

子供を引き連れている様は、人間にしか見えんな。ああいつのを見ると、機械にも心が宿るというのも頷けるな。

マクダウェルの従者という先入観は取り去つた方がよさそうだな。階段を上っていた老婆を背負つていく、絡繩を見て思つ。

少々興味が湧いたな。話してみるか。

そう思い、絡繩に近づく。絡繩は川を注視していた。

なにがあるのか？

川を見ると、猫が入つていて段ボール箱が流れている。それを見た絡繩が、川を仕切つている柵を乗り越える。流石にこれは、見たまま放置はできんな。

「まあ、待て。絡繹。」

絡繹を呼び止め、柵を飛び越える。

「え？ サイトウ先生。」

「ちらを見て止まる絡繹を追い越し、川へと入る。

「みー。」

ダンボールを掬い上げ、戻る。

絡繹が困惑したような、不思議な顔をして立っていた。

「なに。生徒に、しかも女子にこのような真似はさせられんからな。

「しかし、サイトウ先生の服が濡れてしましました。」

何を言つてゐるんだこいつは？

「お前が入つていたら、お前が濡れてしまつていただらう。」

絡繹がちらを見る。

「私は…。」

「ああー。麻帆良の最終兵器リーサルウェポンが猫を助けたー。」

歩道に戻ると、絡繹の周りにいた子供達が、俺にまとわりつく。本当に良く好かれているものだ。

子供達を散らせた後、

「絡繹、この猫はどうするつもりだつたんだ？」

段ボール箱で鳴き続ける猫を見て、絡繹に問う。

「…あ、はい。この先の教会で猫が集まつていますので。」

「野良猫の世話をしているのか？

「そうか。では、そこに行くとするか。」

「はい。」

先程の猫を頭に載せた絡繩と共に、教会の広間へ行く。  
絡繩が来た瞬間に、それが分かつたのか猫が寄つてくれる。  
すると、絡繩が手に持つていた袋から缶を取り出した。

「ねこ缶まで用意していたのか。よく世話をしているのか?」  
絡繩がしゃがみ、いつもそれであげているのである「ねこ缶」、元の目で、ねこ缶の中身を移している。

「はい、マスターが用事でいないときや、時間があるときにはこの子達の世話をしています。」

そう言つて、絡繩が少し微笑んだように見えた。

本当にロボットなのだろうか?ロボットと認識するたびに思つてしまつ。

猫が絡繩にまとわりつくだけでは飽き足らず、俺の足元にも寄つてくる。

「ふ、こいつのもたまにはいいか。」

足元に来た猫を抱き上げる。

「サイトウ先生は猫がお好きなのですか?」

絡繩がこちらに顔を上げる。

「そうだな、好きな方に入るな。」

そう答えると、絡繩は満足したようだつた。

「まあ、絡繩には負けるがな。」

「なにがでしようか?」

絡繩は不思議そうな顔をする。

「絡繩も、猫が好きなのだろう?」

これだけ猫を可愛がつてゐるのだから、そのはずだと思つたのだが。

「すいません、…良く分かりません。」  
顔をうつむかせる絡繆。

「そういえば、中学生として扱っていたが、絡繆がこの世に生を受けたのは、ほんの数年前だったか。

ならば、自分の感情も分からんのかも知れんな。

「自らこうしたいと思つたのであります?」

「…はい。」

「ならば、好きなのであります。」こうしたが…この空聞が、な。

「私はロボットです。そのようなことは無いかと思われます。」  
そこで、否定するのか。

ふむ、何か劣等感でもあるのか…。それも感情だと気づけばよいが、最初に認識するのが、それというのは余りに味気ない。

「否定はするな。自らが何者であるかと、自らが思つて行動したことをのだろう?ならば、なぜそつしたかぐらい考えておけ。」

それが、猫相手だとしても…な。

「…わかりました。」

「絡繆が、自ら考え、自ら行動することに何かを感じ取れたのならば、そのときは、眞の意味でマクダウホールの従者になるのでありますな。」

まさにマームスターであるな。機械に魂を宿す…か。

「すでに、私はマスターの従者ですが?」

分からないと顔に出ている絡繆を見て思わず笑みがでる。

「…ああ、人間であるないなど、些細な問題だつたな。  
ここにはもう、絡繆茶々丸といつ、一個の存在であるのか。

「サイトウ先生はなぜ、笑っているのでしょうか？」  
少々不機嫌な顔の絡繆を見て、ますます笑みを深めてしまつ。  
「いや、なんでもない。」

絡繆がそれに気づけたならば、それはとても幸せなことなのだらつ  
な。

## 第4話（後書き）

作者は茶々丸が好きです。  
書いて消してを繰り返していたらよく分からなくなってしまつぽど  
に。

茶々丸が幸せならばそれでいいんです。ではまた。

## 第5話

吸血鬼と少年の決闘が決まる  
されど彼我の実力差は明白であった

### 第5話

「決闘状」

絡繹と別れ、職員室に戻ったハジメを待っていたのは、

「サイトウ先生つ、助けてください。」

泣きついてくるネギであった。

：さかのぼる事数時間前  
「ふう、終わつたあ。」

ネギが今日中に済ませることを終えると、

「あ、ネギ先生。学園長がお呼びでしたよ？」

「そうですか、分かりました。行つて来ます。」

他の先生に学園長へいくように言われ、席を立つ。

「学園長が何の用だらう？」

学園長室に続く廊下を、ネギは一人考えながら進む。

学園長室につくと、ネギはノックをする。

「学園長、ネギですが何か御用でしょうか？」

「おお。ネギ君か、説明するから入つてきてよいぞ。  
分かりました、失礼します。」

挨拶もほどほどに中へと入るネギ。

「へ？」

ネギが学園長室に入つて待つていたのは、いつものように椅子に座る学園長と、

「来たか、ネギ先生。」

ソファーにもたれかかるエヴァンジエリンであった。

「ええっ。なんでここにマクダウルさんがっ？」

先に襲われた事実から、あたふたしながら困惑した様子を見せるネギ。

「まずは落ち着きなさい。ネギ君。」

それを見かねた学園長が、ネギに呼びかける。

「なに、要はこういうことだ。ネギ先生。」

エヴァンジエリンが右手に持つた封筒を掲げる。

その封筒には、『決闘状』と書かれていた。

「…決闘…ですか。」

封筒に書かれている文字を認識したネギの喉が鳴る。

「ああ、私が負ければ坊やの要求を聞こう。だが、私が勝てば、封印が解けるまでその血を吸わせて貰う。」

エヴァンジエリンが挑戦的な笑みをたたえて、鋭い視線でネギを射抜く。

「もちろん、生徒を襲つこともやめよつ。爺にばれてしまつたしな。

「

ネギは、エヴァンジエリンの視線に真っ向から向かい合い、

「僕が勝てば、話を聞いてくれるんですね？」

「言つただろ？~要求を聞くとな。もちろん、聞くだけなど愚かな

恥知らず事はしないぞ。」

両者の視線がぶつかり、沈黙が降りる。

「いいでしょ。その決闘受けたいと思います。」

その沈黙を破ったのは、ネギの肯定だった。

「いいのかの？ネギ君。」

学園長の確認にただ頷くネギ。

「ふふふ。それでこそ、奴の息子だ。受け取れ、そこに場所と時間が記されている。」

エヴァンジエリンが封筒をネギに飛ばし、ネギがそれを受け取る。「では、私は帰る。用も済んだしな。坊や、決闘楽しみにしているぞ？」

ドアを開け、立ち去る寸前にエヴァンジエリンがそう言い残し、去つていった。

⋮⋮⋮

「…とこうことがあつてですね。」

簡易的な認識齟齬の術を使い、普通の会話をしているように見せた空間で、ネギはハジメに起きたことを話す。

ハジメは呆れたような、疲れたような表情をしていた。

「それで、勝ち田はあると思つてゐるのか？」

一通り聞き終えたハジメは、まずネギに勝算を聞くが、「真祖の吸血鬼に、どうやつたら勝てるのでしょうかね？」

ネギは困ったように頭を搔いて曖昧に返す。勝てる見込みが無いと、暗に言つていて。

「はあ。それで、俺に助力を求めたと。」

「はい、すいません。迷惑でしたね…。」

うつむか、意氣消沈するネギ。

もともと封印されているとはいって、相手は真祖の吸血鬼であり、数百年を戦いの中で生き抜いてきたとされる存在である。魔法使いとして未熟なネギが勝てる見込みなど無いに決まっている。

「なぜ、決闘など受けたんだ？ 勝てる見込みなど無い」とぐりり、貴様でも分かるだろうに。」

普段から大人のよう振舞つているネギに対し、当然湧いた疑問を投げかけるハジメ。

その疑問にネギは、

「もし、引き受けなければ、他の人が犠牲になるかもしれませんし。… それになにより、僕の生徒ですから。僕が逃げては意味が無いと思います。」

と、ネギ自身の考えを述べる。

そんなネギの様子を見て、ハジメは思案する素振りを見せ、「ふむ、それで決闘の日付は？」

「あ、はい。えっと、この日は、停電する日の夜ですね。」

封筒の田付と、スケジュール表の日付を見比べたネギが答える。

「停電の日の夜か…。闇夜の戦いになる…か。」

戦いなれているハジメならともかく、戦いの基礎も知らないネギでは話にならないことは明白であった。

「どうしましょう？ やっぱり、考えが足らなかつたですかね。」

若干涙目になつてきているネギを見て、

「そこまで悲観することなかろう。いずれは、こうなつただろうからな。」

ハジメは、机においてあつたコーヒーを飲みながら、決闘のことを

考える。

確かに、ハジメが戦うならば負けることは無い。

しかし、これはネギが受けた決闘。

だが、あまりにも不公平である。それを踏まえて受けたネギが、悪いといえばそれまでだが……。

「明日、マクダウェルのところに行くとするか。」

ハジメの提案にネギが疑問の表情を見せる。

「さすがに、ネギだけを相手にするというのは恥も外聞もなき過ぎる。」

「は、はは。」

完全に弱者というレッ テルを貼られている事実に、ネギは乾いた笑みを浮かべるしか無い。

「俺が協力できるかどうかを、明日マクダウェルと交渉してこいつ。今日はもう遅いしな。」

気がつけば、職員室の窓の向こうには、夜の暗闇が広がっていた。

「失敗したら、『愁傷様だな。』

「そんなん。」

ハジメの冗談めいた台詞に、号泣するネギであった。

## 第5話（後書き）

読んでいただきありがとうございました。ではまた。

少年と吸血鬼の決闘  
そこに英雄が加わる

第6話

～参戦～

「ふむ、 そうか。 分かった。」

ハジメは職員室の自らの机で電話を取つていた。  
会話が終わり、 電話を置く。

「どうかしたんですか？」

電話が終わつたタイミングを見計らつて、 ネギがハジメに問う。

「いや、 マクダウェルが風邪を引いて休むそうだ。 絡縁も看病とうことで休む。」

ハジメが出席簿のエヴァンジエリンと茶々丸の欄に病欠と書く。

「ええつ？ マクダウェルさんつて風邪を引くんですか？」

魔法使いであり、 吸血鬼でもあるエヴァンジエリンが、 風邪を引くことには驚きを隠せないネギ。

「…お見舞いに行つたほうがいいんでしょう？」

ネギの提案に、 ハジメは腕を組みながら、

「ふむ、 今日のネギの授業は午前中だけだからな。 昼間に俺が行く  
としよう。 決闘の件もあるしな。」

ハジメ自身が行くことを告げた。

- エヴァンジエリン side -

『だからよお、知らねえって言つてんだる？もう着いてくんな。』

『なぜ知らんのだ？お前の行動範囲であつたのだろう？』

『確かによ、そことかにも行つたぜ？だけどよ、お前みたいな奴知らねえよ。』

『私を助けたという事実が、知られたくないのか？』

『ナアナア、ゴ主人』

『お前は黙つていろ、チャチャゼロつ。』

『だあつ、うつとうしつ。』

『ははは、逃がさんぞ千の呪文の男サウザンドマスター』

『ナアナア、ゴ主人』

『今がいいところなんだつ、チャチャゼロつ。』

『それよお、もしかしたらハジメかもしんねえな。』

『なに？あの悪を切る暗殺者が？馬鹿な、それならばもう私はこの世にいなさい。』

『いや、倒れてる奴に追い討ちかけるような奴じやないと思つぜ？』

『ソイツツテ、剣ヲ突ク奴力？』

『ああ、確かそうだつた。』

『…ソウカ。（アノ時ハ魔力ガナクテ、視覚ガ途切レタノガ災イシチマツタナ）』

『ふはははつ、お前の苦手なもんは調査済みだつ。いい加減にひづつてえんだよつ。』

『いやああああつ。』

『後はハジメに任せたつ。』

『ヤツパ違ツタンダナア。』

「うわあああああつ。」

ゼえつ、ゼえつ。いやな夢を見た…。

脇の机においてある水を一気に飲む。

「随分うなされていたようだが?」

「なに、またいやな夢を見ただけだ。」

忌々しい。封印をかけたあの男も、私をだましたあの男もだつ。

思い返すたびに、屈辱で怒りがこみ上げてくる。

ん? 今のは男の声?

隣を見ると、暢気に本を読んでいるハジメの姿があった。

・・・

「貴様つ、ここで何をしているつ。」

い、意味がわからんぞつ?なぜ、起きたらハジメがここにいるんだ  
つ?

ここは私の部屋だよな?

思わず辺りを見回す。

「なに、決闘の件などで貴様に話があつたのだがな。風邪で休むと  
いつのでな。見舞いとしてやつてきたわけだ。」

百歩譲つて見舞いは許そづ。

だが、

「なぜ、私の部屋にいる？」

この男は、そういうことをする男だとは思わなかつたのだが…。

「大体茶々丸はどうした？」

そうだ、茶々丸がいない。

「まずは話を聞け。絡繹ならば、お前の薬を取りに病院へ向かつた。俺が来たときに向かう予定だつたが、貴様一人残すのは、心もとなかつたらしい。」

だからといって、この男を家に残すか普通？茶々丸にはメンテが必要かも知れん。

「故に、貴様の看病を引き継いだといつわけだ。俺がここにいる理由が分かつたかな？マクダウェル。」

なぜだか知らんが、非常にイラつくな。あの夢を見たからか？こいつがいやな笑みを浮かべているからか？

恐らく両方だろうな。封印状態じゃなければ、ハツ裂きにするところだ。

「まあ、そんなに目くじらを立てるな。見た目はいいのだから、損をするぞ？…では、決闘の件の話をしようか。」

貴様のせいだらうがつ、と言いたかつたが、

「坊やと私の決闘に、なぜお前が話しに入るのだ？」

これは、あの坊やと<sup>ダーク・エヴァンジェル</sup>私との決闘だ。邪魔者はいらん。

「ふふ、かの高名な闇の福音<sup>ダーク・エヴァンジェル</sup>が随分と大人気ないな。」

挑戦的な笑みを浮かべながら、こちらを見てくるハジメ。

「まさか、パートナーもない見習い小僧一人に、従者を連れて戦う気ではあるまいな？だとしたら、闇の福音<sup>ダーク・エヴァンジェル</sup>とやらも随分と臆病になつたものだな。」

「なんだと？」

「では、私一人でやれと？」

「違うな。なにをどうやっても貴様が弱者を傲慢に踏み潰すことには変わりは無からう……要はだ、俺がネギにつくということだ。」

「何を言つて……」

待てよ。決闘の当日は。

私のものにするのも面白い…か。

「くく、いいだろう。好きにするがいいさ。しかし、私が勝ったと

「ニニギハ、ヤマツセのウサツ。

をハシマリテ、壁屋からてるハジノ

「ふ、ふはははははははははははは、じいじいの日が来たか。」

面白くなつてきた……。実に愉快ではないか。ああ、決闘の夜が楽し  
みだ。

西から差し込む夕日を見ながら、私は笑みを消すことが出来なかつた。  
決闘に勝つ自らの姿を幻視して。

- side end -

卷之三

エヴァンジエリンが自分の部屋で笑っているとき、下の階ではハジ

「ああ、あれほど元気ならば明日は平氣だろ。」

ハジメは若干呆れた感じで上を見て喋る。

「あの、サイトウ先生。紅茶でもビリビリとか？」

茶々丸が留守番の礼として誘うが、

「いや、遠慮しておひづ。」

「…ですか。」

「…こちらも、残念そうな表情を浮かべる茶々丸。

そんな茶々丸を見て、ハジメが、

「…次の機会があれば頼む。」

「あ、…はい。」

微笑を浮かべる茶々丸であった。

「ではな。明日はちゃんと来い。」

「はい、本日はありがとうございました。」

帰るハジメに、茶々丸は玄関まで出て、見送った。

ハジメが職員室に戻ると、ネギが自分の机で明日の授業の準備をしていた。

「すまんな、ネギ。今戻った。」

「あ、サイトウ先生。お帰りなさい。」

ハジメに気づいたネギが笑みを浮かべて答える。

ハジメは自分の席に戻ると、ネギに近寄り、

「明日の決闘は俺も出ることになつた。」

「え、本当にですか？」

思わず、手を止めてハジメに向くネギ。

「ああ。まあ、どうなるかは分からんが、問題兎にお灸を添えねばな。」

ネギに向かつて少しお笑みを浮かべるハジメ。

「はい。頑張りましょう。」

ネギもやる氣が出たようである。

決闘は明日。

少年は吸血鬼と話しかけた覚悟をした。

吸血鬼は少年を生贊に封印を解き、英雄を手中にせんとする。

## 第6話（後書き）

（作者が）残念なお話です。今日中に吸血鬼編を終わらすのは無理でした。いや、予定は未定という言葉もあるくらいですしね…。いえ、なんでもありません。すいませんでした。

これから用事があるので、今田の更新はここまでです。次回更新は明後日には何とかしたいと思います。ではまた。

## 第7話

たとえそれが無謀であらうとも譲れないものがあるのならばそれは勇気となる

### 第7話

「決闘」

「はい、それでは今日は、夜8時から深夜12時まで停電ですのでも懐中電灯や蠅燭、ガスなど用意を怠らないようにしてください。」  
帰りのHRでネギが教壇で事務報告を行つていく。

「はい。」

「いやあ、楽しみだねえ。ドキドキするよ。」

「はしゃぎすぎないでよね。」

停電といつものも彼女らにとつてはイベントになるらしく、怖さ半分楽しさ半分といった雰囲気であった。

「夜には出かけないでくださいよ。」

そんな3・Aの面々を見て、ネギは苦笑するしかなかつた。

夜になり、停電が始まる。漆黒の暗闇が麻帆良を覆つ。

月明かりだけの夜道を、懐中電灯一つで見回るネギの姿がそこにあつた。

「麻帆良大橋…か。」

もちろん見回りも目的の一つであったが、真の目的はエヴァンジ

リンとの決闘。

その場所こそが麻帆良大橋であった。

「マクダウエルさんつ、来ましたよ。でてきてください。」

麻帆良大橋にたどりついたネギが、暗闇に向かって大声を上げる。その声に降り立つ影が2つ。

エヴァンジエリンと茶々丸である。

エヴァンジエリンはネギが一人であることを認めると、

「おや、坊や。ハジメの姿が見えないが？」

ここにいるのはネギとエヴァンジエリン、茶々丸だけでハジメの姿はなかつた。

「サイトウ先生は急用です。ですが、決闘に遅れるわけには行きませんでしたからね。僕だけでは不足ですか？」

ネギが杖を構える。

そんなネギを見て、思わず笑い声を上げるエヴァンジエリン。

「はつはつはつは。なかなか面白いことを言つじやないか、坊や。

…不足に決まつているだろう？」

エヴァンジエリンの顔から笑みが消え、猛禽類を思わせる鋭い視線がネギを射抜く。

「ひつ。」

思わず身を縮こませてしまつたネギだが、それを見逃すエヴァンジエリンではない。

放つた十数の魔法の射手が、ネギを襲つ。

「あつ。」

「坊やには10年早いさ。」

……

ところ変わつて麻帆良の森。

結界が停電によって弱まつてしまつ今、麻帆良は格好の獲物であつた。

よつて、侵入者を撃退できる者は、全て駆り出されていた。

「ちひ、こんなことをしている暇は無いといつのに。」「

このときばかりはハジメとて例外ではなく。

牙突を放てば森ごと消えてしまつたため、加減をしながら侵入者を屠つていく。

次々と難ぎ払いながら侵入者を払つていく。

「…やつときたか。」

「ふおつふお。すまんの。今回の件はこちらの不手際じや。」「ハジメの狩るエリアが広いために、交代する要員がいなかつた為に、交代要員として学園長が来る。

「ここはわしに任せ、行ってくだされ。ネギ君を頼んじやぞ。」

無詠唱の魔法で辺り一帯の鬼共を還す学園長。

「心得てゐる。」

そして、その場を離脱するハジメ。

「…エヴァンジエリンの魔力が幾分戻つておるの。停電の際の予備電力をいじられたかの?」

鬼や術士を屠り続けながら、学園の失態を考察していく学園長であった。

……

魔法の射手による粉塵が晴れる。

「ほう。なかなか面白いものを持っているじゃないか、坊や。茶々丸、後ろに控えておけ。」

ネギは、趣味でもある自前の装備を使い、エヴァンジェリンの攻撃を防いでいた。

茶々丸はエヴァンジェリンの命令に頷くと端へ寄る。

「では、楽しませてくれよ？坊や。」

最初の一撃で勝負がつくと思っていたエヴァンジェリン。  
しかしネギが耐え抜き、興が乗ったのか知らないが、夜空に飛翔するエヴァンジェリン。

「ならば、これは耐えられるかつ？」

更に本数を増やした魔法の射手を、ネギに向かつて次々と放つ。

「くつ。ラス・テル・マ・スキル・マギステル・魔法の射手連弾。  
雷の17矢。」

ネギも杖に跨つて低空飛行を行い、エヴァンジェリンの魔法の射手を避けながら、詠唱魔法を放つ。

「ハハハつ。雷も使えるのか、坊や。なかなか面白いな……だがつ、詠唱に時間がかかりすぎだぞ。」

徐々に数を増やしていくエヴァンジェリン。

ネギもなんとかそれについて行くが、地力が違いすぎた。

次々に襲い掛かる魔法に、ネギが追い詰められていく。

「くくっ……では、こんなものはどうだ？リク・ラク・ラ・ラック。  
ライラック來たれ氷精、大氣に満ちよ。白夜の國の凍土と氷河を……  
凍る大地」

ネギに向かって、エヴァンジェリンが両手を前に突き出し、詠唱魔法を唱える。

その瞬間、ネギの周囲の地面から巨大な氷柱が出現し、ネギを襲いネギの装備が碎かれていいく。

「わつ、ぐつ。」

ネギは回避するために急上昇するが、

「だから、10年早いと言つたんだよ…坊や。」

そこには、エヴァンジェリンが待ち構えていた。

「しまつ…」

ネギが気づくも、時すでに遅く。エヴァンジェリンがすでに唱え終わっていた魔法を放つ。

「があつ。」

レジスト抵抗するも、魔法の強大さに吹き飛ばされ、意識を失うネギ。ネギが地に落ちるのをエヴァンジェリンは飛びながら見ていた。

「これで、ゲームオーバーだ。坊や。」

エヴァンジェリンが降り立つ。茶々丸もその傍に立つ。

「さて、これで終わりか。ハジメがいなのが残念であつたがな。よくよく考えれば、ただ甚振つただけに終わってしまったと思つエヴァンジェリン。

「そうか、俺としてはここれからが本当の決闘だと思つが？」

「つ？」

エヴァンジェリンが、ネギが落ちた場所を再度見るとそこには、ハジメが立っていた。

「…サイトウ先生。」

茶々丸が、少し悲しそうな顔を見せる。

「くく、どこに行っていたのやら。坊やは見ての通りだ。」

「そのようだな。だが、臆病風に吹かれるような奴よりよほどまし  
だろう。」

ネギを横田で見ながらハジメが言ひ。

「無謀と勇氣は違うが？」

「そんなもの些細な差だな。覚悟があるのならば、それは勇氣と言  
つても良からひ。」

ハジメが一步踏み出し、構える。

「茶々丸、あれは別格だ。用心しろ。」

エヴァンジエリンも構える。

「はい、マスター。」

決闘の第2幕が開かれる。

## 第7話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

時間が取れたので書きました。後2話で吸血鬼編も終わるかな。  
次回更新も明後日位だと思います。ではまた。

情けか憐憫かそんなものはいらない  
彼女が欲したのはなんだつたのか

第8話

「決着」

英雄と呼ばれた男と対峙する悪の魔法使い。

「なかなか面白い構図じゃないか？ハジメ。」

「なに、悪がきと教師という構図しか浮かばんな。」  
エヴァンジエリンの言葉に、ハジメは鼻で笑つて言つ。

「封印を完全に解いてからと思ったが、変更だつ。貴様の鼻つ柱を折つてやろう。茶々丸つ。」

「はい、マスター。…申し訳ありません。サイトウ先生…。」  
茶々丸がエヴァンジエリンの命図に、一気にハジメに接近し、拳を叩き込むが、

「俺の戦闘法を知らんのか？」

難なく茶々丸の攻撃を回避し、そのまま茶々丸を放り投げる。

「なに、時間稼ぎに過ぎんつ。闇の吹雪〔ウイス・テンペスター・オフスクランス〕つ」

詠唱を終えたエヴァンジエリンが魔法を放つ。

闇をもたらす吹雪がハジメを襲つが、

「破つ。」

放つた牙突がエヴァンジエリンの魔法を打ち払い貫く。

「なつ？くつ、不可視の剣かつ。」

魔法を放つた直後に回避行動していたエヴァンジエリンが、牙突を

避ける。

そこにハジメが追い討ちをかけようとするが、茶々丸に防がれる。茶々丸は必死にハジメに喰らいつくが、

「俺と闘うには、まだまだ甘い。」

「あつ。」

ハジメに吹き飛ばされる。しかし、その瞬間を狙つて、エヴァンジエルンが魔法を放つ。

それを幾度と繰り返していくと、

「鬱陶しいこと…この上ないな。」

ハジメに纏う空気が変わる。

向かつてきた魔法を、一閃のもとに断ち切り、その余波は斬撃となつてエヴァンジエルンを襲う。

「なつ？…くつ、咸卦法かつ。」

エヴァンジエルンは驚くと同時に回避行動し、ハジメの雰囲気が変わつた理由を察する。

「貫かれる準備はいいか？」

弓を引き絞るように、体を屈めるハジメ。次の瞬間にば、その姿は搔き消える。

「マスターつ、後ろです。」

茶々丸がセンサーによつて、ハジメの位置を特定する。

「ちいつ。」

エヴァンジエルンが後ろに向かつて魔法の射手を放つ。ハジメはそれを打ち払い、牙突の構えを取る。

「そろそろ寝ておけ。」

引き絞られた体躯から牙突・零式が放たれた瞬間、エヴァンジェリンがありつたけの魔力で障壁を張る。

しかし、放たれた不可視の刃は障壁を容易く突き破り、エヴァンジェリンを貫いた。

「マスターっ。」

茶々丸の悲鳴が上がる。

貫かれたエヴァンジェリンが、その勢いのまま大地に突き刺さった。

・エヴァンジェリン side・

「がはっ。」

貫かれ、地に落とされた衝撃で血を吐きだす。

なんという圧倒的な力だ…。

結界が弱まれば…どうにかできると、思い上がっていたか…。

…英雄に滅ぼされる…か。

こういう終わり方も悪くは無いかも知れん。その覚悟のもとに私は私を貫いてきた。

心残りがあるとすれば、

「マスターっ、大丈夫ですかっ？」

茶々丸、お前かな。

随分と人間らしくなつてきたと思ったが、ここ最近はより顕著だつたな。

そんな顔をするなよ。茶々丸。

ハジメが近づいてくる音がする。  
もう終わりも近いか。

「それ以上近づかないでください。…サイトウ先生。」

ハジメの前に立ちふさがる茶々丸。

「お…」

「めろ茶々丸と言おうとするよ、

「そんな泣きそうな顔をするな絡繆。止めをさすつもりなど無い。」

その言葉に、頭に血が上るのを自覚する。

なぜだ？なぜ殺さん？同情か？哀れみか？そんなものはいらん。今私達が矛を交えたこの戦いは、そんなもので終わらせるものではない。

「ふ…巫山戯るなあ。」

貫かれた箇所から、血が出るのも構わずに立ち上がる。

「マスター、危険です。」

こちらに駆け寄る茶々丸を無視して、ハジメを視線で殺さんとばかりに睨み付ける。

「なんのつもりだ？貴様はそれほどまでに腑抜けていたのか？」

聞く噂は、どれもこれも腐った奴らを屠ってきたといつ逸話ばかりの男。

悪を許さず、自らの信念に従い、全てを貫いてきた男。そんな男が、聞けばますます面白」と思った男がつ、

「貴様がなぜ、そんな真似をする？？」

感情のままに言い放つ。涙が頬を伝うのが伝わる。

なぜかは分からぬ。情けをかけられた自分が悔しいのか、興味を少なからず抱いていた男に失望したのか。

「…貴様の言うことも分かるが…今の俺は英雄でも、ましてや暗殺

者でも無い。教師だ。」

「それがどうしたつ？」

「どうもいつも、道に迷つてゐる生徒がいるなれば、導くのが…俺らの仕事だ。」

何を言つてゐるんだ?」  
「こいつは。

「あの馬鹿が、なんのつもりで貴様をここに封印したかは知らん。だが、それは全く無意味のものだつたか?」

「そんなことつ

決まつてゐるとはいえなかつた。最初の数年は楽しく感じていた、未知の出来事に楽しく感じてしまつていた。だが、この呪いが解けないことを知り、数年も過ぎれば封印した男に対する憎しみしかなかつた。

そして、10年以上が過ぎ、やせぐれでいた私に『えられたのは…。茶々丸を見る。

そう…茶々丸という従者だつた。あのときから、独りではなくなつた…。

「マスター?」

茶々丸が不思議そうな顔をする。

「それに、貴様の担任はどうしても貴様と話し合いたかつたそつだ。教師として、生徒を助けたかったのだろうな。」  
坊や…。

「マクダウエル。」

顔を見上げる。

「絶望しかないと呟つならば、せめてもの手向けだ。殺してやる。」  
「だが、希望はあつたのだろう、表で生きたいといつならば、術を磨け。それでもできないならば、俺らを頼れ。貴様は俺の…生徒なのだからな。」

なんだ、なんなんだ、こいつは。

偉そうに…本当に偉そうだ。

そして、湧いてくる感情は…、

生きたい。

茶々丸と、共に、あの能天氣な連中を見ながら、平穏を生きたい…。

「まさか、生きたいと…そう思つことになるとはな…初めてだよ。

」

本当に初めてだ。

「そつか、ならば」これを抜かんとな。  
ん?

ハジメが徐に私の前の空間を掴んだ。  
掴んだ?

そして、それを引き抜く動作をした…つ。

「ぎやあああああつ。いだあああつ。

「マスターつ? 大丈夫ですか?」

があつ? 貫かれていた場所に激痛が走る。

「ふむ、即席と言つていたが十二分に効果があつたな。」

私の血で塗れた不可視の刃を見ながら、ハジメが呟いているが、  
「貴様あ、何をしたあつ。」

本当に何をした?

「なに、吸血鬼に効果がある剣を作つてくれと頼んだだけだが?  
どんな効果だ。」

「不死を苦しめる、といつより傷を塞げ無いよつとして欲しいと言  
つただけなのだが。」

なら何なのだこの痛みはつ。悪魔か己はつ。

だめだ、痛すぎて喋れん。

「…ふむ、灸を据え過ぎたか…？」

背中をさすってくれる茶々丸だけが私の味方だつた。

蹲り、ハジメの治癒魔法をかけ続けられること数分。なんとか、持ち直した。

「…まさか命をとらずに、生徒として生きるとはな。

「貴様が生徒であることに、変わりは無いからな。」

生徒…か。

「まあいいさ。今日は私の負けだからな。」

封印を解くことも…この男を屈服させる…とも出来なかつたか。

ハジメが近い。そのせいかも知れん。胸中に会つた疑問がすつと口から出た。

「…なぜ、貴様は私を助けたのだ？」

「だから、生徒と」

「そう言つ意味ではない。もう何年前だつたか忘れたが、貴様は私を助けたのだろう? 千の呪文サザンドマスターの男と名を偽つて。」

そのおかげで、私はこうして屈辱の日々をすごしてきたわけだが。 「偽つて…? ああ、大戦が終わつてからのことだな、それは…なに助けたと言うのならば、それは貴様が助けるべき存在だつただけだろう。」

飄々とした顔でこいつは、…とんでもないことをさうりと言つた。私は、世界に恐れられた魔法使いだというのに…。

こいつにはそう見えたと言つことか。

この私が助けられるべき存在か…。

「くく、やはり、お前は面白いな。ハジメ。  
「サイトウ先生と呼べ。」

言わんさ、絶対にな。

そしていつか、手に入れてみせるわ…。

⋮⋮⋮

戦いが終わり、ハジメがネギの治癒を終える。

「あ、サイトウ先生。え、あれ？」

周りの惨状と近くにいるエヴァンジエリンと茶々丸を見たネギは、  
ただ混乱する羽田になつた。

「どうですか。結局サイトウ先生に助けられてしましました。」

ハジメに事情を聞いたネギは、自分の情けなさに不甲斐なさを感じた。

「勘違いするな。貴様が…ネギがマクダウエルをどうにかしようつと  
思わなかつたら、俺はこんなことはしなかつただろう。且う覚悟を  
決めたのはお前だ。ならば、胸を張つて誇ればいい。

ハジメがネギの頭に手を載せる。

「では、マクダウエルのことを話せんとな。」

ハジメがエヴァンジエリンに向くと、ネギもつられて向く。

「さて、ネギ。話したいことがあるのだろう?」

「はい。マクダウエルさんが生徒を襲つたのは僕の血を吸つて、封

印を解くためですね。でも、僕はマクダウェルさんにそんなことはして欲しくありません。」

ネギがエヴァンジェリンに真剣な顔で訴える。

「ふん。それは、坊やが死んでしまうしな。」

エヴァンジェリンも頷く。

「それもありますが、それより大事なのはマクダウェルさんのことです。僕はマクダウェルさんに皆とは言いません、ですが、マクダウェルさんを知っている人がマクダウェルさんを祝福してくれるような生き方をして欲しいんです。」

「きれい」ことを…だが、この封印はどうするのだ？私をこの地に封印し続ければ満足なのか？」

ネギの言葉に、エヴァンジェリンが自嘲気味な笑みを浮かべる。

「それは、…僕が何とかして見せますつ。」

握り拳を胸に、ネギが宣言する。

「話にならんな。まあ、襲うことはもうしないさ。ではな、行くぞ茶々丸。」

「まあ、待て。」

踵を返そとしたエヴァンジェリンを呼び止めるハジメ。

「まだ何か用か？」

「そう睨むな。…たとえばだが、その封印を解く当てがあるとするならばどうする？」

エヴァンジェリンの瞳が見開き、ハジメのもとへ一気に駆け寄つてその胸倉を掴む。

「…解けるのか？」

本人は落ち着かせようと静かに口を開くが、興奮が抑えきれない。

「当てがあるといつただけだ。」

胸倉を掴まれているが、いたつて冷静なハジメ。

「ならば、その当てとやらを持ってきて、わざわざと解けつ。私はこの麻帆良からすら出れないんだぞつ。」

今までの退屈な日々から開放されるからか、どんどん直情的になるエヴァンジエリン。

「まあそつだな。修学旅行ぐらには行かせてやらん」ともないが、本当に解呪するのは、貴様が生きる意義を見つけたときだな。…いまのままでは、呪いを解くわけにはいかん。」

「生きる意義だと…？」

胸倉を掴む力が強まる。

「これからが再スタートと言つことだ。この学園から出られる日が、卒業できる日が来たならば、開放してやるつ。」

ハジメがエヴァンジエリンの頭を乱暴になんでる。

「絡繹と一緒に見つけるがいいさ。主従どちらも、これから大切なものを見つければいい。」

「それは、なんだ？」

「そのくらい自分で考える。帰るぞ、ネギ。」

「あつ、はい。」

踵を返し、去つていくハジメとそれを追いかけるネギ。

それを見ながら、エヴァンジエリンはため息をつく。

「まったく、まだ生徒じつをしていなればならな」とはな。

その顔に笑みを浮かべて。

「ですが、マスターは楽しそうです。」

「う、うるさいわつ。…帰るぞ、茶々丸。」

「はい、マスター。」

茶々丸もほのかに笑みを浮かべて、2人の主従は帰つていった。

……

「と言うわけで、作つておけ。」

「なにがと言うわけなのか疑問なのだが。…全く人使いが荒い者だ。」

「ならば、人で無いお前に何を言つても大丈夫だな。それに、使うべきものは有用に使わんとな。あの剣のようにな、あれは役に立つたぞ。」

「…そうか。」

そこいら一帯に魔方陣や書かれ、魔法書が無造作に積み置かれている部屋に2つの影があった。

その魔方陣は見るものを見れば卒倒し、魔法書は見るものを見れば大枚をはたく物ばかりであった。

ローブに包まれた男が口を開く。

「場所の制限を無くすものと、呪いの正常化と継承。後は封印そのものを解くもの…でいいのか?」

「ああ、別々にしておけ。」

ローブの男はため息をつきながら、魔法書が置かれている場所に座る。

「ではな。できたら、いつもの通りにだ。」

立ち去る男に手を振りながら、魔法書に没頭するのであった。



## 第8話（後書き）

書いていながら結構長くなってしまいました。  
もつとうまく纏めたかったのですが、未熟な作者ではこれが限界の  
ようです。

次回更新は、明後日までには更新できそうです。ではまた。

## 第9話

少女の居場所はどこにもなく彷徨つ  
見つけることが夢だつたのかもしれない

### 第9話

「夢」

-エヴァンジエリン side -

あたりが暗闇であつたり、ぼやけていたり…ちぐはぐになつていた  
り…。だが、私は知覚している。  
…これは、夢の中か。

あたりが暗闇に覆われていたが、次の瞬間には、建物の中にいた。  
私の誕生日か。…忌まわしき記憶の映像が目の前に…ある。  
そして、場面は飛び、そこにいたのは、…を殺した私だつた。  
ふふ、思えば随分昔に捨て去られたのだったな。私の命、人生とい  
うものは。

あの頃は、昨日まで話していた者が敵になる時代だつた。  
弱点もあつたしな。  
力をつけるために、いろいろなことをしたものだと思つ。

魔女狩りの時代に場面は飛んでいく。

ああ、この時代は面倒だつたな。  
なにせ、この体だ。一時たりとも同じ場所に住まつことは出来なか  
つたものだ。

そうだ、そうだ。焼かれたこともあったな。

思えば至る所に歩き回ったものだ。世界がこんなにも広いものだと  
は思つていなかつた。

だが、こんなにも世界が広くとも、私が受け入れられる場所はなか  
つた。

一つたりとも…。

殺さなければ生きていけなかつた。

殺さずに生きれる日々はとても安らかだつた。

そんな日々が場面となつて次々と移り変わつていく。  
そして、忌まわしい連中の場所で場面が止まる。

『…「めんなさい…。』

『なにがだ?』

私の傍に来た子供から、魔力があふれ出した。

今見ても、忌々しい。反吐が出る。

助けを呼ぶでもなく、ただ謝罪したあの子供に何の罪があつたのか  
…。

あの後、呪いを受けてしまつた私は痛手を受け、逃げ続けた。

チヤチヤゼロが盾になつてくれなかつたら、今頃私はいなかつたかも  
知れんな。

しかし、私は森の中で意識を手放してしまつた。

このときに少しでも意識があつたのならば、あんなことは起きなかつただろうに。

宿屋で目覚めた私が最初に会話したのはチャチャゼロだつたか。

『お互い随分とひどい目にあつたものだな。』

『全クダゼ。ゴ主人ノ魔力ガ無カツタセイデ、物ハミレネエシヨ。』

そうだつた。私の魔力がごく僅かになつたせいで、チャチャゼロは聴覚だけを残し、奴らと戦つていた。

くつ、うまくいかないときは全てがうまくいかないものだな。

チャチャゼロと宿屋の主人の情報から、千の呪文サウザンドマスターの男という男を追いかける日々が続いた。

ああ、今思うと、ただの黒歴史だな…。

近くに奴の情報があれば向かうという生活をしていくと、

『ついに、ついに見つけたぞつ。千の呪文サウザンドマスターの男つ。』

『誰だ、お前?なんだ、俺を倒して名を売ろうつて奴か。いいぜつ、こいつ。』

阿呆だな。今思い出しても阿呆だな。

戦い終え、誤解を解き、私を助けた件を聞いても、

『知らねえ。』

としか言わない。

最初は、私を助けたという事実をこの男は隠したいのではないかと疑つたものだ。

『ナアナア、ゴ主人』

『お前は黙つていろ、チャチャゼロ。』

……ああ、チャチャゼロは私を助けた男が剣士だということを知つていたのに…。

血りの馬鹿を加減に羞恥心が沸いてくるな。

その後も、事実をちゃんと認めるまでついていったわけだが、  
『だあつ、うつとうしいつ。』

（瞬動で森を抜ける氣か知らんが、甘いわあつ。）

『ははは、逃がさんぞ千の呪文の男<sup>サウザンドマスター</sup>。』

『ナアナア、ゴ主人』

『今がいいところなんだつ、チャチャチャゼロつ。』

……もう何も思わん。ただチャチャチャゼロ…すまなかつた。

諦めたのか、疲れた顔をしたナギと共に歩く。

『それよお、もしかしたらハジメかもしんねえな。』

『なに？あの悪を切る暗殺者が？馬鹿な、それならばもつ私はこの世にいないさ。』

『いや、倒れてる奴に追い討ちかけるような奴じやないと思つぜ？』

『ソイツツテ、剣ヲ突ク奴力？』

『ああ、確かそうだつた。』

『ソウカ。』

このときは、あの男が私を助けたなどとは夢にも思わなかつたな。奴があの場にいたら全員を殺していただろうとすら思つていた。そして、やはりチャチャチャゼロは気づいていた…みたいだな。

そして、日本にたどりついてしまつた。

あの悪夢…か。

『ついに…追い詰めたぞ？千の呪文の男<sup>サウザンドマスター</sup>。』

砂浜の上で対峙する私とナギ。

『だからよ、いい加減にしろよなあ。俺じゃねえつて。』  
『認めるまで、ついていく。認めないのならば、認めさせぬまでさ  
つ。』

……多少にこまできたら意固地になっていたのだろう、そう信じた  
い。

ナギに襲い掛かる私とチャチャゼロ。  
しかし、

『えーっと、この辺だつたよな。』

ナギを目前に捉えた瞬間、足を支える大地の感覚がなくなる。

『うわあつ。』

『ふはははは、お前の苦手なもんは調査済みだつ。いい加減にうざ  
つてえんだよつ。』

『ひ、ひいいつ。私の嫌いな二二二クやネギいつ。  
うう、夢だと分かつていてもつらー。』

『くくく、ハジメの後始末をする俺の気持ちになりやがれつ。一度  
と悪さの出来ないように変な呪いをかけてやるつ。』  
膨大な魔力が辺りを覆う。

『いやああああつ。』

『後はハジメに任せたつ。』

『ヤツバ違ツタンダナア。』

『なにつへどういうことだチャチャゼロつ。』

『ダカラヨ、ゴ主人ヲ助ケタノハ、アイツジヤナカツタツテ事ダ』

『…なんだとおおおつ。』

その後、麻帆良学園に通つ羽田になり、なんとか私を助けた男を突  
き止めた。

まさか、本当にハジメだとは思わなかつたよ。  
ナギには悪いことをした。だが、封印を解きに来ても良かつただろ  
う。

そうして、私は15年間も生徒をし続けた。

ハジメが結婚していたことに驚き、無性に腹が立つたこともあつた。  
ナギが行方不明で、解きにくることは無いだろうといつ話もあつた。  
自らの力ではこの呪いを解くことは出来ないと知つた。  
茶々丸が来て、独りであるといつことがなくなつた。

そして、今は…。

「起きてくださいマスター。朝です。遅刻はサイトウ先生が許さな  
いと思われます。」

「んんっ。あと5分。」

「いけません、マスター。朝食も出来ております。」

茶々丸…前までは、こんなにしつこくはなかつたと思うのだが。  
これも、奴のせいかも知れんな。

「わかつたわかつた。今起きる。」

「はい、では着替えはここにありますので。」

そう言つて、下に戻る茶々丸。

制服に着替え、下に行く。

「茶々丸、食べないのか？」

朝食を食べていると、自然とそんな言葉が出た。

「いえ、私に朝食は必要ありませんので。」

茶々丸は気持ち残念そうな顔で答える。

そういえば、いつも朝食はこうだつたな。

…ハカセたちに頼んで、食べれるよつこしてもりつか…。

「行くか。」

「はい。」

朝食を食べ終え、学校へと向かう。

今日も坊やの子供にしてはうまい授業と、居眠りするよつな馬鹿は、ハジメの鋭い目に射抜かれ、手刀でたたき起しきされる。それを見て、また騒ぎ出すクラス。そんな連中を見ながら、また馬鹿をやつていい奴らだと思う自分がいる。

ああ、なるほど。今私は、平穀の中に生きている。  
何も殺すことなく、ただ、今を生きて、未来を考えられる。  
こつこつのも悪くは無いかも知れんな。

## 第9話（後書き）

この話で吸血鬼編は終わりとなります。エヴァと茶々丸を書きたかつただけなのでおかしい点が多くありました。

次回からは修学旅行編となります。プロットもどき通りにいくと若干鬱展開になるかもしれません、拙作を楽しんでいただけたらと思います。

次回更新は未定です。ではまた。

## 第1話（前書き）

お久しぶりです。

様々な思惑のもとに事態は動く  
そして異分子も組み込まれていく

## 第1話

「西」

「馬鹿な。それでも、関西呪術協会の長か？」

座りながらも、身を乗り出した和装の男が激昂しながら、言い放つ。  
「はい、もちろん。長という肩書きを忘れたことなど、就任してから一切ありませんよ？」

男の対面にいる長と呼ばれた男、近衛詠春は男の怒号を意に介さず  
に返す。

「こ」は関西呪術協会総本山、近衛家である。

その近衛家には、関西呪術協会を代表する者達が集っていた。

協会の術士の中でも多忙な彼らが集まつた理由、その名目は関東魔  
法協会から来訪する使者と親書についてであった。

「大体だつ、そもそも協会に属してすらいない者が、使者といつこと事  
態おかしいでは無いか。長つ、これは我等、西の者達を侮辱する  
行為だとは思わんのか？」

激昂した男は、相手が長といつのも考慮できないのか、次々と不満  
を述べていく。

「あなたは、このまま友好を結べば、私達がいじょうに扱われる  
考えているのですか？」

「ええつ。我等を舐めている奴らが考えることなど、それがいいと  
ころだつ。」

勢いのままに、立ち上がり足を前に出した瞬間。

「あなたこそ、私を隨分と舐めてはいませんか？」

「「つ。」」

詠春が放つ威圧、殺氣にその場にいた者全員が息を呑む。

そして、詠春がその鋭い目で睨んだ件の男は身動きがとれずにいた。

「ぐつ。」

男の顔に汗が浮かぶ。

「友好を結び、私達をいいように扱う？そんな」とさせるわけありません。そんな気持ちで、こちらと友好を結ぼうというならば…そんなくだらない考え方潰しますよ。義理の父親であろうとも。」

詠春が威圧を解き、目を外す。

「…はあつ、はあつ。」

解放された男は、息を乱しながら詠春を睨む。

「東に気をとらわれすぎて、私達の本懐を忘れてはいけませんよ？友好を結び、提携できたのならば御の字。できなくとも、余計な戦力は省かずには済みます。違いますか？」

余計な戦力…東を鬱陶しく思う者たちの東への襲撃。過激派が率先して行つている武力行為。友好が結べるのなら、襲撃など行えなくなる。結べないのなら、東を敵と認識し、本気で事を構えるまでの事。

「ぐつ…失礼するつ。」

思つことがあるのか、歯を強く噛み締めながら男は勢いよく立ち上がり、廊下を踏み鳴らしながら去つていく。

他の者も一人一人と男に追従して去つていった。

去つていった男を発端とし、解散ということに相成り、部屋に集ま

つた者も半分ほどに減つた。

「さて、餌は撒けましたかな。思惑通りに動いてくれるといいのですが。」

一息つきながら、和やかに詠春が口を開く。

「恐らくは動くでしよう。しかし、長。あまり、氣を放たないでもらいたい。老骨に響きます。」

詠春の一番近くにいた老人が、詠春の言葉に返す。

「いやはや、思わず身構えてしました。気迫というのをどうとか、もはや、長としての風格そのものでした。」

その立ち振る舞いから、実力者と分かる青年も先程の出来事の感想を述べる。

「はつはつは。鍛えられていますからね。」

次々と発せられる贅辞に詠春は、戦友との稽古を思い出しながら笑うのであった。

⋮⋮⋮

「くつ、忌々しいつ。」

先程詠春に睨まれ引き下がった男たちは、近衛家によつて用意された部屋に集まつていた。

「長はああいうが、友好は結ばれるだろう。なぜ、我等が新参者である魔法協会と手を結ばねばならんのか…。」

「木乃香お嬢様も東に居られる。数年前の変革のためといえども、こちらに戻る兆しが見えん。」

腕を組みながら、配下と思われる男たちも意見を重ねる。

「やはり、友好など結ばせてはならぬ。我等の本懐は裏に潜む闇を滅すること。だが、それは…我等呪術協会だけでなすべきである

「う？」

男の言葉に、配下たちは思い思に頷いた。

男たちは、関西呪術協会のいわゆる過激派と呼ばれるものたちであった。

過激派の思想は、様々であるがその基点は関西呪術協会の威光を強くすることであった。

そして、男たちも例外ではなく、魔法協会などと手を結べば呪術協会の威光も弱くなり、唯一のものではなくなつてしまふと恐れている。

そんなことは許されない。呪術協会が魔法協会より優れていることを示さねばならない。

「ならば、使者をどうにかするしかない…か。」

「それでしたら、ちょうどいい手駒が居りますよ。」

目的を定めた男に、配下の一人が笑みを浮かべ、

「天ヶ崎という術士です。」

男たちは詠春たちの思惑通りに動き出す。

それが自分達の首を絞めるとも知らずに…。

関西呪術協会と関東魔法協会が友好を結ぶために、魔法協会が使者を送ることが決まって早数日。

月が浮かび上がり、草木も眠る夜に、近衛家から離れた神社で2つの影があつた。

1つは白を基調とした和装の男の影。

そして、もう一つの影は着物を基調として、腕や方を露出している

女の影であった。

「それで、ウチはその使者から親書を奪えればえんどすな？」

女の影である天ヶ崎千草が、呼ばれた理由である命令を確認する。「その通りだ。東の奴らが送り出す者だ、それ相応の実力者ではあるだう。失敗は許されんぞ。」

「心配せんでもどいつてことあらへん。ウチに任してくれば。」

「そうか、田にちは先程言つたとおりだ。ではな。」

もう一つの影であった男は、用件が済むと足早に去つていった。

「魔法協会… どすか。これも何かの縁なんかな。」

千草は夜空に浮かぶ月を見ながら、独りしゃがる。

「父上… 母上。そろそろウチも、そつちこいくことになりそつぜ。」

瞳を閉じて、闇の中へと歩いていく千草。

「どれだけ怒つてくれてもええよ。だから、許してくれたつてな？」

千草の姉さま、その姿と共に闇へと消えていった。

## 第1話（後書き）

3週間更新できず、楽しみにしていただいた方には、申し訳ありませんでした。今日は、2～3話更新したいと思います。

さて、修学旅行編に突入します。原作に沿う形ですが、終わりは少し変わると思います。京都弁というのでしょうか、いろいろおかしな点が多く見られるでしょうが、楽しんでいただければ幸いです。ではまた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8391x/>

---

信念を貫く者

2011年12月25日12時32分発行